

令和4年度業務実績報告書

令和5年6月
独立行政法人国立美術館

目 次

I 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置	1
1 美術振興の中心的拠点としての多彩な活動の展開	1
(1) 多様な鑑賞機会の提供	1
① 所蔵作品展	1
② 企画展	3
③ 国立映画アーカイブの映画上映会・展覧会	6
④ 国立西洋美術館本館の活用・公開	7
⑤ 地方巡回展等	7
(2) 美術創造活動の活性化の推進	8
① 公募団体等への展覧会会場の提供等	8
② 新しい美術の動向や現代作家の積極的な紹介	8
③ 国際発信拠点として機能するための運用の見直し	8
(3) 美術に関する情報の拠点としての機能の向上	9
① 国立アトリエサーチセンターにおける国内美術館所蔵作品等の情報の国内外への発信	9
② 国立美術館所蔵作品等のデジタル化・データベース化、所蔵作品検索システムの充実	9
③ 美術情報・資料の収集、レファレンス機能の充実	13
(4) 教育普及活動の充実	15
① 幅広い学習機会の提供及びラーニングコンテンツ等の開発	15
② ボランティアや支援団体との相互協力等による教育普及事業及び企業や地域等との連携による事業の開発・実施等	19
③ 映画フィルム・資料の所蔵作品の活用	21
(5) 調査研究の実施と成果の反映・発信	21
① 調査研究一覧	21
② 調査研究成果の発信	23
(6) 快適な観覧環境の提供	26
① 高齢者、障がい者、外国人等を含めた入館者本位の快適な観覧環境の形成	26
② 入場料金、開館時間等の弾力化	28
③ キャンパスメンバーズ制度の実施	30
④ ミュージアムショップ、レストラン等の充実	30
2 我が国の近現代美術及び海外の美術を体系的・通史的に提示し得るナショナルコレクションの形成・活用・継承	32
(1) 作品の収集	32
① ナショナルコレクションの形成	32
② 所蔵作品の収集に係る取組状況	33
(2) 所蔵作品の保管・管理	37
① 収蔵庫等の狭隘・老朽化への対応	37
② 防災対策の推進・充実	38
(3) 所蔵作品の修理・修復	38
(4) 所蔵作品の貸与	40

3	我が国における美術館のナショナルセンターとして美術館活動全体の活性化に寄与.....	43
(1)	国内外の美術館等との連携・協力等.....	43
①	国内外の研究者の招へいによるシンポジウムの開催等.....	44
②	我が国の作家、美術作品による展覧会開催のための海外の美術館との連携・協力.....	44
③	全国の美術館等との人的ネットワークの形成等.....	44
④	国立アトリサーチセンターによる連携・協力.....	46
(2)	ナショナルセンターとしての人材育成.....	46
①	美術教育の一翼を担うナショナルセンターとしての活動.....	46
②	今後の美術館活動を担う中核的人材の育成.....	48
③	映画保存のニーズに対応した人材育成.....	51
(3)	国内外の映画関係団体等との連携等.....	51
①	映画フィルムの収集.....	51
②	映画フィルム及び映画関連資料の保管・修復・復元.....	53
③	映画フィルム及び映画関連資料の貸与等.....	53
④	所蔵フィルム検索システムにおける公開実績.....	54
⑤	国内外の映画関係団体等との連携・調整に係る取組状況.....	54
⑥	情報発信、人材育成に係る機能強化.....	54
II	業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置.....	55
1	業務運営の取組.....	55
2	組織体制の見直し.....	55
3	契約の点検・見直し.....	55
4	共同調達等の取組の推進.....	57
5	給与水準の適正化等.....	57
III	予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画等.....	58
1	自己収入の確保.....	58
2	保有資産の有効利用・処分.....	58
3	予算.....	59
4	収支計画.....	60
5	資金計画.....	60
6	貸借対照表.....	61
7	短期借入金.....	61
8	重要な財産の処分等.....	61
9	剰余金.....	62
IV	その他主務省令で定める業務運営に関する事項.....	63
1	内部統制・ガバナンスの強化.....	63
2	施設・設備に関する計画.....	65
3	人事に関する計画.....	65
4	関連公益法人.....	67
5	国立アトリサーチセンターの設置.....	67
別表1	所蔵作品展.....	68
別表2	企画展.....	68

別表 3	映画上映会（国立映画アーカイブ）	71
別表 4	展覧会（国立映画アーカイブ）	72
別表 5	地方巡回展・巡回上映等	72
別表 6	公募展示室における展覧会毎の入場者数	73
別表 7	展覧会毎の批評・レビューの状況（掲載数及び掲載媒体数）	79
別表 8	企画展示室における現代作家を採り上げた展覧会の実施回数及び採り上げた作家の人数	79
別表 9	調査研究一覧	80
別表 10	展覧会図録における執筆	91
別表 11	研究紀要における執筆	95
別表 12	館ニュースにおける執筆	96
別表 13	館外の学術雑誌、学会等における調査研究成果の発信	99
別表 14	所蔵作品等に関するセミナー・シンポジウムの開催	119
別表 15	シンポジウムの開催等による国内外の優れた研究者等とのネットワークの構築	121
	（別紙）独立行政法人国立美術館の役職員の報酬・給与等について	

I 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1 美術振興の中心的拠点としての多彩な活動の展開

(1) 多様な鑑賞機会の提供

第5期（令和3年度～令和7年度）中期目標に定める指標	
指標	<ul style="list-style-type: none"> ・所蔵作品展及び企画展並びに国立映画アーカイブの上映会・展覧会の満足度調査を実施し、「良い」以上の回答率を、前中期目標期間実績と同程度の水準を維持するものとする。 ・国立美術館巡回展の満足度調査を実施し、「良い」以上の回答率を8割程度とする。 ・国立映画アーカイブの優秀映画鑑賞推進事業の満足度調査を実施し、「良い」以上の回答率を8割程度とする。
関連指標	<ul style="list-style-type: none"> ・所蔵作品展及び企画展の入館者数 ・国立映画アーカイブの上映会及び展覧会の入館者数 ・国立美術館巡回展の入館者数／巡回先美術館数 ・国立映画アーカイブの優秀映画鑑賞推進事業の入館者数

※上記指標に係る実績は別表1～5を参照のこと。

多様な鑑賞機会の提供にあたっては、研究成果、利用者のニーズ等を踏まえ、国立美術館ならではの多様な美術作品鑑賞機会を提供するため、魅力ある質の高い所蔵作品展・企画展等を実施した。

① 所蔵作品展

所蔵作品展は、各館の特色を生かし、小企画展・テーマ展として行うものを含め、別表1のとおり積極的に実施した。

各館の取組の特徴は以下のとおりである。

ア 東京国立近代美術館

(本館)

19世紀末から今日に至る日本の近現代美術の流れをわかりやすく伝えるとともに、部屋ごとにテーマを設けて各時代の美術を新鮮な切り口から提示した。

令和4年12月1日に開館70周年を迎えることから、令和4年度は特徴的な寄贈作品に光を当てる「ギフト」など、様々なテーマ立てで70年間を振り返るとともに、未来を展望するような企画を行った。また令和4年10月12日から令和4年12月4日まで、及び令和4年12月6日から令和5年2月5日までの会期で、開館1周年時に開催した展覧会を振り返る企画「プレイバック『抽象と幻想』展(1953-1954)」を行った。再現VRの駆使、情報資料(ライブラリ)や教育普及との協働など新機軸を打ち出し、メディアでも取り上げられるなど話題を呼んだ。さらに近年力を入れているコレクション展内での特集展示に精力的に取り組む、上述の「プレイバック」展のほか、1950年代から60年代にかけての絵画と漫画との関係に焦点をあてた「白い漫画、黒い漫画」や、詩にまつわる作品を集め、詩と造形の交流や連帯を紹介する「ぼえむの言い分」などを開催した。

(国立工芸館)

「こどもとおとなの自由研究 工芸の○△□×展」は工芸作品およびその素材に潜む○や△といった単純形態を探し出そうとすることで、作品をじっくり鑑賞してもらおうと意図した展覧会であった。これは以前から注力してきたこどもにわかりやすく工芸を伝えることをテーマとした一連のシリーズの一環である。なお令和4年度より来館者層にあわせ内容をマイナーチェ

ンジしている。「ジャンルレス工芸展」では昨今の潮流のひとつである現代アートと工芸の境界線上にある作品や、素材や技術だけでなくモチーフに焦点を合わせて紹介することで新たな作品の見方を提示した。「工芸館と旅する世界展」では国立工芸館が所蔵する外国作品を石川移転後初めてまとめて紹介し、所蔵作品の幅広さを提示した。

イ 京都国立近代美術館

令和4年度の所蔵作品展では、企画展の内容に合わせたテーマ設定の展示を数多く実施できた。例えば、「サロン！雅と俗ー京の大家と知られざる大坂画壇」展の会期には、「上方と洋画」と題して関西の洋画を紹介するコーナーを設け、企画展で近代日本画を紹介しているのに対して、同時代の洋画作品を展示した。「鏑木清方展」の会期では、企画展で美しい着物を着た美人画が並ぶのに対し、「近代工芸の着物」及び「飾りと装いの工芸」と題して工芸作品にみる着物や装飾品の美しさを紹介する展示を行った。SNS上では、企画展と一緒に所蔵作品展を見るべきという趣旨の好意的な感想が多かった。また、「珠玉の日本画」と題して日本画コレクションの名品を並べたが、こちらは普段は館外に貸し出していることが多い日本画コレクションが、コロナ禍を理由にした借用キャンセルなどが重なったことから、偶然にもまとめて展示できることをチャンスと捉えたものであった。充実した形で京都画壇の日本画を展示することができ、好意的な感想が多かった。

ウ 国立西洋美術館

約1年半の休館後のリニューアルオープンに合わせ、所蔵作品展も一新させた。おおよそ制作年代の順に沿いつつも、キリスト伝、肖像画、聖人像、風景画といったテーマごとに作品を配置することで、より分かりやすい展示となった。また、特に新しい試みとして、Collection in Focus という小展示コーナーを展示室内に複数設けた。これは一つのテーマのもとに数点の作品を展示し、解説する試みで、時に思いもよらぬ組み合わせによって、コレクションの新たな魅力を伝えることとなった。また、科学調査の結果や作品に用いられた顔料等を作品と共に展示することで、技法など、通常とは別の側面からの作品理解を促した。

常設展示室内ではこのほか、数十点の作品を用いた小企画展を計5回開催した。うち1回は通常小企画展を行わない空間を用いて、大成建設から寄託を受けているル・コルビュジエの素描や油彩作品を展覧し、この建築家晩年の芸術観を紹介した。その結果、国立西洋美術館本館を設計した際の彼の考えをより深く知ることにつながった。

エ 国立国際美術館

前年度からの「コレクション2」に続き、「コレクション1 遠い場所/近い場所」と題した所蔵作品展を開催した。コロナ禍による行動や移動の制限によって、近視眼的になりがちな私たちの視野を豊かに広げてくれるような、多彩な現代美術作品を紹介した。東欧からロシアに関連する作家、また新収蔵を中心とした沖縄出身の作家の作品をそれぞれ小特集で構成することで、社会の大きな変化の中で芸術を生み出してきた作家たちや、今なお戦後の難しい問題をはらむ沖縄の現実の現実にいかに作家が向きあっているのかを提示することができた。展示に際しては、インスタレーション、映像など多彩な作品を含め、先端的な表現の動向を示すことができるように工夫した。

また「コレクション2 特集展示：メル・ボックナー」では、前年度の特別予算により購入したメル・ボックナーの新収蔵作品を展示した。あわせて河原温、荒川修作、ヨーコ・オノ、高松次郎といった日本人作家たちによる作品も加えコンセプチュアル・アートの同時代的な動向を紹介。パイオニア的存在であるボックナーの作品理解を深める一助になった。また所蔵作品だけではなく、豊田市美術館が所蔵する記念碑的なボックナーの《必ずしも芸術として見られる必要のないワーキング・ドローイングとそのほかの視覚的なもの》も借用して展示することで、深度のある構成を実現できた。

② 企画展

企画展では、世界の美術の新たな動向を紹介する展覧会や我が国の作家や芸術的動向を海外に紹介し、国際的な美術動向に位置付ける展覧会、メディアアート等の先端的な展覧会、作家・作品の再発見・再評価、我が国に所在するコレクションの積極的活用を目指した展覧会を、以下の点に留意し、別表2のとおり実施した。

- イ 国際的視野に立ち、アジア諸地域を含め海外の主要美術館と連携し、確固たる評価を得ている世界の美術や海外の美術の新たな動向を紹介するとともに、我が国の作家や芸術的動向を海外に紹介し、国際的な美術動向に位置付ける展覧会等に積極的に取り組む。
 - ロ 展覧会テーマの設定や他の芸術文化との連携による展示方法等について方向性を提示することに取り組む。
 - ハ メディアアート、アニメ、マンガ、デザイン、建築など我が国が世界から注目される新しい領域の芸術表現を積極的に取り上げ、最先端の現代美術への関心を促す。
 - ニ 国内の美術館と連携し、我が国に所在するコレクションの積極的活用を図る。
 - ホ 過去の埋もれていた作家・作品・動向の発見や再評価に取り組み、国際的な美術動向に位置付ける展覧会に積極的に取り組む。
- 各館の取組の特徴は以下のとおりである。

ア 東京国立近代美術館

(本館)

「大竹伸朗展」は、1980年代初頭にデビューして以来、絵画、版画、素描、彫刻、インスタレーション、デザイン、映像、絵本、音楽、エッセイなど広汎な表現を手掛け、近年ではドクメンタやヴェネチア・ビエンナーレなど主要な国際美術展への参加が続き、現代日本を代表する美術家として確固たる地位を築いている大竹伸朗（1955年生まれ）の東京都現代美術館における大回顧展「全景」（2006年）以来の回顧展となった。

総数400点を超える大量の作品が展示室を埋め尽くすダイナミックな展示が実現し、比較的天井高が低い東京国立近代美術館の展示室で現代美術を有効に見せる可能性を示した。近年、1980年代の美術に焦点をあてる企画が各地で相次ぐなかで、80年代を代表する作家である大竹の個展は時宜を得た企画と言える。同時に、大竹の最新作までを紹介する本展は、音、光、動力を取り入れた多様な作品を通じて、最先端の現代美術の鑑賞機会を提供した。また、ユビキタス環境を踏まえてキャプション情報や音源をクラウド上に実験的に設置したほか、パノラマ新聞印刷を採用したカタログによって通常の冊子形態では困難な巨大な作品紹介を試みるなど、新たな展示・印刷手法に積極的に取り組んだ。

「東京国立近代美術館70周年記念展 重要文化財の秘密」は、明治以降の美術の重要文化財を総覧する史上初の展覧会となった。重要文化財に指定された作品の評価の変遷を辿ることで、その時々々の価値観を反映する日本近代美術史生成のプロセスに迫りつつ、第一級の作品群によって国内外に日本の近代美術の魅力を発信した。重要文化財は保護の観点から貸出や公開が限られるため、本展はそれらをまとめて見ることができ得がたい機会となり、その点をアピールすることで、多くの入館者を獲得することができた。また、本展を見た後に所蔵作品展を併せて見る観覧者数も多く、東京国立近代美術館のコレクションの魅力を多くの来館者に認知してもらうことができた。

(国立工芸館)

「未来へつなぐ陶芸—伝統工芸のチカラ展」は、日本の伝統陶芸の歴史を築き上げてきた日本工芸会陶芸部会の活動が50周年を迎えたのを記念して企画した。陶芸部会は、重要無形文化財保持者（人間国宝）をはじめとする優れた陶芸家を輩出するとともに、「伝統」そして「伝統工芸（陶芸）」という言葉や取り組みを広く知らしめてきた。展覧会では、「歩み」と「確立・展開」、そして「未来へ」と繋がる歴史的な流れ3章立てとし、各章には2つのコラムを設けて、特徴を示す動向や情勢などを伝えた。作品は、伝統の技を伝え支えてきた歴代の人間国宝の名品はもとより、日本工芸会と勢力を二分する日展の代表的な陶芸家の代表作や、陶芸部

会以外でありながらも伝統の世界に刺激を与え続けている陶芸家の優品、さらには新進作家の最新作までを展示紹介した。伝統を幅広くとらえることで伝統工芸に見る「個性」を考える場となるとともに、未来への姿をも感じられる機会となった。

「ポケモン×工芸展—美とわざの大発見—」は、最先端のメディアミックスの分野で世界的に注目を集めている「ポケモン」という表現様態と、「工芸」という伝統に裏打ちされた分野の特質を融合させた新たな試みを示す展覧会として企画した。重要無形文化財保持者から新進気鋭までの20名のアーティストによる新作72点は、「ポケモン」を入口として、さまざまな素材・技法からつくり出される質感を引き出し、それを表現と一体化させて、工芸の魅力の幅広さと奥深さを来館者に伝える機会となった。工芸の新しい可能性とともに、ポケモンの世界の新たな一面も同時に楽しめると話題となった。

イ 京都国立近代美術館

「生誕100年 清水九兵衛／六兵衛」は、彫刻家・清水九兵衛と陶芸家・清水六兵衛の二つの顔を持つ九兵衛／六兵衛を一人の造形作家としてその生涯を検証する初めての試みであった。展覧会では、清水の九兵衛を名乗る以前の陶芸作品、九兵衛としての彫刻作品、七代六兵衛としての陶芸作品のほか、清水自身が撮影した写真作品、彫刻制作のための図面やマケットなど、168件の作品および関連資料を紹介した。展示レイアウトではケース外展示を多用し、特に彫刻と陶芸との関係性および作品と空間との関連性を意識させるように努めた。展覧会図録では、展覧会担当者による二本の論考のほか、作家本人の文章の再録、作家の背景を知るための「五条坂（京焼）」、「六兵衛窯」、「彫刻」に関する三本のインタビュー記事に加えて、詳細な年譜と参考文献を収録したことで、今後1950-90年代の美術を知るうえでの文献としても十分に活用できるものとした。また、展覧会にあわせて京都市内に残る九兵衛彫刻を紹介する「京の街角てくてく 九兵衛さんマップ」を作成し、地域の文化遺産としての九兵衛作品の認知度をあげることができた。

「開館60周年記念 甲斐荘楠音の全貌—絵画、演劇、映画を越境する個性」は、大正から昭和にかけて日本画家として、そして時代劇映画の衣裳考証家として活躍した甲斐荘楠音（1894-1978）の回顧展である。京都国立近代美術館が26年前に開催した回顧展では日本画作品のみを展示したのに対し、今回は、彼が手がけた時代劇映画の衣裳約40領を、関連のポスター等とともに取り上げたほか、彼が遺した膨大な写真やスケッチをも一挙公開し、絵画・写真・映画という3つの分野をまたぐ展示を試み、絵画と映画をつなぐ演劇や身体への彼の関心をも視野に入れた構成とした。26年前の回顧展以降、国内外を問わず研究者の間で絶えず関心を持たれ、再評価の途上にありながらも、研究材料の不足から未だ充分には解明されてこなかった芸術家について、近年発見された映画衣裳コレクションや、今回新発見の絵画・素描コレクションなど、新たな研究材料を多数提示するとともに新たな視点を提案した。一般に広く知られているとは言い難く、美術ファンの間でも一側面しか知られていなかった作家についてその全貌を明らかにするとともに、絵画・写真・演劇／映画というジャンル間の越境性や性における越境性について理解を促すことにも繋がった。

ウ 国立西洋美術館

「国立西洋美術館リニューアルオープン記念 自然と人のダイアログ フリードリヒ、モネ、ゴッホからリヒターまで」は、ドイツのフォルクヴァング美術館とお互いのコレクションを用いて協働して作り上げた2部構成の展覧会企画の後期にあたる。まず、企画全体を通じた意義としては、日独2つの美術館の歴史やコレクションの研究の蓄積を披露し、進展させる貴重な機会になったことが挙げられる。さらに、本展では、お互いのコレクションの現在に焦点をあてたテーマ展として、自然と人の関係性という今日の問題の考察を深めることができた。建築家の協力を得て、ディスプレイのデザインに、本展のテーマ性だけでなく、2つの美術館建築の特質も落とし込んだことも新しい試みであった。また、展示の中心は19-20世紀初頭の絵画であったが、フォルクヴァング美術館の写真作品や現代アート作品を加えることで、国立西洋美術

館のコレクションに新たな角度から光をあててその魅力の再発見につなげることを目指した。これにより、従来の鑑賞者層よりも若年の鑑賞者の関心を広く集めることができた。

「ピカソとその時代 ベルリン国立ベルクグリーン美術館展」は、ベルリン国立ベルクグリーン美術館の改修を機に実現した。ドイツ生まれの美術商でコレクターのハインツ・ベルクグリーン功績と彼が蒐集した比類のないコレクションを、日本および世界で初めて包括的に紹介する貴重な機会となった。ベルクグリーンが敬愛したピカソ、クレー、マティス、ジャコメッティという4人の芸術家の作品を中心に構成された展示は、シンプルで明快であるとともに、それぞれの作家の強烈な個性を際立たせるものであり、結果、個々の芸術家の魅力と、創造性と生命力にあふれた20世紀美術の精髓を最大限示すことができた。常設展示の核となる19世紀フランス美術やオールド・マスターの企画展が主流である国立西洋美術館において、ピカソやマティスといったモダン・マスターの展覧会の開催は実に約20年ぶりのことであり、展示の可能性を再び大きく広げるとともに、従来の鑑賞者層よりも若年の鑑賞者の関心を広く集めることができた。また、20世紀美術の専門家が多く参加し、出品作品108点の詳細な作品解説も含む展覧会カタログも、学術的に優れた成果として評判を得た。

エ 国立国際美術館

「感覚の領域 今、「経験する」ということ」は、表現の手法も素材も技法も異なる7名の作家を個展形式で紹介することによって、各々の特色を際立たせ、各作家のテーマ性と独創性への理解を深めてもらえるよう試みた。また、来館者には、さまざまな実際の経験（体験）の機会を提供することで、現代美術の魅力を堪能してもらうと同時に、リアルな経験の場としての美術館のもつ可能性を認識してもらえるよう努めた。展示会場では来館者が積極的に作品へ関与する様子が見受けられ、こうした目的は概ね達成されたものと思われる。

「すべて未知の世界へ — G U T A I 分化と統合」は、具体美術協会の18年に及ぶ軌跡を、前・中・後期といった従来の単線的な図式に落とし込むのではなく、むしろ輻輳的に捉えなおそうとした。国立国際美術館では集団全体の流れをマクロな視点から捉えつつ、大阪中之島美術館では各会員たちの手がけた作品の見方、体験の内実についてミクロな分析をほどこすといった具合に、異なる視点からこの動向にアプローチすることで、従来とは異なる価値付けができたと考えている。また、1960年代以後の活動に重点を置いていたことも本展覧会の特徴で、従来「衰退期」とも位置づけられうるこの時期の仕事に新たな光を当てたことは、結果として、具体の評価を総合的に高めることにも繋がった。歴史的な分類・整理を超え、「いま、具体の作品を見ることの意義」について積極的な議論を喚起できた点で、本展覧会はこれまでの具体展とは一線を画している。

オ 国立新美術館

「メトロポリタン美術館展 西洋絵画の500年」は、メトロポリタン美術館の常設展示室の改修を機に実現し、通常ほぼ貸し出されない常設展の主要作品が出品された。出品作65点（うち46点は初来日）は、各時代・国を代表する画家たちの最も質の高い作品ばかりであり、500年間の西洋絵画史を最良の作品を通して体感する貴重な機会を提供できた。日本では1972年以来、10年に1回ほどの頻度でメトロポリタン美術館のコレクション展が開催されてきたが、本展において特筆すべきは、90年代頃まで「名品」と見なされなかった18世紀末フランスの女性画家の作品を紹介したことである。これは、70年代に始まったジェンダー論からの美術史の見直しを踏まえている。「名品展」はブロックバスター展と批判されがちだが、その出品内容には美術史研究の最新の方法論・現代的視点が反映され、偏りや欠けていた視点が補なわれる。その意義を、本展では会場の解説や音声ガイドの原稿を工夫し、鑑賞者に伝えることができた。西欧各国のオールドマスターが出品されたため、展覧会カタログには作家の活動地・生没年地のデータを明記し、現在の地名と異なる場合は補足するなどして、精緻な情報提供を心がけた。編集作業のなかで、所蔵先のメトロポリタン美術館から提供された生没年地データにいくつか不備を発見したため、先方にその旨共有し、データの精度を高めることに貢献しつつ、本展観覧者にも正確な情報を提供することができた。

「国立新美術館開館 15 周年記念 李禹煥」について、李禹煥が主導した 1970 年代に生まれた美術運動である『もの派』は、2010 年代に主にアメリカとフランスの主要美術館で展覧会が立て続けに開催されたことで、国際的文脈で確固たる戦後美術の重要な運動として地位を築いた。こうした機運の中で、東京で李禹煥の過去最大の個展を開催したことは、日本並びにアジアの現代美術の国際的発信に大きく寄与したと考えられる。本展の最も重要な点の一つは、李禹煥自身がこれを自身初のキャリアの全貌を振りかえる回顧展として位置づけたことにある。また、絵画と彫刻を大きく二つのパートに分ける展示構成にも特色があった。李は 1970 年代から絵画と彫刻の両方のジャンルで活発に活動してきたが、その両者を混在させることなく、それぞれを独立させた本展の展示構成は、国内外の幅広い美術関係者、コレクター、評論家、キュレーター、批評家から強い関心が寄せられた。さらに、日本語と英語を見開きでレイアウトすることで英語圏の読者にも配慮した本展のカタログは、英語圏での売れ行きも良く 3 刷りまで印刷された。寄稿された論文の質は当然のことながら、展覧会歴や文献などの資料情報を網羅的に掲載した点が特に高く評価されたと考える。くわえて漫画形式を採用した鑑賞ガイド（日・英）は、SNS やアンケートなどで高い評価を得ることができた。

③ 国立映画アーカイブの映画上映会・展覧会

国立映画アーカイブの映画上映会・展覧会は、別表 3 及び別表 4 のとおり実施した。

取組の特徴は以下のとおりである。

上映会「発掘された映画たち 2022」の特色は、国立映画アーカイブにおける日々のアーカイブ活動の成果を一般の映画ファンにも目に見える形で披露する上映シリーズであり、茨城県・神龍寺所蔵の説明台本をもとに弁士付きで上映した『關東大震大火實況』（1923）や、西村小楽天の説明音声を映像と同期させた『戀の花咲く 伊豆の踊子』（1933）、長らく上映の機会が失われていた清水宏の戦後第 2 作『明日は日本晴れ』（1948）、マキノ正博主宰の C. A. C.（映画藝術家協同）が製作した『生きてみた幽霊』（1948）と『今日われ恋愛す』（1949）、映画完成時の色彩を再現した『回路』（2001）の銀残し・再タイミング版など、計 58 本の復元作品について、映画史ならびに保存復元の観点から多彩な切り口で紹介することができた。

上映会「日本の女性映画人（1）——無声映画期から 1960 年代まで」の特色は、女性の映画監督のみならず、脚本家をはじめとして、結髪やスクリプターなどこれまで看過されてきた領域にも光をあて、日本映画史における女性映画人の貢献を再評価したことにある。戦前期から 1960 年代までの日本映画の黄金期に、撮影所での映画作りにおいて多くの女性が活躍していた点に着目することで、日本映画史に対する新たな視座を切り拓く上映会となった。とりわけ先行研究の限られていた戦前期について、剣戟時代劇の分野で活躍していた女性脚本家の業績を網羅的に紹介した。また、劇映画のみならず、ドキュメンタリーや教育映画なども幅広く対象として、羽田澄子、時枝敏江、中村麟子、井出玉江、かんけまりなどが多種多様な作品作りに取り組んでいたことを明らかにした。

展覧会「脚本家 黒澤明」について、国立映画アーカイブでは 2010 年の「生誕百年 映画監督 黒澤明」展の後も、ポスター展「旅する黒澤明」（2018 年）、「公開 70 周年記念 映画『羅生門』展」（2020 年）と黒澤映画の先端的な探求を推し進めてきたが、本展覧会は在野の黒澤映画の専門家による全面的な協力を得て、そのシナリオ術に照準を当てた黒澤研究の最新形といえる企画である。黒澤は、幾多の名脚本家に支えられて次々と傑作映画を生み出したが、若き日から世界の文豪たちの影響を受けながら自身もシナリオを執筆することで成長した。本展覧会はそうした側面に着目し、『七人の侍』（1954 年）ほか名作脚本の生成・変更の過程を分析し、また他の監督たちに提供した脚本、新たに発見された未映像化脚本も加えて、「シナリオ作家黒澤」の創作の秘密を解き明かそうとした。多くの一次資料を発掘して展示したほか、とりわけ『隠し砦の三悪人』（1958 年）の脚本作りの過程についてはデジタル展示システム「IT-One Quest」の最新バージョンを導入して解説し、名作の脚本の生成について入場者の理解を促した。

④ 国立西洋美術館本館の活用・公開

世界文化遺産を構成する前庭の防水更新工事を竣工し、設計者であるル・コルビュジエの設計理念を反映した1959年開館当初に可能な限り復原した。また、前庭の工事について館内解説パネルを作成し、建築ツアー等で紹介することで建築作品としての鑑賞の機会を提供した。

⑤ 地方巡回展等

国立美術館の所蔵作品を効果的に活用し、地方における鑑賞機会の充実及び美術の普及を図るとともに全国の公私立美術館等の活動の充実と作品活用の促進に資するため、全国の公私立美術館等と連携して、国立美術館巡回展を実施した。

また、国立映画アーカイブにおいて、「優秀映画鑑賞推進事業」を全国各地で実施した。

令和4年度の地方巡回展及び巡回上映等は、別表5のとおりである。

さらに、国立アトリサーチセンターにおいて、全国の美術館等と協力し、国立美術館のコレクションを活用した展覧会の開催を支援する新たな事業の構築に向けて検討を行った。

(2) 美術創造活動の活性化の推進

第5期（令和3年度～令和7年度）中期目標に定める指標	
指標	・国立新美術館（国立アートセンター）の公募展示室の予約率は、展覧会の国際的な評価の向上を図りつつ100%を目指すものとする。
関連指標	・国立新美術館（国立アートセンター）における全国的な活動を行っている美術団体等への展覧会会場の提供に係る取組状況。（公募展団体数） ・公募展示室における展覧会毎の入場者数 ・展覧会毎の批評・レビューの状況（掲載数及び掲載媒体数） ・新聞社・テレビ局・公募展以外の主体への展示室貸し出し件数 ・企画展示室において現代作家を採り上げた展覧会の実施回数及び採り上げた作家の人数

※本項目はすべて国立新美術館に関する指標である。

① 公募団体等への展覧会会場の提供等

公募展団体数	80 団体	年間予約室数	3,461 室/年	予約率	98.9%
公募展事業収入	306,014,730 円	入館者数	878,858 人		

全国的な活動を行っている美術団体等への展示室の提供を上記のとおり行った。また、令和6年度に公募展示室を使用する81団体（野外展示場のみ使用団体を含む。）3,486室を決定したほか、美術に関する新たな創造活動の展開や国際発信、芸術家の育成等を支援し、我が国の美術創造活動の活性化に資するため、令和9年度以降の公募展示室の貸出に係るワーキング・グループを設置した。

② 新しい美術の動向や現代作家の積極的な紹介

- ・「ダミアン・ハースト 桜」と「李禹煥」は、それぞれ、世界の主要都市で個展が開催されながら、東京ではまだ個展が実現していなかった現代作家の活動を紹介した展覧会として、大きな意義があった。
- ・「ルートヴィヒ美術館展 20世紀美術の軌跡—市民が創った珠玉のコレクション」は、20世紀初頭の前衛的表現の延長線上に現代美術を位置づける俯瞰的視点をもった、意義深い企画であった。
- ・現代美術に親しむ機会を広く提供することを目指し、入場無料で開催したインスタレーション展「ワニがまわる タムラサトル」は、実際に幅広い層の来場者を迎えることができ、現代美術振興という目的を果たすことができた。
- ・令和4年度開始した館内パブリックスペースでの小企画展シリーズ「NACT View」では、第1回に玉山拓郎（1990年生）、第2回に築地のはら（1994年生）を取り上げた。2000㎡の広い展示室では紹介しにくい若手作家の作品を、全来館者が無料で気軽に鑑賞できるパブリックスペースに展示することにより、若手作家の支援と現代美術の普及という二重の観点で意義深いプロジェクトとなった。
- ・新聞社・テレビ局・公募展以外の主体への展示室等貸し出し件数については、213件であった。

※関連指標の2、3、5点目は別表6～8参照。

③ 国際発信拠点として機能するための運用の見直し

展示室の予約の在り方等を見直すため、令和4年度は東京都美術館に往訪し、公募展の現状についてのヒアリング及び意見交換を行った。

令和5年1月に館内で令和9～13年度の公募展示室使用団体の使用基準見直しに係るワーキング・グループを設置し、現状の課題の共有を行った。

(3) 美術に関する情報の拠点としての機能の向上

第5期（令和3年度～令和7年度）中期目標に定める指標	
指標	<ul style="list-style-type: none"> ・ホームページアクセス件数の合計は、前中期目標期間の実績以上とする。 ・デジタル化した所蔵作品データの公開率（画像データ）は、前中期目標期間の実績以上とする。 ・デジタル化した所蔵作品データの公開率（テキストデータ）は、前中期目標期間の実績以上とする。 ・アトライブラリーの利用者数（オンライン利用含む）

① 国立アトリサーチセンターにおける国内美術館所蔵作品等の情報の国内外への発信

国立アトリサーチセンター（設置準備室における取組を含む。以下同じ。）において、「全国美術館収蔵品サーチ」をはじめとする「アートプラットフォームジャパン」サイトのデータベース事業を継承し、データの追加・更新及び持続的な運営・発展体制の構築に努めた。「全国美術館収蔵品サーチ」に関連し、国内の複数の美術館と連携して、収蔵品データ登録件数の増加を実現した。また、東京文化財研究所との連携の関係を維持し、作家情報に関するデータの充実を図った。

「独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システム」については、国立工芸館所蔵品に関する所蔵先表記の明確化など、データの精度を高めるとともに、令和3年度と同様に著作権者情報の整備を行い、画像使用許諾申請等の手続業務を行った。また、「国立美術館サーチ試験公開版」を新たに公開し、国立美術館コレクションとその関連情報へのアクセシビリティ向上を図った。以前より連携している国立国会図書館「ジャパンサーチ」については、新たに「関東大震災映像デジタルアーカイブ」など、国立映画アーカイブ所蔵映画フィルムに関するデータ連携を実現した。

② 国立美術館所蔵作品等のデジタル化・データベース化、所蔵作品検索システムの充実

・ホームページアクセス件数

館名	アクセス件数（ページビュー）	
	実績	目標※
本部	1,332,204	1,329,241
東京国立近代美術館（本館・工芸館）	7,451,619	5,951,959
京都国立近代美術館	2,550,242	4,243,023
国立映画アーカイブ	1,973,266	1,385,168
国立西洋美術館	24,064,182	16,108,316
国立国際美術館	2,524,098	2,810,293
国立新美術館	15,678,319	14,564,307
合計	55,573,930	46,392,307

※目標値は前中期目標期間の平均値である。

・ 所蔵作品データ等のデジタル化と公開

館名	画像データ					テキストデータ				
	デジタル化件数		累積公開	公開率		デジタル化件数		累積公開	公開率	
	新規	累計	件数	実績	目標	新規	累計	件数	実績	目標
東京国立近代美術館 (本館)	35	12,218	8,115	59.5%	56.7%	325	13,228	12,395	90.8%	87.1%
東京国立近代美術館 (国立工芸館)	142	5,217	3,923	96.3%	87.2%	32	5,722	4,937	121.2%	114.6%
京都国立近代美術館	412	10,090	9,346	70.5%	60.1%	298	16,317	15,573	117.5%	118.4%
国立映画アーカイブ	-	-	-	-	-	14,244	300,070	-	-	-
国立西洋美術館	6	4,652	4,652	72.3%	71.8%	6	5,089	5,089	79.1%	76.6%
国立国際美術館	186	8,853	5,052	61.9%	61.6%	175	9,622	8,702	106.6%	103.8%
合計	781	41,030	31,088	68.2%	63.4%	15,080	350,048	46,696	102.5%	100.0%

【注1】「デジタル化件数」は、各館のローカルシステムにおける画像及びテキストデータの登録件数である（国立映画アーカイブについては、ローカルシステムである NFAD への映画フィルム及び映画関連資料のテキストデータ登録件数を掲載している。）。

【注2】「累計公開件数」は、「独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システム」(<http://search.artmuseums.go.jp/>)における画像及びテキストデータの公開件数である。

【注3】上表のほか、東京国立近代美術館ではホームページ内「作品検索」(<https://www.momat.go.jp/collection>)において作品のテキストデータ 12,532 件及び画像データ 8,206 件を、国立映画アーカイブでは「国立映画アーカイブ所蔵映画フィルム検索システム」(<http://nfad.nfaj.go.jp/>)において日本劇映画のテキストデータ 7,903 件を、国立西洋美術館では「国立西洋美術館所蔵作品データベース」(<http://collection.nmwa.go.jp/artizeweb/>)において作品のテキストデータ 6,296 件及び画像データ 6,467 件を、国立新美術館では「ANZAI フォトアーカイブ」(<http://db.nact.jp/anzai/>)においてアーカイブズ資料のテキストデータ 3,217 件を公開している。

※ 国立工芸館、京都国立近代美術館、国立国際美術館では、複数で一揃いの作品を個別に掲載している場合等があるため、テキストデータの公開率が高くなっている。

特記事項

ア 法人全体・国立アトリサーチセンター

国立アトリサーチセンターにおいて、各館との連携の下、国立美術館における所蔵作品・関連資料のデジタル化・データベース化を推進した。国立西洋美術館が保管する林忠正(1853-1906)宛書簡群(東京文化財研究所蔵)のデジタル化・データベース化を実現し、ジャポニスム研究をはじめとする、国内外の美術研究に資する良質なコンテンツの提供につとめた。

また、法人のホームページは法人情報を中心に掲載してきたが、利用者が日本の国立美術館の入口として利用している事実を鑑み、国立美術館各館の特徴を理解した上で各館に誘導できるよう、令和5年2月にホームページのリニューアルを行った。また、インバウンドのアクセスも考慮し日英言語をサポートした。さらに、リニューアルに伴い HP アクセス件数の算出方式を修正し、ウェブサイトに対する攻撃的な行動を対象外とした。

イ 東京国立近代美術館 (本館)

情報通信技術 (ICT) の活用事例として、以下を継続的に行った。平成8年以来、国立情報学研究所 (NII) が提供する NACSIS-CAT に参加し、展覧会カタログを中心とする美術資料の書誌デ

ータ流通への貢献。平成16年以来、東京国立近代美術館をはじめとする在京国立美術館、国立博物館、東京都歴史文化財団の美術館、博物館等で構成される美術図書館連絡会（ALC：The Art Library Consortium）への加盟を継続し、同会が維持管理する美術図書館横断検索（ALC Search）への情報連携。平成24年度からの60周年事業の一環である60年史のデータ集成及び編集作業、および、ミュージアム・アーカイブの整備を進め、法人文書ファイル管理簿等との整合性が図れるよう関係部署と調整し、図書検索システムでの情報管理の継続。過年度より継続して「JAIRO Cloud」を用いて「東京国立近代美術館リポジトリ」の整備に努めた。さらに「ERDB-JP」（電子リソース管理データベース）への登録を引き続き行ない、Cinii Researchと連動した電子コンテンツへのアクセス向上に寄与するとともに、東京国立近代美術館の活動を広く周知するのに役立てた。また、「若林奮資料」（全3213点のうち1707点）、貴重書「岸田劉生資料」（396件）および「講演会音声テープ」（199本）のデジタル化に取り組んだ。

（国立工芸館）

所蔵作品総合検索システム等における作品情報・画像の公開については、正確でより充実した情報の発信を心掛けてデータの整備を行っている。なかでも画像の公開については、モノクロ画像のカラー画像への差し替えが課題として挙げられている。古い作品は、過去に撮影したモノクロ画像のみのものが多く、システムへの掲載もモノクロ画像のみとなっており、作品の情報を画像から得ることが難しくなっている。そのため令和4年度は、モノクロ画像のみの作品を優先的に撮影対象とし、カラー画像の撮影とその画像のデータベースへの登録を進めた。データベースへ登録した画像は、順次所蔵作品総合検索システムへ差し替えを行い、より充実した内容をシステム利用者へ提供することができた。

ウ 京都国立近代美術館

所蔵作品等のデジタル化・データベース化は美術に関する情報の拠点としての国立美術館の使命であり、国立アトリサーチセンターが推進する総合検索システム整備の一翼を担うべく、所蔵作品データベース整備とともに、作品画像のデジタル化や新規のデジタル撮影を推進している。データベース整備においては、年々増加し続ける新収蔵作品等のデータ入力だけではなく、過去に入力されたデータの見直しを行い、最新研究成果に基づく修正や充実を行うとともに、利用者のための利便性の向上も図っている。また、データベースの整備や修正からその公開までの間には現行システム上タイムラグが生じるため、それを解消するため美術作品管理システムを既成のクラウド型データベースへ移行させる予定であり、令和4年度にデータを移行し、令和5年度中の公開を目指して作業を進めている。

エ 国立映画アーカイブ

令和3年度に開設した「関東大震災映像デジタルアーカイブ」については、震災から100年目を迎える令和5年9月1日に向けて、追加の動画等の公開を進めた。また令和4年度は国立映画アーカイブのフィルム・コレクションのより大規模な公開を行う新たなプラットフォーム「フィルムは記録する ー国立映画アーカイブ歴史映像ポータル」を開設した。

平成25年度開始の所蔵資料公開事業「NFAJ デジタル展示室」については、令和4年度中に第26回から第28回の公開として「戦前期の日本の映画撮影所」第1回から第3回までの特集展示を行った。

デジタル化については、「みそのコレクション」の映画館プログラム、戦前期の映画雑誌、映画技術資料などの大規模なデジタル化を実施し、そこで得られたデータの整理にも取り組んだ。うち映画技術資料については国立アトリサーチセンターの協力の下、令和5年度公開予定の映画資料専門ウェブサイト「映画遺産 国立映画アーカイブ映画資料ポータル」への搭載作業を行った。また令和3年度にデジタル化を実施した映画史家塚田嘉信旧蔵の映画雑誌に関しては、平成29年度に図書室内に開設した「デジタル資料閲覧システム」にデータが追加され、さらなる充実を果たした。

オ 国立西洋美術館

新規収集品の速やかな写真撮影、来歴や展覧会歴・文献歴なども含めた館所蔵作品データベースへの登録を着実に進め、「全国美術館収蔵品サーチ」との連携も通して、コレクションの情報を広く発信している。国立西洋美術館の SNS でも所蔵作品データベースを引用した所蔵品紹介記事を定期的に投稿しており、幅広い層にデータベースおよびコレクションについて周知する工夫も行っている。

さらに、東京文化財研究所から寄託を受けている林忠正宛書簡群のデジタル化を完了し、ウェブサイト「林忠正関連書簡・資料集」を通じて公開した。同書簡を複数のアクセスポイントから検索可能とし、書簡画像と翻刻テキストを併置して見られる仕様で館外に情報発信することができた。

カ 国立国際美術館

所蔵作品、所蔵作家及び過去の展覧会や刊行物ほか資料（インタビュー映像も含む）など、国立国際美術館の活動に関する種々の情報を横断的に検索できる公開システムの構築を実施した。国立アトリサーチセンターの協力の下で構築した本システムは、日英バイリンガルで、令和5年度に運用を開始する予定である。検索項目に関連する展示風景やテキスト等も並列的に表示されることで、国立国際美術館の所蔵作品についての理解が促進されることが期待される。また、システム構築と並んで、展覧会や関連イベントの記録写真および映像、過去に作成した展覧会広報物（チラシ、ポスター）やフロアガイドのデジタル化も積極的に実施した。

キ 国立新美術館

国立新美術館が所蔵する ICA, Nagoya 関係資料の写真 2,843 点（紙焼き、ネガ、ポジ）を中心にデジタル化を行った。また、ANZAI フォトアーカイブ所収の写真を「国立新美術館開館 15 周年記念 李禹煥」展カタログ（16 点）および『李禹煥：ドキュメンツ 2022-23』（4 点）に掲載、「国立新美術館所蔵資料に見る 1970 年代の美術—— Do it! わたしの日常が美術になる」展（97 点）に出品し、発信に努めた。「Do it!」展を契機とし、出品資料の閲覧申込 2 件（うち 1 件は海外）を受けた。

デジタルデータの提供としては、令和 4 年 10 月から機関リポジトリの公開に着手し、国立新美術館が刊行した活動報告、国立新美術館ニュース等のデータの提供を開始した。

③ 美術情報・資料の収集、レファレンス機能の充実

ア 美術情報・資料の収集及び情報サービスの提供

館名	収集件数 (冊)	累計件数 (冊)	図書室等 利用者数 (人)	図書室等のオン ライン利用数 (件)
東京国立近代美術館 (本館)	4,201	158,224	1,032	1,580,668
国立工芸館	1,607	32,961	1,014	
京都国立近代美術館	1,363	36,436	3	138,449
国立映画アーカイブ	2,038	53,831	1,186	1,409,992
国立西洋美術館	612	55,058	115	137,475
国立国際美術館	1,166	56,980	5	94,440
国立新美術館	2,395	165,511	11,984	1,588,615
合計	13,382	559,001	15,339	4,949,639

【注1】上記の図書室等のほか、東京国立近代美術館は本館4階（令和2年度より新型コロナウイルス感染防止のため停止していたが、令和4年10月にリニューアルし再開した）、京都国立近代美術館は4階、国立西洋美術館は1階、国立国際美術館は地下1階に図録等を閲覧できる情報コーナーを設けている。

【注2】平成30年11月3日より京都国立近代美術館及び国立国際美術館では事前予約制による資料閲覧を開始したため、予約閲覧利用者数を「図書室等利用者数」の欄に記載している。

【注3】「図書室等のオンライン利用数」は蔵書検索（OPAC）のアクセス数又は検索数、リポジトリ閲覧件数、パスファインダー閲覧数のうち該当するものの合計値である。

特記事項

(ア) 東京国立近代美術館

(本館)

企画展、所蔵作家・作品、近現代美術に関する資料の収集（寄贈交換含む）を積極的に行い、展覧会活動の推進に役立てた。4月より高度な検索機能を有する図書館システム「E-CatsLibrary」（株式会社シー・エム・エス）に移行した。令和2年度より事前予約制による開室を行っていたが、8月より原則事前予約不要（一部資料を除く）とする開室に切り替え、美術資料へのアクセス向上を図った。引き続き、「NACSIS-ILL（図書館間相互利用サービス）」に参加し、遠隔による文献複写サービスに取り組み、52件対応した。ウェブサイト内で連載企画「研究員の本棚」「カタログトーク」「アトライブラリ所蔵資料の紹介」を公開し、美術資料に関する情報発信に努めた（『現代の眼』（637号）に収録）。令和5年3月の新ウェブサイト移行に伴い、情報サービスへのアクセス性向上を目的に「調査研究」ページを整理・構築した。令和3年度に引き続き、書架の狭隘化対策として民間倉庫を継続的に利用した。また、閉架書庫の老朽化に伴い、電動書架（計6か所）の内1か所の改修工事を行った。

(国立工芸館)

展覧会毎に参考図書を提供しているため、展覧会のテーマに合わせた資料の収集を行った。令和4年度はポケモン展が開催され、普段とは異なった客層が来館しており、展覧会の会場にある作品から作家に興味を持った利用者のため、展覧会担当者に相談をしながら出品作家の資料収集も積極的に行った。

また、金沢への工芸館移転後から資料寄贈の申し出が増加傾向にあり、これまでも個人収集家や工芸館所蔵作家からの寄贈申し出を受けてきたが、特記すべきは2021年に解散した、日本クラフトデザイン協会からのまとまった資料寄贈である。この寄贈をきっかけに、同協会所属会員からも資料寄贈の申し出があった。協会発足時からの貴重な資料を分散させることな

く、工芸館でまとめて所蔵できたことは、同協会に関する研究への寄与のみならず、工芸館のライブラリが専門図書館としての役割を果たすうえで重要である。

(イ) 京都国立近代美術館

図書資料は主に寄贈により増加し続けているが、保管場所に限界があることや、美術関連を含めた一般書籍・雑誌については隣接する京都府立図書館が利用できることから、近現代の美術・工芸に関するものに限定して収蔵している。寄贈のほかにも、令和5年度開催予定の「開館60周年記念 小林正和とその時代：ファイバー・アート、その向こうへ」展に向けた研究資料として『現代日本の衣匠』vol.1 (2004年) など関連書籍を、京都国立近代美術館収蔵作品研究に資する資料として明治美術学会誌『近代画説』22-30巻などを購入したほか、雑誌『視覚障害：その研究と情報』を定期購入し、教育普及事業における「障害当事者と協働した鑑賞プログラム開発」に活用した。図書データベースの整備も引き続き推進し、特に未登録状態となっていた上野伊三郎氏旧蔵資料(一部 約90点)を登録することで、館内資料全般にわたるアクセス向上を目指した。なお、これまでは展覧会カタログに限定してデータベースを一般公開してきたが、画集・書籍のデータも令和5年度中に公開できるように準備中である。図書閲覧サービスも、前年度と同様に換気・アルコール除菌等による徹底した感染症対策のもと実施し、3件の申込みに対応した。

(ウ) 国立映画アーカイブ

図書室では、映画文献に関する一定の網羅性を目指して、映画関連の新刊書と雑誌を収集するとともに、未所蔵の古書や戦前の雑誌など貴重な映画文献の購入、さらに一般の書籍流通ルートには乗らない刊行物の収集にも努めている。令和4年度も未収蔵の文献を購入したが、中でも古書店からの購入として特筆すべきは「活動週報」「キネマ画報」などであり、雑誌欠号の入手にも努めた。

図書所蔵情報の公開については、新型コロナウイルスの影響にもかかわらず、新着書籍の登録を例年通り行えただけでなく、映画雑誌の遡及登録も進めることができた。

図書室運営についても、新型コロナウイルス感染症のため令和3年度に採用した事前予約を優先とする入室制限(同時に8名まで)を行いつつ週3日開室(火曜・木曜・土曜)としてきたが、11月1日からはさらなる入室緩和を行い、事前予約を廃止して入室人数の上限を10名に変更した。

(エ) 国立西洋美術館

松方コレクション関連の資料について積極的に収集を進めていくという方針のもと、松方コレクションの形成に係る書簡資料の調査、収集準備を行った。また令和5年度開催の自主展に向け、フランスの画家セレスタン・ナントゥイユによる挿絵が挿入されたヴィクトル・ド・フェレアルほか著『絵画、芸術、記念碑のスペイン』(パリ、1848年)等の貴重書をはじめ、関連書籍を多数収集した。これらは展覧会における展示のほか、研究資料センターでの閲覧公開など多義的な活用が期待できるものである。書庫の狭隘化に伴いオンライン資料の充実にも努めており、3件の購読雑誌を紙媒体での購読からオンライン媒体での購読へと切り替えた。

研究資料センターを通じてのサービス提供としては、利用予約をウェブサイトから24時間受付可能とし、利用者の利便性向上を図った。また22件(280枚)の遠隔複写に対応した。

(オ) 国立国際美術館

作品収集に関する文献資料や、所蔵作家の資料を中心に収集することができた。特にコレクション展の特集テーマに沿った資料の収集等に取り組み、展示室に閲覧資料として設置することで、多くの方の閲覧に供することができた。コレクション1では世界情勢、社会情勢を踏まえた特集展示が生まれ、作品収集でも近年力を入れている非欧米系の作家、作品に関する資料、また日本では沖縄など地域性を重視した作品収集に関連して、文献資料についても同様

に、収集に力を入れるとともにコレクション2のメル・ボックナーの特集展示では、作品収集当時から継続して作家資料を中心に収集しており、それらも閲覧していただけるように図書資料コーナーを展示室に設置した。

教育普及のイベントでは未就学児を対象にした「ちっちゃなこどもびじゅつあー」で絵本の読み聞かせを取り入れており、連携して絵本の購入も積極的に行った。イベント後はキッズルームに配架し、一般の利用者の閲覧に供している。

(カ) 国立新美術館

令和3年6月以降、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、事前予約制による資料提供を行ってきたが、令和4年4月よりアトライブラリーの土日開室（予約制）、続いて10月より通常開室を開始した。また、6月からは予約閲覧を再開し、別館所蔵資料の一部を当日出納可とし、資料提供制度を回復させた。

オンラインイベント「Museum Week 2022」に合わせ、アトライブラリー内の資料展示コーナー「話のたね」にて「ジェンダーの視点から見る、絵画、写真、ファッション」を企画、資料リストを公開した。

イ 東京国立近代美術館アトライブラリーと国立新美術館アトライブラリーの在り方の見直し
両館の蔵書体系および収蔵方針や、運営方法等を中心とする基本情報の共有・確認を行ったうえで、両館の特性を踏まえたライブラリー運営の将来的な在り方に関する意見交換（収蔵方針の明確化、書庫の狭隘化等）を行った。令和5年度以降、利用者の利便性向上を目的に、相補的な活動を促進するための協議を重ねていくこととしている。

(4) 教育普及活動の充実

第5期（令和3年度～令和7年度）中期目標に定める指標	
指標	<ul style="list-style-type: none"> ・講演会等のイベントの満足度調査を実施し、「良い」以上の回答率を8割程度とする。 ・教材化された素材の活用件数
関連指標	<ul style="list-style-type: none"> ・教育普及事業参加者数

① 幅広い学習機会の提供及びラーニングコンテンツ等の開発

ア 幅広い学習機会の提供（講演会、ギャラリートーク、アーティスト・トーク等）

新型コロナウイルス感染症の感染状況を見ながら、オンラインも活用し、年齢や理解の程度に応じたきめ細かい多様な事業を展開した。

館名	事業実施回数(回)	参加者数(人)	満足度調査実績
東京国立近代美術館（本館）	304	4,486	93%
国立工芸館	85	1,785	94%
京都国立近代美術館	60	2,763	85%
国立映画アーカイブ	188	14,097	92%
国立西洋美術館	159	6,677	98%
国立国際美術館	238	8,077	94%
国立新美術館	71	3,661	97%
合計	1,105	41,546	93%

【注】満足度調査実績は、「良い」「普通」「悪い」のうち「良い」と回答した者の割合である。

特記事項

(ア) 東京国立近代美術館

(本館)

令和4年度前半は、令和3年度に引き続き感染症対策に取り組みながら、学校団体向けガイドダンスなど一部の対面プログラムを実施した。令和4年度後半はガイドスタッフによる「所蔵品ガイド」を定員制で3年ぶりに再開したほか、講演会など対面でのイベントを再開した。一方でオンライン事業も継続し、大竹伸朗展では対面でのトークイベントを収録し後日配信するなど、オンライン・対面双方を活用した教育普及活動が定着しつつある。MOMAT コレクション小特集「プレイバック「抽象と幻想」展（1953-1954）」は、VR 展示ガイドシート、対面の講演会、YouTube でのキュレータートーク配信など様々な形で学習機会を提供することができた好例となった。

(国立工芸館)

令和4年度の新しい試みとして、展覧会に出品中の作家・作品に関する技術記録映画（文化庁企画・制作）の上映会を行った。来場者は直前まで会場で作品鑑賞を行っていたこともあり、作品理解と関心を深めることができたとして好評であった。このような新規プログラムを開発できたのは、国立美術館内で情報等の共有が整備されていたことが大きな力となり、貴重な機材・映写技術をもって実現することができた。

(イ) 京都国立近代美術館

企画展に関連し、清水九兵衛展では市内に点在する作品をイラストマップで紹介する「九兵衛さんマップ」、鏑木清方展では「ジュニアガイド」を制作し市内小学校へ無料配布することで、より幅広い利用者層に向けて美術に親しむ機会を届けることができた。

また、9月には清水九兵衛作品を視覚障害のある人となない人が共に鑑賞する「手だけが知ってる美術館」、3月には甲斐荘楠音の作品について聴覚障害のある人となない人で対話鑑賞を行う「シュワー・シュワー・アワーズ」を開催し、障害のある方を含めより多様な人びとに向けて美術館利用の機会をひらくことができた。

さらに、京都市国際交流協会との共催で、京都市内の留学生を対象に、京都国立近代美術館のコレクションに親しむとともに相互交流を深めるプログラムを実施した。

(ウ) 国立映画アーカイブ

教育普及事業の上映イベントでは、新型コロナウイルス感染症拡大対策をおこないながら、小中学生を対象とする「こども映画館」や「V4 中央ヨーロッパ子ども映画祭」、「ユネスコ『世界視聴覚遺産の日』記念特別イベント」などの恒例企画を、いずれもトークイベントや講演付きで開催し好評を博した。

また、令和4年度は令和2年度以降コロナ禍で開催することができなかつた映画・映像のアーカイブ活動に関する教育プログラムのアーカイブセミナーを、協同組合日本映画・テレビ録音協会との共催により「NFAJ&J.S.A. アーカイブセミナー 映画表現と音 『マダムと女房』」を開催し、その採録も協同組合日本映画・テレビ録音協会会報誌に掲載することができた。

(エ) 国立西洋美術館

新型コロナウイルス感染症の状況に応じ、学校向けプログラム、ファミリープログラムを含むほぼ全てのプログラムを、形を変えながら実施することができた。

障がい者の方に向けて、新たな取り組みも行った。盲学校の受け入れに加え、成人の視覚障がい者の方に向けて触察を含む鑑賞サポートを開始した。また、例年行ってきた「美術館でクリスマス」では新たに視覚障がい者、聴覚障がい者の方に向けたギャラリートークを実施し、より多くの方々に参加いただけるよう配慮した。

広報に関しては、4月に稼働した新しいウェブサイト及び SNS の活用などにより、告知をスムーズに行うことができた。

(オ) 国立国際美術館

令和4年度は空調設備更新工事に伴う臨時休館があったが、その時期を活用してオンラインによる教育普及活動を実施し、国立国際美術館の多様な活動に参加いただくことができた。特に「みる+ (プラス) オンラインではなしてみる」では視覚に頼らない鑑賞アクティビティを実施することで、障害の有無に関係なく誰もが参加できた。また、「NMAO トーク・マラソン 2022」は、館長以下ほぼ全ての研究員が、自らの研究テーマや過去に実施した事業に関連あるいは現在抱えている興味関心領域に基づいた対談相手を招き、連続トークを実施する2日間のイベントで、オンラインを通じても視聴可能であった。多彩なゲストを迎えるプログラムにより、これまでの研究の蓄積や今後の活動の萌芽を示すことができた。

(カ) 国立新美術館

令和4年度は、中高生を対象とした新しい事業「NACT YOUTH PROJECT 新美塾！」を立ち上げた。10代の参加者13人が塾長役の現代美術家とともに、半年間にわたり「表現」について考え学ぶこのプロジェクトでは、各自が課題に取り組む通信教育(11回)や、全員が集まって対話するオンラインミーティング(8回)、実地に集合して行うスタジオビジットや展覧会鑑賞など(5回)全24回のプログラムを実施した。本事業は、表現のスキルを磨くのではなく、表現活動を通して参加者が自ら考え、将来を選択する力を伸ばすことを目指したもので、参加者はもとより保護者からも中高生の成長につながる取り組みであるとの支持を得た。

また、対話を通して鑑賞を深めるプログラムに力を入れ、「美術館のよかつ対話鑑賞ワークショップ」、「李禹煥で哲学対話」などを行った。参加者同士の対話によって深い鑑賞を他者と共有し、豊かなアート体験を提供することができた。加えて、主に専門性の高い学びを望む層を対象とした連続講座を企画するなど、各対象に合わせた活動の展開を図り、それぞれの事業において高評価を得られた。

イ 幅広い人々を対象としたラーニングコンテンツの開発・提供
・教材化された素材の活用件数

館名	教材化された素材の活用件数	内訳
東京国立近代美術館(本館)	4	<ul style="list-style-type: none"> ・MOMAT コレクション展では、来館した小・中学生(学校団体での来館含む)に「MOMAT コレクション こどもセルフガイド」、幼児に「MOMAT コレクション セルフガイドプチ&みつけてビンゴ!(日・英)」を無料配布した。また、この2件の教材の使い方を紹介する動画を制作し、当館 Youtube チャンネルに掲載した。(2件) ・小中学生向けセルフガイドのデジタル版である「MOM@T Home こどもセルフガイド」を配信し、展示室内外から、大人を含む誰でもがアクセスできる環境を整えた。(1件) ・企画展では「東京国立近代美術館70周年記念展 重要文化財の秘密 ジュニア・セルフガイド」を制作し、中学生以下に無料配布したほか、希望する小・中学校へ無料で送付した。(1件)
国立工芸館	5	<ul style="list-style-type: none"> ・夏の所蔵作品展に際して「こどもの〇△□×」(セルフガイド)を作成して小学生以下に配布した。

		<ul style="list-style-type: none"> ・中学生の団体来館に際してワークシートを作成、配布した（「未来へつなぐ陶芸」展、「工芸の○△□×展」、「ジャンルレス工芸展」）。 ・金沢市との連携により「親子でミッション」（ワークシート）を作成、配布した。
京都国立近代美術館	8	<ul style="list-style-type: none"> ・楠木清方展では「ジュニアガイド」（1件）を制作し、館内での配布に加え、市内小学校へ無料配布し、鑑賞前の事前学習や学校見学の際に活用いただいた。 ・視覚障害のある方に向けた鑑賞ツールとして継続的に制作している、所蔵作品についての触察ツール「さわるコレクション」（7件）を活用したワークショップとして、10月に京都府視覚障害者指導者研修会（長岡京市）、2月に奈良県立盲学校の2カ所へ出張授業を行った。
国立映画アーカイブ	3	<p>従来の「ジュニアセルフガイド」に加え、新しいジュニアセルフガイド「NFAJセルフガイド」（2種類）を作成し、併せていつでも映画の歴史や魅力を楽しく学ぶことができる当館常設展を紹介する「セルフガイド活用広報ビデオ」も作成し、子どもたちに常設展への関心を高めてもらえるようにした。従来のセルフガイド同様に窓口で配布するほか、当館ホームページからPDFのダウンロードも可能とし、紹介ビデオはYouTubeチャンネルで公開した。</p>
国立西洋美術館	4	<ul style="list-style-type: none"> ・各企画展の入場券を兼ねた小・中学生を対象としたセルフガイド「ジュニア・パスポート」について、令和4年度は「自然と人のダイアログ展」、「ピカソとその時代展」、「ブルターニュ展」と3つの展覧会で作成した。（3件） ・学校団体が来館した際に、各生徒に小冊子「国立西洋美術館アクティビティブック 美術館を楽しむ100のこと」を配布した。国立西洋美術館ウェブサイトでも掲載した。美術館の様々な楽しみ方を、実際に書き込みながら体験できる内容で、一人一人が自分の好きな作品を選ぶため、コロナ禍において展示室で密にならずに使用することができる。ギャラリートークの実施を控える中、新たな学校対応の形として来館する学校に提案した。（1件）

国立国際美術館	9	『ジュニア・セルフガイド』（1件）は、個人で来場された家族が、お子さん中心に当館恒久設置作品の鑑賞サポートとして、展示室の入場前後に活用する姿が目立った。また、『アクティビティ・ブック』（1件）は、学校団体を中心に、児童生徒の主体的な鑑賞活動を引き出すツールとして活用された。ユニバーサルプログラム用鑑賞サポートツール（7件）の活用例としては、視覚に加えて他の感覚も積極的に使用するプログラム「みる+（プラス）」で、ジョアン・ミロ《無垢の笑い》の実寸サイズを確認できる布や触って楽しめる触図を、見えない、見えづらい参加者と使用したり、アルベルト・ジャコメッティ《ヤナイハラ I》のレプリカ作品を視覚支援学校に持参し、見えない、見えづらい生徒たちに触ってもらいながら、対話による鑑賞活動を実施した。
国立新美術館	3	学校等を対象に実施している「鑑賞ガイダンス」及び「施設ガイダンス」において、企画展にあわせて制作した鑑賞ガイドや、子ども向け施設ガイド『てくてくマップ』を事前または当日配布し、学校での事前学習や当日の鑑賞活動において活用した。

国立アトリサーチセンターにおいて、誰もがアートに親しみ、美術館を利用することができるよう、法人内各館の教育普及室と連携して以下の取組を実施した。

- ・主に発達障害のある方とその家族に向けた、やさしい文章と写真による来館案内冊子「ソーシャルストーリー」を、全7館分作成し、ウェブサイトに掲載した。
- ・各館で実施している特徴的な教育普及プログラムの紹介動画を作成し、ウェブサイトに掲載した（東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、国立映画アーカイブ、国立国際美術館、国立新美術館）。
- ・「鑑賞教育指導者研修」のダイジェスト映像動画を2本作成し、ウェブサイトに掲載した。

② ボランティアや支援団体との相互協力等による教育普及事業及び企業や地域等との連携による事業の開発・実施等

ア ボランティアや支援団体との相互協力等による教育普及事業

館名	ボランティア登録者数(人)	参加者数(人)	ボランティア参加者数(人)
東京国立近代美術館（本館）	49	792	221
国立工芸館	28	294	72
京都国立近代美術館	33	-	-
国立西洋美術館	56	3322	288
国立国際美術館	0	-	-
国立新美術館	59	456	30
合計	225	4864	611

特記事項

(ア) 東京国立近代美術館 (本館)

令和3年度より新型コロナウイルス感染症の影響で延期されていたガイドスタッフ（解説ボランティア）7期生の養成研修が終了し、新たに16名を登録した。令和4年6月11日（土）

には、香港で開館したばかりの M+ のチーフキュレーター横山いくこ氏を講師に迎え、ガイドスタッフ全員を対象とするフォローアップ研修をオンラインで実施した。この研修には国立工芸館・国立西洋美術館のボランティアもオブザーバーとして参加し、他館ボランティアとの交流機会を得た。

また、令和 4 年度後半には感染症対策の緩和にともない、対面での対話鑑賞プログラム「所蔵品ガイド」を定員制で 3 年ぶりに再開した。オンラインプログラムの参加者が来館し対面プログラムに参加するなど、コロナ禍の活動が実を結びつつある。

(国立工芸館)

工芸トークオンラインにおいて、英語ガイドを実施した。プログラムの企画・構成は国立工芸館ガイドスタッフと協働して行い、そのうち、英語トーカーにはその語学的手法を、また日本語トーカーからも作品や素材技法情報提供や内容の精査の協力を得た。また金沢市役所所属の国際交流員の協力を得て、ネイティブスピーカーとしての意見や希望を調査し、プログラムの充実に資することができた。

(イ) 京都国立近代美術館

「京都市博物館ふれあいボランティア養成講座（京都市内博物館施設連絡協議会及び京都市教育委員会主催）」を受講・修了された方が所属する、京都市博物館ふれあいボランティア「虹の会」からボランティアを受け入れ、来館者へのアンケート調査回収、集計に携わってもらっていたが、新型コロナウイルス感染症の影響により、令和 3 年度に引き続きボランティアによるアンケート調査回収、集計作業を中止とした。

(ウ) 国立映画アーカイブ

小中学生対象の「こども映画館」と V4 各国大使館および文化センターとの共催企画「V4 中央ヨーロッパ子ども映画祭」を開催し、「こども映画館」では弁士の語りと生演奏によるライブパフォーマンス付きで無声映画を鑑賞するプログラムを、「V4 中央ヨーロッパ子ども映画祭」では各作品の上映前に大使館員が解説するトークイベント付きのプログラムで、教育事業の充実を図ることができた。

(エ) 国立西洋美術館

約 60 名のボランティア・スタッフが、ファミリープログラム「どようびじゅつ」、学校オリエンテーション補助、美術トーク、建築ツアーなどで活動した。「どようびじゅつ」では、ボランティア有志が、教育普及室職員と共に企画や準備にも携わった。

また、東京藝術大学・国立美術館・慶應義塾大学が参画する産学連携プログラム『「共生社会」をつくるアート・コミュニケーション共創拠点』の研究活動として、高齢者を対象に作品の対話鑑賞ワークショップを行い、アートを介したコミュニケーションの効果を測定した。国立西洋美術館常設展示室を実施会場とし、国立アトリサーチセンターとの連携を行った。

(オ) 国立国際美術館

新型コロナウイルス感染症対策のため、ボランティアによる教育普及事業を休止した。

(カ) 国立新美術館

株式会社日本設計のボランティア有志と協働し、「建築ツアー 歩く・見る・知る美術館」において、バックヤード見学を含むマスターコースのツアーを実施した。

「視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ」では、任意団体と協働し、李禹煥展をグループで対話しながら鑑賞した。

「障害のある方のための特別鑑賞会」は三菱商事株式会社の協力で実施、休館日に障がい者の方を招待し、周囲を気にすることなくゆっくりと展覧会を観覧する機会を提供した。

教育普及資料（全国美術館のワークシート、鑑賞ガイドなど）の整理については、引き続きサポートスタッフと行った。

イ 企業や地域等との連携による事業の開発・実施等

国立アトリサーチセンターにおいて、超高齢社会における孤独・孤立や認知症といった社会的課題に対応する研究プロジェクト「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」（JST COI=NEXT 育成型（共創分野））に参加し、東京藝術大学ほか企業・地方自治体・NPOと連携して取り組んだ。例えば9月には、国立西洋美術館にて高齢者への対話鑑賞を行い、慶応義塾大学・川畑秀明教授による鑑賞の効果測定を実施した。

また1月には英国に出張し（4名）、ブリティッシュカウンシルの協力を得て、高齢者に向けた認知症対応プロジェクトの関係者らからヒアリングを行い、先進的な事例を視察した。

③ 映画フィルム・資料の所蔵作品の活用

国立映画アーカイブでは、所蔵作品を活用した館外教育普及事業として、磁気テープ映像の危機とデジタルファイル化による保存の必要性を広く訴えるトーク付き共催上映「【磁気テープの映画遺産を救え！『わが映画人生』デジタルファイル化プロジェクト】『わが映画人生』特別上映会 ―映画監督は語る―」を京都文化博物館にて開催し、上方歌舞伎の至宝といわれる林又一郎コレクションを考察する「歌舞伎学会 2022 年度秋季大会『歌舞伎・文楽の発掘映像をみる』」を同学会と共催した。また、常設展のこども向けの新しいセルフガイドとして「NFAJセルフガイド」を2種類作成し、国立映画アーカイブのサイト上からPDFで公開するとともに、その広報用動画も作成して、YouTubeチャンネルで公開した。

(5) 調査研究の実施と成果の反映・発信

第5期（令和3年度～令和7年度）中期目標に定める指標	
指標	・調査研究活動の成果に基づき、所蔵作品展において、前中期目標期間実績程度の展示替えを実施する。
関連指標	・調査研究活動の成果の多様な方法による公開に係る取組状況。（調査研究成果の公開方法・公開件数） ・映画のデジタル保存・活用等に関する調査研究の取組状況（調査研究の取組件数）

① 調査研究一覧

国立美術館における美術作品の収集・展示・保管、教育普及、情報の収集・提供その他の美術館活動の推進を図るため、各館において調査研究を実施し、その成果を美術館活動の充実に生かした（計150件）。個々の調査研究については別表9を参照。また、展示替えについては別表1を参照。

特記事項

ア 東京国立近代美術館 (本館)

- ・榎田倫広（主任研究員）が中心となって編集・執筆した『ゲルハルト・リヒター展』図録は、絵画の可能性を60年にわたって追求してきた世界的なアーティストの画業を俯瞰的に理解できるよう、シリーズごとの解説や書下ろしのエッセイ、海外の重要な論考や作家の対談の翻訳など、国内外の研究者による最新の成果を凝縮したもので、今後のリヒター研究に参照されることが見込まれる。

- ・成相肇（主任研究員）が中心となって編集・執筆した『大竹伸朗展』図録は、様々なジャンルを横断する活動を展開してきた作家の、とりわけ「音」に関する資料（パフォーマンスの記録や音を発する作品情報など）をまとめた資料編が充実しており、1980年代以降の日本の現代美術を歴史的に位置づけていく今後の研究に資する内容となった。
- ・東京国立近代美術館の70周年記念事業として刊行した『重要文化財の秘密』展図録は、明治以降の近代美術の重要文化財68件すべてについて、評価の変遷を跡づけるとともに重文指定の理由も記したもので、大谷省吾（副館長）を中心に同館の研究員が総力を挙げて取り組んだ研究成果として特筆すべきである。日本の近代美術の歴史を「評価の基準」という観点からとらえ直した本図録は、過去に類書がなく今後の研究の基準となることが見込まれる。

（国立工芸館）

- ・唐澤昌宏（工芸館長）がゲストキュレーターとなり金沢21世紀美術館の展示室6を会場に開催した『「ひとがた」をめぐる造形』展は、両館の所蔵品から、工芸領域では人形、土が素材では陶芸、美術領域では彫刻として主に捉えられてきた「ひとがた」作品を取り上げ、今日的な人体表現の多様な展開をあらためて示し紹介した。工芸館移転後の初めての他館とのコラボレーション展としても話題となり、今後のコラボ企画のモデルケースとなった。
- ・岩井美恵子（工芸課長）が企画した「ジャンルレス工芸」展は、工芸と現代アートの境界を探るという日本の現代工芸の一側面を紹介し、工芸の新たな見方も提示した展覧会であるが、所蔵作品に加え国内外で活躍する中堅から新進気鋭の若手まで紹介する内容で評価を得た。
- ・中尾優衣（主任研究員）がポーラ美術振興財団から「『綾錦』に関する総合的研究」についての調査研究助成を受け、その研究成果の一部を「『綾錦』の制作工程に関する一試論：模写図が木版画になるまで」として館の研究紀要に公表した。『綾錦』に関する初めての本格的な学術調査であり、今後の近代図案研究においても参照されるものと見込まれる。

イ 京都国立近代美術館

- ・大長智広（主任研究員）が中心となって刊行した『生誕100年 清水九兵衛／六兵衛』展図録は、陶芸と彫刻という異なる領域を横断して活躍したこの作家の活動や作品に関する詳細な情報を掲載し、カタログ・レゾネに代わるものとして、今後の研究における基本文献となった。
- ・宮川智美（研究員）が「リュウユーフィンランドのテキスタイル：トゥオマス・ソパネン・コレクション」展に際して企画・編集した図録は、包括的な視点で「リュウユ」を紹介する唯一の日本語文献であり、今後のデザイン・テキスタイル研究にとって極めて重要なものとなった。
- ・梶岡秀一（主任研究員）が中心となって刊行した『甲斐荘楠音の全貌—絵画、演劇、映画を越境する個性』展図録は、絵画のみならず、新しく発見されたスケッチや、衣裳を含む映画関連資料の画像ならびにそれらに関する多くの論考を掲載し、1997年に京都国立近代美術館で開催した回顧展の内容を大幅に刷新するものとなった。また、本展準備段階で京都国立近代美術館が所蔵する写真や書簡類などの膨大な関連資料をアーカイブ化した成果が、内容に大きく寄与した。

ウ 国立映画アーカイブ

- ・上映会「発掘された映画たち2022」において、計58本の復元作品について映画史ならびに保存復元の観点から多彩な切り口で紹介することができた。とりわけ日本初期の前衛映画として世界的にも名高い『狂った一頁』（衣笠貞之助監督、1926年）について、調査研究によりオリジナルのフィルムに青染色が施されていることが明らかになり、新たに青染色を施した35mmプリントを作成、公開することで、同作品の映画史的な重要性を改めて示すことができた。
- ・これまで埋もれていた数多くの女性映画人について紹介する上映会「日本の女性映画人（1）——無声映画期から1960年代まで」を開催し、特に、先行研究の限られていた戦前の女性脚本家について網羅的に紹介し、1920年代の無声映画期において、剣戟時代劇の分野で女性脚本家たちが活躍していたことを明らかにした。

エ 国立西洋美術館

高嶋美穂主任研究員が、「特許第 7080034 号。発明の名称：コラーゲン由来材料の動物種を判定する方法」の特許発明者となった。特許権者：一般財団法人日本皮革研究所、株式会社ニッピ。登録日：2022 年 5 月 26 日。この方法は、液体クロマトグラフィー質量分析計（LC-MS）を用い、特定の 12 種のペプチドを組み合わせることでコラーゲンの動物種を判定する方法であり、美術品に使用されている膠の動物種の同定に役立つと見込まれる。

オ 国立国際美術館

- ・福元崇志（主任研究員）が展覧会カタログ『すべて未知の世界へ — G U T A I 分化と統合』に執筆した論文「具体をばらばらにまとめる — その「自由」の内実を求めて」は、具体研究への新たな視座をもたらす研究であり、今後の具体研究においても参照されるものと見込まれる。
- ・橋本梓（主任研究員）が企画に関わった「六本木クロッシング 2022 展：往来オーライ！」（森美術館主催、国立国際美術館企画協力）は、日本の現代アートシーンを総覧する定点観測的な展覧会であるが、すでに国際的な活躍が目覚ましいアーティストから新進気鋭の若手までを紹介する内容により評価を得た。

カ 国立新美術館

- ・国立新美術館開館 15 周年を記念して開催した「李禹煥」展では、作家自身と国立新美術館の研究員、及び内外の専門家によるシンポジウムやトークなど多数の関連イベントを開催した。これらを収録した記録集『李禹煥：ドキュメンツ 2022-2023』は、今後、美術史研究者に参照されることが見込まれる。
- ・「ルートヴィヒ美術館展 20 世紀美術の軌跡—市民が創った珠玉のコレクション」、および「ルーヴル美術館展 愛を描く」においては、担当研究員が共同研究機関と密に連携しながら企画を立案し、学術的に優れたカタログを刊行した。
- ・開館以来初となる所蔵資料展示の試みとして、李禹煥展 関連小企画「国立新美術館所蔵資料に見る 1970 年代の美術—— Do it! わたしの日常が美術になる」を開催した。

② 調査研究成果の発信

ア 館の刊行物による調査研究成果の発信

各館において、以下のとおり展覧会図録、研究紀要、館ニュース等を刊行し、研究成果を発信した。それぞれの項目における研究員の執筆事項については別表 10～12 を参照。

館名	展覧会図録	研究紀要	館ニュース	パンフレット・ガイド等	
				パンフレット・ガイド	その他
東京国立近代美術館（本館）	5	1	1	2	1
国立工芸館	3	0		4	1
京都国立近代美術館	5	0	7	3	2
国立映画アーカイブ	0	0	4	19	9
国立西洋美術館	3	1	2	4	2
国立国際美術館	3	0	4	1	2
国立新美術館	4	1	-	4	1
合計	23	3	18	37	18

イ 館外の学術雑誌、学会等における調査研究成果の発信

各館において、以下のとおり学会、学術雑誌等において研究成果を発信した。それぞれの項目における研究員の執筆事項については別表 13 を参照。

館名	学会等発表	論文等発表件数			
		学術書籍、研究 報告書等の発行	論文掲載 (査読有り)	論文掲載 (査読無し)	その他
東京国立近代美術館（本館）	33	4	0	18	33
国立工芸館	23	2	0	6	24
京都国立近代美術館	16	3	3	11	16
国立映画アーカイブ	32	3	3	2	10
国立西洋美術館	12	8	1	5	28
国立国際美術館	20	1	1	9	23
国立新美術館	4	0	0	1	11
合計	140	21	8	52	145

ウ インターネットによる調査研究成果の発信

(ア) 東京国立近代美術館（本館・国立工芸館）

- ・『研究紀要』及び美術館ニュース『現代の眼』の収録論文を、ホームページ上及びインターネット上の東京国立近代美術館リポジトリを通じて公開した。
- ・ウェブサイトリニューアルにあたり、「見る・聞く・読む」シリーズの一つとして「教育普及レポート」を新設した。
- ・以下のとおり動画をオンラインで公開した。
 - ・「展示の道具 | MOMAT Focus」 / 東京国立近代美術館公式 YouTube（オンライン配信、令和 4 年 6 月 14 日）
 - ・「斎藤義重《ペンチ》1967 年 | キュレータートーク | 所蔵品解説 007」東京国立近代美術館公式 YouTube（オンライン配信、令和 4 年 8 月 30 日）

(イ) 京都国立近代美術館

- ・「サロン！雅と俗—京の大家と知られざる大坂画壇」展の理解促進を目的に、当時の文化交流の様相を伝える文人風の煎茶会の雰囲気で作成した代表的な作品を紹介する動画 9 本を作成し、ホームページ上にアーカイブ化し公開した。
- ・各展覧会において開催した記念シンポジウムならびに講演会はすべて、京都国立近代美術館 YouTube アカウントよりオンライン同時配信を行った。配信データは、ホームページ上にアーカイブ化され、著作権上制限のある「ルートヴィヒ美術館展」に係るクロストークと講演会以外、常時閲覧可能としている。
- ・各展覧会のギャラリー・トークを Instagram アカウントより LIVE 配信し、ホームページ上でアーカイブ化を行っている。
- ・公開データは「おうちで MoMAK」ページに集約させ、各展覧会や教育普及事業に関するページと相互にリンクさせることで、検索・閲覧しやすい環境を整えている。

(ウ) 国立映画アーカイブ

- ・映画関連資料のデジタル画像を公開する新しいウェブサイト「映画遺産 国立映画アーカイブ映画資料ポータル」を制作、令和 5 年度早期の公開に向けて準備を進めた。
- ・より良質な画像への入れ替えや関連ページへのリンクなど「NFAJ デジタル展示室」の改善作業に着手するとともに、以下のデジタル展示を公開した。
 - 「第 26 回 戦前期の日本の映画撮影所(1)」を公開 (R4. 11. 15)

「第 27 回 戦前期の日本の映画撮影所(2)」を公開 (R5. 2. 2)

「第 28 回 戦前期の日本の映画撮影所(3)」を公開 (R5. 3. 8)

- ・京都国立近代美術館での「MONDO 映画ポスターアートの最前線」において岡田秀則（主任研究員）が Instagram の LIVE 配信でギャラリートークを行った。
- ・ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」記念特別イベント [上映と講演] 「戦前日本の映画検閲―内務省 切除フィルムからみる―」について、当日の配布資料と上映作品および調査結果で判明した「落花の舞」のみを編集した映像を NFAJ Youtube Channel で公開した。
- ・国立映画アーカイブ所蔵の関東大震災関連の映画を公開する配信サイト「関東大震災映像デジタルアーカイブ」の更新に加え、新たなプラットフォーム「フィルムは記録する―国立映画アーカイブ歴史映像ポータル―」を開設した。
- ・「映画製作専門家養成講座」（平成 9 年度～平成 16 年度実施事業）の「第 4 回平成 12 年度高村倉太郎とその仲間たち」（令和 5 年 2 月 6 日～9 日）と「第 5 回平成 13 年度川又昂とその仲間たち」（令和 5 年 2 月 13 日～16 日）の各 4 日間分の講義採録テキストのオンライン PDF を公開した。

(エ) 国立西洋美術館

インターネット上の「国立西洋美術館出版物リポジトリ」を通じ『国立西洋美術館研究紀要』収録の研究論文、『国立西洋美術館報』最新号、および『国立西洋美術館教育活動の記録 2013-2019』を公開した。

東京文化財研究所から寄託を受けている「林忠正宛書簡群」のデジタル画像と基本情報、翻刻テキストを公開するサイトを作成し、ホームページで公開した。

(オ) 国立国際美術館

新型コロナウイルス感染拡大の影響から、インターネットを通じて多様な手段により調査研究成果を発信する機会が増えた。令和 4 年度は空調工事更新のため臨時休館時期があったが、これまでの蓄積を活用した発信を行なった。特に「NMAO トーク・マラソン 2022」と題して、館長以下ほぼ全ての研究員が、自らの研究テーマや過去に実施した事業に関連あるいは現在抱いている興味関心領域に基づいた対談相手を招き、連続トークを 2 日間にわたり実施し動画配信サービスを通じてライブ配信し、また、講演者から許諾を得られかつ著作権等の問題ない動画は国立国際美術館の公式動画配信チャンネルを通じてアーカイブ配信を行った。

(カ) 国立新美術館

- ・国立新美術館ホームページにおいて、『令和 3 年度活動報告』を公開した。
- ・企画展「ワニがまわる タムラサトル」では、360 度の鑑賞体験ができる VR 映像（オンライン展覧会）、および記録集の PDF を国立新美術館のホームページにおいて公開した。
- ・企画展「李禹煥」展の関連事業として研究者や専門家を招いたシンポジウム 1 回、講演会 1 回、トークイベント 4 回の記録映像をウェブサイトで公開した。また、シンポジウムはオンラインでも配信した。
- ・連続講座「美術館を考える」において研究者を招いたレクチャー 4 回のうち、1 回をオンライン開催した。また、各回終了後にオンデマンド配信を行った。

(6) 快適な観覧環境の提供

第5期（令和3年度～令和7年度）中期目標に定める指標	
指標	・快適な観覧環境の提供に係る取組状況。（入館者に対する満足度調査の「良い」以上の回答率を、前中期目標期間実績と同程度の水準を維持するものとする。）
関連指標	・サインや作品解説等の多言語化に向けた取組件数。

館名	観覧環境に対する満足度調査における「良い」以上の回答率	目標 (第4期中期目標期間実績)
東京国立近代美術館	81.4%	78%
国立工芸館	80.6%	
京都国立近代美術館	77.3%	
国立映画アーカイブ	84.7%	
国立西洋美術館	81.0%	
国立国際美術館	78.5%	
国立新美術館	80.4%	

【注1】満足度調査は、回答を「良い」「普通」「悪い」のいずれかに分類し、集計している。

① 高齢者、障がい者、外国人等を含めた入館者本位の快適な観覧環境の形成

※多言語化に向けた取組件数は58件である。以下、多言語化に向けた取組には下線を付する。
(第4期中期目標期間中の平均件数は60件である。)

<各館共通実施事項>

- ・多言語による館案内表示
- ・多言語による館内リーフレット、ミュージアムカレンダー等の配布
- ・英語による館内放送の実施（一部の放送を除く）
- ・所蔵作品展・企画展における展示解説（章解説パネル・キャプション・作品リスト等）の多言語化（日本語・英語・中国語・韓国語に対応）
- ・所蔵作品展・企画展における音声ガイドの多言語化（原則として日本語のほか英語・中国語・韓国語に対応）
- ※国立映画アーカイブを除く。
- ・多言語対応の案内用デジタルサイネージの設置
- ・クレジットカード及び電子マネー（Suica及びPASMO等）による観覧券の窓口販売
※京都国立近代美術館はクレジットカードのみ対応。
- ・多目的（身体障がい者用）トイレ、エレベータ（エスカレータ）、スロープ（手摺り）の設置
- ・車椅子の貸出、ベビーカー（国立西洋美術館は除く）の貸出
- ・身体障がい者用駐車スペース（国立国際美術館は除く）の提供
- ・自動体外式除細動器（AED）の設置
- ・盲導犬、介助犬の同伴による観覧
- ・観覧者の休憩のための椅子を展示室に配置
- ・オストメイト（人工肛門、人工膀胱保有者）対応の設備を設置
- ・無料Wi-Fiの提供

- ・インフォメーションカウンターに筆談ボードを設置

<各館ごとの実施事項>

- ・電話による展覧会情報案内（ハローダイヤル）の多言語化（日本語・英語・中国語・韓国語・ポルトガル語・スペイン語）【東京国立近代美術館（本館・国立工芸館）、国立映画アーカイブ、国立西洋美術館、国立新美術館】
- ・多言語による所蔵作品展チケットのオンライン販売を実施（Tiqets）【東京国立近代美術館（本館・国立工芸館）、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館】
- ・授乳室の設置【東京国立近代美術館（本館・国立工芸館）、京都国立近代美術館、国立映画アーカイブ、国立国際美術館、国立新美術館】
- ・東京都が実施する「ウェルカムカード」に参加し、外国人来館者の所蔵作品展観覧料を割引【東京国立近代美術館（本館）、国立映画アーカイブ、国立西洋美術館】
- ・QRコード決済サービス（訪日外国人向け）による観覧券の窓口販売を開始【東京国立近代美術館（本館）、京都国立近代美術館、国立国際美術館】
- ・地下鉄の対象の乗車券の提示により割引等を実施するサービス「ちかとく」の英語版に参加【東京国立近代美術館（本館）、国立西洋美術館】
- ・QRコード読み取り式の電子アンケート（日本語・英語）を導入【東京国立近代美術館（本館・国立工芸館）、国立国際美術館（日本語のみ）、国立新美術館】
- ・国立美術館6館紹介パンフレットの多言語化（日本語・英語・中国語・韓国語）【法人本部】
- ・館内サインの拡大、所蔵作品展における「重要文化財」のキャプション表示の追加、ホームページ上の重要文化財作品の特設解説ページ設置、所蔵作品展における小中学生向けこどもセルフガイドの配布、自主企画展における無料音声ガイドアプリの提供、所蔵作品展におけるスマートフォンアプリによる4ヶ国語（日本語・英語・中国語・韓国語）の章解説・作品解説の提供、訪日外国人に向けた、英語による鑑賞・異文化交流プログラム「Let's Talk Art!」のオンラインによる実施【東京国立近代美術館（本館）】
- ・作品名・作家名にふりがなを入れた会場キャプションの設置及び作品リストの配布、夏季所蔵作品展における児童生徒を対象とした「セルフガイド」（日本語・英語）及び冬季所蔵作品展における一般観覧者向けリーフレット（日本語・英語）の作成・配布、スマートフォンアプリによる章解説・作品解説の多言語での提供【東京国立近代美術館（国立工芸館）】
- ・美術館ニュース『視る』の配布、免震装置付有機EL照明による展示ケースの設置、自主企画展チケットのオンライン販売の実施【京都国立近代美術館】
- ・特集展示「NFAJ コレクションでみる 日本映画の歴史」における児童生徒向けの「ジュニア・セルフガイド」の配布、所蔵作品上映におけるバリアフリー上映を実施（視覚障がい者向け音声ガイドの使用、聴覚障がい者向け字幕投影及び磁気ループシステム使用）、企画上映について、前売券の販売【国立映画アーカイブ】
- ・企画展における児童生徒向けの「ジュニア・パスポート」を配布、館広報物（館ニュース『Zephyros』の最新号及びバックナンバー）の配布及びホームページ掲載、「建築探検マップ」を全面改定版した「世界遺産パンフレット」（日本語・英語・中国語・韓国語）の作成・配布、グーグル「Arts&Culture」アプリによる主要所蔵作品解説（日本語・英語・中国語・韓国語）の無料配信の実施、建築音声ガイドの多言語化（日本語・英語・中国語・韓国語）、企画展におけるスマートフォンアプリによる3ヶ国語（英語・中国語・韓国語）の章解説・作品解説の提供【国立西洋美術館】
- ・安全仕様のキッズルーム（地下1階）の設置、同所における幼児向け絵本常設【国立国際美術館】
- ・点字ブロック（正門から正面入口、地下鉄口から西入口（インターホンを設置））及び点字表示（エレベータ内ほか）の設置、補聴器等への磁気誘導無線システムの講堂内への設置（専用受信機10台）、ロビー等の館内ディスプレイでの展覧会や講演会等の情報表示、託児サービスの実施、文字を大きくし見易くしたフロアガイド「大きな文字の利用案内」の館内配布、企画展における児童生徒向け鑑賞ガイドの配付及び子ども向け施設ガイド『てくてくマップ』の

配布及びホームページ掲載、地域の学校を対象として休館日の展示室を無料で開放する「かよ
うびじゅつかん」を実施、外国人来館者向けの翻訳サービス「ポケットーク」を導入、講演会・
シンポジウム等における手話通訳の導入、利用者がスマートフォン等の端末で視聴できるウ
ェブアプリ「国立新美術館建築ガイドアプリ CONIC」を配信、QRコードを活用した作品解説
キャプションの多言語化（日英中韓）【国立新美術館】

② 入場料金、開館時間等の弾力化

<各館共通実施事項>

- ・国際博物館の日（5月18日）に関連し、所蔵作品展の観覧料を無料化
- ・所蔵作品展、自主企画展及び国立映画アーカイブの展覧会における高校生以下及び18歳未満の観覧料を無料化
- ・所蔵作品展及び企画展における夜間開館（原則として毎週金曜・土曜日20時まで）を実施
- ・文化の日（11月3日）における所蔵作品展の観覧料を無料化

<各館ごとの実施事項>

ア 東京国立近代美術館

（本館）

- ・東京都が実施する「家族ふれあいの日」に参加し、毎週土曜、日曜に優待券を提示した高校生以下の子どもを連れた家族に所蔵作品展の観覧料割引を実施
- ・東京メトロ、都営地下鉄ワンデーパスによる所蔵作品展の観覧料割引を実施
- ・JAF会員券の提示による所蔵作品展の観覧料（個人一般）割引を実施（企画展も展覧会により割引実施。）
- ・企画展（「没後50年 鏑木清方展」、「ゲルハルト・リヒター展」、「大竹伸朗展」、「東京国立近代美術館70周年記念展 重要文化財の秘密」）において、各種観覧料割引を実施
- ・所蔵作品展については引き続き「5時から割引」（夜間割引）を実施
- ・通訳案内士の所蔵作品展・企画展（展覧会による）の無料観覧
- ・「アートフェア東京2023」の特別協力美術館として、令和5年3月18日～19日について、当該イベントの参加者に対し、所蔵作品展観覧料を無料又は割引とした。
- ・一般社団法人コンテンポラリーアートプラットフォームが主催するイベント「アートウィーク東京」に協力し、令和4年11月2日～6日について、当該イベント参加者に対し、企画展「大竹伸朗展」及び所蔵作品展観覧料を無料又は割引とした。

（国立工芸館）

- ・通訳案内士の所蔵作品展・企画展（展覧会による）の無料観覧
- ・所蔵作品展及び企画展において各種観覧料割引を実施
- ・いしかわ文化の日（10月16日）における観覧料を無料化
- ・学生のまちパスポート『学パス』（いしかわ・かなざわ文化施設入館証）により、石川県内の高等教育機関に在学する1年生を対象に、観覧料無料を実施

イ 京都国立近代美術館

- ・企画展を開催しない土曜日における所蔵作品展の観覧料を無料化
- ・「関西文化の日」（11月19日、20日）における所蔵作品展の観覧料を無料化
- ・京都国立博物館、京都市京セラ美術館、京都文化博物館と組織する「京都ミュージアムズ・フォー」において、各館の友の会と相互割引を実施。また10月～12月において各館で開催する展覧会との相互割引（観覧券提示）を実施
- ・奈良国立博物館、国立民族学博物館及びMIHO MUSEUMの友の会と相互割引を実施
- ・近隣の京都市京セラ美術館、細見美術館と連携し、相互割引を実施
- ・京都伝統産業ミュージアムと相互割引を実施
- ・JAF会員証提示による企画展及び所蔵作品展の観覧料（個人一般）割引を実施

- ・朝日新聞グループ 朝日友の会、京都新聞トマト倶楽部、阪急阪神カード及び京阪カードの情報誌・ホームページに展覧会情報を掲載するとともに観覧料割引を実施
- ・「ミュージアムぐるっとパス・関西」に参加し、所蔵作品展の観覧料無料化及び企画展観覧料割引を実施
- ・企画展（「没後 50 年 鏑木清方展」、「生誕 100 年 清水九兵衛／六兵衛」、「ルートヴィヒ美術館展 20 世紀美術の軌跡—市民が創った珠玉のコレクション」、「開館 60 周年記念 甲斐荘楠音の全貌—絵画、演劇、映画を越境する個性」）において、各種観覧料割引を実施
- ・第 1 回コレクション展及び「サロン！雅と俗—京の大家と知られざる大坂画壇」において、金、土曜日の 17 時以降の入館者に対して、夜間割引を実施
- ・第 2 回～第 5 回コレクション展及び「生誕 100 年 清水九兵衛／六兵衛」において、金曜日の 17 時以降の入館者に対して、夜間割引を実施

ウ 国立映画アーカイブ

- ・7階展示室の毎月末の金曜日（プレミアムフライデー）の 20 時までの開館延長。
- ・「東京・ミュージアムぐるっとパス」に参加し、展覧会観覧料割引を実施

エ 国立西洋美術館

- ・東京都が実施する「家族ふれあいの日」に参加し、毎月第三土曜・日曜日に優待券の提示による所蔵作品展の観覧料を無料化
- ・東京メトロの対象乗車券提示で割引等を実施するサービス「ちかたく」による所蔵作品展の観覧料割引を実施
- ・京成電鉄の対象乗車券提示で割引等を実施するサービス「下町日和きっぷ」による所蔵作品展の観覧料割引を実施
- ・「東京・ミュージアムぐるっとパス」に参画し、所蔵作品展の観覧料割引を実施
- ・ゴールデンウィーク（5月2日）、お盆期間（8月15日）、年末年始（12月28日、12月29日）、3月最終月曜日（3月27日）に臨時開館を実施

オ 国立国際美術館

- ・所蔵作品展及び自主企画展における夜間開館時の観覧料割引を実施
- ・原則毎月第一土曜日における所蔵作品展の観覧料を無料化
- ・大阪観光局が発行する「大阪周遊パス」による所蔵作品展の観覧料無料化及び企画展観覧料割引を実施
- ・「ミュージアムぐるっとパス・関西」に参加し、所蔵作品展の観覧料無料化及び企画展観覧料割引を実施
- ・京都国立博物館、奈良国立博物館及び国立民族学博物館の友の会等と相互割引を実施
- ・近隣の大阪市立東洋陶磁美術館及び大阪大学適塾記念センターと連携し、相互割引を実施
- ・朝日新聞グループ 朝日友の会、大阪市高速電気軌道株式会社、大阪大学カード、OSAKA メセナカード、京阪カード及びみずほプレミアムクラブの情報誌・ホームページに展覧会情報等を掲載するとともに観覧料割引を実施
- ・近隣ホテルとの連携を強化し、ホテル利用者に入場割引券を配布し、展覧会広報を行うとともに観覧料割引を実施。また、提携ホテルでの展覧会の半券持参等による特典を提供
- ・ゴールデンウィーク期間中に臨時開館を実施【5月2日（月）】

カ 国立新美術館

- ・六本木アート・トライアングル参加館との観覧料の相互割引及び共通マップの作成・配布
- ・公募団体展と企画展の観覧料の相互割引を実施したほか、企画展において、各種観覧料割引を実施
- ・「東京・ミュージアムぐるっとパス」に参加し、企画展観覧料割引を実施

- ・東京ミッドタウンと連携し、東京ミッドタウン内対象ショップへの展覧会の半券持参による特典提供を実施

③ キャンパスメンバーズ制度の実施

国立美術館全体の事業として平成18年12月から実施している、大学、短期大学、高等専門学校及び専修学校等を対象とした会員制度「国立美術館キャンパスメンバーズ」について、令和4年度は5校の新規加盟があり、退会校1校と合算すると前年度比4校の増加となった。（メンバー校102校、利用者数97,304人）

平成29年度から実施している外部媒体（マイナビ「学生の窓口」）を活用した広報では、「みんなで、みると、みえてくる！国立美術館の歩き方をモニタリング調査」と題し、国立西洋美術館にそれぞれ専攻が異なる4人の大学生に集まってもらい、実際に館内を巡りながら、それぞれの視点でどのように美術館を楽しんでいるのかを意見交換してもらうという記事を掲載し、学生に対する広報活動を引き続き強化した。同記事は、令和3年度のページビュー数8,769回を上回る10,643回閲覧された。

④ ミュージアムショップ、レストラン等の充実

ミュージアムショップについては、企業との連携等により各館所蔵作品の図版等を活用したオリジナルグッズの開発に努め、ホームページにおいて展覧会図録やグッズの情報を紹介するなどの広報宣伝を行った。レストランについては、企画展にちなんだ特別メニュー等を提供した。各館の特徴的な取組は以下のとおりである。

ア 東京国立近代美術館

（本館）

- ・2023年東京国立近代美術館カレンダーを販売した。
- ・2023年「美術館の春まつり」期間中、通常のショップに加えてポップアップショップを設置、花にちなんだ作品をモチーフとした商品等を販売し、好評だった。
- ・三越伊勢丹と協力し、所蔵作品の図柄を容器にあしらったギフト商品の菓子をミュージアムショップで販売し、好評だった。
- ・2023年「美術館の春まつり」期間中、併設のレストランがお花見弁当等の特別メニューを含むテイクアウトメニューを提供し、イベントを盛り上げた。

（国立工芸館）

- ・北陸地域の企業との連携によるオリジナルグッズとして、加賀市に本社を置く株式会社丸八製茶場とのパッケージコラボによる「献上加賀棒茶」を作成し、販売し始めた。
- ・「稲垣隼次郎作《紙本型絵染額面 都をどり》」をマスキングテープにするなど、工芸館所蔵作品3点を日常使いの出来る文具で表現し、オリジナルグッズの一層の充実化に努めた。
- ・三越伊勢丹と協力し、工芸館所蔵作品の図柄を容器にあしらったギフト商品の菓子をショップで販売し、売り上げに結びつけた。
- ・ミュージアムショップでの購入者にとって、「来館記念」や「特別なギフトのためのラッピング」となるよう、新たにオリジナルデザインショッパーを作成し、販売し始めた。これは購入者が金沢市内を持ち歩くことによる副次的な宣伝効果も期待したものにもなっている。
- ・上記の取組みが功を奏し、ショップにおける収入は前年度比約200%の増収となった。

イ 京都国立近代美術館

- ・ミュージアムショップでは、すべての展覧会において、それぞれの内容に合わせた関連書籍及びグッズのコーナーを設け、幅広い層の来館者にご満足いただけるよう、商品を充実させることに尽力した。

以下の展覧会では、企画・制作したオリジナルグッズを販売した。

- ①「MONDO 映画ポスターアートの最前線展」においては、アメリカのMONDO社全面協力のもと、

活版印刷のカードセットを製作した。

- ②「甲斐荘楠音の全貌展」では、ポストカードの他、クリアファイル、一筆箋、しおりセットなど、6アイテムのオリジナルグッズ製作し販売した。京近美所蔵作品のため、美術館のオリジナルグッズとして引き続き販売することにより、今後も作家と所蔵作品の知名度を高めることに貢献できる。また、オリジナルコラボグッズとして京都の香老舗『松栄堂』とコラボしたお香を3アイテム製作した。共催展（「没後50年 鏑木清方展」、「ルートヴィヒ美術館展」）では展覧会では協力会社である株式会社アールプリュ企画と共同で特設ショップを運営した。
- ・OK パスポートをお持ちのお客様に開催中の展覧会図録、コレクション作品のオリジナルポストカードの10%割引を実施した。
 - ・レストランにおいて、企画展に合わせた期間限定メニューを実施した。
「サロン！展」と「ルートヴィヒ美術館展」では前菜と3種から選べるパスタセットを販売した。平日にはお得なランチセットも提供した。
 - ・友の会及びJAF会員様に10%割引を実施した。
 - ・令和3年度より始めた季節のパフェメニューを引き続き販売した。令和4年度は展覧会期間限定ドリンクも販売し限定メニューをより充実させた。
 - ・京野菜・京ほうじ茶・抹茶など京都ならではの食材を使用し他府県からのお客様ニーズにも対応した。

ウ 国立映画アーカイブ

令和2年度に館内整備を行い、1階エントランスホールの総合受付に併設したミュージアムショップを開設し、オリジナルグッズの製作を行ったが、新型コロナウイルス感染症対策のため、刊行物等の販売に留めており、引き続き令和4年度もNFAJニューズレター及び展覧会図録等の販売に留めた。

エ 国立西洋美術館

- ・所蔵作品を用いたオリジナルグッズ（A4クリアファイル、ポストカード、洋菓子、ブックマーク、ミニプレート、一筆箋、写本複製画、ボールペン、石鹸）を新たに制作・販売し、作家と所蔵作品の知名度を高めることに貢献した。
- ・常設展内の小企画展「調和にむかって ル・コルビュジエ芸術の第二次マシン・エイジ — 大成建設コレクションより」、企画展「ピカソとその時代 ベルリン国立ベルクグリューン美術館展」、「憧憬の地 プルターニュー — モネ、ゴーガン、黒田清輝らが見た異郷」にちなんだ特別メニューを開発・提供し、食の面からも来館者が出展作家や美術館の所在地等にちなんだ料理を楽しむ機会を提供した。

オ 国立国際美術館

- ・「感覚の領域 今、「経験するということ」」展では、出展作家についてさらに知ってもらうために作家のオリジナルグッズコーナーを設けた。オリジナルグッズの売れ行きは好調でこれをきっかけに以前に国立国際美術館にて展覧会開催した国内作家のグッズ、書籍、ポストカード等も販売し、現代芸術作家を広く知ってもらう取組みを進めた。
- ・「すべて未知の世界へ — GUTAI 分化と統合」では関連書籍を充実させ来館者に「具体活動」についてさらに深堀していただける運営を実施した。
- ・「ピカソとその時代ベルリン国立ベルクグリューン美術館展」では、子供でもわかりやすく楽しめる書籍も取り揃え来館者のニーズに応えた。

カ 国立新美術館

- ・ミュージアムショップにおいて、アーティストの個展を美術館との連携により2回開催し、あわせて関連商品の展示販売を実施した。
- ・ミュージアムショップにおいて、各展覧会の来館客層に合わせた催事展開を実施した。

- ・レストランにおいて、メトロポリタン美術館展、ルートヴィヒ美術館展、ルーヴル美術館展とコラボした特別メニューの提供を、展覧会の開催期間に合わせて展開した。

2 我が国の近現代美術及び海外の美術を体系的・通史的に提示し得るナショナルコレクションの形成・活用・継承

(1) 作品の収集

第5期（令和3年度～令和7年度）中期目標に定める指標	
指標	<ul style="list-style-type: none"> ・所蔵作品の収集に係る取組状況。 （美術作品購入点数、美術作品寄贈点数、美術作品年度末所蔵作品数） ・所蔵作品整理に係る取組状況（レジストラー等の専門的職員の充当人数） ・国立各館間での管理換及び長期貸与の件数

① ナショナルコレクションの形成

法人全体の収集方針として「独立行政法人国立美術館 作品収集方針」を定め、それに即して各館の収集方針を改め令和5年度計画に反映させた。

あわせて、「独立行政法人国立美術館作品収集方針に基づく現代の美術作品の同時代収集の推進方針」についても新たに定め、令和4年度の法人全体の購入予算のうち190,000,000円を現代作品の収集に充てることとした。各館で収集方針に基づき調査を行い、法人内会議及び各館で行う外部の学識経験者で構成する購入委員会での審議を経て、東京国立近代美術館で8件、国立工芸館で6件、京都国立近代美術館で8件、国立国際美術館で13件の作品を収集することとなった。これらの新収蔵作品については令和5年度中に法人ウェブサイトで紹介するとともに、各館の所蔵作品展示において順次公開の予定である。また同時代美術作品の令和5年度以降の収集活動に資するため、各館のコレクション担当者による研究会を行うこととし、令和4年度中に2回実施した。

- ・所蔵作品整理に係る取組状況（レジストラー等の専門的職員の充当人数）

令和4年度充当人数 (人)	令和4年度新規	1	総数	2
------------------	---------	---	----	---

特記事項

レジストラーの配置について、上記のとおり充当した。

レジストラー（作品に関わる諸データや他館への貸出、作品状態など所蔵品情報の一元的管理、および他館からの作品借用に関わる業務の集約に携わる専門家）は、欧米の多くの美術館ではその専門家が配置されており、またアジア圏で近年新しく開設された美術館のほとんどが常勤職員として採用している。しかし、日本では、美術館で雇用される職員数が少ないため、学芸員（キュレーター）が調査研究や展覧会企画等の業務を担いつつ兼務せざるをえない状況にあり、諸外国と同様にレジストラーを配置することが長らく期待されてきた。法人内では平成27年度に国立国際美術館がレジストラーを採用し、多様な現代美術作品の管理にあたっている。また令和4年7月には国立西洋美術館もレジストラーを採用し、コレクション情報等に関わる専門的管理が可能となり、システムの整備を進めるとともに、作品の貸借に関わる業務を美術史系研究員に代わり担当することとなった。その他の国立美術館においては、ラーニング、広報、情報資料など他領域においても対応すべき人員が求められていることもあり、館全体の業務を考慮し、レジストラーの配置については今後の課題となっている。

・国立各館間での管理換及び長期貸与の件数

特記事項

国立美術館同士のコレクションの相互使用については、各館で開催される企画展での相互所蔵品貸借を積極的に行った。また、令和4年度には各館と国立アトリサーチセンターの連携の下、所蔵品展示での相互貸借の推進方策についての検討を進め、令和5年度中に国立国際美術館から京都国立近代美術館に日本画作品2点を数年間長期貸与するほか、国立工芸館から東京国立近代美術館へ、東京国立近代美術館から京都国立近代美術館と国立国際美術館へ、それぞれコレクションを貸与することにより各館の所蔵作品展の特集展示の充実を図ることとした。また国立工芸館において、国立工芸館、東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、国立国際美術館のコレクションを活用した展覧会「版画とグラフィックデザインの交錯と境界」を実施することとした。これらの実施にあたり、法人内の相互使用に関するルールを定め、国立アトリサーチセンターにおいて各館の年度ごとの相互使用の希望のとりまとめを行った。

② 所蔵作品の収集に係る取組状況

作品の収集は、国立美術館の役割を踏まえ、法人全体及び各館の収集方針に基づき、各館の調査・研究活動を通じて収集すべき美術作品を検討した後、外部の有識者による美術作品購入選考委員会等の審査を経た上で実施している。また、学芸課長会議において、各館の収集予定やその緊急性等について情報交換を行うことにより、適時適切な収集に努めている。

令和4年度の購入予算（法人共通）の用途については、海外への流出可能性など緊急度の高さや作品の品質と希少性等の観点から法人全体で協議し、決定している。

館名	購入点数	購入金額	寄贈点数	年度末 所蔵作品数	年度末 寄託品数
東京国立近代美術館	9	478,134,300	22	13,648	249
国立工芸館	12	107,810,000	39	4,074	87
京都国立近代美術館	120	407,303,800	113	13,256	1,602
国立西洋美術館	35	1,152,193,540	5	6,434	270
国立国際美術館	37	749,652,044	9	8,161	104
合計	213	2,895,093,684	188	45,573	2,312
(参考)第4期中期目標期間実績	349	-	208	44,873	-

【注】「(参考)第4期中期目標期間実績」の購入点数及び寄贈点数は平均値である。年度末所蔵作品数は令和2年度の数値である。

館名		令和4年度の収集方針
東京国立近代美術館	本館	近代日本美術の体系的コレクションの構築を図りつつ、近代日本美術に影響を与えた海外作家の作品、及び日本と海外の同時代美術作品の収集を次の点について留意しながら積極的に行う。 ア 1970年代以降の日本と海外の作品の収集 イ 日本の美術に影響を与えた海外作家の作品の収集 ウ 1900～1940年代の日本画作品の収集
	国立工芸館	次の点について留意しつつ、近代日本における工芸の体系的コレクションの充実を図る。 ア 日本工芸の近代化を示す作品の補充 イ 戦後から現代に至る伝統工芸や造形的な表現、クラフト等の重要作品の収集 ウ 近・現代の欧米の工芸及びデザイン作品の収集

京都国立近代美術館	<p>ア 近・現代美術史の将来的検証に資する作品・資料を収集する。</p> <p>イ 絵画、彫刻、版画、素描類、工芸（陶芸・漆芸・金工・染織など）・デザイン、写真など、芸術の動向に係る作品・資料をジャンルの区別なく収集するだけでなく、複数のジャンルを横断する作品も積極的に収集対象とする。</p> <p>ウ 日本の作品については、全国の動向に目配りしつつも、京都を基盤とし、関西さらには西日本での芸術活動に重点を置き、所蔵作品の充実を図る。</p> <p>エ 国外の作品については、日本の芸術と世界の関係に鑑み、日本へ／からの影響関係が認められる作品の収集に重点を置く。特にダダイスムのような、芸術におけるパラダイムシフトに大きな役割を果たした動向の作品に注目する。</p>
国立西洋美術館	<p>ア おもに 15～20 世紀の西洋美術作品の収集に努める。</p> <p>イ ドイツ・フランドル・イタリア・フランス等を中心にヨーロッパ版画のコレクションを充実させる。</p> <p>ウ 国内外に残る旧松方コレクション作品の情報収集を継続する。</p>
国立国際美術館	<p>ア 1945 年以降の日本の現代美術作品の系統的収集を継続する。</p> <p>イ 国際的に注目される国内外の同時代の美術作品の収集を継続する。</p>

特記事項

ア 東京国立近代美術館

(本館)

<購入>

彫刻では、フランスの女性彫刻家ジェルメヌ・リシエ《蟻》（1953 年）を購入した。リシエは 19 世紀と 20 世紀を結びつける要素を備えた、アルベルト・ジャコメッティと比較される重要作家である。国立美術館全体のコレクションのなかで多様な活用が見込まれる。日本画では、安田靱彦《居醒泉》（1928 年）を購入した。再興院展出品の重要作であり、靱彦の画業を通覧する際に欠けていた記紀神話主題の作品を補完できた。また、竹内栖鳳の希少な人物画《日稼》（1917 年）を購入した。油彩では、吉澤美香《タイトルなし》（1987 年）、素描では、川俣正《アパートメント・プロジェクト「テトラハウス N-3 W-26」》から 2 点（1983 年）、映像では、遠藤麻衣×百瀬文《Love Condition》（2020 年）など現代作家の作品を購入した。近年重点的に取り組む 80 年代作品（吉澤、川俣）、女性作家の作品（吉澤、遠藤麻衣×百瀬文）の充実など、収集方針に沿った作品を計画的に購入し、多様化する現代の美術動向をより広く紹介することが可能となった。

<寄贈>

日本画では、池田蕉園《かえり路》（1915 年）をご寄贈いただいた。東都を代表する美人画の旗手とうたわれた女性画家の大作で、9 回文展にて美人画を集めて話題となった「美人画室」の出品作である点などエピソードも多く、さまざまなテーマで活用可能である。油彩では、コンセプチュアル・アートの第一人者として評価される河原温の代表作「日付絵画 (Today)」2 点（1966 年、1988 年）を受贈し、作家の仕事を体系的に紹介することが可能となった。版画では海老原瑛《事故現場見取図集》（1970 年）、彫刻では堀川紀夫《The Shinano River Plan 1969/2013》（2013 年）をそれぞれ作家から受贈した。東京国立近代美術館ではいずれもこれまで未収蔵の作家であり、70 年代の多様な芸術動向を示すものとして意義深い収蔵となった。素描の木下晋《103 歳の闘争 I》（2003 年）、写真のオノデラユキ《11 番目の指 No. 9》（2008 年）も、それぞれ作家から寄贈を受けた。いずれも近年、購入により作品を収蔵した作家であり、すでに収蔵した作品とあわせてより効果的な展観が可能となった。

(国立工芸館)

<購入>

川之邊一朝《梨子地青貝唐草内蒔絵硯箱・料紙箱》と芝山象嵌による《渡船・雨宿芝山象嵌屏風》を購入した。明治時代の日本の工芸技術の粋を示す優品を収蔵できたことで、国立工芸

館のコレクションの欠落を補い、また作品の海外流出を防いだという点でも国立の美術館としての役割を果たした意義のある購入であった。

また、所蔵作品展開催を機に、見附正康と牟田陽日の陶磁作品と、青木千絵と池田晃将の漆工作品など、1970～1980年代生まれの作家の作品を購入したことも今年度の成果として挙げられる。現代的な視点で工芸の分野を新たに切り拓こうとする若い世代の作家にも目配りしつつ、幅広い収蔵を進めることができた。

〈寄贈〉

富本憲吉《楽焼葡萄模様壺》を受贈した。本作は、現存作例の少ない大和時代の富本の陶器作りの実践を端的に示すものとしてきわめて貴重であり、イギリスの陶芸家バーナード・リーチとの交流を示す作例として令和4年度の所蔵作品展においても早速活用することができた。また、鈴木治《太陽の道》を受贈した。1980年代の作風をよく示す焼き締め作品の代表作の一つであり、コレクションにさらに厚みを持たせることができた。さらに石黒宗麿、板谷波山、河井寛次郎、鈴木藏、富本憲吉、深見陶冶、森陶岳など、日本の近現代陶芸を代表する作家による香炉を中心としたコレクション21点を一括受贈した。小品であるが作家の特徴を端的に示す作品が揃っており、今後所蔵作品展において活用が期待される。

イ 京都国立近代美術館

〈購入〉

戦後日本の陶芸界における最重要人物として国際的に高く評価される八木一夫の作品75点を一括収蔵した。ここには、オブジェ焼きの記念碑的作品である《ザムザ氏の散歩》(1954年)や、ブロンズやガラスといった異素材作品、ドローイングなどが含まれ、すでに所蔵する51点と合わせて、作家の初期から晩年にいたる創造の軌跡を包括的に研究・紹介できる環境を整えることができた。また、現存三基のみの黒田辰秋《朱漆三面鏡》(1934年)を購入し、2024年度開催予定の黒田生誕100年記念回顧展並びに京都国立近代美術館における民芸関連コレクションの充実化を図った。

また、特徴的な購入作品として小出檜重の代表作《裸女結髪》(1927年)が挙げられる。裸婦像で著名な小出ではあるが完成作は30点ほどしか知られていない上、本作品は珍しい座像であり、かつマティス作品との関連も明確で、今後の日本近代洋画研究に大きく寄与するものと期待される。また今年度は、笠原恵美子や竹村京といった女性の現代美術家の作品を購入し、コレクションにおけるジェンダーバランスの是正や中堅・若手作家作品の充実化を目指した。

〈寄贈〉

令和4年度も、多彩なジャンルの作品を数多く受贈することができた。なかでも、竹内栖鳳を受け継ぐ動物画の名手山口華楊の代表作《月夜野》(1971年)は、今後コレクション展などでの活用が期待される。またパンリアル美術協会を牽引した不動茂弥と山崎隆、染色家の小合友之助についても数多くの貴重な作品・資料の寄贈を受けた。これらはすべて作家遺族からの寄贈であり、展覧会開催や日頃の活動などを通じて、地道に築き上げた作家遺族との信頼関係が基礎になっている点が重要である。

また京都国立近代美術館の日本画コレクションをよく知る元学芸課長島田康寛が築いた「春星館コレクション」から、コレクションを補完する作品として、塩川文麟《雪中平等院》(1863年)ほか13点が寄贈された。加えて、北大路魯山人《紅志野茶碗》(1945-59年)や音丸耕堂《彫漆香合 紫陽花》(1970年)、松田権六《長生の器》(1940年頃)など、小振りではあるものの各作家の作風や優れた技術を知ることができる茶道具を中心とした個人コレクションからも29点を受贈し、工芸コレクションの充実化を図ることができた。

ウ 国立西洋美術館

〈購入〉

アウグスト・ストリンドベリの油彩《インフェルノ(地獄)》、ホアキン・ソローリャの油彩《水飲み壺》、アルブレヒト・デューラーの木版画連作『聖母伝』を購入した。

ストリンドベリとソローリヤの作品はそれぞれ作者の代表作のひとつである。松方コレクションに由来するフランス美術の作品が多数を占める国立西洋美術館の近代美術コレクションは、近年デンマークやフィンランド、ドイツといった周縁国の画家の作品を加えることによって、ヨーロッパ全体を俯瞰する方向に拡充してきた。スウェーデンとスペインの国民画家であるこのふたりの作品の収蔵は、この流れに沿うものであり、西洋近代美術の多様な表現を展覧することが可能になった。

デューラーの『聖母伝』は『黙示録』『大受難伝』の各連作とともに「三大書物」と呼ばれる。今回の購入により、国立西洋美術館はこれらすべてを収蔵することになった。デューラー作品のコレクションの充実にとどまらず、西洋版画コレクション全体にとっても画期的な追加である。

〈寄贈〉

令和4年度受贈した作品のうち、レンブラントの《風車》はこの作家の典型的な風景版画であり、継続的にレンブラントの版画作品を収集してきた国立西洋美術館にとって、重要な追加となる。この作品は旧松方コレクションに由来し、松方幸次郎の孫に当たる方から寄贈されたものである点も、特筆される。松方コレクションに含まれるオールドマスター作品の貴重な例と言えよう。

同じく受贈したブーダンの《海浜》は、1967年以来半世紀にわたり国立西洋美術館に寄託されてきた素描である。寄託された当初の所有者は、「アラビア太郎」の綽名で知られたアラビア石油の創設者、山下太郎の妻である山下和子氏であった。長らく日本にあった作品が国外流出せず、国立西洋美術館に留まることになったことは重要な成果と言える。

エ 国立国際美術館

〈購入〉

令和4年度は、村上隆《727 FATMAN LITTLE BOY》（2017年）ほか37点の作品を購入することができた。世界的に評価の高い村上隆作品は国立国際美術館にとって初収蔵となり、代表的絵画シリーズがコレクションに加わったことは意義深く、洋画、彫刻、写真、映像など多岐にわたるジャンルの作品が購入でき、女性作家の作品も数多く収集することで、コレクションのジェンダーバランス是正に配慮することができた（田島美加、石川真生、西山美なコ、ブブ・ド・ラ・マドレーヌほか）。また、国内作家のみならず、タイ（アリン・ルンジャー）、フィリピン／イギリス（マリア・ファーラ）、ドイツ（アストリッド・クライン）など幅広い地域の作家の作品を収集し、国際的な現代美術の収集の継続に努めた。

〈寄贈〉

9点の作品寄贈を受けた。一点または複数点の作品購入に伴い、購入品と別のタイプの作品を受贈することで作家の多面性を担保することのできた例として、柏原えつとむ、西山美なコ、マリア・ファーラを挙げることができる。ニューヨークを拠点に再評価の機運が高まる篠原有司男の渡米前の大変貴重な作例《花魁》、《凧》は、寄託作品から寄贈が実現した。着実にキャリアを積む中、不慮の事故で夭逝した関西出身の作家、國府理の作品は遺族より申し出があり、調査の上、国立国際美術館のコレクションに適した《Tug Tricycle》を受贈することができた。また、過去に開催した展覧会の出品作であったナムジュン・パイクの資料については、所蔵者から寄贈の申し出を受け入れた。

(2) 所蔵作品の保管・管理

第5期（令和3年度～令和7年度）中期目標に定める指標	
指標	・ 保管環境等の改善等に係る取組状況。 (各館の収蔵庫の収納率。)

保管施設の狭隘・老朽化への対応として、外部倉庫の活用、関係機関等との協議、既存の収蔵庫等保管施設の改修、額縁及び作品の整理による保管スペースの確保等を進め、保管環境の改善を行った。

また、平成31年3月に策定した「収蔵庫等保管施設の狭隘・老朽化対応に係る方針」に基づき、ナショナルセンターとして担う役割にふさわしい機能を有する新たな収蔵施設の設置に向けた検討を進めた。

① 収蔵庫等の狭隘・老朽化への対応

ア 東京国立近代美術館

(本館)

収納率：約165%

従来どおり、館外の倉庫2か所に作品の一部を預けたり、作品貸与や所蔵作品展示により作品を庫外に出したりして最低限やりくりしているが、これをもってしても新規収蔵作品、特に大型作品の保管場所を確保することができなくなっている。令和4年度に定められた「現代の美術作品の同時代収集」方針により、今後ますます大型作品の収集が増加していくことが見込まれる。

(国立工芸館)

収納率：約100%

金沢移転後の収蔵庫は、令和3年度までに移動した工芸作品で収納率が100%を超え、所管する残りの約44%は東京分室内の収蔵庫および東京都内の民間倉庫の2ヶ所に分蔵して保管している。令和5年度から金沢市内の外部倉庫の活用を目指し、調査及び検討を進めた。石川と東京の収蔵庫では、空気の対流の妨げにならないよう、作品の配置を検討し、また庫内清掃の徹底やサーキュレータの併用など、でき得る限りの環境保全に努めている。

イ 京都国立近代美術館

収納率：約194%

収納率が200%を超えるのは時間の問題という極めて危機的な状況にある。対応としては、令和3年度に引き続き、館内収蔵庫で収納することによって他収蔵品の運用を妨げる可能性のある大型作品や、展示・貸与の機会が比較的低い作品については、その作品の状態を考慮しつつ、館外の民間倉庫を活用している。それにより、館内外に収納されている作品の保存環境維持に努めているが、民間倉庫の借用には常に経費の限界が伴う。また、館内収蔵庫内での収蔵方法を適宜見直し、保存環境の改善と維持に努めている。

令和4年度に情報資料（アーカイブ）担当の常勤職員（任期付研究員）を新たに採用し、その者を中心として収蔵庫に収められている貴重書やエフェメラルな資料類の整理にとりかかった。

ウ 国立西洋美術館

収納率：約90%

額縁のない作品には新規額を作成し、オリジナル額から外され放置されている作品のオリジナル額の改修を行い、展示できる作品を増やすとともに、絵画ラックに掛けられる作品を増やすことで、収蔵庫の狭隘化解消を僅かながら進めた。

適切な保管環境の整備：バックヤードに関しては例年どおり、トラップを仕掛けて文化財害虫のモニタリングを定期的に行い、現状調査と問題点の把握に努めた。不明な虫が発見された際には、東京文化財研究所に相談し指示を仰ぐようにした。

エ 国立国際美術館

収納率：約 137%

令和 4 年度から民間倉庫の利用を開始し、大型の立体作品を中心に所蔵作品 34 点を移動した。これにより若干のスペースを確保できたため、作品の配置を整理し、本来収納スペースでない場所に仮置きしていた作品や新収蔵品を一部収納することが可能になった。しかし、収蔵庫全体は引き続き稠密であるため、巡回展に際して作成した輸送箱を活用し、不定形の立体作品や画面保護がない平面作品の保管場所を確保している。また、収納棚の棚板増設と整理を行い、収納スペースを確保し、作品を安全に取り扱うことができるようにするとともに、大型の作品を開梱するスペースを確保するため、市販の可動式収納用品を活用して収蔵庫内の備品を整理するよう努めた。

② 防災対策の推進・充実

館名		避難訓練等の実施日
東京国立近代美術館	本館	(本館) 令和 4 年 12 月 16 日 (金) (分室) 令和 4 年 11 月 29 日 (火)
	国立工芸館	令和 4 年 11 月 21 日 (月)
京都国立近代美術館		令和 4 年 11 月 7 日 (月)
国立映画アーカイブ		(本館) 令和 4 年 7 月 26 日 (火) (相模原分館) 令和 4 年 11 月 29 日 (火)
国立西洋美術館		令和 4 年 10 月 18 日 (火)
国立国際美術館		令和 4 年 12 月 12 日 (月)
国立新美術館		令和 4 年 10 月 3 日 (月)～14 日 (金)

(3) 所蔵作品の修理・修復

第 5 期 (令和 3 年度～令和 7 年度) 中期目標に定める指標	
指標	・所蔵作品についての修理、修復に係る取組状況。(所蔵作品の修理・修復数)

所蔵作品等の保存状況について、各館の連携・調整を行い、特に緊急に処置を必要とする作品について重点的に修理・修復を行った。

・所蔵作品の修理・修復実績

館名		修理・修復点数
東京国立近代美術館	本館	25 点 (絵画 19 点、素描 2 点、版画 3 点、彫刻 1 点)
	国立工芸館	37 点 (工芸 11 点、デザイン 26 点)
京都国立近代美術館		15 点 (絵画 11 点、水彩 1 点、素描 1 点、版画 1 点、資料・その他 1 点)
国立西洋美術館		92 点 (絵画 18 点、水彩 2 点、素描 2 点、版画 62 点、彫刻 5 点、写真 1 点、工芸 1 点、書籍 1 点)
国立国際美術館		39 点 (絵画 18 点、水彩 2 点、素描 1 点、版画 4 点、彫刻 8 点、写真 2 点、デザイン 4 点)

特記事項

ア 東京国立近代美術館

(本館)

修復家や美術史家などの協力を得て、昨年度より継続して行ってきた藤田嗣治作品の修復作業の多くが完了した。特に《五人の裸婦》(1923年)、《自画像》(1929年)は、画面の洗浄や剥落止めといった処置とともに、過去の修復跡や技法材料の科学調査も行い、謎の多い彼の創作の秘密に迫った。そこで得られた知見は、コレクションによる小企画「修復の秘密」(令和5年3月17日～令和5年5月14日)や『東京国立近代美術館研究紀要』(27号)にて公開し、美術館の重要な活動のひとつである作品の保存修復について、一般の理解を大いに深めることができた。また、東京国立近代美術館のシンボリック的存在、イサム・ノグチによる屋外彫刻《門》(1969年)を約10年ぶりに補修、塗り替えてきたことも大きな成果の一つである。東京文化財研究所などと共同連携し、近年継続的に進めている酵素を用いたシミ抜きの修復を、太田聰雨《山陽母子》(1942年)ほか計4点の日本画について行ったほか、令和4年度も各ジャンルについて着実に所蔵作品の保存修復とその公開に努めることができた。

(国立工芸館)

工芸作品は、金作品のうち帯留4点について経年による汚れのクリーニング、染織作品のうち稲垣稔次郎の型絵染作品6点のクリーニングなどを行った。また、令和3年度に引き続き、使用頻度の高い杉浦非水やアルフォンス・ミュシャなどのポスターについて、低反射アクリルへの交換および裏板の交換を行った。

イ 京都国立近代美術館

菊池芳文ほか《(合作)》、木島桜谷《鹿図》、高谷仙外《みはれるまなこ》、高谷仙外《(象と鳩)》、甲斐庄楠音《裸婦デッサン》、上村淳之《四季花鳥図》、川端玉章《山澗僻邑》、加藤土師萌《下図「萌黄金欄手蓋付飾壺」》を修復した。芳文、桜谷、仙外、楠音の作品は、長く個人宅にあったため、汚れと傷みがあり、受贈後展示ができなかったが、今回の修復により令和5年度以降コレクション展で使用出来るようになった。特に《みはれるまなこ》は存在が明らかになった高谷仙外唯一の出品作なので、今後の仙外研究に大いに資するものと思われる。上村淳之作品は仮の縁がつき、2面に分かれていたが、1面の額装とすることにより春夏秋冬を一望するという本来の在り方で鑑賞することが可能となった。玉章作品は収蔵してから年数が経ち、進行していた傷みを止めることが出来、今後も展示し続けることが可能となった。

また、寺松国太郎《寺院》、田中善之助《裸婦》、正宗得三郎《富岡鉄斎像》、山下新太郎《宇治川》、榎本巳之助《行徳風景》(水彩)、須田国太郎《風景》(版画)は、いずれも長く個人宅にあったため、展示に耐えない状態であったが、いずれも展示可能となった。さらに、白髪一雄《天暴星両頭蛇》は経年劣化で傷んだ木枠を修復、裏にポリカーボネート板をあてることにより、木枠が補強され、移動時の振動を抑えることが出来た。早速、国立国際美術館と大阪中之島美術館が共同で開催した具体美術協会の解散後50年を記念する大回顧展への貸出が叶った。

ウ 国立西洋美術館

企画展『憧憬の地 ブルターニュ —モネ、ゴーガン、黒田清輝らが見た異郷』(令和4年3月18日(土)～6月11日(日)開催)のため、コッテ《ブルターニュの入り江》(制作年不明)、コッテ《夕べのミサ》(制作年不明)、シモン《ブルターニュの祭り》(制作年不明)などの作品と額の保存修復及び額縁改修などを特別修復費を利用して行った。

オリジナル額縁があるにも拘わらず、著しい劣化が理由と思われる白木の新規額への交換が過去に大量に行われ、作品の時代・雰囲気と合わずに作品価値を低めていた作品群のうち、アマン＝ジャン《室内の少女》(制作年不明)とクールベ《馬小屋》(1873年制作)の額縁処置を行い、オリジナルの雰囲気を復活させるとともに、作品を安全に展示活用できる状態となった。

初めて法人内の金属彫刻作品である国立国際美術館のオノ・ヨーコ《忘れなさい》（1988年）と国立映画アーカイブの《金獅子賞トロフィー》（1953年）を預かり、金属の保存修復を専門とする保存修復室長が保存修復作業を行い、安全に展示活用できるよう協力した。

国立西洋美術館所蔵の板絵3点について、令和3年度に東京国立博物館が所有するX線CTスキャンを利用してもらい、以後、年輪年代測定を進めてきたが、ドイツの研究者などの協力を得て、3点について板の伐採年を決定することができた。年輪年代測定は、国立西洋美術館、東北大学及び東京芸術大学などとの共同研究である。こうした協力を継続的に行うことで、収蔵品の制作年代・技法を研究し、学術調査研究の推進に貢献し続けていきたい。

東京電機大学及び筑波大学との共同研究により、所蔵作品3点（令和3年度とは異なる作品）について非破壊・非接触の科学的調査を行い、材料・技法について明らかにした。

マイクロSCOPEメーカーによる研究支援（無償）により、国立西洋美術館所蔵作品1点についてデジタルマイクロSCOPEによる調査を行った。

また、産業用インガス（In Ga As）カメラを用いて、民間企業の協力のもと、所蔵作品10点の赤外線反射撮影を行い、下描きや欠損や過去の修復箇所を明らかにした。

エ 国立国際美術館

経年劣化により色調が沈み、部分的に錆が生じていた黒川弘毅《Eros 25》（2001年）ほか2点について、特別修復予算により錆落とし、防錆処置、ワックス塗布の処置を行った。これにより、作品本来の色調を取り戻した状態で令和4年に武蔵野美術大学美術館で開催された回顧展に貸し出しを行うことができた。

作品を構成する部品の一部が折損して展示できない状態だったオノ・ヨーコ《忘れなさい》（1988年）について、国立西洋美術館の協力により接合処置を行い、安全に展示することが可能になった。令和5年2月よりコレクション展にて収蔵後初めて展示することができた。

（4）所蔵作品の貸与

第5期（令和3年度～令和7年度）中期目標に定める指標	
指標	・所蔵作品の貸与に係る取組状況。（所蔵作品の貸与件数）
関連指標	・所蔵作品の活用割合（展示、貸与及び特別観覧の合計の所蔵品と寄託品の合計に占める割合） ・国立美術館所蔵作品の国内外美術館への長期貸与契約件数

所蔵作品について、各館においてその保存状況や展示計画を勘案しつつ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に実施した。

・所蔵作品の貸与に係る取組状況／国内美術館所蔵作品の国内外美術館への長期貸与契約件数

館名	貸出		貸出のうち長期貸与（※）		特別観覧	
	件数	点数	件数	点数	件数	点数
東京国立近代美術館（本館）	75	339	23	109	155	402
国立工芸館	12	102	0	0	24	31
京都国立近代美術館	58	949	13	58	53	169
国立西洋美術館	14	61	2	6	72	230
国立国際美術館	14	66	3	6	15	25
合計	173	1,517	41	179	319	857

※「長期貸与」とは、国内外を問わず貸出期間が半年以上のものである。

- ・所蔵作品の活用割合（展示、貸与及び特別観覧の合計の所蔵品と寄託品の合計に占める割合）

館名	所蔵作品の活用割合
東京国立近代美術館（本館）	12.0%
国立工芸館	11.7%
京都国立近代美術館	11.5%
国立西洋美術館	15.2%
国立国際美術館	3.3%

特記事項

ア 東京国立近代美術館

（本館）

新型コロナウイルスまん延のため延期となった展覧会の新会期での開催が相次ぎ、海外への貸与が多い年度となった。「Surrealism Beyond Borders」（テート・モダン、メトロポリタン美術館）で、古賀春江《海》が展覧会の重要作として位置づけられたほか、近年の決定版となる個展「Cezanne」（シカゴ美術館、テート・モダン）で、《大きな花束》が収蔵後初の海外お披露目となるなど、東京国立近代美術館コレクションの充実ぶりを国際的に発信できた。また「Yayoi Kusama: 1945 to Now」（M+・香港）への草間彌生作品や「Future Bodies from a Recent Past」（ブランドホルスト美術館・ミュンヘン）への赤瀬川原平作品の貸与など、現代日本人作家の海外での顕彰にも貢献した。国内では速水御舟展（茨城県近代美術館）に15点、「藤野一友と岡上淑子」展（福岡市美術館）に17点のほか、「岡本太郎」展（大阪中之島美術館ほか）、「小茂田青樹展」（川崎市立美術館）、「佐伯祐三」展（東京ステーションギャラリーほか）など、いずれも回顧展開催に必須となる作品を多数貸与し、その顕彰に寄与した。

（国立工芸館）

令和3年度から国内4会場を巡回した「杉浦非水 時代をひらくデザイン」展の会期が延長となり、引き続き特別協力を行い、国立工芸館のデザイン作品の重要な柱である非水作品・資料類29点を貸与し、その顕彰に寄与した。また、豊田市美術館を皮切りに国内3会場を巡回した「交歓するモダン 機能と装飾のポリフォニー」展に特別協力を行い、企画内容に不可欠な1920 - 30年代のヨーロッパの工芸・デザイン作品を貸与し、内容の充実に寄与した。

また、金沢21世紀美術館市民ギャラリーにて開催された「第5回金沢・世界工芸トリエンナーレ」において、国立工芸館、石川県立美術館、金沢21世紀美術館の3館の所蔵作品を中心に構成された企画展「工芸が想像するもの」に13点の工芸作品を貸与した。金沢において、工芸表現の拡がりや新しい可能性を示す同企画に寄与したことは、石川県に移転後の活動として有意義なものであった。

イ 京都国立近代美術館

国外では、フランクフルト近代美術館（ドイツ、フランクフルト）で開催された「Marcel Duchamp: A Revision of the Object」展にマルセル・デュシャンの記念碑的作品《泉》（1917/1964年）を含むレディ・メイド6点を、香港のM+（エム・プラス）で開催された「Yayoi Kusama: 1945 to Now」展に草間彌生《トラヴェリング・ライフ》（1964年）を貸与した。また、アルケン近代美術館（デンマーク、コペンハーゲン近郊イシヨイ）で開催された「Woman and Change」展に、平成31/令和元年度の特別予算で購入したピピロツティ・リスト《永遠は終わった、永遠はあらゆる場所に（Ever is Over All）》（1997年）を貸与した。ただし京都国立近代美術館が所蔵するオリジナル・データを実際に貸与することはせず、作家からの申し出により、展示用複製データは作家自身から提供することとなった。

国内では主な事例として、「交歓するモダン 機能と装飾のポリフォニー」展（豊田市美術館、島根県石見美術館、東京都庭園美術館）にソニア・ドローネー《リズム》（1915-30年）など14点を、「並河靖之の雅な技 海外を魅了した明治時代の京都七宝」展（茨城県天心記念五浦美術館）には展覧会広報のメインヴィジュアルにも使われた並河靖之の代表作《桜蝶図皿》（明治時代中期）のほか初代稲葉七穂や濤川惣助らの名品計20点を、西宮市大谷記念美術館開館50周年として開催された特別展「Back to 1972 50年前の現代美術へ」には池田満寿夫《七つの大罪（罪）》（1972年）ほか版画作品を中心に19点を貸与し、いずれも各展覧会に欠くべからざる作品として、展覧会内容の充実に寄与した。

また、京都国立近代美術館で開催したキュレトリアル・スタディズ15「八木一夫の写真」の展示作品100点を、特別協力として茨城県陶芸美術館に貸与した。さらに、京都国立近代美術館における寄託の高野コレクション（明治期の日本の風景を描いた作品約640点）から、「発見された日本の風景」展として、愛媛県美術館に247件、長野県美術館に246件を一括貸与した。

ウ 国立西洋美術館

コロナ禍で準備が進められた展覧会企画が多かったためか、国内への貸出件数が比較的多く、海外への貸出が少なかった。海外への所蔵作品貸出は0件だが、寄託絵画2点を2つの海外展（オルセー美術館、アムステルダム国立美術館ほか）に貸与しており、海外の主要美術館との関係性維持・強化に努めた。特にアムステルダム国立美術館への貸与は、大規模なフェルメール展に出品するためであり、国立西洋美術館寄託の「フェルメールに帰属」作品がフェルメールの真筆として紹介された。また展覧会に合わせ詳細な科学調査を行われるなど、きわめて有意義な貸出しであった。

また、絵画以外にも版画や工芸作品、研究資料センター所蔵の資料などの貸出要請も多かった。それらに答えることで、所蔵の作品・資料をより活用しつつ、コレクションの広がり・深みを発信することにつながったと考える。

エ 国立国際美術館

西宮市大谷記念美術館で開催された「西宮市大谷記念美術館 開館50周年記念 特別展 Back to 1972 50年前の現代美術へ」へ、北辻良央《作品》（1972年）他、版画、彫刻、写真など計25点を貸与した。美術館の50年の活動を顕彰し、関西の1970年代の美術を回顧する展示内容に貢献した。

また、東京オペラシティ アートギャラリーで開催された「ライアン・ガンダー われらの時代のサイン」展に、ライアン・ガンダー《あの最高傑作の女性版》（2016年）他、計2点の作品を貸与した。国立国際美術館でも過去に個展を開催し、作品を収蔵した重要な海外作家であり、再び日本での個展に出品された意義は大きい。

3 我が国における美術館のナショナルセンターとして美術館活動全体の活性化に寄与

(1) 国内外の美術館等との連携・協力等

第5期（令和3年度～令和7年度）中期目標に定める指標	
指標	<ul style="list-style-type: none"> ・国立美術館巡回展の満足度調査を実施し、「良い」以上の回答率を8割程度とする。 ・国立映画アーカイブの優秀映画鑑賞推進事業の満足度調査を実施し、「良い」以上の回答率を8割程度とする。
関連指標	<ul style="list-style-type: none"> ・国立美術館巡回展の事業数及び会場数 ・国立映画アーカイブの優秀映画鑑賞推進事業の実施回数 ・国立美術館巡回展の入館者数 ・国立映画アーカイブの優秀映画鑑賞推進事業の入館者数 ・国内外の美術館関係者との研究会の開催や研究者との交流等に係る取組状況。 (所蔵作品等に関するセミナー・シンポジウムの開催回数、国内外の研究者の招へい等に基づくセミナー・シンポジウムの開催回数。)

※指標及び関連指標1～4点目については別表5、関連指標5点目については別表14、15を参照。

各館において国内外の研究者を招へいし、展覧会の開催等に合わせ各種講演会・セミナー・シンポジウムを開催し、展覧会等の紹介や企画に関連し、海外の美術館との連携・協力を図った。

また、全国の美術館等の運営に対する援助、助言を適時行うとともに、地方巡回展の開催、企画展の共同主催やそれに伴う共同研究等を通じて、関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等に取り組んだ。

さらに国立アトリサーチセンターにおいて、文化庁アートプラットフォーム事業の全国美術館収蔵品サーチ「SHŪZŌ」を継承し、全国の美術館との連携のもと、国内美術館収蔵作品・作家情報の集約・国際発信を主導して進めた。また、国内美術館や美術関係者、海外の主要な美術館、作家等と連携し、美術を通じた国際交流を促進するために文化庁アートプラットフォーム事業継承に関する検討・準備を進めた。

① 国内外の研究者の招へいによるシンポジウムの開催等

国内外の優れた研究者等との人的ネットワークの構築を図るため、セミナー・シンポジウムを以下のとおり開催した。

館名	所蔵作品等に関するセミナー・シンポジウムの開催回数	国内外の研究者の招へい等に基づくセミナー・シンポジウムの開催回数
東京国立近代美術館（本館）	1	1
国立工芸館	2	3
京都国立近代美術館	0	7
国立映画アーカイブ	2	3
国立西洋美術館	0	1
国立国際美術館	0	7
国立新美術館	0	22
合計	5	44

※詳細については別表 14、15 を参照。

② 我が国の作家、美術作品による展覧会開催のための海外の美術館との連携・協力

ア 国立国際美術館

韓国現代美術館と将来的に持続可能な関係を構築することを目指している。その一環として、令和6年度～令和7年度に特別展を共同で企画予定である。

③ 全国の美術館等との人的ネットワークの形成等

ア 地方巡回展の開催（再掲）

地方巡回展及び巡回上映等は、別表5のとおり実施した。

イ 企画展・上映会等の共同主催と共同研究

館名	共同主催件数	機関数	共同研究件数	機関数
東京国立近代美術館（本館）	4	5	4	5
国立工芸館	4	7	5	10
京都国立近代美術館	6	7	7	13
国立映画アーカイブ	9	127	8	14
国立西洋美術館	1	1	2	2
国立国際美術館	3	4	3	4
国立新美術館	4	4	4	4
合計	31	155	33	52

ウ 国内外の美術館等との保存・修復に関する連携・協力等

（ア）京都国立近代美術館

国宝修理装演師連盟が文化庁の補助金を得て進めている「近代絵画修理ガイドラインの作成」事業に協力し、所蔵品のうち、最近修復したものや、今後修復を予定しているものの熟覧および座談会への出席を行った。

(イ) 国立映画アーカイブ

映画関連資料については、「全国映画資料館録」の編纂や文化庁事業「全国映画資料アーカイブサミット」などを機に各地の映画資料館とのネットワーク作りに努めている。近年は国立映画アーカイブで受領した印刷資料の重複分について、資料の廃棄を防ぎ、各館の所蔵品充実を促す目的でこうした資料館への頒布を検討している。

(ウ) 国立西洋美術館

国立西洋美術館において、主に以下の取組を実施した。

- ・令和4年度は初めて法人内の金属彫刻作品である国立国際美術館のオノ・ヨーコ《忘れなさい》(1988年)と国立映画アーカイブの《金獅子賞トロフィー》(1953年)を預り、金属文化財の保存修復を専門とする保存修復室長が保存修復作業を行い、法人全体の収蔵品の安全性や質を高めることに協力した。
- ・国立アートリサーチセンター作品活用促進グループが進める国内外からの専門家を講師として招いて行うワークショップ構想について、担当者に助言を行い、長年実績のある(独)国立文化財機構東京文化財研究所との関係構築に協力した。
- ・一般社団法人全国美術館会議(以下、「全美」)の活動に対し、保存修復室長が災害対策委員、災害時緊急連絡網広域ブロック(東京ブロック)本部館代表、保存研究部会幹事として協力を行った。令和3年度に引き続き、災害対策委員内のワーキンググループではリーダーとして「緊急時のための常備用資機材リスト」作成を有しメンバーとを行い、2022年5月31日に全美ウェブサイトにて公開し、美術館の日頃の防災対策の一環として役立ててもらえるよう貢献した。

また、保存研究部会幹事として、2022年8月9日～10日に福岡市美術館にて対面の部会合開催を行うとともに、2023年3月20日に第37回学芸員研修会「美術館の防災対策」を国立西洋美術館講堂にて対面とオンラインのハイブリット方式で開催する準備をし、上記資機材リストの発表を行った。全美を通して関連館と密に連絡を取り、災害対策と作品保存に関する情報交換を常時行っている。

- ・国立国際美術館の美術館ニュースに、国立西洋美術館のコレクション・ケアについて紹介する記事を執筆し、保存修復作業を行う前に、日常的な予防保存を目指すための活動の重要性を啓蒙した。
- ・企画展『ピカソとその時代 ベルリン国立ベルクグリューン美術館展』2022年10月8日(土)～2023年1月22日(日)西美、2023年2月4日(土)～2023年5月21日(日)国立国際美術館巡回で、保存修復室長および研究補佐員が西美での展示・撤収と大阪での展示時の点検に参加し、展示館とクーリエで来日したベルクグリューン美術館の保存修復家や責任者らと共に作業を行い、保存修復の方法論や材料に関して議論する機会を得るとともに、両美術館の関係をより強固にすることにつながった。
- ・国立西洋美術館収蔵品の板絵3点について、保存科学室長主導のもと、引き続き、年輪年代特定と樹種同定の共同研究に継続して参加している。令和4年度は参加者との情報共有に関わる内部調整を重点的に手助けした。
- ・保存科学室が行う科学調査の下準備として、作品移動や額装解除・再額装などの作業補助を行った。

(エ) 国立国際美術館

- ・国立西洋美術館保存修復室に依頼し、オノ・ヨーコ《忘れなさい》(1988年)の修復を行った。
- ・現代美術の保存修復に関する共同研究として昭和女子大学、東京藝術大学と連携し、福岡市美術館、九州大学総合研究博物館における所蔵品管理の調査を行った。

④ 国立アトリサーチセンターによる連携・協力

美術振興のナショナルセンターとして国内美術館の活動全体の活性化に寄与するため、国立アトリサーチセンターの設置に向けて各種の取組を実施し、令和5年3月28日に同センターを設立した。（1（1）⑤、（3）①及び②ア、（4）①イ及び②イ、3（2）①参照）

特記事項

- ・従来の国立美術館巡回展をリニューアルするため、国立美術館巡回展を実施した各地の美術館担当者にヒアリングを行い、それをもとに令和7年度から新たに「国立美術館 コレクション・ダイアログ」、令和6年度から「国立美術館 コレクション・プラス」を実施することを決定した。またコレクションの保存修復や科学調査に関する情報発信を進めていくために、東京文化財研究所と連携していくこととし、令和5年度には東京文化財研究所を会場として海外の保存修復専門家を招いたワークショップを開催する。
- ・令和4年度承継した「全国美術館収蔵品サーチ」について、国内の複数の美術館との連携を進め、各館から提供されたデータ素材を元に、国立アトリサーチセンターがウェブ公開可能なデータに整形する中心的役割を担い、同データベースにおける収蔵品データ登録件数の増加を図るとともに、国内外への発信を実現した。
- ・令和5年1月に英国に出張し（4名）、ロンドン、リバプール、マンチェスターの美術館博物館の担当者と面会し、認知症に対する取組みなどについてヒアリングを行った。これらをもとに令和5年度には国際シンポジウムを開催する予定である。

(2) ナショナルセンターとしての人材育成

第5期（令和3年度～令和7年度）中期目標に定める指標	
指標	・指導者研修参加者に対する満足度調査を実施し、「良い」以上の回答率を前中期目標期間と同程度の水準を維持するものとする。
関連指標	・指導者研修実施回数 ・今後の美術館活動を担う中核的な人材や映画保存のニーズに対応した人材の育成に係る取組状況（インターンシップ受入人数、キュレーター研修受入人数）

① 美術教育の一翼を担うナショナルセンターとしての活動

ア 教育普及活動の充実に資する教材やプログラムの開発・実施・普及、実践者の育成・研修

(ア) 国立アトリサーチセンターにおいて、誰もがアートに親しみ、美術館を利用することができるよう、法人内各館の教育普及室と連携して以下を実施した。

- ・主に発達障害のある方とその家族に向けた、やさしい文章と写真による来館案内冊子「ソーシャルストーリー」を、全7館分作成し、ウェブサイトに掲載した。
- ・各館で実施している特徴的な教育普及プログラムの紹介動画を作成し、ウェブサイトに掲載した（東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、国立国際美術館、国立新美術館、国立映画アーカイブ）。また、「鑑賞教育指導者研修」のダイジェスト映像動画を2本作成し、ウェブサイトに掲載した。

(イ) 東京国立近代美術館

(本館)

- ・企画展ごとに「先生のための鑑賞日」を実施し、計254名が観覧した。また、教員を中心とした美術館教育に関心のある方向けのオンライン講座を開催し計41名が参加した。
- ・東京都内の区立小中学校図画工作・美術教員による部会等の依頼に応じ、対面・オンライン合わせて7団体207名が参加した。

(ウ) 京都国立近代美術館

7月25日(月)に、京都市教育委員会、京都市立中学校教育美術部会、京都市図画工作教育研究会との共催で、京都市内の小中学校教員を対象とした、鑑賞教育の充実を目指した研修会「令和4年度 図画工作科・美術科夏季連携講座」を休館日に実施し、40名の参加があった。

12月2日(金)に、京都府総合教育センターとの共催で、京都府下の中学・高等学校教員を対象とした研修会「中高美術講座～対話で深める鑑賞～」を実施し、36名の参加があった。

(エ) 国立西洋美術館

教員研修2件(千葉教育研究会造形部会76名、荒川区中学校美術部会7名)

今年度より学校団体に向けて配布を始めた冊子「アクティビティブック」を使用している鑑賞教育について研修を行った。

(オ) 国立国際美術館

大阪府教育センターと連携し、大阪府の小・中学校、義務教育学校、高等学校、特別支援学校の図工・美術担当教員を対象として、夏季の美術館研修を実施した。美術館を活用した授業プランについて、終日、協議・考案し、今後の美術館と学校が連携した鑑賞活動をより一層推進できる内容となった。

また、大阪府公立小・中学校美術教育研究会と連携し、中学部冬期研修会を実施した。美術館活用の機会が少ない先生を中心に、美術館での児童生徒の学びの重要性を確認し、今後の連携へと進める機会になった。

他にも、大阪市立小学校の校内研修を実施し、より具体的な鑑賞活動に繋げる協議の場を持った。また、「先生のための鑑賞プログラム」を各展覧会で開催し、教員が具体的に相談できる場を持つなど、美術館活用に繋げる機会を用意した。

(カ) 国立新美術館

- ・全国美術館会議第58回教育普及研究部会会合の開催に協力。(12月12日オンライン開催、47人参加)
- ・全国美術館会議第59回教育普及研究部会会合の開催に協力。(3月14日～15日開催、56人参加)

イ 美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修の実施等

国立美術館は、美術教育の一翼を担うナショナルセンターとして「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」を実施している。同研修は、学校や美術館で鑑賞教育に携わる教員、学芸員に対して実践的な研修を行うもので、修了者が研修の成果を各地域の学校等、現場で実践することで、鑑賞教育の充実を図っている。各地域の学校と美術館との連携強化を図るとともに、全国の児童生徒に対する鑑賞教育の充実に貢献している。

17年目となる令和4年度は、新型コロナウイルス感染症対策を行いながら、3年ぶりに対面で開催した。修了者数は54名で、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、実地研修に参加できなかった受講者6名のうち希望した4名については、後日、研修プログラム内の講演部分の録画を視聴案内し、ビデオ講習修了者として修了証書を発行した。

また、本研修の記録はウェブサイトで公開しており、例年、より多くの情報を伝えるとともに視認性の向上に努めており、令和4年度は、新たに研修2日間の様子や本研修の核となるグループワークの様子を撮影したダイジェスト動画をウェブサイトで公開した。

- ・会期：令和4年8月1日、8月2日(2日間)
- ・修了者数：54名(小学校・中学校・高等学校・特別支援学校等教諭36名、美術館学芸員14名、指導主事4名)
- ・参加者の満足度：98.1%(目標：98.8%)

ウ 国立アートリサーチセンターにおけるファシリテータの育成・運営等

高齢者に対応するファシリテータについて、今後開発予定の高齢者対象鑑賞アプリに連動して育成プログラムを開発することを検討した。

② 今後の美術館活動を担う中核的人材の育成

国立美術館においては、美術館活動を担う中核的な人材を育成するため、選考方法、カリキュラムの内容、実際の指導等の検討を行い、大学院生等を対象としたインターンシップや美術館員（学芸員）の研修としてキュレーター研修を行った。

ア インターンシップ等の実施

館名	キュレーター研修 受入人数	インターンシップ 受入人数	博物館実習 受入人数
東京国立近代美術館（本館）	4	5	-
国立工芸館	0	0	-
京都国立近代美術館	3	1	-
国立映画アーカイブ	-	1	12
国立西洋美術館	4	7	-
国立国際美術館	3	7	-
国立新美術館	2	6	-
合計	16	27	12

特記事項

（ア）東京国立近代美術館

（本館）

<キュレーター研修>

4名を受け入れ、以下のとおり実施した。

- ・令和4年5月9日(月)から13日(金)まで(5日間)、北海道立近代美術館の学芸員1名を受け入れ、展示に関する作業、アトライブラリでの資料調査等の研修を行った。
- ・令和4年5月20日(金)から10月4日(火)まで(うち7日間)、横浜美術館の学芸員1名を受け入れ、写真作品の管理方法・貸出作業、展示に関する作業等の研修を行った。
- ・令和4年6月1日(水)から7日(日)まで(うち5日間)、諸橋近代美術館の学芸員1名を受け入れ、展示に関する作業、企画展運営、アトライブラリでの文献調査、教育普及・広報活動等の研修を行った。
- ・令和4年9月13日(火)から令和5年2月8日(水)まで(うち10日間)、原美術館ARCの学芸員1名を受け入れ、作品の管理、貸出、展示に関する作業、施設管理、教育普及等の研修を行った。

<インターンシップ>

「学芸／コレクション」近現代美術1名、「学芸／企画展」2名、「美術館教育」1名、「図書資料」1名を受け入れ、以下のとおり実施した。なお、実地研修とオンライン研修を織り交ぜながらインターン活動を行い、各分野の研究員が全分野のインターンに対し各々の業務等をオンラインでレクチャーする機会も設けた。

- ・「学芸／コレクション」近現代美術分野では所蔵作品展の運営に関する業務や作品の貸出・返却等の補助、所蔵作品展展示図面作成の補助、所蔵作品情報整理を行った。
- ・「学芸／企画展」分野では「ゲルハルト・リヒター展」「大竹伸朗展」「東京国立近代美術館70周年記念展 重要文化財の秘密」等の企画渉外事業・トークイベントの補助を行った。
- ・「美術館教育」分野ではオンライン対話鑑賞・教員向けオンライン講座・子供／ファミリー向けプログラム等の教育普及に係る事業の補助を行った。
- ・「図書資料」分野では書誌データ登録、カタログ配架作業、展覧会の特集展示準備等の補助を行った。

(イ) 京都国立近代美術館

<キュレーター研修>

以下のとおり3名を受け入れ、所蔵作品展と企画展の展示撤収作業や作品取り扱い、教育普及事業の考え方について等の研修を行った。

- ・令和4年7月19日～7月28日（10日間）金沢卯辰山工芸工房学芸員1名
- ・令和4年10月2日～10月16日（うち11日間）宮崎県立美術館主事1名
- ・令和5年2月7日～2月10日（4日間）総社市文化スポーツ部文化芸術課学芸員1名

<インターンシップ>

令和4年度は、大学院生1名を受け入れ、展覧会に向けた資料整理、データ入力作業や、教育普及事業のサポートや情報発信等を行った。

(ウ) 国立映画アーカイブ

<インターンシップ>

令和4年7月6日から12月24日までの約半年間、映画・映画アーカイブを研究している大学院生1名をインターンとして受け入れ、学芸課全4室で研修を行った。研修では、上映会・展覧会等の実施に関わる業務、映画フィルム及び関係資料の収集・保存・整理に関わる業務などを行った。

<博物館実習>

令和4年8月16日から20日までの5日間、定員の12名を受け入れた。実習内容は、映画アーカイブの概要講義と見学実習、学芸課の映画室、展示・資料室、上映室、教育・発信室の全4室で1日ずつ、映画フィルム及び関係資料の収集・保存・整理、上映会・展覧会・教育普及・広報等の実施に関わる業務を行った。

(ウ) 国立西洋美術館

<キュレーター研修>

4名を受け入れ、研修内容として、企画展展示作業の見学、常設展展示作業の見学、版画素描室撤去及び展示作業の見学、X線による作品調査見学、貸出作品調査の見学、埃払い見学、館内の保存修復、保存科学設備の見学、普及課業務についての聞き取り、及び広報室業務についての聞き取り等を行った。

<インターンシップ>

7名を受け入れ、インターンシップ業務として、国立西洋美術館所蔵作品（絵画・彫刻）の来歴及び展覧会歴の調査、美術史的研究及び関連業務の補佐、国立西洋美術館で実施予定の展覧会の準備、カタログ編集業務等の補佐、教育普及プログラムの企画・実施の補助、資料整理、保存修復室に関連する業務全般（所蔵作品（絵画・彫刻）の保存修復、作品のエックス線写真・赤外線写真の撮影、環境制御（温湿度、紫外線、照度測定等）、総合的有害生物管理業務）の補佐等を行った。

(エ) 国立国際美術館

<キュレーター研修>

3名を受け入れ、以下のとおり実施した。

- ・令和4年5月18（水）から24日（火）まで（うち6日間）、弘前れんが倉庫美術館の学芸員1名を受け入れ、展示室での展覧会撤去作業の立ち会い、展覧会の企画運営及び教育普及についての研修を行った。
- ・令和4年10月2日（日）から8日（土）まで（7日間）、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館の学芸員1名を受け入れ、展示室での展示作業の立ち会い、展覧会の企画運営についての研修を行った。
- ・令和5年2月7日（火）から8日（水）まで（2日間）、鹿児島県霧島アートの森の学芸員1名を受け入れ、作品の管理業務、教育普及プログラム、コレクション形成、展覧会企画・運営等についての研修を行った。

<インターンシップ>

「学芸」3名、「美術館教育」2名、「映像関係」1名、「情報資料」1名を受け入れ、以下のとおり実施した。

- ・「学芸」分野では「感覚の領域 今、「経験する」ということ」展、「すべて未知の世界へ — G U T A I 分化と統合」展、所蔵作品展の運営に関する業務の補助を行った。
- ・「美術館教育」分野では教育普及に係る事業の補助を行った。
- ・「映像関係」分野では「中之島映像劇場」の企画事業の補助を行った。
- ・「情報資料」分野では、主に図書登録から装備、配架作業までの補助を行い、データベースの調査、登録の補助も行った。

(オ) 国立新美術館

<キュレーター研修>

令和4年7月11日から25日までパナソニック汐留美術館の学芸員1名を受け入れ、海外の美術館から作品を借用する展覧会の業務全般について研修を行った。ま

た、令和5年3月16日～3月19日に丸亀市猪熊弦一郎現代美術館の学芸員1名を受け入れ、ワークショップや連続講座の準備・運営等、教育普及事業全般に関する研修を行った。

<インターンシップ>

展覧会、教育普及、広報の3部門で6人を受け入れた。展覧会部門では企画展「李禹煥」カタログの編集及び校正作業等、教育普及部門では建築ツアーやワークショップなどのイベント補助等、広報部門ではSNS投稿案の作成や英訳等の研修を行った。

③ 映画保存のニーズに対応した人材育成

- ・NFAJ&J.S.A. アーカイブセミナー映画表現と音 『マダムと女房』

主催：国立映画アーカイブ、協同組合日本映画・テレビ録音協会

協力：日本大学芸術学部映画学科

内容：デジタルでの映画制作や上映が主流となった現在において、公開当時のオリジナルの映像や音の保存と復元について知見を深め、映画の適正な保存や映画文化の継承をはかることを目的に開催。令和2年度以降、コロナ禍により開催を見送られていたが、今回は、国産トーキー映画の第一弾『マダムと女房』（1931年、五所平之助）をとりあげ、撮影時に使用した機材の特性の観点を交えて映画の音の生成と映画表現について考察した。

- ・映写ワークショップは、会場となる相模原分館映写ホールの天井工事の為、令和4年度は開催を見送った。

(3) 国内外の映画関係団体等との連携等

第5期（令和3年度～令和7年度）中期目標に定める指標	
指標	<ul style="list-style-type: none"> ・映画・映像作品の収集・保管に係る取組状況。（映画フィルム購入本数、映画フィルム寄贈本数、映画フィルム年度末所蔵本数、所蔵フィルム検索システムにおける新規公開件数、所蔵フィルム検索システムにおける累計公開件数） ・国内外の映画関係団体等との連携・調整に係る取組状況。（「全国映画資料館録」更新版を中期目標期間中に刊行する。） <p>以上の指標については、第4期中期目標期間と同程度の水準を維持するものとする。</p>

※令和4年度は「全国映画資料館録」更新版を刊行していない。

① 映画フィルムの収集

	購入本数	購入金額	寄贈本数	年度末所蔵本数	年度末寄託本数
令和4年度	109	125,632,071	387	86,407	19,322
第4期中期目標 期間実績（※）	152	-	970	83,744	-

※購入本数及び寄贈本数は平均値であり、年度末所蔵本数は令和2年度末の数値である。

令和4年度の収集方針

映画を芸術作品のみならず、文化遺産として、あるいは歴史資料として、網羅的に収集することを目標に、日本映画の収集を優先しながら、時代を問わず散逸や劣化、滅失の危険性が高い映画フィルム等及び上映事業や国際交流事業に必要な映画フィルム等の収集を行う。なお、収集にあたっては、自主製作映画等企業の管理下に置かれない映画の収集にも配慮することとし、受贈については、デジタル素材の受入れも継続しながら、映画のデジタル化に伴い散逸の危機に瀕しているフィルム原版の受入れも重点的に実施することとする。映画資料については、日本映画に関わるものを中心に、作品レベルでの網羅性を向上させるとともに、映画史の調査研究に資する幅広い種類の資料の収集を行う。加えて、本年度は特に次の点について留意する。

ア 歴史資料として貴重な無声期の映画作品について、デジタル復元を実施する。

イ 日本映画監督協会の協力を得て実施した国立美術館のクラウドファンディング第3弾「磁気テープの映画遺産を救え！『わが映画人生』デジタルファイル化プロジェクト」の成果を基に、国立映画アーカイブ初の磁気テープコレクションのデジタルファイル化を図る。

ウ 国立映画アーカイブが所蔵する歴史的映像等のデジタル化と配信への取り組みを継続し、サイトの充実を図る。

エ フィルム、デジタルともにオリジナルフォーマットを重視した収集を行う。

特記事項

〈購入〉

上映企画に伴う映画フィルム購入に関しては、「東宝の90年 モダンと革新の映画史」に関連して、『都会の横顔』（1953年）等17作品、21本のフィルムを、また「生誕120年 映画監督山本嘉次郎」に関連して、『東京の休日』等9作品、10本のフィルムと、『標高8125米 マナスルに立つ』（1956年）1作品のデジタル保存用素材を購入することができ、撮影所全盛期の代表的なジャンル映画を多数収蔵してコレクションの欠落を補うことができた。さらに、「日本の女性映画人（1）——無声映画期から1960年代まで」に関連して、『開拓の花嫁』（1943年）等13作品、17本のフィルムと、『村の婦人学級』（1957年）1作品のデジタル上映用及び保存用素材を購入することで、従来の映画史的な記述から漏れがちだった女性映画人が携わった作品を収蔵することができ、新たな映画史を提示するという意味において、国立映画機関として意義のある購入となった。その他、現代日本映画を代表する作家・相米慎二監督の『お引越し』（1990年）について、公開当時の撮影監督とタイミング担当者の協力を得て、再タイミング版のプリントを作製できたことも、非常に意義のある購入だった。

〈受贈〉

映画フィルムの寄贈受け入れ本数は、387本、42件だった。令和2年度から4年度にかけて行った、1980年代と1990年代の日本映画を特集した上映企画がきっかけとなり、独立系映画製作会社から原版の寄贈を受けたことが大きな特徴であり、作品としては『生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言』（1985年）や『あなたがすきです、だいすきです』（1994年）、『第七官界彷徨 尾崎翠を探して』（1998年）などがある。その他にも、故・中沢啓治製作のアニメーション映画『はだしのゲン』（1983年）や横山博人監督の『純』（1980年）、三原光尋監督の『真夏のビタミン』（1994年）など、1980～90年代の日本映画のシーンを形成した自主製作映画についても、原版受贈によりコレクションを築くことができた。1980年代以降の日本映画は、こうした独立系映画製作会社が多数出現して作品製作を行い、現在も著作権を保持しているケースが多いため、このように受贈できる機会はきわめて重要であり、現代日本映画の保存において大きな意義を持っている。映画関連資料については、例年通り映画会社・個人などから多種の資料寄贈を受けている。

② 映画フィルム及び映画関連資料の保管・修復・復元

修理・修復本数
63本（ノイズリダクション等16本、不燃化作業35本、映画フィルム洗浄12本）

特記事項

映画史的に重要な作品を可燃性フィルムあるいは不燃性フィルムから複製し、上映用ならびに保存用素材を作ることができた。可燃性フィルムについては、公開当時の日本語字幕が付いたドイツ映画『アトランティドー熱砂の女王』(1932年)をはじめ、月形龍之介主演作『戦国時代』(1937年)や吉川英治原作『総輯版 天兵童子』(1941年)といった、現在アクセスすることが難しい戦前の日活京都時代劇作品の不燃化を行うことができた。さらに、『続水戸黄門廻国記』(1938年)は、きわめて珍しいことに可燃性オリジナルネガが(オリジナル13巻中3巻のみであるが)残っており、そこから作製したプリントの美麗さから、当時の撮影・現像技術の質の高さを確認することができた。不燃性フィルムもビネガーシンドローム等、状態の悪いものについては複製化による安全な媒体への保存が急がれるが、本年度は『開拓の花嫁』(1943年)16mmプリントや『突貫小僧』(1929年)16mmプリントなど、残存する唯一の版と思われるフィルムから保存用素材と上映用素材を作製することができ、大きな成果を得た。

映画関連資料については、年度ごとに劣化の状況に応じたさまざまな専門家に依頼して修復を行うとともに、アーカイブ用の資料保存ケースを購入して長期保存を図っている。本年度の具体的な案件としては、『エリソー』(1928年)ほか袋一平コレクションの初期ソビエト映画ポスターや戦前・戦後期の日本映画ポスターの修復、戦前期の映画館プログラムや宣伝チラシの脱酸性化作業、また常設展展示品の中で長期展示に対応するための修復を行った。常設展展示品については、中でも『羅生門』のヴェネチア国際映画祭金獅子賞トロフィの国立西洋美術館における修復が特筆される。スタッフによる作業としても、公開・貸出頻度の高いポスターなどへの和紙を用いた簡易修復、脆弱なシナリオ等冊子に対する保存ケースの作成、接着したスチル写真の剥離などの措置を講じている。

③ 映画フィルム及び映画関連資料の貸与等

・映画フィルム

貸出		特別映写観覧		複製利用	
件数	点数	件数	点数	件数	点数
81	166	55	206	41	78

・映画関連資料

貸出		特別観覧	
件数	点数	件数	点数
5	83	50	330

特記事項

映画フィルム等の貸与・特別映写観覧・複製利用の実績数は、ほぼコロナ前の数字に戻りつつある。昨年比では、特に貸与件数が20件、特別映写観覧の上映本数が約80本増加した。海外の貸与先はヨーロッパ・アメリカ・東アジア中心で、半数がFIAF加盟機関の利用であった。ニューヨーク近代美術館「小津を越えて 松竹撮影所の秘宝」、フィルモテカ・エスパニョーラ「日本の最初の超自然的ホラー物語」、韓国映像資料院「放浪者の手帳」等の日本映画をテーマにした特集上映には6-8本フィルムを貸与し、それぞれの企画を支えた。国内はラピュタ阿佐ヶ谷を始めとした都内名画座が案件数としては多いものの、横浜シネマリン、シネ・ヌーヴォ（大

阪)、福岡市総合図書館、神戸映画資料館、山口県情報芸術センター等々全国から貸与依頼が寄せられた。国内外問わず、無声映画の貸出も一定数あり、活弁や伴奏をつけての上映が行われた。

特別映写観覧は引き続き大学の研究試写が突出して多く、番組制作のための参考試写のほか、パッケージ販売を前提とした元素材確認試写も行われた。

複製利用は番組制作のためのフッター利用や、美術館の企画展への映像提供が主であるが、海外案件ではシネマテーク・フランセーズによる4Kデジタル復元のため『コルシカの兄弟』を提供した。また、国立映画アーカイブの配信サイト「関東大震災映像デジタルアーカイブ」掲載作品のフッター利用は10件以上に及んだ。

映画資料の貸与については、日本でも数少ない常設の映画関連展示施設である鎌倉市川喜多映画記念館への貸出が案件の数として目立っているが、本年度は京都国立近代美術館・東京ステーションギャラリー・日本経済新聞社共催の「甲斐荘楠音の全貌 絵画・演劇・映画を越境する個性」展に対する資料30点の貸与、県立神奈川近代文学館の「小津安二郎展」へのポスター貸与も特筆される。資料の特別観覧については、出版社・教育機関・テレビ局などの要望に対し、資料画像の提供や研究者による熟覧などの形で所蔵資料へのアクセスに応じている。

④ 所蔵フィルム検索システムにおける公開実績

映画フィルム (テキストデータ)	令和4年度新規公開実績	累計公開件数
公開実績	169	7,903

⑤ 国内外の映画関係団体等との連携・調整に係る取組状況

展示企画においては、「日本の映画館」で株式会社チネチッタや北九州市松永文庫の協力を得て各地の映画館資料を展示することができた。

映画関連資料については、研究員が北の映像ミュージアムや札幌映像機材博物館、北九州市松永文庫、福岡市総合図書館文学・映像課を訪問するなど、各地の映画資料館・専門図書館・研究機関と映画資料の保存に関する情報の収集や交換を行った。また研究員が文化庁事業「アーカイブ中核拠点形成モデル事業（撮影所等における映画関連の非フィルム資料）」に検討委員として参加、映画資料のアーカイビングについて提言を行った。また、同事業の一環として「全国映画資料アーカイブサミット2023」が1月30日にオンラインで開催され、研究員が主導的な役割を果たした。

⑥ 情報発信、人材育成に係る機能強化

国立映画アーカイブ展示・資料室及び教育・発信室に新たに人員を2名配置し、国立アトリサーチセンター及び国立各美術館との連絡調整及び事業の企画、立案、実施に取り組むべく、令和4年度は基礎的かつ専門的な調査研究に向けた調整・検討を行った。

II 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

1 業務運営の取組

● 一般管理費及び業務経費の削減状況

(単位：千円)

区分	前中期目標期間 最終年度	当中期目標期間	増減率
	令和2年度	令和4年度	
一般管理費物件費及 び業務経費物件費	2,410,288	2,480,769	2.9%

特記事項

当中期目標期間終了年度（令和7年度）において、前中期目標期間の最終年度（令和2年度）と比べて、運営費交付金を充当して行う事業について一般管理費物件費及び業務経費物件費の合計を5%削減することを目標としている。（ただし、美術作品購入費、美術作品修復費及び土地借料等の特殊要因経費（令和3年度以降に既定経費化されたものを含む。）は対象外。）

光熱費の支出増等から、令和4年度の一般管理費物件費及び業務経費物件費の合計は、令和2年度に比し11.4%増加している。

2 組織体制の見直し

独立行政法人の組織ガバナンス強化の観点から、法人経営に係る重要事項を審議する経営会議の設置、審議役の任命及び経営企画室の設置、学芸調整担当の副理事の任命及び学芸調整室の設置、本部専任職員の増員など、本部体制の強化を図った。

また、我が国におけるアート振興の新たな拠点として、法人本部に新たに国立アトリサーチセンターを設置し、国立美術館のナショナルセンターとしての機能強化を図るための組織体制を構築・整備した。

このほか、国際発信拠点としての国立新美術館の機能強化、映画文化振興の中核的拠点としての国立映画アーカイブの体制及び業務拡充に向けた検討を進めた。

3 契約の点検・見直し

(1) 調達等合理化の推進

「独立行政法人における調達等合理化の取組の推進について」（平成27年5月25日総務大臣決定）に基づき、事務・事業の特性を踏まえ、PDCAサイクルにより、公正性・透明性を確保しつつ、自律的かつ継続的に調達等の合理化に取り組むため、令和4年度独立行政法人国立美術館調達等合理化計画を策定した。

① 令和4年度の調達実績

ア 令和4年度の調達全体像

(単位：件、千円)

	令和3年度		令和4年度		比較増△減	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額
競争入札等	(33.2%) 78	(53.0%) 3,802,548	(31.5%) 84	(37.9%) 2,475,028	(7.7%) 6	(△34.7%) △1,327,520
企画競争・ 公募	(17.4%) 41	(10.4%) 747,634	(21.0%) 56	(7.6%) 498,368	(36.6%) 15	(△33.3%) △249,266
競争性のあ る契約（小 計）	(50.6%) 119	(63.4%) 4,550,181	(52.4%) 140	(45.5%) 2,973,396	(17.6%) 21	(△34.7%) △1,576,785

競争性のない随意契約	(49.4%) 116	(36.6%) 2,621,390	(47.6%) 127	(54.5%) 3,554,521	(9.5%) 11	(35.5%) 933,131
合 計	(100.0%) 235	(100.0%) 7,171,571	(100.0%) 267	(100.0%) 6,527,916	(13.6%) 32	(△8.9%) △643,655

(注1) 計数は、それぞれ四捨五入しているため、合計において一致しない場合がある。

(注2) 比較増△減の()書きは、令和4年度の対令和3年度伸率である。

イ 令和4年度の一者応札・応募状況

(単位：件、千円)

		令和3年度		令和4年度		比較増△減	
2者以上	件数	68	(57.1%)	53	(37.9%)	△15	(△22.1%)
	金額	2,102,537	(47.0%)	844,915	(28.3%)	△1,257,622	(△60.0%)
1者以下	件数	51	(42.9%)	87	(62.1%)	36	(70.6%)
	金額	2,447,644	(53.0%)	2,128,481	(71.7%)	△319,163	(△13.1%)
合 計		119	(100.0%)	140	(100.0%)	21	(17.6%)
		4,550,181	(100.0%)	2,973,396	(100.0%)	△1,576,785	(△34.7%)

(注1) 計数は、それぞれ四捨五入しているため、合計において一致しない場合がある。

(注2) 合計欄は、競争契約（一般競争、指名競争、企画競争、公募）を行った計数である。

(注3) 比較増△減の()書きは、令和4年度の対令和3年度伸率である。

② 契約監視委員会の審議状況

監事及び外部有識者で構成される契約監視委員会を2回実施（書面審査1回含む）し、令和4年度調達等合理化計画策定及び令和4年における契約の点検見直しを行ったところ、指摘事項はなかった。

- ・一者応札の検証実施件数：92件

③ 調達等合理化検討チームによる点検

新たに随意契約（少額随契を除く。）を締結することになった案件について、本部事務局長を総括責任者とする調達等合理化検討チームにおいて事前点検（緊急の場合は事後点検）を行い、競争性のない随意契約に関して真にやむを得ないものかの確認を行うことで契約の適正化に努めた。

- ・事前点検：4件

④ 不祥事の発生の未然防止・再発防止のための取組

令和4年度は、本部事務局、東京国立近代美術館、国立工芸館、京都国立近代美術館、国立映画アーカイブ、国立西洋美術館、国立国際美術館及び国立新美術館を対象として、契約方法の妥当性、固定資産等の管理、債権・債務の管理、前年度指摘事項のフォローアップ等について、監査員による内部監査を行った。内部監査の実施により、不適正な会計処理の未然防止と、効率的な取組の情報共有を図り、法人全体の業務効率化に努めた。

また、新規採用者等（有期雇用職員を含む。）を対象とした新人研修において会計に係る研修を実施した。

- ・内部監査実施件数：8件
- ・研修参加者数：81名

(2) 民間委託の推進

① 一般管理部門を含めた組織・業務の見直しと民間委託の推進

次のとおり民間委託による業務の効率化を行い、限られた人員及び予算の中で、効率的な施設設備の維持及び来館者サービスの向上を図った。

- (ア) 会場管理業務、(イ) 設備管理業務、(ウ) 清掃業務、(エ) 保安警備業務、
- (オ) 機械警備業務、(カ) 収入金等集配業務、(キ) レストラン運営業務、
- (ク) アートライブラリー運営業務、(ケ) ミュージアムショップ運営業務、
- (コ) 美術情報システム等運営支援業務、(サ) ホームページサーバ運用管理業務、
- (シ) 展覧会アンケート実施業務、(ス) 省エネルギー対策支援業務、
- (セ) 展覧会情報収集業務、(ソ) 映写等請負業務

② 広報・普及業務の民間委託の推進

次のとおり民間委託を行い業務の効率化を図った。

- (ア) 情報案内業務、(イ) 広報物等発送業務、(ウ) 交通広告等掲載、
- (エ) ホームページ改訂・更新業務、(オ) 特設サイト等、
- (カ) ラジオCM等を利用した総合的な広報宣伝業務、
- (キ) 講堂音響設備オペレーティング業務、(ク) 画像貸出業務

4 共同調達等の取組の推進

周辺機関や法人間で連携し、共同調達を行うことで、契約事務等の効率化を図った。国立西洋美術館は周辺の機関と連携し、電子複写機賃貸借及び保守、コピー用紙及びトイレットペーパー、廃棄物処理、古紙売買契約、トイレ用洗浄・脱臭器具の賃貸借について共同調達を実施した。東京国立近代美術館、国立映画アーカイブ及び国立新美術館はトイレットペーパー、電気の共同調達を実施し、周辺の機関と連携して、コピー用紙の共同調達を実施した。京都国立近代美術館は周辺の機関と連携し、コピー用紙及びトイレットペーパーの共同調達を実施した。国立国際美術館は、周辺の機関と連携し、コピー用紙の共同調達を実施した。

5 給与水準の適正化等

① 人件費決算

決算額 1,083,746 千円 (対令和3年度比較 109.2%)

※人件費は常勤職員を対象とし、退職金、福利厚生費を含まない。

② 給与体系の見直し

国家公務員の給与等を考慮して、平成18年4月から俸給表の水準を全体として平均4.8%引下げるとともに、級の構成の見直し、きめ細かい勤務実績の反映を行うため号俸の4分割を行ったほか、調整手当を廃止し、地域手当を新設するなど、国家公務員の給与構造改革を踏まえた給与体系の見直しを行った。なお、令和4年度においては、国家公務員の給与改定に準拠し、人事院勧告による官民較差等の状況を踏まえ、若年層を中心とした俸給水準の引き上げ及び期末勤勉手当に係る給与改定を実施した。

また、国立美術館の職員が行う職務は、国の行政職俸給表(一)又は研究職俸給表の適用を受けるものと同等の職務であるとみなし、給与についても一般職給与法に準拠した給与制度で支給してきていることを前提に、これらとの比較を行った。

ア 一般職俸給表の適用を受ける職員の給与水準

【ラスパイレス指数(令和4年度実績)】

対国家公務員・・・(年齢勘案) 95.7

(年齢・地域・学歴勘案) 88.1

イ 研究職俸給表の適用を受ける職員の給与水準

【ラスパイレス指数（令和4年度実績）】
対国家公務員・・・（年齢勘案）96.4
（年齢・地域・学歴勘案）94.7

③ 令和4年度の役職員の報酬・給与等について

別紙「独立行政法人国立美術館の役職員の報酬・給与等について」を参照。

6 情報通信技術を活用した業務の効率化

在宅勤務等に対応するため、グループウェア等のクラウド化を進めている。また、法人内各拠点を結んだクラウド型オンライン会議サービス活用を推進し、在宅勤務者や外部関係者とのオンライン会議を積極的に実施し、業務の効率化を図った。

さらに在宅勤務時に館内情報システムを利用するためのリモートアクセスサービスの導入により、在宅勤務の促進を図るとともに、リモートアクセス可能な共用データストレージを導入することで、在宅業務での利便性向上を行った。

そのほか、メール利用等において外部データセンターが提供するサーバ機能により、安全かつ安定した業務運用を実現した。また、法人内ネットワークの回線多重化により、通信障害を回避するようにネットワークを構成した。

また、ウェブサーバーについてはクラウド化を推進し、システムの継続的かつ安定的な運用の基盤を整備した。

Ⅲ 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画等

1 自己収入の確保

入場料収入 727 百万円、公募展事業収入 306 百万円、不動産賃貸収入 132 百万円、その他事業収入 144 百万円等により、1,319 百万円の展示事業等収入を獲得し、予算額として定めた目標値である 1,303 百万円を達成した。外部資金については、本部においてファンドレイジング担当職員の増員による体制整備を行い、法人寄付サイトのリニューアルを実施した。また、企業等からは、周年事業や展覧会開催への支援を獲得したことに加え、国立西洋美術館では企業とオフィシャルパートナーシップ締結を行う等、積極的な働きかけにより外部資金の獲得に努めた。

会費収入及びクラウドファンディングによる寄附金収入の令和4年度における合計額は 68 百万円であり、第5期中期目標期間累積額は 138 百万円である。

（前中期目標期間累積実績額 287 百万円）

2 保有資産の有効利用・処分

保有する資産について、美術館の事業・運営に影響のない範囲で積極的な講堂等の外部貸出やエントランスロビーの活用を努めた。また、保有する資産のうち不要な資産はない。

3 予算

(単位：百万円)

区 分	予算額	決算額	増△減額
収入			
運営費交付金	8,423	8,423	—
展示事業等収入	1,303	1,319	15
施設整備費補助金	400	1,125	725
文化芸術振興費補助金	—	54	54
受託収入	—	202	202
寄附金収入	650	723	73
計	10,776	11,845	1,068
支出			
運営事業費	9,726	9,618	108
人件費	1,264	1,212	52
一般管理費	675	927	△252
事業部門経費	7,787	7,479	308
うち美術振興事業費	3,282	3,077	205
うちナショナルコレクション形成・継承事業費	3,176	3,243	△67
うちナショナルセンター事業費	1,330	1,160	170
施設整備費	400	1,125	△725
文化芸術振興費	—	54	△54
受託事業費	—	202	△202
寄附金事業費	650	477	173
計	10,776	11,475	△698

※金額は単位未満四捨五入のため、合計等が合致しない場合がある。

特記事項

一般管理費については、光熱費の支出増等により、予算に比し252百万円の支出増となり、ナショナルセンター事業費については、国立アトリサーチセンターにおける業務に係る運営費交付金債務の次年度への繰り越し等により170百万円の支出減になっている。

施設整備費補助金は、前年度から繰り越された工事の完了により、予算額より725百万円の支出増となった。

寄附金については、723百万円を獲得し、令和4年度に477百万円を支出した。

4 収支計画

(単位：百万円)

区 分	計画額	決算額	増△減額
費用の部			
経常費用	7,687	7,302	385
人件費	1,175	1,223	△48
一般管理費	655	979	△324
事業部門経費	5,077	4,603	473
うち美術振興事業費	3,260	3,321	△61
うちナショナルコレクション形成・継承事業費	701	437	264
うちナショナルセンター事業費	1,116	846	270
寄附金事業費	650	388	262
減価償却費	130	108	22
収益の部			
経常収益	7,687	7,313	△373
運営費交付金収益	5,604	4,968	△636
展示事業等の収入	1,303	1,319	16
受託収入	—	202	202
寄附金収益	650	388	△262
資産見返負債戻入	130	109	△21
補助金等収益	—	53	53
施設費収益	—	125	125
引当金見返に係る収益	—	150	150
経常損益		11	11
臨時損益		0	0
当期純損益		11	11
前中期目標期間繰越積立金取崩額		27	27
当期総利益		38	38

※金額は単位未満四捨五入のため、合計等が合致しない場合がある。

5 資金計画

(単位：百万円)

区分	計画額	決算額	増△減額
資金支出	10,776	11,444	△668
業務活動による支出	10,291	9,796	495
投資活動による支出	485	1,647	△1,162
財務活動による支出	—	—	—
資金収入	10,776	12,302	1,526
業務活動による収入	10,376	10,623	247
運営費交付金による収入	8,423	8,423	—

展示事業等による収入	1,303	1,275	△28
受託収入	—	156	156
補助金等収入	—	46	46
寄附金収入	650	723	73
投資活動による収入	400	1,680	1,280
施設整備補助金による収入	400	1,680	1,280
資金増減額		859	
資金期首残高		5,623	
資金期末残高		6,481	

※金額は単位未満四捨五入のため、合計等が合致しない場合がある。

6 貸借対照表

(単位：百万円)

資産の部		負債及び純資産の部	
資産の部		負債の部	
I 流動資産	7,264	I 流動負債	7,092
II 固定資産		II 固定負債	1,465
1. 有形固定資産	206,326		
2. 無形固定資産	53	負債合計	8,556
3. その他の固定資産	741		
固定資産合計	207,120	純資産の部	
		I 資本金	81,019
		II 資本剰余金	124,263
		III 利益剰余金	546
		純資産合計	205,828
資産の部 合計	214,384	負債及び純資産の部 合計	214,384

※金額は単位未満四捨五入のため、合計等が合致しない場合がある。

7 短期借入金

実績なし。

8 重要な財産の処分等

実績なし。

9 剰余金

(1) 当期末処分利益の処分計画

(単位：円)

区分	金額
I 当期末処分利益 当期総利益	38,215,444
II 利益処分額 独立行政法人通則法第44条第3項により 主務大臣の承認を受けようとする額	38,215,444

(2) 利益の生じた主な理由

支出の抑制等による。

(3) 目的積立金の使用状況

目的積立金について、令和4年度は以下のとおり使用した。

区 分	金額 (円)	使用内容
前中期目標期間繰越積立金	26,850,000	入館者サービスに係る経費
計	26,850,000	

(4) 積立金（通則法第44条第1項）の状況

(単位：円)

使途の内訳	期首残高	当期増加額	当期減少額	期末残高
積立金	0	121,499,910	0	121,499,910
前中期目標期間繰越積立金	413,616,711	0	26,850,000	386,766,711
目的積立金	0	0	0	0

IV その他主務省令で定める業務運営に関する事項

1 内部統制・ガバナンスの強化

(1) 内部統制の充実・強化

① 理事長がリーダーシップを発揮できる環境の整備

国立美術館が有する美術館施設や運営費交付金等を有効に活用して戦略的、効果的、かつ効率的で適正な管理運営を確保するため、内部統制・ガバナンスの強化に努めている。

理事長の意思決定を補佐するため、理事長及び理事をもって組織する理事会を原則毎月開催し、国立美術館の運営に関する基本方針のほか、中期計画・業務評価・予算・人事等の重要事項を審議した。

本部には、理事が兼任する事務局長を置き、事務局の企画立案機能の充実を図るとともに、各館横断的な調査研究業務及びその他の学芸に係る専門的な重要事項に係る業務を掌理する学芸調整役を配置し、各館が有機的に連携し、効果的・効率的な業務を遂行しうる体制を整備している。令和4年度は、組織ガバナンスの一層の強化を図るため、法人経営に係る重要事項を審議する経営会議の設置、審議役の任命及び経営企画室の設置、学芸調整担当の副理事の任命及び学芸調整室の設置、本部専任職員の増員など、本部の組織体制を強化した。さらに、法人内会議（経営会議、研究系管理職を中心とした学芸課長会議、事務系管理職を中心とした運営管理会議）を通じて、役員及び各館の館長はもとより、法人各職員に対するミッションの周知及び情報共有を図っている。

また、予算配分に関しては、法人全体としての作品購入予算や修復予算、人件費等を本部が一括管理し、戦略的・機動的な執行を図っているほか、令和4年度は新たに理事長裁量経費を計上し、中期目標の変更を踏まえた各館の新たな取組への機動的配分や、各館の自己収入増へのインセンティブとして自己収入実績に応じた再分配など、理事長のリーダーシップによる資源配分の強化を図った。

内部統制に関しては、平成29年度に制定された「独立行政法人国立美術館内部統制規則」に基づき、国立美術館に対する社会的信頼の確保及び国立美術館における内部統制の推進のため、国立美術館内部統制委員会を開催した。本委員会では、内部監査及び監事監査の結果について情報共有と意見交換を行い、内部統制機能の強化に努めた。

さらに、外部の有識者で組織し、国立美術館の管理運営に関する重要事項について理事長の諮問に応じて審議し、理事長に対して助言する独立行政法人国立美術館運営委員会を開催し、令和3年度事業実績並びに、令和4年度事業計画について説明聴取の上、意見交換を行った。

② 組織全体で取り組むべき重要な課題（リスク）の把握

法人内の会議において情報共有及びリスクの把握に努めているほか、法人全体で取り組むべき重要な課題（リスク）に対応するため、法人で取り組むべき重要な課題（リスク）の見直しに着手した。

そのほか、法人の事業継続計画の作成を進めるとともに、外部有識者で構成する運営委員会や外部評価委員会の開催を通じて、外部の視点からのリスクの把握に努め、監事や会計監査人との意見交換を通じて法人運営に影響を及ぼすリスクの把握に努めている。

(2) 情報セキュリティ

情報資産の安全な運用管理実現のために、令和3年度に改定された「政府機関等の情報セキュリティ対策のための統一基準群」に基づき、法人の情報セキュリティ体制の整備を進めるとともに、情報セキュリティ委員会を開催し、国立美術館の情報セキュリティ対策実施状況の把握・情報セキュリティ対策実施計画の協議及び推進を行うなど、情報セキュリティの実現に取り組んだ。

令和4年度は、「政府機関等の情報セキュリティ対策のための統一基準群」への準拠度を把握するため、国立映画アーカイブ及び国立西洋美術館を対象とした情報セキュリティ自己監査を実施した。自己監査の結果については、法人内役職員を対象とした説明会において報告し、現状

の情報セキュリティ対策上の課題等を共有した。加えて、令和3年度に受けた内閣サイバーセキュリティセンターによる情報セキュリティ監査(対象:本部、東京国立近代美術館、国立工芸館、国立国際美術館)について、令和4年度はフォローアップ監査を受け、監査指摘事項に対応するための情報セキュリティ関連規程の整備を進めた。

また、頻発している情報漏えい、情報改ざん等につながる悪意のあるソフトウェアが添付されたメール等への注意喚起等を適時適切に行うとともに、標的型メール攻撃訓練のプラットフォームをクラウド上に設置するなど環境整備を行った。

(3) 内部統制・ガバナンスの強化に係る取組状況の検証

① 監事監査

監事2名が経営会議その他重要な会議に出席するほか、役職員から事業の報告を聴取し、重要な決裁書類等を閲覧し、財務及び業務についての状況を調査している。また、会計監査人から会計監査人の監査方法及びその結果について説明を受け、会計帳簿等の調査を行い、財務諸表、事業報告書及び決算報告書について検討を加え、いずれも適正であることを確認するとともに、業務の執行に関する法令遵守等の状況についても確認している。

令和4年度においては令和4年6月23日に期末監査を実施したほか、各館に対し期中監査を以下のとおり実施した。

令和5年1月18日：国立国際美術館

令和5年1月20日：国立映画アーカイブ、東京国立近代美術館（本館）

令和5年1月23日：国立工芸館

令和5年1月24日：国立西洋美術館、国立新美術館

令和5年1月31日：京都国立近代美術館

なお、監査結果報告については速やかに法人内に周知し、運営改善に生かすとともに、報告書において意見が付された場合には、速やかに対応し、その状況を随時監事に報告している。

このほか、「独立行政法人、特殊法人等監事連絡会」第3部会（書面開催）へ監事2名が参加している。

② 内部監査

本部事務局、東京国立近代美術館、国立工芸館、京都国立近代美術館、国立映画アーカイブ、国立西洋美術館、国立国際美術館及び国立新美術館を対象として、契約方法の妥当性、固定資産等の管理、債権・債務の管理、前年度指摘事項のフォローアップ等について、監査員が以下のとおり実地監査に当たった。

令和4年8月30日：本部事務局、東京国立近代美術館

令和4年8月10日：国立工芸館

令和4年8月23日：京都国立近代美術館

令和4年8月25日：国立映画アーカイブ

令和4年8月3日：国立西洋美術館

令和4年8月24日：国立国際美術館

令和4年8月17日：国立新美術館

なお、監査結果報告については速やかに理事長、監事、理事及び各館長へ周知している。また、監査結果報告書において意見が付された場合には、改善措置を講じている。

③ 外部評価

外部有識者で構成し、国立美術館の単年度ごとの業務の実績に関する評価を行う独立行政法人国立美術館外部評価委員会を2回開催し、令和3年度事業実績について説明聴取の上、審議し外部評価報告書を取りまとめている。外部評価報告書については法人ホームページにて公表している。

2 施設・設備に関する計画

京都国立近代美術館外壁、屋上等雨漏れ対策工事、国立西洋美術館自動火災報知設備更新工事、国立国際美術館雨漏り修繕工事及び国立国際美術館 B3 階展示室空調設備更新工事を竣工した。また、平成 19 年度から継続している国立新美術館の土地購入を、予算措置に応じて行った。

3 人事に関する計画

(1) 職員採用等の状況

令和 4 年度の常勤職員数は 127 名である。令和 4 年度においては、国立アトリサーチセンターの設置に向けた体制整備を図るため、常勤職員の募集・採用を進めた。（令和 4 年度新規採用 25 名）

(職種別人員の増減状況 (過去 5 年分))

(単位：人)

職種	平成 30 年度	令和元年度	令和 2 年度	令和 3 年度	令和 4 年度
定年制研究系職員	56	57	56	54	58
定年制事務系職員	53	57	57	57	63
定年制技能・労務系職員	1	1	1	1	1
指定職相当職員	5	4	5	5	5

また、国立美術館では、継続的な業務の見直しや人員の再配置、平成 23 年度より制度化した任期付き研究員制度等の活用を行っている。

さらに、平成 26 年度に整備した常勤の研究職員及び事務職員に準じた特定有期雇用職員制度(専門的事項の調査研究を行う研究職及び専門的な知識と経験等を有する専門職を外部資金等により採用)を活用し、本部及び各館に必要な人員の配置に努めた。(任期付研究員及び特定有期雇用職員の新規採用 18 名) 特に令和 4 年度においては、国立アトリサーチセンター設置を契機とし、法人全体の体制強化のため、渉外・広報、国際発信・連携、社会連携分野等の専門人材の確保を推進した。有期雇用職員についても、無期雇用への転換など職員の多様化を推進している。

人事・給与制度については、公務員の給与改定に関する取扱いについて(平成 18 年 10 月 17 日閣議決定)に基づき、公務員の例に準じて措置、対処している。また、職員兼業規則を改正し、兼業の許可基準の緩和・明確化を図り、外部人材の登用の柔軟性を高めた。

事務系職員については、法人内各館の異動のほか、文化庁、国立大学法人及び他の独立行政法人との間で定期的な人事交流を行い、組織の効率化と個々の職員の能力の発揮とその向上を考慮して人事配置を行った。また、学芸系職員についても、国立アトリサーチセンター設置を契機に各館から法人本部への異動など法人全体の観点から適正な人事配置に努めた。

(2) 職員の研修等

① 新規採用者・転任者職員研修

主に新規採用者(非常勤職員を含む)・外部機関からの転入者を対象として、新任職員研修をオンライン形式で実施した。(令和 4 年 11 月 21 日～12 月 23 日実施 研修参加者 81 名)

② 職員研修の実施(括弧内は参加人数)

- ・「令和 4 年度ハラスメント研修」(321 人)

このほか、産業医による個別面談により、職員のメンタルヘルスケアを実施した。

③ 外部の研修への派遣（括弧内は参加人数）

ア 本部（事務局、国立アトリサーチセンター）

- ・文化庁主催「令和4年度図書館等職員著作権実務講習会」（2人）
- ・文化庁主催「令和4年度文化財行政講座」（1人）
- ・国立公文書館主催「令和4年度公文書管理研修Ⅰ」（1人）
- ・国立公文書館主催「令和4年度公文書管理研修Ⅱ」（1人）
- ・独立行政法人工業所有権情報・研修館主催「令和4年度（初級）知的財産権研修」（1人）
- ・一般社団法人全国美術館会議主催「第37回学芸員研修会」（1人）

イ 東京国立近代美術館

（本館）

- ・国立公文書館主催「令和4年度公文書管理研修Ⅰ」（3人）
- ・国立公文書館主催「令和4年度公文書管理研修Ⅱ」（2人）
- ・文化庁主催「令和4年度図書館等職員著作権実務講習会」（1人）
- ・九州国立博物館主催「令和4年 IPM セミナー」（2名）
- ・一般社団法人全国美術館会議主催「第37回学芸員研修会」（2人）

ウ 京都国立近代美術館

- ・人事院主催「第58回近畿地区係長研修」（1人）
- ・国立公文書館主催「令和4年度公文書管理研修Ⅰ」（2人）
- ・国立公文書館主催「令和4年度公文書管理研修Ⅱ」（2人）
- ・近畿管区行政評価局主催「情報公開・個人情報保護・公文書管理制度の運用に関する研修会」（3人）
- ・近畿管区行政評価局主催「行政手続・行政不服審査制度の運用に関する研修会」（3人）
- ・文化庁主催「令和4年度図書館等職員著作権実務講習会」（2人）
- ・スマカン株式会社「スマカン Public-人事給与（旧 U-PDS） 初任者研修 2022」（4人）

エ 国立映画アーカイブ

- ・スマカン株式会社主催「スマカン Public-人事給与（旧 U-PDS） 初任者研修 2022」（1人）

オ 国立西洋美術館

- ・国立公文書館主催「令和4年度公文書管理研修Ⅰ」（2人）
- ・国立公文書館主催「令和4年度公文書管理研修Ⅱ」（1人）
- ・国立公文書館主催「令和4年度アーカイブズ研修Ⅰ」（1人）
- ・スマカン株式会社主催「スマカン Public-人事給与（旧 U-PDS） 初任者研修 2022」（1人）
- ・文化庁主催「令和4年度文化財行政講座」（2人）
- ・パナソニック汐留美術館主催「第21回 学芸員照明研究会」（1人）
- ・2022年度東京大学職員階層別研修（係長級（5年経験者））（1人）
- ・一般社団法人全国美術館会議主催「第37回学芸員研修会」（3人）
- ・公益財団法人日本博物館協会主催「第70回全国博物館大会」（2人）

カ 国立国際美術館

- ・人事院主催「第58回近畿地区係長研修」（1人）
- ・国立公文書館主催「令和4年度 公文書管理研修Ⅰ」（3人）
- ・国立公文書館主催「令和4年度 アーカイブズ研修Ⅰ」（1人）

- ・財務省主催「第 60 回政府関係法人会計事務職員研修」(3 人)
- ・大阪労働局主催「公正採用選考人権啓発推進員 新任・基礎研修」(1 人)
- ・公益財団法人日本図書館協会主催「図書館に向けた図書館等公衆送信サービス説明会」(1 人)
- ・スマカン株式会社主催「スマカン Public-人事給与 初任者研修 2022」(1 人)

キ 国立新美術館

- ・国立公文書館主催「令和 4 年度公文書管理研修 I」(1 人)
- ・国立公文書館主催「令和 4 年度公文書管理研修 II」(1 人)
- ・スマカン株式会社主催「スマカン Public-人事給与 (旧 U-PDS) 初任者研修 2022」(2 人)
- ・国立新美術館学芸課研究職員の東京国立近代美術館における研修(2 人)
- ・政策研究大学院公共政策プログラム文化政策コース主催「特別セミナー2022 | 文化を巡る政策最前線 (第 84 回)」(6 人)
- ・九州国立博物館主催「令和 4 年 IPM セミナー」(2 人)
- ・財務省主催「第 60 回政府関係法人会計事務職員研修」(1 人)

4 関連公益法人

該当なし。

5 国立アトリサーチセンターの設置

「アートをつなげる、深める、広げる」をキーワードに、国内外の美術館、研究機関をはじめ社会のさまざまな人々をつなぎ、アート振興の基盤整備および国際発信に寄与するとともに、その持続的な発展を志向する組織として、令和 5 年 3 月 28 日に国立アトリサーチセンターを設置した。

国立アトリサーチセンターにおいては、専門領域の調査研究(リサーチ)に留まらず、わが国の文化芸術振興政策にもとづき、独立行政法人国立美術館のナショナルセンターとしての機能の強化、情報収集と国内外への発信、コレクションの活用促進、人的ネットワークの構築、ラーニングの拡充、アーティストの支援などに取り組み、わが国の美術館活動全体の充実に寄与していく。

別表1 所蔵作品展

館名	開催日数(日)		展示替回数		出品点数	入館者数		満足度	
	実績	年度計画	実績	年度計画		実績	目標	実績	目標
東京国立近代美術館(本館)	266	265	5	5	1,213	250,740	199,000	86.2%	77.4%
国立工芸館	179	178	3	3	376	38,579	27,300	89.5%	
京都国立近代美術館	299	295	5	5	630	128,660	200,000	71.6%	
国立西洋美術館	251	256	3	3	790	462,463	497,500	92.3%	
国立国際美術館	132	189	3	4	220	69,618	137,000	71.0%	
合計	1,127	1,183	19	20	3,229	950,060	1,060,800	82.1%	

※ 「満足度」とは、満足度調査における「良い」以上の回答率を指し、合計欄に記載の値は平均値である。以下同じ。

※ 展示替回数の第5期中期目標数値は4.6回(第4期中期目標期間実績)

別表2 企画展

館名	展覧会名	開催日数		入館者数		満足度		企画観 点	共催者
		実績	目標	実績	目標	実績	目標		
東京国立近代美術館(本館)	没後50年 鏑木清方展	34 (47)	34 (47)	61,750 (75,341)	72,000 (100,000)	93.5%	85.6%	ニ	毎日新聞社、 NHK、NHKプロ モーション
	ゲルハルト・リヒター展	103	102	138,831	69,000	89.0%		イ、ロ、 ハ	朝日新聞社
	大竹伸朗展	80	80	76,470	54,000	86.2%		イ、ロ、 ハ	日本テレビ放 送網
	重要文化財の秘密	14	14 (52)	25,014	19,000 (72,000)	-		イ、ロ、 ニ	毎日新聞社、 日本経済新聞 社
	小計	231	230	302,065	214,000	89.5%			
国立工芸館	未来へつなぐ陶芸—伝統工 芸のチカラ展	66	66	14,533	14,500	87.8%	85.6%	ニ	公益社団法人 日本工芸会、 NHKエンター プライズ中 部、北國新聞 社
	ポケモン×工芸展 美とわ ざの大発見	10	10 (72)	13,188	2,200 (15,800)	-		ハ	NHKエンター プライズ中 部、読売新聞 北陸支社
	小計	76	76	27,721	16,700	87.8%			

京都国立近代美術館	サロン！雅と俗—京の大家 と知られざる大坂画壇	34 (42)	34 (42)	9,996 (11,740)	12,500 (15,500)	87.5%	85.6%	ホ	朝日新聞社
	没後 50 年 鏑木清方展	39	39	72,137	40,000	95.3%		ホ	毎日新聞社、 NHK 京都放送 局、NHK エン タープライズ 近畿
	生誕 100 年 清水九兵衛/ 六兵衛	50	50	8,696	11,000	91.8%		ニ、ホ	京都新聞
	ルートヴィヒ美術館展 20 世紀美術の軌跡—市民が創 った珠玉のコレクション	84	82	44,186	60,000	82.2%		イ、ハ	ルートヴィヒ 美術館、日本 経済新聞社、 テレビ大阪、 BS-TBS、京都 新聞
	開館 60 周年記念 甲斐荘 楠音の全貌—絵画、演劇、 映画を越境する個性	42	42 (50)	18,398	16,000 (20000)	-		ロ、ハ、 ニ、ホ	日本経済新聞 社、京都新聞
	小計	249	247	153,413	139,500	90.8%			
国立西洋美術館	国立西洋美術館リニューア ルオープン記念 自然と人 のダイアログ フリード リヒ、モネ、ゴッホからリ ヒターまで	87	87	221,847	200,000	80.6%	85.6%	イ	読売新聞社、 NHK、NHK プロ モーション
	ピカソとその時代 ベルリ ン国立バルクグリーン美 術館展	90	88	228,580	188,000	90.0%		イ	ベルリン国立 バルクグリュ ーン美術館、 東京新聞、 TBS、共同通 信社
	憧憬の地 ブルターニュ —モネ、ゴッガン、黒田清 輝らが見た異郷	13	12 (76)	26,157	23,000 (153,000)	-		ニ、ホ	TBS、読売新 聞社
	小計	190	187	476,584	411,000	85.4%			
国立国際美術館	感覚の領域 今、「経験す る」ということ	46 (91)	46 (91)	15,478 (28,884)	19,000 (37,000)	80.3%	85.6%	イ、ハ	
	すべて未知の世界へ — G U T A I 分化と統合	63	63	19,307	20,000	79.6%		イ	大阪中之島美 術館、朝日新

									開社、MBS テレビ
	ピカソとその時代 ベルリン国立ベルクグリ ューン美術館展	48	48	66,630	44,000	-			ベルリン国立 ベルクグリ ューン美術館、 産経新聞社、 MBS テレビ、 共同通信社
			(93)		(85,000)				
	小計	157	157	101,415	83,000	80.0%			
国立新美術館	メトロポリタン美術館展 西洋絵画の500年	53	53	208,610	121,000				メトロポリタ ン美術館、日 本経済新聞 社、テレビ東 京、BSテレ ビ東京、 TBS、BS-TBS
			(97)	(97)	(333,669)	(222,000)	91.0%		
	ダミアン・ハースト 桜	47	47	81,532	54,000				カルティエ現 代美術財団
			(73)	(73)	(125,485)	(84,000)	89.7%		
	ワニがまわる タムラサト ル	30	30	37,088	47,000				ハ、ホ
	ルートヴィヒ美術館展 20 世紀美術の軌跡ー市民が創 った珠玉のコレクション	78	78	70,224	172,000	83.8%			ルートヴィヒ 美術館、日本 経済新聞社、 TBS、BS-TBS
								85.6%	
国立新美術館開館15周年 記念 李禹煥	78	78	66,188	57,000	94.7%			朝日新聞社、 独立行政法人 日本芸術文化 振興会、文化 庁	
DOMANI・明日展 2022-23	49	49	22,639	14,000	91.0%			ハ 文化庁	
ルーヴル美術館展 愛を描 く	27	27	128,221	101,000				ルーヴル美術 館、日本テレ ビ放送網、読 売新聞社、BS 日テレ、ニッ ポン放送	
			(91)		(342,000)	-			
小計	362	362	614,502	566,000	91.0%				
合計	1,265	1,259	1,675,700	1,430,200	87.0%				

※ 別表2に記載の「企画観点」は以下のとおり。（別表3及び4についても同様。）

- (イ) 国際的視野に立ち、アジア諸地域を含め海外の主要美術館と連携し、確固たる評価を得ている世界の美術や海外の美術の新たな動向を紹介するとともに、我が国の作家や芸術的動向を海外に紹介し、国際的な美術動向に位置付ける展覧会等に積極的に取り組む。
- (ロ) 展覧会テーマの設定や他の芸術文化との連携による展示方法等について方向性を提示することに取り組む。
- (ハ) メディアアート、アニメ、マンガ、デザイン、建築など我が国が世界から注目される新しい領域の芸術表現を積極的に取り上げ、最先端の現代美術への関心を促す。
- (ニ) 国内の美術館と連携し、我が国に所在するコレクションの積極的活用を図る。
- (ホ) 過去の埋もれていた作家・作品・動向の発見や再評価に取り組み、国際的な美術動向に位置付ける展覧会に積極的に取り組む。

※ 会期が年度をまたぐものは、通期の数値を括弧書きで記載している。以下同じ。

別表3 映画上映会（国立映画アーカイブ）

上映会名	上映日数		上映回数	入館者数		満足度		企画観点	共催者
	実績	目標	実績	実績	目標	実績	目標		
1 1990年代日本映画——躍動する個の時代	24 (54)	24 (54)	54 (114)	8,760 (16,983)	8,000 (17,000)	93.2%	91.5%	ニ	-
2 発掘された映画たち 2022	18	18	38	5,676	5,000	85.7%		ニ	-
3 EU フィルムデイズ 2022	23	23	54	7,388	8,000	96.1%		ホ	駐日欧州 連合代表 部、在日 EU 大使 館・文化 機関
4 東宝の90年 モダンと革新の映画史(1)(2)	96	96	209	26,282	16,000	94.7%		ニ	-
5 NFAJ コレクション 2022 春	9	9	18	1,713	1,000	88.2%		ホ	-
6 生誕120年 映画監督 山本嘉次郎	22	22	47	5,650	5,500	90.0%		ニ	-
7 サイレントシネマ・デイズ 2022	6	6	12	1,217	1,000	100.0%		ニ	-
8 第44回びあフィルムフェスティバル	14	14	43	4,409	2,500	92.7%		ホ	一般社団 法人 PFF、 公益財団 法人川喜 多記念映 画文化財

										団、公益 財団法人 ユニジャ パン
9	長谷川和彦とディレクターズ・カンパニー	6	6	13	1,447	1,000	100.0%		ホ	東京国際映画祭
10	アカデミー・フィルム・アーカイブ 映画コレクション	29	29	63	6,740	7,000	95.5%		ホ	アカデミー・フィルム・アーカイブ
11	日本の女性映画人(1) — 無声映画期から1960年代まで	41	41	88	8,809	7,500	92.9%		ホ	-
合計		288	288	639	78,091	62,500	95.6%			

別表4 展覧会（国立映画アーカイブ）

展覧会名	開催日数		入館者数		満足度		企画観点	共催者
	実績	目標	実績	目標	実績	目標		
1 日本の映画館	80	80	6,639	5,000	90.3%	93.8%	ニ	-
2 脚本家 黒澤明	92	92	5,847	6,000	96.5%		ニ	-
3 ポスターでみる映画史 Part 4 恐怖映画の世界	83	83	7,816	6,500	95.2%		ホ	-
合計	255	255	20,302	17,500	93.8%			

別表5 地方巡回展・巡回上映等

地方巡回展 (企画館：国立国際美術館)	開催館	開催日数	入館者数	満足度調査	
				実績	目標
国立国際美術館コレクション 現代アートの100年	広島県立美術館	51	17,779	77.9%	80.0%
国立国際美術館コレクション 現代アートの100年 ハロー、アート！世界に夢中になる方法	大分県立美術館	71	12,388	83.6%	80.0%
合計		122	30,167	80.8%	
優秀映画鑑賞推進事業 (企画館：国立映画アーカイブ)	会場数	開催日数	入館者数	満足度調査	
				実績	目標
令和4年度優秀映画鑑賞推進事業	108	204	27,011	91.2%	80.0%

巡回上映会・展覧会名 (企画館：国立映画アーカイブ)	会場数	開催日数	入館者数	満足度調査	備考(会場)
こども映画館 スクリーンで見る 日本アニメーション!	5	6	945	-	①高知県立県民文化ホール(オレンジホール・ロビー) ②川崎市アートセンターアルテリオ映像館 ③四万十町窪川四万十会館(シネマ四国) ④兵庫県西宮市立大社小学校校庭 ⑤松山市総合福祉センター
MoMAK Films 2022	1	8	151	100.0%	京都国立近代美術館
第24回 中之島映像劇場「ケアする映画をたどる」	1	2	355	95.3%	国立国際美術館
【磁気テープの映画遺産を救え！ 『わが映画人生』デジタルファイル化プロジェクト】 『わが映画人生』特別上映会 — 映画監督は語る—	1	10	699	-	京都文化博物館
アカデミー・フィルム・アーカイブ 映画コレクション	2	30	1,955	-	①福岡市総合図書館 映像ホール・シネラ②京都文化博物館
MONDO 映画ポスターアートの最前線	1	53	50,364	-	京都国立近代美術館
合計	11	109	54,469	97.7%	

別表6 公募展示室における展覧会毎の入場者数

	タイトル (主催団体名)	会期	年度内		会期全体	
			開催日数 (日)	入館者数 (人)	開催日数 (日)	入館者数 (人)
1	第75回 日本アンデパンダン展 (主催：日本美術会)	令和4年3月23日～ 令和4年4月4日	4	3,343	12	9,402
2	第98回 白日会展 (主催：白日会)	令和4年3月23日～ 令和4年4月4日	4	4,145	12	12,126
3	公募第62回 日本南画院展 (主催：公益社団法人 日本南画院)	令和4年3月23日～ 令和4年4月4日	4	1,335	12	4,397
4	第81回 創元展 (主催：一般社団法人 創元会)	令和4年4月6日～ 令和4年4月18日	12	9,834	12	9,834

	タイトル (主催団体名)	会期	年度内		会期全体	
			開催日数 (日)	入館者数 (人)	開催日数 (日)	入館者数 (人)
5	75周年記念 示現会展 (主催：一般社団法人 示現会)	令和4年4月6日～ 令和4年4月18日	12	12,562	12	12,562
6	第81回 水彩連盟展 (主催：水彩連盟)	令和4年4月6日～ 令和4年4月18日	12	6,840	12	6,840
7	第108回 光風会展 (主催：一般社団法人 光風会)	令和4年4月20日～ 令和4年5月2日	12	12,206	12	12,206
8	第99回 春陽展 (主催：一般社団法人 春陽会)	令和4年4月20日～ 令和4年5月2日	12	16,051	12	16,051
9	第37回 全国公募書道展 (主催：現代日本書家協会)	令和4年4月20日～ 令和4年5月2日	12	2,925	12	2,925
10	第96回 国展 (主催：国画会)	令和4年5月4日～ 令和4年5月16日	12	59,048	12	59,048
11	第44回 日本新工芸展 (主催：公益社団法人 日本新工芸家連盟)	令和4年5月18日～ 令和4年5月29日	11	5,731	11	5,731
12	第117回 太平洋展 (主催：一般社団法人 太平洋美術会)	令和4年5月18日～ 令和4年5月30日	12	11,125	12	11,125
13	74回 三軌展 (主催：三軌会)	令和4年5月18日～ 令和4年5月30日	12	9,108	12	9,108
14	第78回 現展 (主催：現代美術家協会)	令和4年6月1日～ 令和4年6月13日	12	7,431	12	7,431
15	第91回 第一美術展 (主催：第一美術協会)	令和4年6月1日～ 令和4年6月13日	12	11,292	12	11,292
16	第36回 日洋展 (主催：一般社団法人 日洋会)	令和4年6月1日～ 令和4年6月13日	12	12,319	12	12,319
17	第21回 国際公募国際墨画会展 (主催：一般社団法人 国際墨画会)	令和4年6月15日～ 令和4年6月27日	12	9,229	12	9,229
18	第47回 日本自由画壇展 (主催：日本自由画壇)	令和4年6月15日～ 令和4年6月27日	12	6,512	12	6,512
19	第26回 日仏現代国際美術展 (主催：サロン・ブラン美術協会)	令和4年6月15日～ 令和4年6月27日	12	5,257	12	5,257
20	第55回記念 たぶろう展 (主催：たぶろう美術協会)	令和4年6月15日～ 令和4年6月27日	12	4,882	12	4,882
21	第50回 「日本の書展」東京展 (主催：公益財団法人 全国書美術振興会)	令和4年6月16日～ 令和4年6月26日	10	8,263	10	8,263

	タイトル (主催団体名)	会期	年度内		会期全体	
			開催日数 (日)	入館者数 (人)	開催日数 (日)	入館者数 (人)
22	第61回 書象展 (主催：書象会)	令和4年6月16日～ 令和4年6月26日	10	4,966	10	4,966
23	第25回 全国公募 陶芸財団展 (主催：公益財団法人 陶芸文化振興財団)	令和4年6月29日～ 令和4年7月3日	5	1,859	5	1,859
24	公募第37回 日本水墨院展 (主催：日本水墨院)	令和4年6月29日～ 令和4年7月10日	11	5,687	11	5,687
25	第41回 日本教育書道藝術院同人書作 展 (主催：日本教育書道藝術院)	令和4年6月29日～ 令和4年7月10日	11	3,675	11	3,675
26	2022・25th 国際公募アート未来展 (主催：アート未来)	令和4年6月29日～ 令和4年7月11日	12	2,905	12	2,905
27	第61回 蒼騎展 (主催：蒼騎会)	令和4年6月29日～ 令和4年7月11日	12	7,003	12	7,003
28	第49回 日象展 (主催：日本表象美術協会)	令和4年6月29日～ 令和4年7月11日	12	4,152	12	4,152
29	第56回 貞香書展 (主催：貞香会)	令和4年6月29日～ 令和4年7月11日	12	2,930	12	2,930
30	千紫会 公募 万紅展 (主催：千紫会)	令和4年6月30日～ 令和4年7月10日	10	2,979	10	2,979
31	第73回 毎日書道展 (主催：一般財団法人 毎日書道会・毎 日新聞社)	令和4年7月13日～ 令和4年8月7日	23	22,072	23	22,072
32	第23回 高校生国際美術展 (主催：特定非営利活動法人 世界芸術 文化振興協会)	令和4年8月10日～ 令和4年8月21日	11	5,074	11	5,074
33	第69回 新美術展 (主催：一般社団法人 新美術協会)	令和4年8月10日～ 令和4年8月22日	12	3,532	12	3,532
34	全国公募 第5回 日美展 (水墨画部 門・絵画部門) (主催：公益財団法人 国際文化カレッ ジ)	令和4年8月11日～ 令和4年8月20日	9	7,560	9	7,560
35	現代書作家協会展 (主催：現代書作家協会)	令和4年8月11日～ 令和4年8月21日	10	1,795	10	1,795
36	第72回 学展 (主催：日本学生油絵会)	令和4年8月11日～ 令和4年8月21日	10	3,429	10	3,429

	タイトル (主催団体名)	会期	年度内		会期全体	
			開催日数 (日)	入館者数 (人)	開催日数 (日)	入館者数 (人)
37	第23回 日本・フランス現代美術世界展 (主催：JIAS 日本国際美術家協会)	令和4年8月11日～ 令和4年8月21日	10	5,726	10	5,726
38	第38回 読売書法展 東京展 (主催：読売書法会・読売新聞社)	令和4年8月26日～ 令和4年9月4日	9	13,131	9	13,131
39	第106回 二科展 (主催：公益社団法人 二科会)	令和4年9月7日～ 令和4年9月19日	12	52,261	12	52,261
40	第85回 新制作展 (主催：新制作協会)	令和4年9月21日～ 令和4年10月3日	12	37,523	12	37,523
41	第77回 行動展 (主催：行動美術協会)	令和4年9月21日～ 令和4年10月3日	12	14,548	12	14,548
42	第86回 自由美術展 (主催：自由美術協会)	令和4年10月5日～ 令和4年10月17日	12	9,472	12	9,472
43	第68回 一陽展 (主催：一陽会)	令和4年10月5日～ 令和4年10月17日	12	12,213	12	12,213
44	第56回 一期展 (主催：一期会)	令和4年10月5日～ 令和4年10月17日	12	5,025	12	5,025
45	第89回 独立展 (主催：独立美術協会)	令和4年10月19日～ 令和4年10月31日	12	27,967	12	27,967
46	第75回記念 二紀展 (主催：一般社団法人 二紀会)	令和4年10月19日～ 令和4年10月31日	12	20,853	12	20,853
47	第27回 瓦・造形展 (主催：瓦・造形会)	令和4年10月20日～ 令和4年10月31日	11	634	11	634
48	第9回 日展 (主催：公益社団法人 日展)	令和4年11月4日～ 令和4年11月27日	21	77,134	21	77,134
49	JAGDA 国際学生ポスターアワード 2022 (主催：公益社団法人 日本グラフィックデザイン協会)	令和4年11月30日～ 令和4年12月12日	12	8,324	12	8,324
50	第94回 新構造展 (主催：一般社団法人 新構造社)	令和4年11月30日～ 令和4年12月12日	12	7,543	12	7,543
51	第47回 秋耕展 (主催：秋耕会)	令和4年11月30日～ 令和4年12月12日	12	3,219	12	3,219
52	21世紀アートボーダレス展 煌星 (主催：21世紀アートボーダレス展実行委員会)	令和4年12月1日～ 令和4年12月10日	9	10,409	9	10,409
53	第10回 躍動する現代作家展 (主催：空間芸術 TORAM)	令和4年12月1日～ 令和4年12月11日	10	883	10	883

	タイトル (主催団体名)	会期	年度内		会期全体	
			開催日数 (日)	入館者数 (人)	開催日数 (日)	入館者数 (人)
54	ナナ展 (主催：一般社団法人 七草會)	令和4年12月1日～ 令和4年12月12日	11	3,567	11	3,567
55	2022年度 第47回全国伝統的工芸品 公募展 (主催：一般財団法人 伝統的工芸品産 業振興協会)	令和4年12月2日～ 令和4年12月12日	10	6,800	10	6,800
56	第35回記念 国際架橋書展 (主催：特定非営利活動法人 国際架橋 書会)	令和4年12月14日～ 令和4年12月23日	12	1,715	12	1,715
57	第29回 雪舟国際美術協会展 (主催：一般社団法人 雪舟国際美術協 会)	令和4年12月14日～ 令和4年12月25日	11	7,676	11	7,676
58	第47回 土日会展 (主催：土日会)	令和4年12月14日～ 令和4年12月26日	12	3,773	12	3,773
59	Idemitsu Art Award展 2022 (主催：Idemitsu Art Award 事務局・ 出光興産株式会社)	令和4年12月14日～ 令和4年12月26日	12	4,559	12	4,559
60	第40回記念 白峰社書展 (主催：白峰社)	令和4年12月14日～ 令和4年12月26日	12	3,171	12	3,171
61	第51回 公募 全書芸展 (主催：株式会社 全日本書芸文化院)	令和4年12月15日～ 令和4年12月26日	11	4,934	11	4,934
62	第71回 独立書展 (主催：公益財団法人 独立書人団)	令和5年1月12日～ 令和5年1月22日	10	16,363	10	16,363
63	第45回 国際書画展 (主催：国際書画連盟)	令和5年1月25日～ 令和5年1月30日	6	3,414	6	3,414
64	第35回記念 平泉展 ～楽しい手作り ～ (主催：特定非営利活動法人 平泉会)	令和5年1月25日～ 令和5年2月6日	12	6,168	12	6,168
65	第39回 産経国際書展 新春展 (主催：産経国際書会)	令和5年1月25日～ 令和5年2月6日	12	2,967	12	2,967
66	第11回 シャドーボックス展 (主催：シャドーボックス展実行委員 会)	令和5年1月26日～ 令和5年2月4日	9	7,153	9	7,153
67	国際公募展 美は国境を越えて (主催：国際墨友会)	令和5年1月26日～ 令和5年2月6日	11	6,222	11	6,222

	タイトル (主催団体名)	会期	年度内		会期全体	
			開催日数 (日)	入館者数 (人)	開催日数 (日)	入館者数 (人)
68	第4回 和紙ちぎり絵創作展 (主催：株式会社ハクビ 和紙ちぎり絵学院)	令和5年1月26日～ 令和5年2月6日	11	1,348	11	1,348
69	第21回 NAU21世紀美術連立展 (主催：New Artist Unit)	令和5年2月8日～ 令和5年2月19日	11	7,346	11	7,346
70	東京書作展 選抜作家展 2023 (主催：東京書作展)	令和5年2月8日～ 令和5年2月19日	11	3,025	11	3,025
71	第67回 新槐樹社展 (主催：新槐樹社)	令和5年2月8日～ 令和5年2月20日	12	4,758	12	4,758
72	第55回記念 等迦展 (主催：美術団体 等迦会)	令和5年2月8日～ 令和5年2月20日	12	5,731	12	5,731
73	第32回 全日本アートサロン絵画大賞展 (主催：全日本アートサロン絵画大賞展実行委員会)	令和5年2月9日～ 令和5年2月20日	11	3,324	11	3,324
74	第63回 日本書作院展 (主催：日本書作院)	令和5年2月9日～ 令和5年2月20日	11	4,356	11	4,356
75	第48回 あきつ会書道展 (主催：あきつ会)	令和5年2月10日～ 令和5年2月19日	9	3,102	9	3,102
76	第63回 現日春季書展 (主催：現日会)	令和5年2月22日～ 令和5年3月6日	12	3,967	12	3,967
77	2022年度 第46回 東京五美術大学 連合卒業・修了制作展 (主催：東京 五美術大学(多摩美術大学・女子美術 大学・東京造形大学・日本大学芸術学 部・武蔵野美術大学))	令和5年2月25日～ 令和5年3月5日	8	101,881	8	101,881 ※
78	DOUBLE ANNUAL 2023 (主催：京都芸術大学)	令和5年2月25日～ 令和5年3月5日	8	4,175	8	4,175
79	2023 汎美展 (主催：汎美術協会)	令和5年3月8日～ 令和5年3月21日	13	6,570	13	6,570
80	第59回 創玄展 (主催：公益社団法人 創玄書道会)	令和5年3月9日～ 令和5年3月20日	11	20,216	11	20,216
81	第76回 日本アンデパンダン展 (主催：日本美術会)	令和5年3月23日～ 令和5年4月3日	8	7,549	11	10,884
82	第99回 白日会展 (主催：白日会)	令和5年3月23日～ 令和5年4月3日	8	11,754	11	15,843

	タイトル (主催団体名)	会期	年度内		会期全体	
			開催日数 (日)	入館者数 (人)	開催日数 (日)	入館者数 (人)
83	公募第 63 回 日本南画院展 (主催：公益社団法人 日本南画院)	令和 5 年 3 月 23 日～ 令和 5 年 4 月 3 日	8	5,353	11	7,052

※「2022 年度 第 46 回 東京五美術大学 連合卒業・修了制作展」の入館者数は複数の展示室それぞれの入館者数を合計したものである。

別表 7 展覧会毎の批評・レビューの状況 (掲載数及び掲載媒体数)

展覧会名	新聞	その他 (※)	合計
メトロポリタン美術館展 西洋絵画の 500 年	97	15	112
ダミアン・ハースト 桜	32	25	57
ワニがまわる タムラサトル	5	5	10
ルートヴィヒ美術館展 20 世紀美術 の軌跡—市民が創った珠玉のコレクシ ョン	15	9	24
国立新美術館開館 15 周年記念 李禹煥	60	28	88
国立新美術館所蔵資料に見る 1970 年 代の美術— Do it! わたしの日常が美 術になる	0	1	1
NACT View 01 玉山拓郎 Museum Static Lights	1	1	2
合計	210	84	294

※「その他」は雑誌、ウェブ掲載数である。

別表 8 企画展示室における現代作家を採り上げた展覧会の実施回数及び採り上げた作家の人数

展覧会 (回)	8 回	作家 (人)	30 人	
	展覧会名	作家名		会期
1	ダミアン・ハースト 桜	ダミアン・ハースト		令和 4 年 3 月 2 日～5 月 23 日
2	ワニがまわる タムラサトル	タムラサトル		令和 4 年 6 月 15 日～7 月 18 日
3	ルートヴィヒ美術館展 20 世紀美術の軌 跡—市民が創った珠玉のコレクション	ジャスパー・ジョーンズ、クレス・オル デンバーグ、リチャード・エステス、ハ インツ・マック、ギュンター・ユッカ ー、トーマス・ルフ、ゲオルグ・バゼリ ッツ、ウルリーケ・ローゼンバハ、ペー ター・ヘルマン、アンドレア・フレイザ ー、イケムラレイコ、カーチャ・ノヴィ ツコヴァ、マルセル・ローゼンバハ		令和 4 年 6 月 26 日～9 月 26 日

4	国立新美術館開館 15 周年記念 李禹煥	李禹煥	令和 4 年 8 月 10 日～11 月 7 日
5	DOMANI・明日展 2022-23	大崎のぶゆき、谷中佑輔、黒田大スケ、池崎拓也、石塚元太良、近藤聡乃、北川太郎、小金沢健人、丸山直文、伊藤誠	令和 4 年 11 月 19 日～ 令和 5 年 1 月 29 日
6	NACT View 01 玉山拓郎 Museum Static Lights	玉山拓郎	令和 4 年 9 月 14 日～12 月 26 日
7	NACT View 02 築地のほら ねずみつけ	築地のほら	令和 5 年 1 月 12 日～5 月 29 日
8	六本木アートナイト	今井俊介、三原聡一郎	令和 4 年 9 月 14 日～9 月 19 日

別表 9 調査研究一覧

ア 東京国立近代美術館			
(本館)			
	調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関
1	鈴木清方と明治・大正・昭和の日本画	「没後 50 年 鈴木清方展」を開催。	京都国立近代美術館
2	ゲルハルト・リヒターと戦後の抽象絵画	「ゲルハルト・リヒター展」を開催。	豊田市美術館
3	大竹伸朗と戦後文化	「大竹伸朗展」を開催。	愛媛県美術館、富山県美術館
4	日本近代美術史の形成と重要文化財制度	「東京国立近代美術館 70 周年記念展 重要文化財の秘密」を開催。	—
5	ガウディと日本	「ガウディとサグラダ・ファミリア展」を開催。	サグラダファミリア教会
6	棟方志功の展示空間と印刷・映像メディア	「生誕 120 年 棟方志功展 メイキング・オブ・ムナカタ」を開催。	青森県立美術館、富山県美術館
7	「MOMAT コレクション」	所蔵作品展「MOMAT コレクション」を開催。	—
8	「MOMAT コレクション 特集：美術館の春まつり」	「MOMAT コレクション 特集：美術館の春まつり」を開催。	—
9	「MOMAT コレクション 東京国立近代美術館の 70 年」	「MOMAT コレクション 東京国立近代美術館の 70 年」を開催。	—
10	コレクションの画像を用いた来館者用体験機器開発	来館者がコレクションの中から好みの作品を選択すると、関連した「おすすめ作品」が表示される機器を所蔵品ギャラリー内に設置。	株式会社 DNP アートコミュニケーションズ
11	デジタルカメラによる作品撮影及び画像アーカイブ構築のための撮影機材の比較	作品の調査撮影とデータ比較を実施。	西川茂（写真家）
12	速水御舟資料の調査研究	『東京国立近代美術館 研究紀要』第 27 号にて研究成果の一部を発表。 関連資料の収集。	—
13	近代日本絵画における多層構造の活用に関する研究	関連資料の収集。	小林俊介（山形大学）

14	所蔵作品に関する画像・歴史的情報等の公開データの拡充（独立行政法人国立美術館所蔵作品化。総合目録検索システムでの公開を目標に）	国立美術館所蔵作品情報の精緻化と世界標準	—
15	独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システムと、国立国会図書館が運営するジャパンサーチ、文化庁文化遺産オンラインとの連携の継続維持	各種データベースへの元データの提供を実施。	—
16	美術館におけるデジタル・アーカイブの構築	デジタル・コンテンツの整備を行い、将来的なデジタル・アーカイブの構築の準備を進めた。	—
17	児童生徒を対象とする所蔵作品の鑑賞教育の推進	学校等団体向けプログラムの実施。	—
18	企画展示やコレクションを活用してのワークショップ、鑑賞ガイド等の推進	ファミリー向けプログラムの実施、ジュニア・セルフガイド等の発行。	—
19	オンライン会議システム等を利用した対話鑑賞や遠隔授業の開発	一般向けオンライン対話鑑賞プログラムの実施。	—
20	動画配信サービス等を利用した解説ボランティア活動の推進	YouTube チャンネル等における動画配信。	—
21	ビジネスパーソンなど特定の層に向けての鑑賞プログラムの推進	企業向け対話鑑賞プログラムの実施。	三菱総合研究所
22	外国人に向けての英語鑑賞プログラムの推進（オンラインを含む）	英語によるオンラインプログラムの実施。	大高幸（アート・エドゥケーター）
23	藤田嗣治《五人の裸婦》《自画像》の修復、科学調査に伴う1920年代の絵肌研究、並びに《五人の裸婦》来歴調査	小企画「修復の秘密」展にて展示、プロジェクト成果の披露、ならびに研究紀要に修復報告執筆。	共同研究者：修復研究所 21（渡邊郁夫、有村麻里、宮田順一）、林洋子（美術史家、文化庁芸術文化調査官）
24	「1990年代から2000年代のロンドンにおける具象絵画に関する研究」（科研費 若手研究（19K13019） 研究代表者：梶田倫広、令和元年～令和5年	作品及び文献調査、『東京国立近代美術館研究紀要』第27号にて研究成果の一部を発表。	—
(国立工芸館)			
	調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関
1	現代の陶芸家と酒のうつわ	「未来へつなぐ陶芸」展に伴うミュージアムショップでの周知・販売	ジャパングラフトサケカンパニー
2	日本の近・現代陶芸史と伝統工芸	「未来へつなぐ陶芸」展の企画構成、開催、カタログの発行、トークイベント等の開催	パナソニック汐留美術館、山口県立萩美術館・浦上記念館、佐賀県立九州陶磁文化館、MOA美術館、愛知県陶磁美術館、

			茨城県陶芸美術館、兵庫陶芸美術館、日本工芸会
3	国立工芸館と周辺美術館・博物館との連携について	観覧料金の相互割引	石川県立美術館、金沢21世紀美術館、金沢市立中村記念美術館ほか
4	国立工芸館と金沢21世紀美術館のコレクションを活用した連携展覧会	「『ひとがた』をめぐる造形」展の企画構成、開催	金沢21世紀美術館
5	国立工芸館の環境整備	館案内パンフレットの作成	石川県、金沢市
6	児童を対象とする工芸作品の鑑賞教育の推進	セルフガイドの作成	—
7	工芸制作における言語活動の推進について	児童・生徒向けガイドプログラム並びにワークショップの実施	石川県図工・美術教育研究会
8	ポップカルチャーを題材とする伝統的工芸制作について	「ポケモン×工芸展」の企画、校正、開催、解説執筆	—
9	工芸作品の鑑賞における高精細デジタルデータの作成について	2D鑑賞システムの活用	シャープ株式会社、株式会社DNPアートコミュニケーションズ
10	日本の現代工芸の動向	「ジャンルレス工芸」展の企画構成、開催、ミニカタログを発行	—
11	現代アートと現代工芸について	「ジャンルレス工芸」展の企画構成、開催、ミニカタログを発行	—
12	石川の若手工芸家に関する調査研究	「ジャンルレス工芸」展の企画構成、開催、ミニカタログを発行	—
13	美術館の宣伝・広報活動	SNS発信およびそれに伴うフォロワー数の増加	石川県立美術館、石川県立歴史博物館、金沢21世紀美術館、金沢市立中村記念美術館ほか
14	ヨーロッパとアメリカの工芸・デザイン作品に関する調査研究	「工芸館と旅する世界展」の企画構成、開催、リーフレットを発行	—
15	版画とグラフィックデザインの交錯と境界：1950-70年代の日本を中心に（2022年度DNP文化振興財団 グラフィック文化に関する学術研究助成 研究代表者：主任研究員・中尾優衣、令和5年（2年目））	令和5年度開催予定の展覧会にて研究成果の一部を発表予定	—
16	1920-50年代のデザイン／工芸の実践に関する基礎的研究（科研費 基盤C 研究代表者：主任研究員・中尾優衣、令和3年度～令和6年度）	令和5年度開催予定の展覧会にて研究成果の一部を発表予定	—
17	「綾錦」に関する総合的研究（令和2年度ポラ美術振興財団調査研究助成 研究代表者：主任研究員・中尾優衣、令和3年度～令和6年度）	令和4年度に調査報告書を発行し、『東京国立近代美術館研究紀要』第27号にて研究成果の一部を発表	一般財団法人西陣織物館、川島織物文化館

	任研究員・中尾優衣、令和2年度～令和3年度)		
18	松田権六資料の活用について	令和4年度国立工芸館開催の各展覧会にて研究成果の一部を発表	富山大学
19	明治時代の輸出工芸の研究	令和5年度開催予定の展覧会にて研究成果の一部を発表予定	三の丸尚蔵館
20	日本における近代デザインの受容と展開について	令和4年度開催の展覧会『工芸教育の精華—納富介次郎とデザインの思想—』にて研究成果の一部を発表	石川県立歴史博物館ほか
21	美術館における作品情報のデータ化について	令和4年度新規受入作品情報のデータベースへの登録	—
イ 京都国立近代美術館			
	調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関
1	京・大坂（大阪）画壇の作品研究と文化ネットワークに関する考察	展覧会「サロン！雅と俗—京の大家と知られざる大坂画壇」を企画構成、開催、図録を発行	大英博物館、関西大学アジア・オープン・リサーチセンター（KU-ORCAS）、ロンドン大学SOAS
2	映画ポスター・アートの最新状況についての調査研究：オルタナティブ・ポスターを中心に	展覧会「MONDO 映画ポスターアートの最前線」を企画構成、開催	国立映画アーカイブ
3	鏑木清方と明治・大正・昭和の日本画	展覧会「没後50年 鏑木清方展」を企画構成、開催、図録を発行	東京国立近代美術館
4	清水九兵衛（七代清水六兵衛）研究—陶芸と彫刻の相関について	展覧会「生誕100年 清水九兵衛／六兵衛」を企画構成、開催、図録を発行	千葉市美術館
5	近現代美術館コレクションの形成とコレクターの役割について	展覧会「ルートヴィヒ美術館展 20世紀美術の軌跡—市民が創った珠玉のコレクション」を企画構成、開催、図録を発行	国立新美術館、ルートヴィヒ美術館（ケルン）
6	フィンランドにおけるリュイユ織に関する研究	展覧会「リュイユ—フィンランドのテキスタイル：トゥオマス・ソパネン・コレクション」を企画構成、開催、図録を発行	—
7	甲斐庄楠音の絵画・映画・演劇：越境的個性に関する研究	展覧会「甲斐庄楠音の全貌—絵画、演劇、映画を越境する個性」を企画構成、開催、図録を発行	東京ステーションギャラリー、国際日本文化研究センター、神戸大学、東映太秦映画村
8	京都国立近代美術館と「現代美術の動向展」	展覧会「Re:スタートライン 1963—1970/2023 現代美術の動向展シリーズにみる美術館とアーティストの共感関係」の開催に向けて準備を進めた	—

9	走泥社と前衛陶芸の展開	展覧会「走泥社再考 前衛陶芸の生まれた時代」の開催に向けて準備を進めた	岐阜県美術館、岡山県立美術館、菊池寛実記念智美術館
10	明治末から昭和初めにかけての京都の日本画について	展覧会「京都画壇の青春：栖鳳、松園につづく新世代たち」の開催に向けて準備を進めた	—
11	小林正和と1970年代以降のファイバーアートの展開について	展覧会「小林正和とその時代：ファイバー・アート、その向こうへ」の開催に向けて準備を進めた	岡山県立美術館、ギャラリー・ギャラリー
12	富岡鉄斎に関する研究	展覧会「没後100年 富岡鉄斎（仮称）」の開催に向けて準備を進めた	鉄斎美術館、碧南市藤井達吉現代美術館、富山県水墨美術館
13	倉俣史朗のデザインとその思想に関する研究	展覧会「倉俣史朗のデザイン：記憶のなかの小宇宙（仮称）」の開催に向けて準備を進めた	富山県立美術館、世田谷美術館、クラマタデザイン事務所
14	上方文化サロン：人的ネットワークから解き明かす文化創造空間 1780-1880（国際共同研究事業 英国との国際共同研究プログラム（JRP-LEAD with UKRI）研究代表者：大英博物館・矢野明子、立命館大学・赤間亮）	コレクション研究、コレクション展に反映	大英博物館、立命館大学アート・リサーチセンター
15	1990年代以降の日本映画監督	国立映画アーカイブ（NFAJ）との共催による映画上映会「MoMAK Films」を実施	国立映画アーカイブ
16	児童生徒を対象とする鑑賞教育	美術館を活用した学習支援活動の実施など	京都市区画工作教育研究会、京都市立中学校教育研究会美術部会
17	美術館の教育普及活動	展覧会に関連したワークショップの開催	—
18	障害の有無に関わらず享受できるユニバーサルな美術鑑賞プログラム	障害の有無に関わらず享受できるユニバーサルな美術鑑賞プログラムの企画実施など	国立民族学博物館、京都市立芸術大学、京都府立盲学校、京都大学総合博物館、大阪教育大学
19	アーカイブズ資料と文化的精神活動との有機的関連性について	資料収集活動における整備充実に反映	—
20	20世紀後半の現代陶芸の動向についての基礎的研究 （科研費 基盤研究C 研究代表者：宮川智美、令和3年度～令和7年度）	コレクション展に反映	—
21	中近世ドイツ語圏の金工の社会史的研究—W.ヤムニツァーを中心に （科研費 若手研究 研究代表者：村松綾、令和2年度～令和5年度）	熟覧対応に活用	—

ウ 国立映画アーカイブ			
	調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関
1	1990年代の日本映画	特集上映「1990年代日本映画——躍動する個の時代」を企画、開催	—
2	発掘された映画（※）	特集上映「発掘された映画たち 2022」を企画、開催	—
3	東宝映画の歴史	特集上映「東宝の90年 モダンと革新の映画史(1)(2)」を企画、開催	—
4	映画監督山本嘉次郎の映画	特集上映「生誕120年 映画監督 山本嘉次郎」を企画、開催	—
5	外国映画を中心とする無声映画	特集上映「サイレントシネマ・デイズ 2022」を企画、開催	—
6	現代日本映画	特集上映「長谷川和彦とディレクターズ・カンパニー」を企画、開催	東京国際映画祭
7	日本映画における女性の役割の歴史	特集上映「日本の女性映画人(1)——無声映画期から1960年代まで」を企画、開催	—
8	ヨーロッパ諸国の現代映画	特集上映「EUフィルムデーズ 2022」を企画、開催	駐日欧州連合代表部及びEU加盟国大使館・文化機関
9	日本の自主映画	特集上映「第44回びあフィルムフェスティバル 2022」を企画、開催	一般社団法人 PFF、公益財団法人川喜多記念映画文化財団、公益財団法人ユニジャパン
10	アメリカ映画の歴史	特集上映「アカデミー・フィルム・アーカイブ 映画コレクション」を企画、開催	アカデミー・フィルム・アーカイブ
11	映画館と観客からみた日本映画史	展覧会「日本の映画館」を企画、開催	—
12	脚本家としての黒澤明	展覧会「脚本家 黒澤明」を企画、開催	—
13	世界の恐怖映画とそのポスター表現	展覧会「ポスターでみる映画史 Part 4 恐怖映画の世界」を企画、開催	—
14	日本の映画検閲による切除対象映画	ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」記念特別イベント [上映と講演] 「戦前日本の映画検閲—内務省 切除フィルムからみる—」を企画、開催	—
15	1990年代以降の日本映画監督	館外上映「MoMAK Films 2022」を企画、開催	京都国立近代美術館
16	映画の収集のための原版の所在並びに権利帰属等の情報収集と調査	寄贈の可燃性フィルム『狂った一頁』の「発掘された映画たち 2022」での公開	映画製作会社等諸団体
17	国際フィルム・アーカイブ連盟 (FIAF) 会員、その他同種機関、現像所等からの情報に基づく、未発見の日本映画フィルムの所在調査	ユーゴスロヴェンスカ・キノテカで発見された『鬼あざみ』の調査及び「発掘された映画たち 2022」での公開	FIAF 会員、国内外の同種機関、現像所

18	映画フィルムのデジタル化と配信に係る調査 (※)	Web サイト「関東大震災映像デジタルアーカイブ」の更新および「フィルムは記録する—国立映画アーカイブ歴史映像ポータル—」の開設	—
19	映画資料を整理するとともに、その画像をデジタル化し、活用することを目的とする事業 (※)	「デジタル資料閲覧システム」の充実等	—
20	可燃性フィルムを含むフィルム映画及びデジタル映画の長期保管・保存・変換・登録、アナログ及びデジタル技術を活用した復元、及び映写 (※)	『関東大震災大火実況』（1923年/可燃性プリント）などをWEBサイト「関東大震災映像デジタルアーカイブ」で公開	FIAF 会員、国内外の同種機関、映画研究教育機関、美術館・博物館、映像機器メーカー、現像所等
21	子どもを対象にした映画鑑賞プログラム	「子ども映画館 2022年の夏休み★」、「V4 中央ヨーロッパ子ども映画祭」、子ども映画館『スクリーンで見る日本アニメーション!』を企画、開催	—
22	社会人を対象にした映画鑑賞プログラム	優秀映画鑑賞推進事業	—
23	映写技術・復元、フィルム映写をテーマにした教育プログラム	「NFAJ&J.S.A. アーカイブセミナー 映画表現と音『マダムと女房』」を企画、開催	—
24	映画製作専門家のオーラルヒストリー	オンラインサービス「映画製作専門家養成講座」	—
25	日本における70ミリ劇映画文化の受容とそのイメージの復元（科研費 基盤B 研究代表者：富田美香、平成31年度～平成33年度）	フィルム及び文献調査	—
26	塚田嘉信コレクションを起点にした初期映画史の調査（科研費 基盤C 研究代表者：入江良郎、令和2年度～令和4年度）	映画史資料及び文献調査	—
27	カラー映画フィルムのスペクトル分析に基づく忠実な色再現と褪色補正に関する基盤研究（科研費 基盤C 研究代表者：大傍正規、令和3年度～令和5年度）（※）	映画のデジタル活用に関する調査	—
エ 国立西洋美術館			
	調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関
1	新収蔵版画	所蔵作品展小企画「新収蔵版画展」を企画、構成、開催	—
2	エッチングの歴史と表現	所蔵作品展小企画「西洋版画を視る—エッチング：線を極める、線を超える」（第2セッション）および関連対談を企画・構成	—

3	フランス・ロマン主義が描いたシェイクスピアとゲーテ	所蔵作品展小企画「版画で「観る」演劇 フランス・ロマン主義が描いたシェイクスピアとゲーテ」を企画、構成、開催	-
4	国立西洋美術館所蔵の橋本コレクション	所蔵作品小企画「橋本コレクション展 - 指輪よりどりみどり」を企画、構成、開催	-
5	黙せる音楽：バスケニスとハンマースホイ	常設展内小企画「Collection in FOCUS 黙せる音楽：バスケニスとハンマースホイ」開催	-
6	ブランディングとル・コルビュジエ：絵画と建築、美術館	常設展内小企画「Collection in FOCUS ブランディングとル・コルビュジエ：絵画と建築、美術館」開催	-
7	カミーユ・クローデルとオーギュスト・ロダンの彫刻	常設展内小企画「Collection in FOCUS 新収作品：カミーユ・クローデル《ペルセウスとゴルゴーン》」開催	-
8	アクセリ・ガッレン=カッレラと同時代のフランス絵画	常設展内小企画「Collection in FOCUS ガッレン=カッレラと同時代のフランス美術—水の風景」開催	-
9	モリゾと近代都市の女性像	常設展内小企画「Collection in FOCUS モリゾと近代都市の女性像」開催	-
10	視覚障害者との鑑賞プログラムを通じた、諸感覚による美術鑑賞の方法	常設展内小企画「Collection in FOCUS 手で見るかたち」開催	-
11	カルロ・ドルチ《悲しみの聖母》の色材調査	常設展内小企画「Collection in FOCUS カルロ・ドルチ《悲しみの聖母》の色材調査」開催	東京電機大学、筑波大学
12	国立西洋美術館第2代館長・山田智三郎によるコレクション形成の方針転換について（国立西洋美術館におけるオールドマスターのコレクション形成史）	常設展内小企画「Collection in FOCUS 国立西洋美術館第2代館長・山田智三郎によるコレクション形成の方針転換について」開催	-
13	ルカス・クラナハ(父)の板絵作品の樹種特定及び年輪年代学調査、またそれらに立脚した美術史的調査	-	東北大学
14	エッチングの技法に関する調査（ヒアリング）	「西洋版画を視る」のハンズオン及び資料展示、熟覧プログラムでの資料	東京藝術大学
15	美術館教育（鑑賞教育、ワークショップなどの学びを深めるためのアクティビティ、アクセシビリティの向上、教材の開発など）	ファミリープログラム、スクールプログラム、障がい者向けプログラムの実施、セルフガイド等の作成 など	-
16	美術史における自然と人の表象	「国立西洋美術館リニューアル・オープン記念展 自然と人のダイアログ フリードリヒ・モネ、ゴッホからリヒターまで」展を企画構成、開催、図録を発行	フォルクヴァング美術館

17	ピカソを中心とした 20 世紀美術	ベルクグリーン美術館展を企画構成、開催、図録を発行	ベルクグリーン美術館
18	憧憬の地 ブルターニューモネ、ゴッホ、黒田清輝らが見た異郷	「憧憬の地 ブルターニュー」展を企画構成、開催、図録を発行	-
19	美術作品や歴史資料中の膠着材の同定法の構築—方法の改善・発展と実践（科研費 基盤 C 研究代表者：高嶋美穂、令和元年～令和 5 年）	所蔵作品の保存のための基礎調査 作品中の膠着材の同定	筑波大学、（株）ニッピ・バイオマトリックス研究所
20	「装飾的」なる概念を介した 19 世紀末美術と演劇の連動—ナビ派と芸術座を中心に（科研費 研究活動スタート支援 研究代表者：袴田紘代、令和 4 年～令和 5 年）	作品及び文献調査	-
21	松方コレクション来歴研究とデジタル・カタログ・レゾネ試作（科研費 基盤 B 研究代表者：川口雅子、令和 2 年～令和 5 年）	作品及び文献調査	-
オ 国立国際美術館			
	調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関
1	所蔵作品	所蔵作品展の企画構成、作品の収集活動	-
2	現代美術の動向	所蔵作品展の企画構成、作品の収集活動	-
3	コロナ禍における共同キュレーションについての実践	森美術館で開催された「六本木クロッシング 2022 展：往来オーライ！」展の企画協力	森美術館
4	具体美術協会について	大阪中之島美術館との共同企画として、「すべて未知の世界へ—GUTAI 分化と統合」展を実施	大阪中之島美術館
5	20 世紀前半の西洋美術について	国立西洋美術館と共催で「ベルリン国立ベルクグリーン美術館展」を実施	ベルクグリーン美術館（ベルリン）、国立西洋美術館
6	タイムベースド・メディアについて	「第 11 回ソウル・メディアシティ・ビエンナーレ」との協力により同ビエンナーレのアーティスティック・ディレクターによるレクチャーを実施	-
7	1960 年代から 70 年代の関西を中心とした前衛美術、パフォーマンスやエフェメラを中心とした研究	1960 年代～1970 年代に発行された関西・中部圏の展覧会関連エフェメラおよび作家資料の調査を継続	-
8	「もの派」について	基礎資料の編集（電子化）を継続的に実施。また、もの派の作家について他館広報誌等に寄稿	-
9	児童生徒を対象とする鑑賞教育の推進	「大阪府教育センター 令和 4 年度 美術館研修—鑑賞ワークショップ—」ほか、「大阪府公立小・中学校美術教育研究会 中学部冬	大阪府教育センター

		期研修会」、美術館での小学校校内研修や国立国際美術館主催教職員プログラムを実施	
10	美術館教育	幅広い年齢層に向けた鑑賞プログラム、ワークショップ、誰でも参加できるユニバーサルプログラムや各校種を対象としたスクールプログラムを実施	-
11	〈映像芸術の会〉の活動についての調査・上映	〈映像芸術の会〉の機関誌の調査、会に参加した松川八洲雄ら映像作家を調査、第22回中之島映像劇場「映像のアルチザン—松川八洲雄の仕事—」を開催	-
12	所蔵作品に関する歴史的情報等の公開データの拡充、整備	所蔵資料のデジタル化、および所蔵品等公開システム（国立国際美術館デジタルリサーチ）の構築	-
13	近現代アートの保存・継承に向けた収蔵品情報管理・共有システムの構築	所蔵品管理システムの情報収集、収蔵環境調査を実施	昭和女子大学、東京藝術大学
14	現代美術における映像表現	作品及び文献調査	関西大学
15	メル・ボックナーについて	企画展示、作家調査	豊田市美術館
カ 国立新美術館			
	調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関
1	メトロポリタン美術館のヨーロッパ絵画	企画展「メトロポリタン美術館展 西洋絵画の500年」を企画、開催した。	メトロポリタン美術館
2	ダミアン・ハーストについて	企画展「ダミアン・ハースト 桜」を企画、開催した。	カルティエ現代美術財団
3	タムラサトルについて	企画展「ワニがまわる タムラサトル」を企画、開催し、図録に準ずる記録集を刊行した。	-
4	ルートヴィヒ美術館のコレクション形成に果たしたコレクターの役割	企画展「ルートヴィヒ美術館展 20世紀美術の軌跡—市民が創った珠玉のコレクション」を企画、開催し、図録を刊行した。	ルートヴィヒ美術館 京都国立近代美術館
5	李禹煥について	企画展「李禹煥」を企画、開催し、図録を刊行した。	兵庫県立美術館
6	1970年代の日本美術の動向	国立新美術館の所蔵資料を中心に調査を進め、「李禹煥」展と連動する小企画展「国立新美術館所蔵資料に見る1970年代の美術—Do it! わたしの日常が美術になる」を企画、開催した。	-
7	西洋美術における「愛」の表現について	企画展「ルーヴル美術館展 愛を描く」を企画、開催し、図録を刊行した。	ルーヴル美術館

8	海外の現代美術の動向	企画展「蔡國強 宇宙遊 ―＜原初火球＞から始まる」、企画展「遠距離現在」、および将来の展覧会に向けて準備を進めた。	-
9	近代以降の美術における光の表象について	企画展「テート美術館展 光 ― ターナ一、印象派から現代へ」に向けて準備を進めた。	テート美術館
10	イヴ・サンローランについて	企画展「イヴ・サンローラン展」に向けて準備を進めた。	イヴ・サンローラン美術館
11	日本の現代美術の動向	「大巻伸嗣展（仮称）」、「遠距離現在」、小企画シリーズ「NACT View」および将来の展覧会に向けて準備を進めた。	-
12	アンリ・マティスについて	企画展「マティス 自由なフォルム」に向けて準備を進めた。	ニース市マティス美術館
13	パンデミック下で顕在化した現代社会の諸傾向と国内外の美術動向について	企画展「遠距離現在」に向けて準備を進めた。	熊本市現代美術館
14	ヴィセント・ファン・ゴッホとエドヴァルド・ムンク	ゴッホとムンクを中心とする企画展に向けて準備を進めていたが、中止となった。	ムンク美術館
15	日本の古美術と現代美術	日本の古美術から現代の表現までをたどる企画展に向けて準備を進めていたが、国立新美術館での開催は中止となった。	-
16	19世紀のイギリス美術	19世紀イギリス美術の企画展に向けて準備を進めていたが、中止となった。	イギリス市立美術館ネットワーク
17	美術館の教育普及事業（ワークショップ、鑑賞ガイド等）	アーティスト・ワークショップやユースプロジェクト、建築ツアー、学校を対象としたガイダンス等を実施した。企画展に合わせて鑑賞ガイドを作成・配布した。	兵庫県立近代美術館 株式会社日本設計
18	日本の近・現代美術資料	日本の近現代美術に関する資料を収集し、公開に向けた整理を進めた。	-
19	美術資料のアーカイブズ構築における編成記述方法	ISAD(G)の記述標準に基づき、新規で受け入れ下資料群についての記述方法を検討した。	-
20	展覧会情報の収集・提供システム「アートコモンズ」の構築	展覧会情報収集・提供サービス「アートコモンズ」において、日本国内の美術館、画廊等で開催された展覧会の情報を収集し、データベースとして公開した。	-
21	展覧会情報の国立国会図書館「ジャパンサーチ」との連携	「アートコモンズ」に登録された展覧会情報を国立国会図書館「ジャパンサーチ」に提供した。	国立国会図書館

※映画のデジタル保存・活用等に関する調査研究である。

別表 10 展覧会図録における執筆

ア 東京国立近代美術館		
(本館)		
タイトル	執筆者氏名 (職名)	展覧会名
1 「プレイバック「抽象と幻想」展(1953-1954)について」	長名大地 (主任研究員)	MOMAT コレクション小特集プレイバック 「抽象と幻想」展 (1953-1954)
2 「ビルケナウ以降—ゲルハルト・リヒターの〈アブストラクト・ペインティング〉における後期様式について」、作品解説、年譜	梶田倫広 (主任研究員)	ゲルハルト・リヒター
3 「大竹伸朗、四角い倍音」	成相肇 (主任研究員)	大竹伸朗展
4 「重要文化財の「指定」の「秘密」」、「東京国立近代美術館における近代日本美術展をふりかえる」、章解説、作品解説	大谷省吾 (副館長)	東京国立近代美術館 70 周年記念展 重要文化財の秘密
5 作品解説「菱田春草《落葉》」	三輪健仁 (美術課長)	東京国立近代美術館 70 周年記念展 重要文化財の秘密
6 作品解説「岸田劉生《道路と土手と塀(切通之写生)》」、「岸田劉生《麗子微笑》」	長名大地 (主任研究員)	東京国立近代美術館 70 周年記念展 重要文化財の秘密
7 作品解説「菱田春草《王昭君》」、「菱田春草《賢首菩薩》」、「横山大観《生々流転》」、「鏑木清方《築地明石町・新富町・浜町河岸》」、「鏑木清方《三遊亭円朝像》」	鶴見香織 (主任研究員)	東京国立近代美術館 70 周年記念展 重要文化財の秘密
8 作家・作品解説「下村観山《弱法師》」、「竹内栖鳳《班猫》」、「竹内栖鳳《絵になる最初》」、「上村松園《序の舞》」「上村松園《母子》」	中村麗子 (主任研究員)	東京国立近代美術館 70 周年記念展 重要文化財の秘密
9 作品解説「荻原守衛《北條虎吉像》」、「荻原守衛《女》」	成相肇 (主任研究員)	東京国立近代美術館 70 周年記念展 重要文化財の秘密
10 「「唯一」と「複数」—近代の美術/工芸の重要文化財指定をめぐる」、工芸分野の作品解説	花井久穂 (主任研究員)	東京国立近代美術館 70 周年記念展 重要文化財の秘密
11 作品解説	増田玲 (主任研究員)	東京国立近代美術館 70 周年記念展 重要文化財の秘密
12 作家解説「原田直次郎《騎龍観音》」「原田直次郎《靴屋の親爺》」、「高橋由一《美人(花魁)》」	都築千重子 (研究員)	東京国立近代美術館 70 周年記念展 重要文化財の秘密
13 作品解説 5 点「浅井忠《春歌》」「浅井忠《収穫》」、「山本芳翠《裸婦》」、「関根正二《信仰の悲しみ》」、「小出権重《Nの家族》」	横山由季子 (研究員)	東京国立近代美術館 70 周年記念展 重要文化財の秘密

14	作品解説「中村彝《エロシエンコ氏の像》）、 「萬鉄五郎《裸体美人》」	小林紗由里 (任期付研究員)	東京国立近代美術館 70 周年記念展 重要文化 財の秘密
15	「メイキング・オブ・ムナカター棟方志功のつ くり方」、「『The Japan Times』がうつし出す 「世界の棟方」—エリーゼ・グリリの批評と戦 後の日本美術」、コラム「『工藝』と『月刊民 藝』の棟方志功特集」、コラム「戦後の出版ブ ームと棟方の装画本」、コラム「ヌードと公共 空間」、コラム「ヴェネチア・ビエンナーレの 展示戦略」、章解説、作品解説、人名解説	花井久穂 (主任研究員)	生誕 120 年記念棟方志功展 メイキング・オ ブ・ムナカタ
(国立工芸館)			
タイトル		執筆者氏名 (職名)	展覧会名
1	「工芸の○△□×」みどころ解説、章解説、作 品解説、「ノート 北村武資作品を視るため の」	今井陽子 (主任研究員)	工芸の○△□×展
2	「工芸の○△□×」章解説、山田貢ほか2名の 作家解説	横川悠子 (主査)	工芸の○△□×展
3	「工芸の○△□×」章解説、伊砂利彦ほか2名 の作家解説	日南日和 (研究補佐員)	工芸の○△□×展
4	「時代の芸術—ジャンルレスな時代の工芸とデ ザイン」、章解説、見附正康《無題》ほか9点 の作品解説	岩井美恵子 (工芸課長)	ジャンルレス工芸展
5	田口善国《日蝕蒔絵飾箱》ほか1点の作品解説	小島美里 (特定研究員)	ジャンルレス工芸展
6	稲垣稔次郎《木綿地型絵染壁掛 虎》ほか1点 の作品解説	横川悠子 (主査)	ジャンルレス工芸展
7	荒木高子《砂の聖書》ほか1点の作品解説	田中真希代 (研究補佐員)	ジャンルレス工芸展
8	永井一正《Life to Share》ほか1点の作品解説	日南日和 (研究補佐員)	ジャンルレス工芸展
9	「吉田泰一郎」ほか20名の作家・制作解説	今井陽子 (主任研究員)	ポケモン×工芸展
10	「ポケモンと工芸の出会いが生むインパクト」	唐澤昌宏 (工芸館長)	ポケモン×工芸展
11	池田晃将ほか19名の作家略歴並びに参考文献	横川悠子 (主査)	ポケモン×工芸展
12	池田晃将ほか19名の作家略歴並びに参考文献	日南日和 (研究補佐員)	ポケモン×工芸展
イ 京都国立近代美術館			

タイトル		執筆者氏名 (職名)	展覧会名
1	「清方さんと京都」、章解説、出品目録・解説	小倉実子 (主任研究員)	没後 50 年 鎬木清方展
2	「清水洋と七代六兵衛の陶芸」、インタビュー聞き手、章解説	大長智広 (主任研究員)	生誕 100 年 清水九兵衛／六兵衛
3	「近代美術のコレクターと美術館—ハウブリヒ・コレクションとその背景をめぐって」、章解説、コレクター・団体解説、作家・作品解説	池田祐子 (副館長・学芸課長)	ルートヴィヒ美術館展 20 世紀美術の軌跡—市民が創った珠玉のコレクション
4	作家・作品解説	牧口千夏 (主任研究員)	ルートヴィヒ美術館展 20 世紀美術の軌跡—市民が創った珠玉のコレクション
5	「リュイユを現代に繋ぐ視点—トゥオマス・ソパネン・コレクション」	宮川智美 (任期付研究員)	リュイユ—フィンランドのテキスタイル：トゥオマス・ソパネン・コレクション
6	「さまざまに越境し混交する個性 甲斐荘楠音をめぐる現在地」	池田祐子 (副館長・学芸課長)	開館 60 周年記念 甲斐荘楠音の全貌—絵画、演劇、映画を越境する個性
7	「肌香を聞く 甲斐荘楠音スケッチ群の楽しみ」、章解説	梶岡秀一 (主任研究員)	開館 60 周年記念 甲斐荘楠音の全貌—絵画、演劇、映画を越境する個性
ウ 国立西洋美術館			
タイトル		執筆者氏名 (職名)	展覧会名
1	「コレクションへの誘い」	田中正之 (館長)	国立西洋美術館名作選改訂版第 6 版
2	巻頭エッセイ「自然と人のダイアログ」、コラム「自然とアトリエ」「ゴッホと南仏の光」、I～IV 章解説、作家解説（共同執筆）、文献一覧（共同編纂）	陳岡めぐみ (主任研究員)	「国立西洋美術館リニューアル・オープン記念展 自然と人のダイアログ フリードリヒ、モネ、ゴッホからリヒターまで」展
3	「資本新世のランドスケープを超えて——／雲／を見つめ直しながら」、作家解説	新藤淳 (主任研究員)	「国立西洋美術館リニューアル・オープン記念展 自然と人のダイアログ フリードリヒ、モネ、ゴッホからリヒターまで」展
4	北欧の自然とナショナル・アイデンティティ	久保田有寿 (特定研究員)	「国立西洋美術館リニューアル・オープン記念展 自然と人のダイアログ フリードリヒ、モネ、ゴッホからリヒターまで」展
5	作品解説 6 点	田中正之 (館長)	ピカソとその時代 バルリン国立バルクグリーン美術館展
6	作品解説 1 点	渡辺晋輔 (学芸課長)	ピカソとその時代 バルリン国立バルクグリーン美術館展
7	作品解説 13 点	久保田有寿 (特定研究員)	ピカソとその時代 バルリン国立バルクグリーン美術館展
エ 国立国際美術館			

タイトル	執筆者氏名 (職名)	展覧会名
1 国立美術館へようこそ—巡回展の余白に	島敦彦 (館長)	国立国際美術館 現代アートの100年
2 作品解説	中井康之 (研究員)	国立国際美術館 現代アートの100年
3 作品解説	武本彩子 (研究補佐員)	国立国際美術館 現代アートの100年
4 作品解説	藤井泉 (研究補佐員)	国立国際美術館 現代アートの100年
5 作品解説	檜山真有 (研究補佐員)	国立国際美術館 現代アートの100年
6 「すべて未知の世界へ — G U T A I 分化と統合」展 開幕に寄せて	島敦彦 (館長)	すべて未知の世界へ — G U T A I 分化と統合
7 具体をばらばらにまとめる — その「自由」の内実を求めて	福元崇志 (主任研究員)	すべて未知の世界へ — G U T A I 分化と統合
8 作品解説	安來正博 (上席研究員)	ピカソとその時代 ベルリン国立ベルクグリュン美術館展
9 作品解説	橋本梓 (主任研究員)	ピカソとその時代 ベルリン国立ベルクグリュン美術館展
オ 国立新美術館		
タイトル	執筆者氏名 (職名)	展覧会名
1 「ワークショップ まわるワニをつくる」(執筆)	吉澤菜摘 (主任研究員)	「ワニがまわる タムラサトル」
2 インタビュー タムラサトルに聞く(聞き手・執筆) / 対談 タムラサトル×吉田戦車(聞き手)	吉村麗 (特定研究員)	「ワニがまわる タムラサトル」
3 「ペーター&イレーネ・ルートヴィヒの同時代への視点—東西を架橋したコレクター」(執筆) / 章解説4本(執筆) / 作家作品解説36点(執筆)	長屋光枝 (学芸課長)	「ルートヴィヒ美術館展 20世紀美術の軌跡—市民が創った珠玉のコレクション」
4 作家作品解説18点(執筆)	亀田晃輔 (研究補佐員)	「ルートヴィヒ美術館展 20世紀美術の軌跡—市民が創った珠玉のコレクション」
5 作家作品解説19点(執筆) / 「関連年表」(編集)	杉本渚 (研究補佐員)	「ルートヴィヒ美術館展 20世紀美術の軌跡—市民が創った珠玉のコレクション」
6 「〈関係項〉について」(執筆) / 章解説2本(執筆) / 「主要展覧会歴」(編集)	米田尚輝 (主任研究員)	「李禹煥」
7 章解説1本(執筆) / 「主要文献」(編集)	尹志慧 (特定研究員)	「李禹煥」

8	「主要展覧会歴」(編集)	伊藤ちひろ (研究補佐員)	「李禹煥」
9	「両性具有的男性像と思春期の美—フランス美術(1790年代—1820年代)におけるホモエロティックな神話主題の作品をめぐって」(執筆) / 作品解説10点(翻訳)	宮島綾子 (主任研究員)	「ルーヴル美術館展 愛を描く」
10	作品解説6点(翻訳)	亀田晃輔 (研究補佐員)	「ルーヴル美術館展 愛を描く」
11	作品解説7点(翻訳)	杉本渚 (研究補佐員)	「ルーヴル美術館展 愛を描く」

別表 11 研究紀要における執筆

ア 東京国立近代美術館				
(本館)				
	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日
1	北脇昇から黒田秀道への書簡	大谷省吾 (副館長)	東京国立近代美術館研究紀要 第27号	R5.3.31
2	「資料紹介 速水御舟日記(1933年)」	鶴見香織 (主任研究員)	『東京国立近代美術館紀要』27号	R5.3.31
3	「リネッタ・イアドム=ボアキエの黒い絵画」	梶田倫広 (主任研究員)	『東京国立近代美術館 研究紀要』第27号	R5.3.31
4	「藤田嗣治《五人の裸婦》《自画像》の科学調査と修復から—1920年代の藤田の絵肌の検証を中心に」	都築千重子 (研究員)	『東京国立近代美術館研究紀要』第27号	R5.3.31
5	ピエール・ボナール《プロヴァンス風景》(1932年)をめぐる覚書	横山由季子 (研究員)	『東京国立近代美術館 研究紀要』第27号	R5.3.31
6	「女性写真家の不在をめぐって—「New Japanese Photography」展における議論の再考」	小林紗由里 (任期付研究員)	『東京国立近代美術館研究紀要』第27号	R5.3.31
7	作品研究: ソル・ルウィット 《ウォール・ドロ—イング#769 黒い壁を覆う幅36インチ(90cm)のグリッド。角や辺から発する円弧、直線、非直線から二種類を体系的に使った組み合わせ全部。》(1994)—「線と円弧」の探求	小川綾子 (研究補佐員)	『東京国立近代美術館 研究紀要』第27号	R5.3.31
(国立工芸館)				

	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日
1	「『綾錦』の制作工程に関する一試論：模写図が木版画になるまで」	中尾優衣 (主任研究員)	『東京国立近代美術館研究紀要』 第 27 号	R5. 3. 31
イ 国立西洋美術館				
	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日
1	カラヴァッジョの《キリストの埋葬》に見られる古典的性格	渡辺晋輔 (学芸課長)	『国立西洋美術館研究紀要』 No. 27	R5. 3. 31
2	松方コレクションとパリの画商—INHA 所蔵のレオンス・ベネディット資料の紹介 (1)	陳岡めぐみ (主任研究員)	『国立西洋美術館研究紀要』 No. 27	R5. 3. 31
3	Beyond a patron's wife: Exploring the friendship between John Everett Millais and Martha Combe	浅野菜緒子 (特定研究員)	『国立西洋美術館研究紀要』 No. 27	R5. 3. 31
ウ 国立新美術館				
	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日
1	美術資料をめぐる回想：高木啓太郎氏（株式会社高木社長、元 ICA, Nagoya オーナー）に聞く	伊村靖子 (主任研究員)	『国立新美術館研究紀要』第 8 号	R4. 12. 10
2	「職員向け連続レクチャーについての記録」（抄録作成）	山田由佳子 (主任研究員)	『国立新美術館研究紀要』第 8 号	R4. 12. 10
3	「職員向け連続レクチャーについての記録」（抄録作成）	吉澤菜摘 (主任研究員)	『国立新美術館研究紀要』第 8 号	R4. 12. 10
4	「職員向け連続レクチャーについての記録」（抄録作成）	杉本雅晃 (事務補佐員)	『国立新美術館研究紀要』第 8 号	R4. 12. 10

別表 12 館ニュースにおける執筆

ア 東京国立近代美術館				
(本館)				
	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日
1	「新しいコレクション 川俣正《TETRAHOUSE PROJECT PLAN 6》1983 年」	三輪健仁 (美術課長)	『現代の眼』637 号	R5. 3. 31
2	「資料紹介 #3 山田正亮関係資料」	長名大地 (主任研究員)	『現代の眼』637 号	R5. 3. 31
3	「カタログトーク#2 大竹伸朗展」	長名大地 (主任研究員)	『現代の眼』637 号	R5. 3. 31
4	「研究員の本棚 #3 展覧会を作ること：美術館をめぐる人とコレクション」	長名大地 (主任研究員)	『現代の眼』637 号	R5. 3. 31

5	「新しいコレクション 竹内栖鳳《日稼》」	鶴見香織 (主任研究員)	『現代の眼』637号	R5.3.31
6	「新しいコレクション 辻晋堂《詩人(大伴家持試作)》」	成相肇 (主任研究員)	『現代の眼』637号	R5.3.31
7	「東近美の門をくぐるのはだれか——イサム・ノグチ《門》について」	成相肇 (主任研究員)	『現代の眼』637号	R5.3.31
8	「カタログトーク#2 「大竹伸朗展」	成相肇 (主任研究員)	『現代の眼』637号	R5.3.31
9	「資料紹介#2 『PLUSONE OFFSIDE』」	赤松千佳 (研究補佐員)	『現代の眼』637号	R5.3.31
10	「オンラインプログラムの取り組み「夏休み!こども美術館オンライン」	藤田百合 (特定研究員)	『現代の眼』637号	R5.3.31
(国立工芸館)				
	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日
1	マルテル坂本牧子「伝統工芸のある未来」後記	唐澤昌宏 (工芸館長)	現代の眼 637号	R5.3.31
2	土屋順紀「特別陳列 北村武資に寄せて」後記	今井陽子 (主任研究員)	現代の眼 637号	R5.3.31
3	「ようこそ!『工芸トークオンライン』へ—見る力に気づくためのプロセス」	今井陽子 (主任研究員)	現代の眼 637号	R5.3.31
4	「新しいコレクション 北大路魯山人《紅白椿鉢》」	高橋佑香子 (客員研究員)	現代の眼 637号	R5.3.31
5	「新しいコレクション 和田的《白器 ダイ/台》」	田中真希代 (研究補佐員)	現代の眼 637号	R5.3.31
イ 京都国立近代美術館				
	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日
1	「新収蔵品紹介 小出檜重筆《裸女結髪》1927年(昭和2)」	梶岡秀一 (主任研究員)	『京都国立近代美術館ニュース 視る』523号	R5.1.18
ウ 国立映画アーカイブ				
	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月
1	デジタル修復のある問題 映画の量と原版の質	岡島尚志 (館長)	『NFAJ ニュースレター』第16号	R4.4.1
2	「見ることへの力 清水宏『明日は日本晴れ』について」	大澤浄 (主任研究員)	『NFAJ ニュースレター』第16号	R4.4.1
3	甦る「闇夜」の世界—『狂った一頁』[染色版]の同定と復元をめぐる	大傍正規 (主任研究員)	『NFAJ ニュースレター』第16号	R4.4.1

4	ピーター・ボグダノヴィッチという「映画史」	岡島尚志 (館長)	『NFAJ ニューズレター』第17号	R4.7.1
5	世界のフィルムアーカイブ探訪コロナ禍における KOFA の試み	岡島尚志 (館長)	『NFAJ ニューズレター』第18号	R4.10.1
6	日本における女性映画人の歴史を掘り起こす——1960年代以前の女性スタッフ人名録の試み	森宗厚子 (特定研究員)	『NFAJ ニューズレター』第18号	R4.10.1
7	『カリガリ博士』、その原題の謎 “Kabinett” と “Cabinet”	岡島尚志 (館長)	『NFAJ ニューズレター』第19号	R5.1.1
8	「長谷川和彦とディレクターズ・カンパニー」トークイベント	中西香南子 (特定研究員)	『NFAJ ニューズレター』第19号	R5.1.1
9	「映画の色はおそろしい 『回路』の銀残しを復元する」(連載 フィルムアーカイブの諸問題 第114回)	西川亜希 (特定研究員)	『NFAJ ニューズレター』第19号	R5.1.1
エ 国立西洋美術館				
	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日
1	版画で「観る」演劇 フランス・ロマン主義が描いたシェイクスピアとゲーテ	浅野菜緒子 (特定研究員)	『国立西洋美術館ニュース：ZEPHYROS』第85号	R4.9.26
2	2020-21年度新規収蔵作品より 2020年度収蔵 ジョン・エヴァレット・ミレイ《狼の巣穴》	陳岡めぐみ (主任研究員)	『国立西洋美術館ニュース：ZEPHYROS』第85号	R4.9.26
3	2020-21年度新規収蔵作品より 2021年度収蔵 アクセリ・ガッレン=カッレラ《ケイテレ湖》	久保田有寿 (特定研究員)	『国立西洋美術館ニュース：ZEPHYROS』第85号	R4.9.26
4	常設展「コレクション・イン・フォーカス」について	川瀬佑介 (主任研究員)	『国立西洋美術館ニュース：ZEPHYROS』第85号	R4.9.26
5	(株)ニッピ、(一財)日本皮革研究所との共同研究により開発した「コラーゲン由来材料の動物種を判定する方法」が特許(特許第7080034号)を取得しました	高嶋美穂 (特定研究員)	『国立西洋美術館ニュース：ZEPHYROS』第85号	R4.9.26
6	憧憬の地 ブルターニュ —モネ、ゴーガン、黒田清輝らが見た異郷	袴田紘代 (主任研究員)	『国立西洋美術館ニュース：ZEPHYROS』第86号	R5.2.17
7	橋本コレクション展—指輪よりどりみどり	飯塚隆 (主任研究員)	『国立西洋美術館ニュース：ZEPHYROS』第86号	R5.2.17
8	2022年度新規収蔵作品より ホアキン・ソローリャ《水飲み壺》	川瀬佑介 (主任研究員)	『国立西洋美術館ニュース：ZEPHYROS』第86号	R5.2.17

9	2022年度新規収蔵作品より アウグスト・ストリンドベリ《インフェルノ（地獄）》	久保田有寿 (特定研究員)	『国立西洋美術館ニュース：ZEPHYROS』 第86号	R5.2.17
10	学校プログラム—休館期間とその後	松尾由子 (特定研究員) 長谷川暢子 (研究補佐員)	『国立西洋美術館ニュース：ZEPHYROS』 第86号	R5.2.17
オ 国立国際美術館				
	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日
1	「館蔵品紹介：館勝生《December 30.2008》」	福元崇志 (主任研究員)	『国立国際美術館ニュース』245号	R4.6.1
2	「美術館が創り出せる場」	藤吉祐子 (主任研究員)	『国立国際美術館ニュース』246号	R4.8.1
3	「館蔵品紹介：チョン・ソジョン《最後の喜び》」	馬定延 (客員研究員)	『国立国際美術館ニュース』246号	R4.8.1
4	「館蔵品紹介：ロバート・ゴーパー《無題》」	植松由佳 (学芸課長)	『国立国際美術館ニュース』247号	R4.11.1
5	「所蔵作家インタビュー 須田 悦弘」	—	『国立国際美術館ニュース』248号	R5.2.1
6	「オンラインクーリエで作品を見守る—コロナ後の美術作品の貸出」	小川絢子 (主任研究員)	『国立国際美術館ニュース』248号	R5.2.1
7	「館蔵品紹介：オノ・ヨーコ《忘れなさい》」	橋本梓 (主任研究員)	『国立国際美術館ニュース』248号	R5.2.1

別表 13 館外の学術雑誌、学会等における調査研究成果の発信

ア 東京国立近代美術館						
(本館)						
学会等発表						
	タイトル	学会等名	発表者氏名 (職名)	日付	場所	聴講者数 (人)
1	対談	映画「見えるもの、その先にヒルマ・アフ・クリントの世界」トークショー	三輪健仁 (美術課長)	R4.4.29	ユーロスペース	オンライン
2	講演「フィードバック：中谷芙二子の思考と表現について」	「霧は生きている—中谷芙二子、中谷宇吉郎、岩波映画」	三輪健仁 (美術課長)	R4.7.30	ゲーテ・インスティテュート	30
3	発表「映像と彫刻」	わからない彫刻公開研究会3—彫刻を考える1 インスタレーション/レディ・メイド/映像と彫刻	三輪健仁 (美術課長)	R4.9.20	武蔵野美術大学	40
4	鼎談「Open Storage 2022 ゲストトーク」	「Open Storage 2022」関連プログラム	三輪健仁 (美術課長)	R4.10.15	MASK (一般財団法人 おおさか創造千島財団)	40
5	対談	「小林耕平 テレポーテーション」(黒部市美術館)に関する対談	三輪健仁 (美術課長)	R4.10.27	富山大学高岡キャンパス講堂	40
6			長名大地	R4.8.15	オンライン	15

	「展覧会資料と展覧会：「抽象と幻想」展（国立近代美術館、1953-1954）の再構成を通して」	シュルレアリスム美術を考える会	（主任研究員）			
7	「プレイバック「抽象と幻想」展（1953-1954）ができるまで」	MOMAT コレクション展小特集「プレイバック「抽象と幻想」展（1953-1954）」講演会	長名大地 （主任研究員）	R5. 1. 28	東京国立近代美術館講堂	40
8	「齋藤隆三と横山大観、菱田春草」	[再興院展の立役者 齋藤隆三]講演会	鶴見香織 （主任研究員）	R4. 10. 30	茨城県天心記念五浦美術館	50
9	「点ではなくて線で見えるおさらい日本近現代美術史」	美術 Academy&School「点ではなくて線で見える おさらい日本近現代美術史」	成相肇 （主任研究員）	8 回開催	美術 Academy&School	112
10	「都市とアート（なかよくけんかしな）」	YAU CLASS「都市とアート（なかよくけんかしな）」	成相肇 （主任研究員）	R4. 5. 25	YAU〈有楽町アートアーバニズム〉 STUDIO	25
11	「砂と創造力」	鳥取大学「鳥取砂丘学」	成相肇 （主任研究員）	R4. 5. 31	鳥取大学	40
12	「美術館学芸員がいま相談したいこと」	「開館記念ラウンドテーブル」／大阪中之島美術館公式 YouTube	成相肇 （主任研究員）	R4. 8. 29	大阪中之島美術館公式 YouTube	オンライン
13	「アーティスト・プレゼンテーション（モデレーター）」	第4回文化庁現代アートワークショップ	成相肇 （主任研究員）	R4. 9. 23	愛知県美術館	現地47、オンライン68
14	「作品の公共性について」	「文化芸術における SDGs のためのファシリテーター育成事業」プログラム「災害と文化芸術」講座	成相肇 （主任研究員）	R4. 12. 11	東京大学大学院 情報学環・学際情報学府	20
15	「縄文土器論とは何だったか」	「岡本太郎を深掘りする—オンライン講座」	成相肇 （主任研究員）	R4. 12. 25	朝日カルチャーセンター（オンライン）	12
16	「日本のアート振興のこれから：5カ年を振り返り今後を考える」	「文化庁アートプラットフォームシンポジウム」	成相肇 （主任研究員）	R5. 2. 23	国立新美術館	107
17	民藝運動とミュージアムの思想	シンポジウム「デザインミュージアムのヴィジョン」主催：神奈川大学人文学研究所（共同研究グループ「観光と美術」企画）、共催：デザイン史学研究会	花井久穂 （主任研究員）	R4. 7. 9	神奈川大学みなとみらいキャンパス米田吉盛記念講堂	76
18	板谷波山とアール・ヌーヴォー、実験場としての石川県立工業学校	石川の歴史遺産セミナー『近代石川の工芸教育』	花井久穂 （主任研究員）	R4. 8. 7	石川県立歴史博物館	—
19	板谷波山の過渡期を凝視する	UTAC 筑波大学アート・コレクション 石井コレクション公開研究会 板谷波山 主催：筑波大学芸術系 協力 筑波大学芸術学美術史学会	花井久穂 （主任研究員）	R4. 10. 22	筑波大学 5C 棟 5C216 教室	—
20	「学芸員のライトモチーフ 「民藝の100年」展の前と後・企画展の裏テーマ」	武蔵野美術大学 学芸員課程 特別授業 2022	花井久穂 （主任研究員）	R4. 11. 17	武蔵野美術大学（オンライン）	—
21	美術館コレクションの構築：東京都写真美術館／東京国立近代美術館	日比谷 OKUROJI PHOTO FAIR 2022	増田玲 （主任研究員）	R4. 10. 10	日比谷 OKUROJI	30
22	「アート講座 ゲルハルト・リヒター展によせて Part.2 《ビルケナウ以前、以後》」	ファッションビジネス学会 +10Y 研究部会	梶田倫広 （主任研究員）	R4. 8. 4	オンライン	30

23	「ゲルハルト・リヒター、リアルとは？」	アートト	梶田倫広 (主任研究員)	R4. 8. 21	アートト	20
24	「ゲルハルト・リヒター展ができるまで」	浄土複合ライティング・スクール	梶田倫広 (主任研究員)	R4. 9. 17	オンライン	20
25	「ゲルハルト・リヒター：トラウマとしての絵画」	ART TRACE	梶田倫広 (主任研究員)	R4. 9. 25	オンライン	30
26	「2022 美術特別講座」	日本大学芸術学部	梶田倫広 (主任研究員)	R4. 11. 1	オンライン	50
27	「大陸のあいだ、国のあいだを表象する絵画について」	アートト	梶田倫広 (主任研究員)	R4. 11. 6	アートト	20
28	「ゲルハルト・リヒターの後期様式について」	早稲田大学美術史学会	梶田倫広 (主任研究員)	R4. 11. 26	早稲田大学	30
29	ゲスト講師	東京造形大学「アーティストとしての実践学」	横山由季子 (研究員)	R4. 6. 21	東京造形大学	60
30	対談	「石田尚志「庭の外」」(タカ・イシイギャラリー)に関する対談	横山由季子 (研究員)	R4. 11. 5	タカ・イシイギャラリー	20
31	対談「アーティストのための近代美術史」	BUG Art Award 関連トークイベント	横山由季子 (研究員)	R5. 3. 24	BUG (リクルートのアートセンター) およびオンライン	50
32	対談	「袴田京太郎 複製する(陰の彫刻)」(富山県美術館)関連トークイベント	横山由季子 (研究員)	R5. 3. 26	富山県美術館	20
33	「「かたち」を起点としたアートエデュケーション開発の研究ー自然や絵画の中のかたちでフロッタージュ創作ー」	日本 STEM 教育学会 第5 回年次大会	藤田百合 (特定研究員)	R4. 9. 23	オンライン開催	—

雑誌等論文掲載

学術書籍、研究報告書等の発行

	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日
1	「The love-hate relationship between art and facsimile in the 1960s and 1970s」	成相肇 (主任研究員)	『Japanese Photography Magazines, 1880s to 1980s』GOLIGA	R4. 12. 28
2	「作品による作品の解釈と、富井さんの半分の作品の話(近藤さんと富井さんの展示から教わったこと)」	成相肇 (主任研究員)	『あっけなく明快な絵画と彫刻 続いているわからない絵画と彫刻』HeHe	R5. 3. 19
3	「宇佐美圭司の絵画以外」	成相肇 (主任研究員)	『宇佐美圭司 よみがえる画家 記録集』東京大学	R5. 3. 30
4	「失踪者のための回路ー都市における失踪表現の変遷」	小林紗由里 (任期付研究員)	『東京時影 1964/202X』	R5. 3. 31

【査読無し】論文掲載(学術誌、美術雑誌、館外の展覧会図録等)

	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日
1	松本竣介《コップを持つ子ども》について	大谷省吾 (副館長)	『生誕 110 年 松本竣介展』図録(ときの忘れもの)	R4. 5. 10
2	二つの、もしくは三つの前衛美術ー北脇昇の軌跡が問いかけるもの	大谷省吾 (副館長)	『美術フォーラム 21』45 号	R4. 6. 30
3	米倉壽仁がダリの影響を受けたその背景についてー日本におけるシュルレアリスム絵画の受容と展開	大谷省吾 (副館長)	『米倉壽仁展』図録(山梨県立美術館)	R4. 11. 19
4	東京国立近代美術館 70 周年記念展 重要文化財の秘密	大谷省吾 (副館長)	『新美術新聞』1626 号(美術年鑑社)	R5. 3. 11
5	東京国立近代美術館 70 周年記念展 重要文化財の秘密なぜ、これが重要文化財なのか	大谷省吾 (副館長)	『美術の窓』474 号(生活の友社)	R5. 3. 20
6		三輪健仁		R4. 12

	《テレポーテーション》におけるテレポーテーションについて	(美術課長)	『小林耕平 テレポーテーション』展図録(黒部市美術館)	
7	「清方という画家、『築地明石町』から」	鶴見香織 (主任研究員)	『別冊太陽 日本のこころ 298 鑄木清方 市井に生きたまなざし』(平凡社)	R4. 4. 18
8	「うずきをみる」	成相肇 (主任研究員)	『形 forme』327号、日本文教出版	R4. 6. 30
9	「「消し」としての「塗り」をみる」	成相肇 (主任研究員)	『形 forme』328号、日本文教出版	R4. 10. 27
10	「生まれた面をみる」	成相肇 (主任研究員)	『形 forme』329号、日本文教出版	R5. 2. 24
11	実験場としての石川県工業学校一板谷波山とアール・ヌーヴォー	花井久穂 (主任研究員)	『工芸教育の精華—納富介次郎とデザインの思想—』展図録(石川県立歴史博物館)	R4. 7. 23
12	六十三年後の「近代美術館」と「民藝館」—東京国立近代美術館「柳宗悦没後六〇年記念展 藝の100」のこと	花井久穂 (主任研究員)	『民藝』837号	R4. 9. 1
13	うごく「民藝」—ミュージアム・出版・生産・流通から景観保存まで	花井久穂 (主任研究員)	『近代画説』第31号	R4. 12. 17
14	写真集『ヨーロッパ・静止した時間』の成立とその背景	増田玲 (主任研究員)	奈良原一高『ヨーロッパ・静止した時間』復刊ドットコム	R4. 10. 1
15	「サイズとスケールについて」	梶田倫広 (主任研究員)	『Idemitsu Art Award』	R4. 12. 1
16	「赤羽史亮」	梶田倫広 (主任研究員)	『VOCA展 2023』	R4
17	「展覧会の「成功」とは—ゲルハルト・リヒター展から」	梶田倫広 (主任研究員)	『美術史研究』第60冊	R4
18	「自画像としての室内画 ボナールの絵画における親密さ」	横山由季子 (研究員)	『部屋のみる夢—ボナールからティルマンズ、現代の作家まで』ポーラ美術館	R5. 3. 28
その他の発表(機関紙、雑誌、新聞、ウェブサイト等)				
	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日
1	コロナ禍と博物館法改正の後で	大谷省吾 (副館長)	『ZENBI 全国美術館会議機関誌』22号(全国美術館会議)	R4. 9. 1
2	東京国立近代美術館70周年記念展 重要文化財の秘密 問題作が傑作へ 変遷たどる	大谷省吾 (副館長)	『毎日新聞』	R5. 3. 15
3	東京国立近代美術館70周年記念展 重要文化財の秘密	大谷省吾 (副館長)	『産経新聞デジタル』	R5. 3. 16
4	重要文化財の秘密(1) 川合玉堂「行く春」	大谷省吾 (副館長)	『毎日新聞』	R5. 3. 18
5	東京国立近代美術館副館長が明かす「重要文化財の秘密」の裏側	大谷省吾 (副館長)	『美術手帖(ウェブ版)』	R5. 3. 19
6	重要文化財の秘密(2) 初代宮川香山「褐釉蟹貼付台付鉢」	大谷省吾 (副館長)	『毎日新聞』	R5. 3. 20
7	重要文化財の秘密(3) 和田三造「南風」	大谷省吾 (副館長)	『毎日新聞』	R5. 3. 24
8	重要文化財の秘密(4) 萬鉄五郎「裸体美人」	大谷省吾 (副館長)	『毎日新聞』	R5. 3. 25
9	重要文化財の秘密(5) 岸田劉生「麗子微笑」	大谷省吾 (副館長)	『毎日新聞』	R5. 3. 27
10	重要文化財の秘密(6) 菱田春草「黒き猫」	大谷省吾 (副館長)	『毎日新聞』	R5. 3. 31
11	《対談》〈絵画の素〉の味	三輪健仁 (美術課長)	『読書』2023年2月号(岩波書店)	R5. 2. 1
12	「第61回情報・資料研究部会会合報告」	長名大地 (主任研究員)	全国美術館会議ホームページ	R5. 3. 3

13	「近代美術の眼：北代省三《モバイル・オブジェ（回転する面による構成）》」	長名大地 (主任研究員)	読売新聞（都内版）	R4. 12. 10
14	「『幻』の名作、鏑木清方《築地明石町》が収蔵品となったことで、何度でも出会える名作へ」	鶴見香織 (主任研究員)	アートアジェンダ (FAITH)	R4. 4. 14
15	「鏑木清方 端午の節句」	鶴見香織 (主任研究員)	『小原流插花』（小原流）	R4. 4. 1
16	「全国ミュージアム紀行 東京国立近代美術館」	鶴見香織 (主任研究員)	『東美ニュース』（東京美術倶楽部）	R4. 9. 1
17	「大竹伸朗 あらゆる「もの」は画材である」	成相肇 (主任研究員)	『ONBEAT』vol. 17、ONBEAT編集委員会	R4. 10. 21
18	「近代美術の眼 イサムノグチ《門》」	成相肇 (主任研究員)	『読売新聞』都内版	R5. 2. 11
19	「近代美術の眼 荻原守衛《坑夫》」	成相肇 (主任研究員)	『読売新聞』都内版	R5. 3. 11
20	「今様耽奇合戦」	成相肇 (主任研究員)	中村裕太・ユアサエボン「耽奇展覧」（ギャラリー小柳）	R5. 2. 26
21	特別対談「窯業と芸術、それから民藝の話」	花井久穂（主任研究員）・梅津庸一（美術家）	WEB マガジン『Fan Palace』Dec 01, 2022	R4. 12. 1
22	「新しい生活様式で挑んだ“リヒター峰”。「ゲルハルト・リヒター」展の担当研究員・梶田倫広語る」	梶田倫広 (主任研究員)	『美術手帖』（ウェブ）	R4. 8. 11
23	「視野を広げて-美術館に来る人から来られない人まで-」	細谷美宇 (研究員)	教育美術 960 号	R4. 6. 1
24	「教美アートギャラリー」東京国立近代美術館	細谷美宇 (研究員)	教育美術 961 号	R4. 7. 1
25	15センチメートルの奥行き	横山由季子 (研究員)	「MONONCLE」FeN works 合同会社	R4. 4. 19
26	「近代美術の眼 小倉遊亀《浴女 その二》」	横山由季子 (研究員)	『読売新聞』都内版	R4. 6. 11
27	「私たち」の美術史に出会える展覧会。町田市立国際版画美術館「彫刻刀が刻む戦後日本」展レビュー	横山由季子 (研究員)	「Tokyo Art Beat」株式会社アートビート	R4. 6. 17
28	Rei Naito, Toeko Tatsuno, Toshi Maruki, Setsuko Migishi	横山由季子 (研究員)	「AWARE(Archives of Women Artists, Research and Exhibitions)」	R5. 2. 20
29	「既知と未知、生と死を往還するアルベルト・ジャコメッティの彫刻」	横山由季子 (研究員)	『美術手帖』（ウェブ）	R5. 3. 31
30	近代美術の眼「荒川修作《アルファベットの皮膚 No. 3》」	小川綾子 (研究補佐員)	読売新聞 都内版	R4. 9. 10
31	近代美術の眼「瑛九《午後(虫の不在)》」	小林紗由里 (任期付研究員)	『読売新聞』（都内版）	R4. 7. 8
32	「つながりを示すラインの軌跡：「宇佐美圭司 よみがえる画家」展」	小林紗由里 (任期付研究員)	『Phantastopia』	R4. 3. 8
33	「近代美術の眼 アルフレッド・スティーグリッツ《ジョージア・オキーフ：ある肖像》」／『読売新聞』（都内版、2022年11月12日）	堀田文 (研究補佐員)	読売新聞 朝刊（都内版）	R4. 11. 12

(国立工芸館)

学会等発表

	タイトル	学会等名	発表者氏名 (職名)	日付	場所	聴講者数 (人)
1	全国・いしかわの工芸講演会「伝統陶芸の未来」	兼六園周辺文化の森等活性化推進実行委員会	唐澤昌宏 (工芸館長)	R4. 5. 8	石川県立美術館ホール	107
2	トークイベント	「平井智 陶・在伊50年 出会い」展	唐澤昌宏 (工芸館長)	R4. 5. 13	和光ホール	40
3	「国立工芸館の活動とコレクション」	新聖町公民館講演会	唐澤昌宏 (工芸館長)	R4. 5. 19	国立工芸館多目的室	30

4	「未来へつなぐ陶芸—伝統工芸のチカラ展 その見どころ」	日本陶磁協会オンラインやきもの講座	唐澤昌宏 (工芸館長)	R4. 5. 22	Zoom オンライン	40
5	「石川の工芸と国立工芸館のコレクション」	石川県県民中学校	唐澤昌宏 (工芸館長)	R5. 5. 28	石川県立生涯学習センター	70
6	基調講演「伝統陶芸の歩みと展開、そして未来」	東洋陶磁学会第49回大会	唐澤昌宏 (工芸館長)	R4. 6. 11	石川県立美術館ホール	45+80 (オンライン)
7	記念講演会「日本の伝統陶芸の歴史的展開と未来への展望」	未来へつなぐ陶芸展実行委員会	唐澤昌宏 (工芸館長)	R4. 7. 2	山口県立萩美術館・浦上記念館講座室	30
8	対談 鈴木藏×唐澤昌宏	とうしん美濃陶芸美術館	唐澤昌宏 (工芸館長)	R4. 7. 9	とうしん学びの丘“エール”ホール	80
9	「『ひとがた』をめぐる造形」	金沢21世紀美術館	唐澤昌宏 (工芸館長)	R4. 7. 23	金沢21世紀美術館レクチャールーム	70
10	「『ひとがた』をめぐる造形」	金沢21世紀美術館友の会おしゃべりツアー	唐澤昌宏 (工芸館長)	R4. 7. 30	金沢21世紀美術館第6展示室	16
11	対談「非対称性へのまなざし」	未来へつなぐ陶芸展実行委員会	唐澤昌宏 (工芸館長)	R4. 8. 6	山口県立萩美術館・浦上記念館講座室	42+43 (サテライト会場)
12	記念講演会「日本の伝統陶芸のあゆみと未来」	佐賀県立九州陶磁文化館	唐澤昌宏 (工芸館長)	R4. 10. 1	佐賀県立九州陶磁文化館	50
13	クタニズムシンポジウム「九谷焼についてお話ししよう」	クタニズム実行委員会	唐澤昌宏 (工芸館長)	R4. 10. 16	根上総合文化会館 音楽ホール「タント」	250
14	特別講演「近代工芸と茶の湯のうつわ」	百工茶会実行委員会	唐澤昌宏 (工芸館長)	R4. 11. 2	しいのき迎賓館2階	84
15	鼎談 アートトーク・セッション「北の美の行方」	第64回北海道文化集会	唐澤昌宏 (工芸館長)	R4. 11. 6	北海道立近代美術館・講堂	103
16	講演会「石川の工芸と国立美術館のコレクション」	調停協会連合会	唐澤昌宏 (工芸館長)	R4. 11. 11	ホテル金沢	135
17	トークセッション「これからの工芸を想像する」	第5回金沢・世界工芸トリエンナーレ イベント「金沢・世界工芸都市会議」	唐澤昌宏 (工芸館長)	R4. 11. 13	金沢21世紀美術館 シアター21	65
18	「作家の言葉から『工芸』を考える」	日本工芸会東日本支部北海道研究会創設40周年記念特別企画	唐澤昌宏 (工芸館長)	R4. 11. 23	札幌三越 本館4階 ライラックルーム	60
19	講演会「国立工芸館とそのコレクション—陶芸を中心に—」	NPO法人やきもの文化芸術振興協会	唐澤昌宏 (工芸館長)	R5. 1. 28	愛知県陶磁美術館地下1階講堂	39
20	茶の湯文化にふれる市民講座「近・現代工芸と茶の湯のうつわ」	表千家同門会石川支部	唐澤昌宏 (工芸館長)	R5. 3. 5	金沢ニューグランドホテル銀扇の間	99
21	全国・いしかわの工芸講演会「工芸作品を作ること」	兼六園周辺文化の森等活性化推進実行委員会	岩井美恵子 (工芸課長)	R4. 11. 5	国立工芸館多目的室	40
22	全国・いしかわの工芸講演会「食とうつわ」	兼六園周辺文化の森等活性化推進実行委員会	岩井美恵子 (工芸課長)	R5. 1. 29	国立工芸館多目的室	40
23	こどもと挑む工芸のラディカル〜国立工芸館の鑑賞プログラム〜	石川図工美術教育研究会	今井陽子 (主任研究員)	R4. 11. 18	能美市辰口福祉会館	89

雑誌等論文掲載				
学術書籍、研究報告書等の発行				
	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日
1	「ひとがた」をめぐる造形	唐澤昌宏 (工芸館長)	『陶説』829	R4. 7. 1
2	『綾錦』に関する総合的研究 調査報告書	中尾優衣 (主任研究員)		R4. 6. 30
【査読無し】論文掲載(学術誌、美術雑誌、館外の展覧会図録等)				
	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日
1	想いを表現するー田中佐次郎の「茶堦」	唐澤昌宏 (工芸館長)	『唐津 窯焼き一千回記念 田中佐次郎展』図録	R4. 4. 27
2	唐津とともに生きるー安永頼山の作陶	唐澤昌宏 (工芸館長)	『唐津 安永頼山展』図録	R4. 6. 8
3	山岸一男の漆芸ー沈金・漆象嵌・螺鈿ーにみる現在性	唐澤昌宏 (工芸館長)	『彫りを彩るー人間国宝 山岸一男の世界』展図録	R4. 9. 17
4	理想のやきものへの挑戦ー津金日人夢の「青瓷」	唐澤昌宏 (工芸館長)	『ー青瓷ー津金日人夢展』図録	R5. 3. 29
5	金沢・世界工芸トリエンナーレが映し出すもの	唐澤昌宏 (工芸館長)	『金沢・世界工芸コンペティション2022』図録	R5. 3. 31
6	工芸が想像するもの	唐澤昌宏 (工芸館長)	『金沢・世界工芸コンペティション2022』図録	R5. 3. 31
その他の発表(機関紙、雑誌、新聞、ウェブサイト等)				
	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日
1	「[工芸館の窓から] 『伝統』 創造的試みの連続」	唐澤昌宏 (工芸館長)	『読売新聞』(石川県版) 朝刊	R4. 5. 14
2	アートダイアリー 092「未来へつなぐ陶芸ー伝統工芸のチカラ展」	唐澤昌宏 (工芸館長)	『文化庁広報誌 ぶんかる』(文化庁) (Web)	R. 4. 5. 25
3	「『奥川真以子陶磁展ー彩磁と錆地ー』に寄せて」	唐澤昌宏 (工芸館長)	『奥川真以子陶磁展ー彩磁と錆地ー』リーフレット	R4. 9. 7
4	「『十月日本祭』の20周年に寄せて」	唐澤昌宏 (工芸館長)	『日本の足跡展 20周年十月日本祭』図録	R4. 10. 8
5	「藤寄一正さんの『木漆工芸展』に寄せて」	唐澤昌宏 (工芸館長)	『藤寄一正 木漆工芸展』リーフレット	R4. 10. 12
6	工芸公募展レポート「2022 金沢・世界工芸コンペティション」	唐澤昌宏 (工芸館長)	『炎芸術』No. 152 2022 冬	R4. 11. 1
7	「技と想いを育む『卯辰山 WORKS』」	唐澤昌宏 (工芸館長)	『KOGEI3 2022 卯辰山 WORKS プロジェクト』(公益財団法人 金沢芸術創造財団 金沢卯辰山工芸工房)	R4. 12. 21
8	「『素材+技術+プロセス』が生み出すものー『工芸的造形』の実践(抜粋)」	唐澤昌宏 (工芸館長)	『橋本真之論集成 工芸批評の時代』	R5. 2. 27
9	「第69回日本伝統工芸展を通して考えたこと」	唐澤昌宏 (工芸館長)	『公益社団法人 日本工芸会 会報』147号(日本工芸会)	R5. 3. 15
10	坪井明日香さんを偲んで	唐澤昌宏 (工芸館長)	『2022 女流陶芸』展図録(女流陶芸)	R5. 3. 30
11	「[工芸館の窓から] ジャンル越え広がる表現」	岩井美恵子 (工芸課長)	『読売新聞』(石川県版) 朝刊	R4. 10. 8
12	「[工芸館の窓から] 近隣美術館と連携 視野に」	岩井美恵子 (工芸課長)	『読売新聞』(石川県版) 朝刊	R4. 12. 10
13	「卯辰山が発信する工芸」	岩井美恵子 (工芸課長)	『KOGEI3 2022 卯辰山 WORKS プロジェクト』(公益財団法人 金沢芸術創造財団 金沢卯辰山工芸工房)	R4. 12. 21
14	「石川の絢爛豪華な工芸文化」	岩井美恵子 (工芸課長)	『KOGEI Art Fair Kanazawa 2022』(縁煌)	R4. 12. 8

15	「博物館鑑賞のススメ 04 国立工芸館」	岩井美恵子 (工芸課長)	宗桂会だより [デコラシオン]	R4. 6. 30
16	「呉のまちにアートを アートのまち『金沢』から学ぶ」	岩井美恵子 (工芸課長)	KREEBAN 10月号	R4. 9. 25
17	「[工芸館の窓から] 気軽に親しむ工芸の魅力」	今井陽子 (主任研究員)	『読売新聞』(石川県版) 朝刊	R4. 7. 9
18	「[工芸館の窓から] 織物 形が生む多彩な表情」	今井陽子 (主任研究員)	『読売新聞』(石川県版) 朝刊	R4. 8. 13
19	「土、金属、炎に収集、知恵、技——意外な共通点が生む化学反応」	今井陽子 (主任研究員)	『公明新聞』	R5. 3. 22
20	「糸の芸術 しびれる黄色」	今井陽子 (主任研究員)	『読売新聞』(石川県版) 朝刊	R5. 3. 24
21	「工業と工芸の間に一受け継いでいく〈揺らぎ〉と〈誠実さ〉」	中尾優衣 (主任研究員)	『MMA fragments 02: TILE』	R4. 秋号
22	「[工芸館の窓から] 旅へいざなう海外作品」	中尾優衣 (主任研究員)	『読売新聞』(石川県版) 朝刊	R5. 2. 11
23	「[工芸館の窓から] 人形 素材や形態幅広く」	小島美里 (特定研究員)	『読売新聞』(石川県版) 朝刊	R4. 11. 12
24	「[工芸館の窓から] 魅力引き出すケースと照明」	小島美里 (特定研究員)	『読売新聞』(石川県版) 朝刊	R5. 3. 11

イ 京都国立近代美術館

学会等発表

	タイトル	学会等名	発表者氏名 (職名)	日付	場所	聴講者数 (人)
1	Nationalmuseum für Moderne Kunst in Tokyo und Kyoto: Geschichte, Profil und Kontext des Kunstmuseums in Japan	“Session Guest Country Japan”、5. Schweizerischer Kongress für Kunstgeschichte / Vereinigung der Kunsthistorikerinnen und Kunsthistoriker in der Schweiz und Universität Zürich	池田祐子 (副館長・学芸課長)	R4. 6. 22	チューリヒ大学	約 50
2	担当研究員によるクロストーク「展覧会が社会を開く—コレクターたちが見た時代の記録と提言—」	国立新美術館、日本経済新聞社	池田祐子 (副館長・学芸課長)	R4. 7. 23	国立新美術館	約 70
3	改良服 (Reformkleid) と女性たち—シャネル以前の試みとその拡がり	豊田市美術館	池田祐子 (副館長・学芸課長)	R4. 8. 21	豊田市美術館	約 170
4	三浦篤 (東京大学大学院教授) 氏講演会「今、ジャポニスム (研究) を考える」コメンテーター	ジャポニスム学会	池田祐子 (副館長・学芸課長)	R4. 10. 15	オンライン開催	約 100
5	「美人画と近代の乙女」	福井県立美術館	梶岡秀一 (主任研究員)	R4. 6. 4	福井県立美術館	45
6	「明治の東西美術文化交流 久松定謨と黒田清輝を中心に」	愛媛県美術館	梶岡秀一 (主任研究員)	R4. 12. 3	愛媛県美術館	32
7	「明治の風景を外から見る/外へ見せる」	長野県立美術館	梶岡秀一 (主任研究員)	R5. 3. 12	長野県立美術館	23
8	対談 秋山陽×大長智広	秋山陽-Far Calls and Textures-	大長智広 (主任研究員)	R4. 5. 21	アートコートギャラリー	40
9	第 69 回日本伝統工芸展 陶芸 講評会	日本工芸会 陶芸部会	大長智広 (主任研究員)	R4. 9. 21	オンライン	100
10		泉屋博古館	平井啓修	R4. 4. 17	泉屋博古館	33

	「『サロン!展』からみた住友コレクションの文人画」		(主任研究員)			
11	「サロン!展にみる大坂(大阪)画壇研究の可能性」	関西大学芸術学美術史研究会	平井啓修 (主任研究員)	R4. 11. 6	オンライン	18
12	座談会「これからの大阪画壇」	大阪美術倶楽部	平井啓修 (主任研究員)	R5. 2. 25	大阪美術倶楽部	140
13	「視覚支援学校の絵画鑑賞とその教材等についての一考察」	日本特殊教育学会 第60回大会	松山沙樹 (研究員)	R4. 9. 17	つくば国際会議場	約100
14	シンポジウム「絵にさわる～視覚障害児者のための絵画鑑賞モデルの構築に向けて～」	日本特殊教育学会 第60回大会	松山沙樹 (研究員)	R4. 9. 19	つくば国際会議場 大会議室 101	15
15	「障害のある方と協働した鑑賞プログラムづくりから考える美術館のこれから」	全日本博物館学会行事「博物館のこれからを考えるー現場の視点と共にー」	松山沙樹 (研究員)	R5. 2. 4	日本大学理工学部駿河台キャンパス、およびオンライン(ハイブリッド開催)	64 (オンライン47、対面17)
16	「16世紀バーゼルの金工コレクション形成過程にみるニュルンベルク出身者の役割: Jobst Friedrich Tetzl (1556 - 1612)を中心とした一考察」	第72回日本西洋史学会大会 自由論題報告 近世史部会	村松綾 (任期付研究員)	R4. 5. 22	東洋大学(オンライン開催)	約100

雑誌等論文掲載

学術書籍、研究報告書等の発行

	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日
1	ビピロッティ・リストのヴィデオ・インスタレーションにおける皮膚感覚	牧口千夏 (主任研究員)	『現代の皮膚感覚をさぐるー言葉、表象、身体』	R5. 3. 19
2	Wabi-sabi und das japanische Kunsthandwerk	大長智広 (主任研究員)	『Mythos Handwerk Zwischen Ideal und Alltag』(Verlag für moderne Kunst)	R4. 5
3	林康夫の《雲》	大長智広 (主任研究員)	『Pure Form: Japanese Sculptural Ceramics』(Art Gallery of South Australis)	R4. 4

【査読有り】論文掲載(学術誌、美術雑誌、館外の展覧会図録等)

	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日
1	前衛陶芸(オブジェ陶)と伝統ー《ザムザ氏の散歩》における轆轤の位置づけ	大長智広 (主任研究員)	『美術フォーラム 21』vol. 45 (一般社団法人 きょうと視覚文化振興財団)	R4. 6. 30
2	金細工師の社会的地位と技能ー16世紀の都市バーゼルを中心にー	村松綾 (任期付研究員)	比較都市史研究 第41巻(比較都市史研究会)	R4. 12. 20
3	帝国都市ニュルンベルクの金細工師ヴェンツェル・ヤムニツァーとスイスのバーゼル市に残された自然物鑄造作品に関する一考察	村松綾 (任期付研究員)	FUSUS 15号 (アジア鑄造技術史学会)	R5. 3

【査読無し】論文掲載(学術誌、美術雑誌、館外の展覧会図録等)

	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日
1	「布の翼」展	福永治 (館長)	「布の翼」展 記録冊子(染・清流館)	R4. 10. 3

2	Kokuga Sosaku Kyokai: Young Artists Pursue Their Vision of a Modern Japan	池田祐子 (副館長・学芸課長)	Karin Althaus, Susanne Böller, Sarah Louisa Henn, Eva Huttenlauch, Matthias Mühling, and Stephanie Weber (eds.), Group Dynamics: Collectives of the Modernist Period, Munich: Lenbachhaus	R4
3	藍のフェルケール：福本潮子の作品をめぐって	池田祐子 (副館長・学芸課長)	『福本潮子 藍色の世界』展 図録、一般財団法人清水港湾博物館（フェルケール博物館）	R4. 10. 18
4	フランスにおける久松定謨と黒田清輝	梶岡秀一 (主任研究員)	『伊予史談』第405号（伊予史談会）	R4. 4. 1
5	都市と神話／歴史と抽象 ―日本画家 岩波昭彦略伝―	梶岡秀一 (主任研究員)	『いにしへそして現在 岩波昭彦の世界』（公益財団法人鋸山美術館）	R4. 4. 17
6	審査員特別賞（大長智広賞）講評 《Awakening Wind Chillout》アサ佳	大長智広 (主任研究員)	『第4回瀬戸・藤四郎トリエンナーレー瀬戸の原土を活かしてー』（大せともの祭協賛会）	R4. 4. 16
7	八木家にみる「抗走の系譜」	大長智広 (主任研究員)	『構想の系譜』（中長小西）	R4. 5
8	今野智子展によせて	大長智広 (主任研究員)	「今野智子展」リーフレット（目黒陶芸館）	R4. 5
9	生誕100年 清水九兵衛／六兵衛	大長智広 (主任研究員)	『陶説』No. 828（日本陶磁協会）	R4. 6. 1
10	美術をふれて味わう～京都国立近代美術館「感覚をひらく」の実践から～	松山沙樹 (研究員)	『教育美術』2022年6月号（No. 960）	R4. 6. 1
11	教美アートギャラリー 第3回 京都国立近代美術館「作品の世界にどっぷり漬かって…」	松山沙樹 (研究員)	『教育美術』2022年9月号（No. 963）	R4. 9. 1
その他の発表（機関紙、雑誌、新聞、ウェブサイト等）				
	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日
1	「伝統と革新が織りなす文化的厚み ものづくりの技や知恵を次世代へ」 中信 On Your Side トーク	福永治 (館長)	京都新聞 朝刊 (京都新聞社)	R4. 6. 18
2	外部審査員雑感	福永治 (館長)	『日展ニュース』第183号 (日展)	R5. 2. 10
3	開館60周年にあたり	福永治 (館長)	MOMAK 展覧会スケジュール 2023（京都国立近代美術館）	R5. 2. 10
4	審査講評	福永治 (館長)	『第56回女流陶芸公募展カタログ』（女流陶芸）	R5. 3
5	審査員総評・作品評	福永治 (館長)	『第8回 Art Exhibition 瀬戸内大賞』（一般社団法人くれしん芸術文化財団）	R5. 3. 2
6	タイトルなし（「とらのもん往来」欄）	福永治 (館長)	『文教ニュース』第2742号 (文教ニュース社)	R5. 3. 13
7	I氏賞への想い	福永治 (館長)	岡山県立美術館「I氏賞」15周年記念誌	R5. 3. 23
8	画家として、映画人として……多面的な表現を貫く精神性	梶岡秀一 (主任研究員)	『美術の窓』12月号（生活の友社）	R4. 12. 20
9	甲斐荘楠音 ―分野も性別も越境するサービス精神旺盛な画家	梶岡秀一 (主任研究員)	「文化庁広報誌 ぶんかる」 (文化庁) (Web)	R5. 1. 25
10	「甲斐荘楠音の全貌」展 演じ、扮し、着飾る	梶岡秀一 (主任研究員)	『公明新聞』（公明党）	R5. 2. 22
11	黒の深淵 vol.4 「〃オブジェ、の土の黒」◆陶芸作家「八木一夫」を語る	大長智広 (主任研究員)	BUNBOU WEB(https://note.com/bunbou/n/nf97fb7e01137)	R4. 10. 17
12	大坂（大阪）画壇の魅力と可能性	平井啓修		R4. 4. 11

		(主任研究員)	『新美術新聞』No. 1597 (美術年鑑社)			
13	和魂漢才—書画のスズメ 当展自慢の一卷 十時梅屋「訪米山人居宅図巻」	平井啓修 (主任研究員)	『美術の窓』2022年4月号 (第41巻第4号通巻483号) (生活の友社)	R4. 4. 20		
14	プレビュー「サロン! 雅と俗—京の大家と知られざる大坂画壇」(京坂の文化サロンを通覧する初めての大規模展)	平井啓修 (主任研究員)	『美術の窓』2022年4月号 (第41巻第4号通巻483号) (生活の友社)	R4. 4. 20		
15	大坂画壇研究の可能性	平井啓修 (主任研究員)	『京都民報』(京都民報社)	R4. 5. 8		
16	関西の陶芸展: 新宮さやか展—As My Own Psyche Indicates—	宮川智美 (任期付研究員)	『陶説』832号 (日本陶磁協会)	R4. 10. 1		
ウ 国立映画アーカイブ						
学会等発表						
	タイトル	学会等名	発表者氏名 (職名)	日付	場所	聴講者数 (人)
1	吉澤商店主・河浦謙一の場合	日本に映画を持ち込んだ男たち～荒木和一、稲畑勝太郎、河浦謙一～	入江良郎 (学芸課長)	R4. 5. 22	おもちゃ映画ミュージアム	27
2	シンポジウム「『日本映像カルチャーセンター』に眠る映像コレクションの利活用研究」	日本映像学会映画文献資料研究会	入江良郎 (学芸課長)	R4. 8. 6	東京工芸大学芸術学部2号館マルチメディア講義室	18
3	『北清事変活動写真』と『新製活動写真』—最古の映画商社・吉澤商店における映画製作の起源	映画史家・塚田嘉信 そのコレクションと業績	入江良郎 (学芸課長)	R5. 3. 18	国立映画アーカイブ	95
4	史上最古にして最大! 映画スター第一号「目玉の松ちゃん」の功績	京の活動写真 下鴨映画祭	入江良郎 (学芸課長)	R5. 3. 26	京都市立文化芸術会館	400
5	「映画宣伝デザイナーの視点 映画への道しるべ」	全国映画資料アーカイブサミット2023	岡田秀則 (主任研究員)	R5. 1. 30	オンライン	174
6	「映画資料を文化的リソースに—関係者の連携強化と今後の展開」	全国映画資料アーカイブサミット2023	岡田秀則 (主任研究員)	R5. 1. 30	オンライン	167
7	大隈重信と『日本南極探検』(1930年)—南極探検後援会長・大隈の功績を顕彰する映画の誕生とその歴史的背景	大隈重信没後100年記念事業記録映画「日本南極探検」特別上映会【早稲田文化芸術週間2022】	大傍正規 (主任研究員)	R4. 10. 21	小野記念講堂	120
8	南極探検記録映画に見る白瀬隊の偉業	白瀬南極探検隊・南極探検後援会子孫の集い	大傍正規 (主任研究員)	R4. 11. 26	SHIRASE 5002	30
9	甦るコニカラー映画『生きている人形』—発掘と復元/林又一郎旧蔵フィルム—初代中村鴈治郎をめぐるフィルム群の発掘の経緯について	歌舞伎学会秋季大会 国立映画アーカイブ共催プログラム「歌舞伎・文楽の発掘映像を見る」	大傍正規 (主任研究員)	R4. 12. 4	早稲田大学富山キャンパス38号館AV教室	130
10	『南極探検活動写真』(1912)関連資料の同定研究—『活動写真機械及フィルム定価表』(1912)に見る最古の長篇記録映画	研究イベント「映画史家・塚田嘉信 そのコレクションと業績」	大傍正規 (主任研究員)	R5. 3. 18	国立映画アーカイブ小ホール	95
11	A case study on how to make educational and industrial film	[2022 FIAF Congress] The Visible Archive: Archiving, preserving, digitizing, and	富田美香	R4. 4. 25	Urania National Film Theatre, Budapest,	

	collections “more visible”	sharing ‘non-feature’ film collections “Immediate Present” - Digitization and access”	(主任研究員)		*報告はオンライン	
12	あなたの家・街の貴重な映像記録を失わないために—磁気テープのデジタルファイル化の緊急性—	～街のアセット&魅力を映像と言葉でつなぐトークイベント～『京橋ひと・こと・とき(刻)つなぎ 2022・春』	富田美香 (主任研究員)	R4. 4. 29	プラザ東京ショールーム	60
13	「京都ニュース」のフィルム保存について—京都からアート・リサーチセンター、そして国立映画アーカイブ—	「京都ニュースアーカイブ」公開記念シンポジウム～時代の光が未来を映す～	富田美香 (主任研究員)	R4. 7. 2	立命館大学図書館 オンライン開催 (ウェビナー)	
14	下加茂撮影所 (松竹京都撮影所) の 1923-1939 —白井信太郎、武田忠哉、加納竜一 (香野雄吉)、斎藤雷太郎、長江道太郎、日夏英太郎が集った時代—	長江道太郎勉強会	富田美香 (主任研究員)	R4. 8. 22	オンライン	
15	京橋地域と映画—日本映画の歴史の投錨地—	「第 33 回 芸術文化講座」京橋彩区エリアマネジメント	富田美香 (主任研究員)	R4. 9. 21	オンライン	
16	A case study on how to make educational and industrial film collections “more visible”	[2022 FIAF Congress] The Visible Archive: Archiving, preserving, digitizing, and sharing ‘non-feature’ film collections “Immediate Present” - Digitization and access”	富田美香 (主任研究員)	R4. 4. 25	Urania National Film Theatre, Budapest, *報告はオンライン	
17	あなたの家・街の貴重な映像記録を失わないために—磁気テープのデジタルファイル化の緊急性—	～街のアセット&魅力を映像と言葉でつなぐトークイベント～『京橋ひと・こと・とき(刻)つなぎ 2022・春』	富田美香 (主任研究員)	R4. 4. 29	プラザ東京ショールーム	60
18	「京都ニュース」のフィルム保存について—京都からアート・リサーチセンター、そして国立映画アーカイブ—	「京都ニュースアーカイブ」公開記念シンポジウム～時代の光が未来を映す～	富田美香 (主任研究員)	R4. 7. 2	立命館大学図書館 オンライン開催 (ウェビナー)	
19	下加茂撮影所 (松竹京都撮影所) の 1923-1939 —白井信太郎、武田忠哉、加納竜一 (香野雄吉)、斎藤雷太郎、長江道太郎、日夏英太郎が集った時代—	長江道太郎勉強会	富田美香 (主任研究員)	R4. 8. 22	オンライン	
20	京橋地域と映画—日本映画の歴史の投錨地—	「第 33 回 芸術文化講座」京橋彩区エリアマネジメント	富田美香 (主任研究員)	R4. 9. 21	オンライン	
21	動画データの長期保存用ファイルフォーマットについて	デジタルアーカイブ学会	三浦和己 (主任研究員)	R4. 11. 11	オンライン	100
22	フィルムアーカイブの現状と国立映画アーカイブの取り組み	Cintel Scanner 事例紹介ウェビナー ～フィルムスキャナーによってよみがえる過去と、新しい創造の可能性～	三浦和己 (主任研究員)	R5. 2. 27	オンライン	80
23	「ベギー・アーウィツシュ特集—アート・オブ・ザ・モーター」上映前解説	恵比寿映像祭 2023	中西香南子 (特定研究員)	R5. 2. 3	東京都写真美術館	100
24	アーカイブ作業における当時のリリースプリントの役割	日本映像アーカイビスト協会ウェビナー「映画フィルムを後世に伝えるために今できる	西川亜希 (特定研究員)	R4. 12. 3	オンライン	20

		こと —再発見するリリースプリントの価値—				
25	上代日本語における使役動詞の形成について：内的再建の試み	日本歴史言語学会	浜田直樹 (特定研究員)	R4. 12. 11	学習院大学南3号館・オンライン	50 (+オンライン)
26	『花つみ日記』における脚本家・鈴木紀子の業績について	上映企画「日本の女性映画人(1)——無声映画期から1960年代まで」に伴う『花つみ日記』上映前解説	森宗厚子 (特定研究員)	R5. 2. 15	国立映画アーカイブ小ホール	110
27	無声映画期の女性脚本家の業績について	上映企画「日本の女性映画人(1)——無声映画期から1960年代まで」に伴う「無声映画脚本家集」上映前解説	森宗厚子 (特定研究員)	R5. 2. 22	国立映画アーカイブ小ホール	100
28	厚木たかと石山一枝の業績について	上映企画「日本の女性映画人(1)——無声映画期から1960年代まで」に伴う「厚木たか/石山一枝」上映前解説	森宗厚子 (特定研究員)	R5. 2. 26	国立映画アーカイブ小ホール	90
29	塚田嘉信旧蔵（創刊号を中心とした）雑誌コレクション調査報告	映画史家・塚田嘉信 そのコレクションと業績	佐崎順昭 (客員研究員)	R5. 3. 18	国立映画アーカイブ小ホール	95
30	松本清張原作の映画化井手雅人の脚色による『顔』、『点と線』を中心に	日本映像学会第48回大会	具珉珂 (研究補佐員)	R4. 6. 5	京都大学	50
31	『日本の映画作り』（1935）の製作をめぐって	国立映画アーカイブ共催「アカデミー・フィルム・アーカイブ映画コレクション」に伴う『日本の映画作り』上映前解説	具珉珂 (研究補佐員)	R5. 2. 26	京都文化博物館	70
32	建築映画館 2023『クリーピー』（黒沢清、2016）上映後トーク	建築映画館 2023	星遼太郎 (研究補佐員)	R5. 2. 25	アンステチュ・フランセ東京	108

B. 雑誌等論文掲載

学術書籍、研究報告書等の発行

	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日
1	「北清事変活動写真」と「新製活動写真」 最古の映画商社・吉澤商店における映画製作の起源	入江良郎 (学芸課長)	映画史家・塚田嘉信—そのコレクションと業績 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C） 「塚田嘉信コレクションを起点に初期映画史を読み直す」成果報告（2020-2022年度）	R5. 3. 31
2	『南極探検活動写真』（1912）関連資料の同定研究—浅草国技館における初回興行と地方興行の諸相	大傍正規 (主任研究員)	『映画史家・塚田嘉信 そのコレクションと業績』（科研費・基盤研究（C）「塚田嘉信コレクションを起点に初期映画史を読み直す」成果報告（2020-22））	R5. 3. 31
3	Motion Pictures Exhibition of 1921: Reinforcement of National Identity and Film Archive in Japan	とちぎあきら (特定研究員)	Keeping Memories: Cinema and Archiving in the Aisa-Pacific (Quezon City: SEAPAVAA and Ateneo de Manila University)	R4. 4. 1
4	『ディープヨコハマをあるく』	佐野亨	辰巳出版	R4. 8. 1

		(客員研究員)			
【査読有り】論文掲載(学術誌、美術雑誌、館外の展覧会図録等)					
	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日	
1	レビュー「堀潤之・木原圭翔編『映画論の冒険者たち』 東京大学出版会、2021年10月」	玉田健太 (任期付研究員)	「映像学」108巻	R4.8.25	
2	「Jホラーにおける変異としてのメディアミックス—撮 影所システムの崩壊と映画のデジタル化を背景に」	宮本法明 (任期付研究員)	『左岸：京都大学映画メ ディア研究』第2号(京都大学大 学院人間・環境学研究科 映 画メディア合同研究室)	R4.10.31	
3	「霊媒としての脳—小中千昭作品における医療メディア と神秘主義」	宮本法明 (任期付研究員)	『メディウム』第3号(『メ ディウム』編集委員会)	R4.11.30	
【査読無し】論文掲載(学術誌、美術雑誌、館外の展覧会図録等)					
	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日	
1	The Disaster, the Moving Images and the Film Archive: the 'Films of the Great Kanto Earthquake of 1923' Website	とちぎあきら (特定研究員)	国際フィルムアーカイブ連盟 機関誌 Journal of Film Preservation No.107 (Bruxelles: FIAF)	R4.10.1	
2	「生まれることは呪われること—Jホラーの妊娠をめぐる 表象」	宮本法明 (任期付研究員)	『ユリイカ』通巻794号(青土 社)	R4.9.1	
その他の発表(機関紙、雑誌、新聞、ウェブサイト等)					
	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日	
1	上映作品の紹介 Apart from You by Naruse「君と別れて」 (1933年・成瀬巳喜男監督)	岡島尚志 (館長)	第25回サンフランシスコ無 声映画祭	R4.5.7	
2	上映作品の紹介 Repast by Naruse「めし」(1951 年・成瀬巳喜男監督)	岡島尚志 (館長)	第6回ナイトレート・ピク チャーショー(ジョージ・イ ーストマン・ミュージアム)	R4.6.3	
3	「叩き起こされる歴史—アリス・ギイと映画アーカイ ブ」	岡田秀則 (主任研究員)	「キネマ旬報」2022年8月上 旬号(キネマ旬報社)	R4.7.20	
4	「「映画館」を伝える—資料が語る《観客の映画 史》」	岡田秀則 (主任研究員)	「東京人」2022年12月号 (都市出版)	R4.11.2	
5	書評「映画を追い フィルムコレクター歴訪の旅」	岡田秀則 (主任研究員)	「日本経済新聞」(日本経済 新聞社)	R5.3.4	
6	「恐怖の感覚のありか」	宮本法明 (任期付研究員)	『ユリイカ』通巻794号(青 土社)	R4.9.1	
7	「Jホラーの現在をめぐる作品ガイド」	宮本法明 (任期付研究員)	『ユリイカ』通巻794号(青 土社)	R4.9.1	
8	「基調講演「起源の映画にみるポスト・シネマ—メ ディア、身体、リズム」」	宮本法明 (任期付研究員)	『左岸：京都大学映画メ ディア研究』第2号(京都大学大 学院人間・環境学研究科 映 画メディア合同研究室)	R4.10.31	
9	「惹句にご注目—企画展『ポスターでみる映画史 Part 4 恐怖映画の世界』」	藤原征生 (特定研究員)	「文化庁広報誌 ぶんかる」 アートダイアリー 101	R5.2.24	
10	『雪夫人絵図』、あるいはPrénom Yuki	星遼太郎 (研究補佐員)	建築映画館2023 ブックレッ ト	R5.2.23	
エ 国立西洋美術館					
学会等発表					
	タイトル	学会等名	発表者氏名 (職名)	日付	場所 聴講者数 (人)
1	「造形美術としての近代 建築：その資料保存の意 義と実践」	国立近現代建築資料館	田中正之 (館長)	R4.7.26~	文化庁公式チャンネル Bunkachannel -
2	「1910-20年代の松方 とマティス」	姫路市立美術館記念講演会	田中正之 (館長)	R4.8.7	姫路市立美術館 31
3			田中正之	R5.3.10	45

	「Well-being と美術館の新たな役割」	企業メセナ協議会・国際セミナー「北欧に学ぶウェルビーイングとアート」	(館長)		大手町フィナンシャルシティカンファレンスセンターホール	
4	「時代と社会をこえる「かたち」カラヴァッジョ《キリストの埋葬》を中心として」	バチカンと日本100年プロジェクト公開シンポジウム	渡辺晋輔 (学芸課長)	R. 4. 11. 12	上智大学10号館(講堂)	約100
5	「国立西洋美術館における近年のスペイン版画収集について」	スペイン・ラテンアメリカ美術史研究会 2022年度夏期研究会	川瀬佑介 (主任研究員)	R4. 7. 9	オンラインで開催	35
6	国立西洋美術館所蔵2作品のオンサイト色材調査ーカルロ・ドルチ《悲しみの聖母》と、ヤーコプ・ヨルダース(に帰属)《ソドムを去るロトとその家族》ー	文化財保存修復学会第44回大会	高嶋美穂 (主任研究員)	R4. 6. 19	熊本県立劇場	100
7	片岩を模したパキスタン将来のガンダーラ・ストゥッコ像のキャラクターゼーション	文化財保存修復学会第44回大会	高嶋美穂 (主任研究員)	R4. 6. 19	熊本県立劇場	100
8	An examination of reflected glare prediction method based on luminance distribution	The 8th International Light Symposium: Re-thinking Lighting Design in a Sustainable Future	高嶋美穂 (主任研究員)	R4. 9. 23	Copenhagen	100
9	「被災収蔵品を緊急搬出するために必要な資機材リスト」	全国美術館会議 第37回学芸員研修会	邊牟木尚美 (主任研究員)	R5. 3. 20	国立西洋美術館 講堂	約200
10	美術×教育:アーティストが学校と協力して出来ること	船橋市民ギャラリー『美術フォーラム』	秋田美緒 (任期付研究員)	R4. 12. 11	船橋市民ギャラリー	30
11	市民ギャラリー事業としてのアーティスト・イン・スクールの効果-川口市立小学校での実践を通して	美術科教育学会	秋田美緒 (任期付研究員)	R5. 3. 27	オンライン、神戸大学	12
12	(講演)「国立西洋美術館 × 東京・春・音楽祭 美術と音楽～牢獄のサラメ(ギュスターヴ・モロー)」	東京・春・音楽祭	浅野菜緒子 (特定研究員)	R4. 4. 7	東京文化会館 小ホール	50

雑誌等論文掲載

学術書籍、研究報告書等の発行

	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日
1	「はじめに」「アジア人画家」「河」「接吻」「南洋」「光」「窓」	田中正之 (館長)	別冊太陽『西洋美術を知る100章』(平凡社)	R4. 11. 25
2	「欺く」「ヴィーナス」「遠近法」「キューピッド」「驚異の部屋」「聖母」「スード」	渡辺晋輔 (学芸課長)	別冊太陽『西洋美術を知る100選』(平凡社)	R4. 11. 25
3	「悪魔」「騎馬像」「宮廷」「台所」「トロンプ・ルイユ」「ぶどう酒」	川瀬佑介 (主任研究員)	別冊太陽『西洋美術を知る100選』(平凡社)	R4. 11. 25
4	「科学調査」	高嶋美穂 (主任研究員)	別冊太陽『西洋美術を知る100選』(平凡社)	R4. 11. 25
5	Analysis of Binding Media Using ELISA and LC-MS	高嶋美穂 (主任研究員)	Scientific Studies on Conservation for Saint Simeon Church and its wall paintings in Cappadocia, Turkey, Vol.1 (Report on	R5. 3. 31

			the activities in 2019 and 2022)	
6	「ヴァニタス」「海」「お金」「寓意」「農民」「雪」	中田明日佳 (主任研究員)	別冊太陽『西洋美術を知る100選』(平凡社)	R4. 11. 25
7	川口市立アートギャラリー・アトリア Annual Report 2021. 4-2022. 3	秋田美緒 (任期付研究員)	川口市立アートギャラリー・アトリア Annual Report 2021. 4-2022. 3	R4. 8. 31
8	「画商」「狩り」「雲」「化粧」「洪水」「子ども」「自画像」「ファッション」「森」	山柘あおい (任期付研究員)	別冊太陽『西洋美術を知る100選』(平凡社)	R4. 11. 25
【査読有り】論文掲載(学術誌、美術雑誌、館外の展覧会図録等)				
	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日
1	Organic Materials Used for Giant Buddhas and Wall Paintings in Bamiyan, Afghanistan	高嶋美穂 (主任研究員)	<i>Appl. Sci.</i> (2022, 12, 9476)	R4. 12. 21
【査読無し】論文掲載(学術誌、美術雑誌、館外の展覧会図録等)				
	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日
1	"Preface"	田中正之 (館長)	<i>RENOIR-MONET-GAUGUIN</i> (Hatje Cantz Verlag, Berlin)	R4
2	「静物画を巡る対話 渡辺晋輔+諏訪敦」	渡辺晋輔 (学芸課長)	展覧会図録『諏訪敦 眼窩裏の火事』	R5. 1. 23
3	「視差のリアリズムへ——リヒターのクールベ」	新藤淳 (主任研究員)	『ユリイカ』2022年6月号、青土社	R4. 5. 1
4	「アトノセカイの森、その痛みのアナクロニー——戸谷成雄のけもの道の記憶、あるいは『ポストもの派』概念の批判へ」	新藤淳 (主任研究員)	展覧会図録『戸谷成雄 彫刻』長野県立美術館/埼玉県立近代美術館、T&M Projects、2022年	R4. 11. 30
5	作品紹介「都築崇広《OSB・風・森》」	秋田美緒 (任期付研究員)	展覧会図録『VOCA展2023 現代美術の展望-新しい平面の作家たち』	R5. 3
その他の発表(機関紙、雑誌、新聞、ウェブサイト等)				
	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日
1	「自然と人のダイアログ」展 私の1点	田中正之 (館長)	読売新聞朝刊	R4. 8. 3
2	「ブラック・アート・マターズ」	田中正之 (館長)	日本経済新聞朝刊「美の十選」	R4. 2. 2- R5. 2. 16
3	「松本竣介にとってのデッサン」	渡辺晋輔 (学芸課長)	大川美術館広報誌『ガス燈』	R5. 3. 24
4	「国立西洋美術館リニューアルオープン記念展 自然と人のダイアログ展」	陳岡めぐみ (主任研究員)	『公明新聞』	R4. 5. 18
5	「空を流れる時間」	陳岡めぐみ (主任研究員) 新藤淳 (主任研究員)	『美術の窓』6月号	R4. 5. 20
6	「国立西洋美術館リニューアルオープン記念展 自然と人のダイアログ展」	陳岡めぐみ (主任研究員)	『うえの』	R4. 6. 1
7	「国立西洋美術館リニューアルオープン記念展 自然と人のダイアログ展」	陳岡めぐみ (主任研究員)	「NRW. Global Business Japan」	R4. 6. 13
8	「国立西洋美術館リニューアルオープン記念展 自然と人のダイアログ展 フリードリヒ、モネ、ゴッホからリヒターまで」	陳岡めぐみ (主任研究員)	『文化庁広報誌ぶんかる』	R4. 7. 25
9	「世界と人をつなぐ回路としてのアート」	陳岡めぐみ (主任研究員)	『美術手帖』(ウェブ版)	R4. 7. 16
10	「印象派と庭 オーギュスト・ルノワール《プランコ》」	陳岡めぐみ (主任研究員)	『旅するフランス語』10月号	R4. 9. 18

11	「印象派と庭 フレデリック・バジール《家族の集まり》」	陳岡めぐみ (主任研究員)	『旅するフランス語』11月号	R4. 10. 18
12	「印象派と庭 エドゥアール・マネ《アルジャントゥイユの庭のモノ一家》」	陳岡めぐみ (主任研究員)	『旅するフランス語』12月号	R4. 11. 18
13	「印象派と庭 ベルト・モリゾ《植木に水をやる若い女性》」	陳岡めぐみ (主任研究員)	『旅するフランス語』1月号	R4. 12. 18
14	「印象派と庭 カミーユ・ピサロ《自宅の窓からの眺め》」	陳岡めぐみ (主任研究員)	『旅するフランス語』2月号	R5. 1. 18
15	「印象派と庭 クロード・モネ《睡蓮の池》」	陳岡めぐみ (主任研究員)	『旅するフランス語』3月号	R5. 2. 17
16	憧憬の地 ブルターニューモネ、ゴーガン、黒田清輝らが見た異郷	袴田紘代 (主任研究員)	『ぶんかる』	R5年3月配信分
17	憧憬の地 ブルターニュー	袴田紘代 (主任研究員)	『東京・春・音楽祭』	R5. 3. 18
18	憧憬の地 ブルターニューモネ、ゴーガン、黒田清輝らが見た異郷	袴田紘代 (主任研究員)	月刊『うえの』	R5年3月・4月合併号
19	知られざる画家たちの「異郷」へのまなざし	袴田紘代 (主任研究員)	月刊『美術の窓』	R5. 3. 20
20	報文「休館工事期間中の国立西洋美術館における活動と保存管理について」	邊牟木尚美 (主任研究員)	公益財団法人文化財虫菌害研究所 機関誌『文化財の虫菌害』第83号	R4. 6. 26
21	「全国美術館会議：緊急時のための常備用資機材リスト」	邊牟木尚美 (主任研究員)	全国美術館会議機関紙「ZENBI (Vol. 22)」	R4. 9. 1
22	「早期発見・早期治療——職員一丸となって行うコレクションケア」	邊牟木尚美 (主任研究員)	国立国際美術館 機関紙『国立国際美術館ニュース』248号	R5. 2. 1
23	「名画紀行⑩ミレイ 国立西洋美術館」	浅野菜緒子 (特定研究員)	『女性のひろば』	R4. 9. 1
24	名画紀行 アクセリ・ガッレン＝カッレラ《ケイテレ湖》	久保田有寿 (特定研究員)	女性のひろば	R4. 6. 1
25	ピカソとその時代 ベルリン国立ベルクグリュン美術館展	久保田有寿 (特定研究員)	『うえの』no. 759 10月号	R4. 10. 1
26	作品解説7点	久保田有寿 (特定研究員)	東京新聞 朝刊	R4. 10. 6
27	ピカソとその時代 ベルリン国立ベルクグリュン美術館展	久保田有寿 (特定研究員)	美術の窓 no. 470 11月号	R4. 11. 20
28	美術を通して他者に出会う	松尾由子 (特定研究員)	点字毎日	R4. 9. 22

オ 国立国際美術館

学会等発表

	タイトル	学会等名	発表者氏名 (職名)	日付	場所	聴講者数 (人)
1	作り手たちとの出会い—内藤礼、小林孝亘、須田悦弘、塩田千春	国立国際美術館巡回展「現代アートの100年」記念講演会	島敦彦 (館長)	R4. 5. 7	広島県立美術館	80
2	島館長とめぐる現代アートの100年	国立国際美術館巡回展「現代アートの100年」オープニングイベント	島敦彦 (館長)	R4. 6. 11	大分県立美術館	30
3	「1980年代を語れるのか？」	「関西の80年代」	島敦彦 (館長)	R4. 7. 24	兵庫県立美術館	120
4	「分からない、を楽しむ！」	関西学院大学総合政策学部・学部研究会主催講演会	島敦彦 (館長)	R4. 12. 13	関西学院大学	100
5	「現代美術をコレクションする」	国立国際美術館巡回展「現代アートの100年 ハロー、アート！世界に夢中になる方法」講演会	植松由佳 (学芸課長)	R4. 7. 23	大分県立美術館	—
6			植松由佳	R4. 9. 23		500

	「アジア太平洋地域の新しいネットワーク」	文化庁現代アートワークショップ セッション1	(学芸課長)		愛知芸術文化センター (ZOOM ウェビナーでも実施)	
7	「アートプラットフォーム事業5カ年の歩みと今後求められるアート振興策」	文化庁現代アートワークショップ シンポジウム」	植松由佳 (学芸課長)	R5. 2. 23	国立新美術館 (ZOOM ウェビナーでも実施)	100
8	「感覚の領域と経験をめぐる対話 ～美術と認知行動科学から～」	国立国際美術館×大阪大学×アートエリア B1・エクステンジ企画	安来正博 (上席研究員)	R4. 4. 27	アートエリア B1 /オンライン	18
9	開かれて、つないでいく美術館	京都市立芸術大学美術教育研究会研究大会	藤吉祐子 (主任研究員)	R4. 6. 24	国立国際美術館	49
10	学校と美術館が創り出せる子どもたちの学びの場	第48回 中播磨造形教育研究会	藤吉祐子 (主任研究員)	R4. 8. 17	イーグレひめじ	90
11	対話をとまなうプログラム 美術館はだれのため? なんのため?	もぞもぞする現場 - 芸術と障害にかかわるひとたちの、ネットワークづくりのためのアセンブリー (主催: 文化庁/一般社団法人 HAPS)	藤吉祐子 (主任研究員)	R5. 1. 14	京都国立近代美術館	20
12	視覚を超えた鑑賞探求ワークショップ 見れば見るほど見えなくなる ジャコメッティ《ヤナイハラ I》を徹底的に鑑賞しよう 報告	感覚をひらくー新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業 研究会「ひらくラボ」	藤吉祐子 (主任研究員)	R5. 3. 11	京都国立近代美術館	20
13	国立国際美術館 活動紹介 美術館は だれのため? なんのため?	全国美術館会議 教育普及研究部会第59回会合	藤吉祐子 (主任研究員)	R4. 8. 17	国立国際美術館	52
14	「GUTAIをめぐるナイトミュージアム トーク&プレ・ツアー」	エクステンジプログラム vol. 1 国立国際美術館×大阪中之島美術館	福元崇志 (主任研究員)	R4. 11. 4	国立国際美術館	52
15	現代美術をコレクションする	国立国際美術館巡回展「現代アートの100年」記念講演会	中井康之 (研究員)	R4. 4. 2	広島県立美術館	80
16	芸術学科草創期の東野芳明	第5回 多摩美術大学アートアーカイヴシンポジウム「東野芳明再考 TONO Renaissance」	中井康之 (研究員)	R4. 12. 3	多摩美術大学 八王子キャンパス	276
17	《プラネット映画資料図書館》の上映活動のアーカイブ化-1974~1987年まで-	日本映像学会	田中晋平 (客員研究員)	R4. 6. 5	京都大学	50
18	〈千年シアター〉と1980年代関西の自主上映文化	日本映像学会	田中晋平 (客員研究員)	R4. 12. 10	大阪芸術大学	50
19	シンポジウム: 映像と時間 レトロ/プロ・スペクテイヴについてのいくつかの覚書	表象文化論学会第16回研究発表集会	馬定延 (客員研究員)	R4. 11. 22	関西大学	250
20	How can we map Ho Tzu Nyen's Artistic Territory? On Hotel Aporia, Voice of Void and Night March of Hundred Monsters	International Symposium: Critical Dictionary of Ho Tzu Nyen	馬定延 (客員研究員)	R4. 11. 22	Art Sonje Center, Seoul	200

雑誌等論文掲載				
学術書籍、研究報告書等の発行				
	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日
1	いくつもの声	馬定延 (客員研究員)	MAM Documents 004 アレクサンドリアから 東京まで：アート、植民地主 義、そして絡み合う歴史	R4. 7. 1
【査読有り】論文掲載（学術誌、美術雑誌、館外の展覧会図録等）				
	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日
1	《プラネット映画資料図書館》の上映活動ー1975～1988 までー	田中晋平 (客員研究員)	映像学	R5. 2
【査読無し】論文掲載（学術誌、美術雑誌、館外の展覧会図録等）				
	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日
1	「絵具と物語のあいだ」	島敦彦 (館長)	「僕の知らないあなたの翼」 小沢さかえ 図録	R4. 7. 16
2	「満田晴徳の自在置物」	島敦彦 (館長)	『JIZAI 満田晴徳』米子市 美術館	R5. 2. 10
3	コロナ禍で生まれたプログラム	藤吉祐子 (主任研究員)	教育美術 2022年6月号	R4. 6. 1
4	「REVIEW ミロ展ー日本を夢みて」	橋本梓 (主任研究員)	『REAR 49号』リア制作室	R4. 12. 30
5	作家解説、「往来へと開かれて」	橋本梓 (主任研究員)	展覧会カタログ「六本木クロ ッシング2022展：往来オー ライ！」森美術館	R5. 2. 6
6	「絵を描き、窓を開く 橋本梓 [国立国際美術館・主 任研究員]によるインタビュー」	橋本梓 (主任研究員)	横山奈美『Open the Window』発行：横山奈美	R5. 3. 3
7	「リヒターと社会主義リアリズム」	福元崇志 (主任研究員)	『ゲルハルト・リヒター』青 幻舎	R4. 6. 1
8	「田島大介のスーパー・パースペクティズム」	中井康之 (研究員)	『田島大介 超越界限』青幻 舎	R4. 10. 26
9	「椿は、我々に…」あるいは、絵画の始原について	中井康之 (研究員)	展覧会リーフレット「LUNA COGNITA-Noboru Tsubaki's Paintings-1978, 1986, 2022- 2023」MtK Contemporary Art	R5. 2. 26
その他の発表（機関紙、雑誌、新聞、ウェブサイト等）				
	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日
1	「美術館へ行こう」	島敦彦 (館長)	「美術資料」中学校用美術副 読本	R4. 4. 1
2	「大阪中之島美術館への期待」	島敦彦 (館長)	『待ってたぞ！美術館 大阪 中之島美術館開館に寄せて』	R4. 4. 20
3	「0 JUN+五月女哲平展」	島敦彦 (館長)	芸術批評誌『リア』	R4. 4. 22
4	書評「TOKYO POP から始まる」小松崎拓男著	島敦彦 (館長)	神戸新聞朝刊、静岡新聞、佐 賀新聞、福島新聞、大分合同 新聞、東奥新聞、新潟新聞、 高知新聞、岩手新聞	R4. 4
5	「評論家・学芸員が選ぶ注目の新人19」	島敦彦 (館長)	『美術の窓』5月号	R4. 5. 20
6	「見えないものが見える」	島敦彦 (館長)	『中部美術縁起』	R4. 6. 13
7	「藤江 民展 Finger Press Painting」	島敦彦 (館長)	藤江 民展 案内状	R4. 7
8	「1980年以降の日本の現代美術について」	島敦彦 (館長)	『コメント通信』27号(10 月号)	R4. 10. 31

9	絹谷幸二芸術賞創設「次代へ支援 第2の『安井賞』」	島敦彦 (館長)	産経新聞	R5. 1. 30
10	「MIMOCA EYE/ミモカ アイ 総評」	植松由佳 (学芸課長)	『MIMOCA EYE』カタログ	R5. 2
11	「VOCA 展 2023 選考を終えて」	植松由佳 (学芸課長)	『VOCA 展 2023』カタログ	R5. 3
12	「REVIEW 国際芸術祭「あいち 2022」パフォーミングアーツ 時空を超え、さらなる高みへ」	橋本 梓 (主任研究員)	「愛知芸術文化センター情報誌AAC vol.114」	R4. 12. 1
13	「具体の内なる複数性」	福元崇志 (主任研究員)	『アートコレクターズ』 No. 161	R4. 8
14	「いま「具体」を見ることの意義」	福元崇志 (主任研究員)	『公明新聞』	R4. 12. 7
15	日本の 80 年代美術展を展望する	中井康之 (研究員)	アートスケープ	R4. 9. 1
16	絵画について考える——椿昇、李禹煥、佐川晃司の作品から	中井康之 (研究員)	アートスケープ	R5. 3. 15
17	原口典之であること(掲載は英語、および北京語)	中井康之 (研究員)	Noriyuki Haraguchi “How freely I can open up this space and time I am sharing” (e-book)	R4. 10. 28
18	李禹煥の教え	中井康之 (研究員)	兵庫県立美術館季刊誌『アートランブル』78号	R5. 3. 24
19	連載 田中功起 質問する 18-1 : アーティストへの質問、あるいは 「これまで」と「これから」の間には何があるのか：最初の接点	馬定延 (客員研究員)	ART iT	R4. 5. 31
20	ムン・キョンウォン& ジョン・ジュンホ (インタビュー)	馬定延 (客員研究員)	美術手帖 74(1094)	R4. 6. 1
21	連載 田中功起 質問する 18-3 : アーティストへの質問、あるいは「これまで」と「これから」の間には何があるのか：「これまで」と「これから」の間について	馬定延 (客員研究員)	ART iT	R4. 9. 7
22	連載 田中功起 質問する 18-5 : アーティストへの質問、あるいは「これまで」と「これから」の間には何があるのか：終わりという可能性	馬定延 (客員研究員)	ART iT	R4. 12. 29
23	[報告]シンポジウム：映像と時間 レトロ/プロ・スペクティブについてのいくつかの覚書 (ニューズレター掲載)	馬定延 (客員研究員)	REPRE ニュース (47) 表象文化論学会	R5. 2. 1

カ 国立新美術館

学会等発表

	タイトル	学会等名	発表者氏名 (職名)	日付	場所	聴講者数 (人)
1	絵画画像の微細色面に着目した再帰的畫面分割に基づく階段関数系による色彩分析の試行	日本色彩学会令第 53 回全国大会	室屋泰三 (主任研究員)	R4. 6. 26	椋山女学園大学 +オンライン	100
2	絵画画像の微細色面の再構成に基づく色彩分析の試行	日本色彩学会令和 4 年度研究会大会	室屋泰三 (主任研究員)	R4. 11. 27	オンライン	70
3	絵画画像の構図を考慮した微細色面の再構成に基づく階段関数系による色彩分析の試行	日本色彩学会画像色彩研究会令和 4 年度研究発表会	室屋泰三 (主任研究員)	R5. 3. 18	国立新美術館 +オンライン	13
4	東野芳明の〈観衆論〉再読	第 5 回多摩美術大学アートアーカイヴシンポジウム	伊村靖子 (主任研究員)	R4. 12. 3	多摩美術大学	276 人 (来

				場者数 47人、視聴者数 229人)
雑誌等論文掲載				
【査読無し】論文掲載（学術誌、美術雑誌、館外の展覧会図録等）				
	タイトル	執筆者氏名（職名）	掲載誌名	発行年月日
1	1960年代日本現代美術における「インターメディア」の系譜	伊村靖子 （主任研究員）	『美術フォーラム 21 特集「前衛美術」は終わったか？』	R4. 6. 30
その他の発表（機関紙、雑誌、新聞、ウェブサイト等）				
	タイトル	執筆者氏名（職名）	掲載誌名	発行年月日
1	「美術コレクター、ルートヴィヒ夫妻」	長屋光枝 （学芸課長）	公明新聞	R4. 8. 24
2	ルートヴィヒ美術館展 20世紀美術の軌跡-市民が創った珠玉のコレクション	長屋光枝 （学芸課長）	『美術の窓』（生活の友社）	R4. 6. 20
3	ルートヴィヒ美術館展 20世紀美術の軌跡-市民が創った珠玉のコレクション	長屋光枝 （学芸課長）	『BM』（美術の杜出版）	R4. 8. 20
4	「もの派」を代表する美術家 初期作品から新作まで 創造の軌跡	米田尚輝 （主任研究員）	公明新聞	R4. 8. 17
5	展覧会の再構成を超えて 「プレイバック「抽象と幻想」展（1953-1954）」から考えること	伊村靖子 （主任研究員）	東京国立近代美術館ウェブサイト	R4. 12. 16
6	「アルパローザを巡るさまざまなこと」第1回 「国立新美術館（2021年6月9日～9月6日）「ファッションイン ジャパン 1945-2020 一流行と社会」展にアルパローザが展示された意味について」	小野寺奈津 （特定研究員）	アルパローザ HP	R4. 5. 20
7	不条理とユーモア、そして職人氣質	吉村麗 （特定研究員）	タムラサトル「ワニがまわる理由は聞かないでほしい」カタログ（MAKI Gallery／帝塚山画廊）	R4. 08
8	アートを描いたマンガ10選！ 手塚治虫、くらもちふさこから藤本タツキ、『ブルーピリオド』まで	吉村麗 （特定研究員）	TOKYO ART BEAT（ウェブサイト／株式会社アートビート）	R4. 9. 9
9	「各界のマンガ好きが選ぶ このマンガがすごい！ [オンナ編]」	吉村麗 （特定研究員）	『このマンガがすごい！ 2023』（宝島社）	R4. 12. 14
10	「特集 THE BEST MANGA 2022 このマンガを読め！」選者コメント	吉村麗 （特定研究員）	『フリースタイル 54 特集 THE BEST MANGA 2023 このマンガを読め！』（フリースタイル）	R4. 12. 20
11	「大会報告」	真住貴子 （主任研究員 教育普及室長）	『美術教育研究』第27号	R4. 7. 21

別表 14 所蔵作品等に関するセミナー・シンポジウムの開催

ア 東京国立近代美術館						
(本館)						
1	セミナー・シンポジウム タイトル	MOMAT コレクション小特集「プレイバック「抽象と幻想」展（1953-1954）」講演会				
	開催日	令和5年1月28日	場所	東京国立近代美術館講堂	聴講者数(人)	40
	講師・パネリスト	司会、講演者：長名大地（東京国立近代美術館企画課主任研究員） 講演者：暮沢剛巳（東京工科大学デザイン学部教授）				

	等の氏名 (職名)					
	内容	所蔵作品展「MOMAT コレクション」内の小特集「プレイバック「抽象と幻想」展(1953-1954)」の関連企画として、JSPS 科研費研究課題「シュルレアリスム美術における展覧会の機能に関する総合的研究」の後援を受けて行われた。VRによる再現など特徴的な試みについて(長名)や、「抽象と幻想」展開催時の時代背景について(暮沢)の発表がなされた。				
(国立工芸館)						
	セミナー・シンポジウム タイトル	工芸技術を支える人々				
	開催日	令和4年8月21日	場所	国立工芸館多目的室	聴講者数(人)	59
1	講師・パネリスト等の氏名(職名)	講師：菊池理予(独立行政法人 国立文化財機構 東京文化財研究所 無形文化遺産部 主任研究員)				
	内容	染織の専門家である東京文化財研究所の菊池理予氏をお招きし、専門家が感じる「ときめき」を工芸初心者の方々と共有するトークイベント。 *石川県との連携事業として開催				
	セミナー・シンポジウム タイトル	トランスナショナルな民芸運動を通して再考する工芸館のコレクション				
	開催日	令和5年2月12日	場所	国立工芸館多目的室	聴講者数(人)	68
2	講師・パネリスト等の氏名(職名)	講師：菊池裕子(金沢美術工芸大学教授)				
	内容	「工芸館と旅する世界展」の関連イベントとして開催した。特にアジア・アフリカ圏の状況や女性作家の位置づけなどに着目した新しい視点から工芸史研究を行っている菊池裕子氏をお招きし、「トランスナショナル」という領域横断的な切り口から、「工芸館と旅する世界展」における日本と世界の関係性を深く読み解いていただいた。 *石川県との連携事業として開催				
イ 国立映画アーカイブ						
	セミナー・シンポジウム タイトル	NFAJ&J. S. A. アーカイブセミナー 映画表現と音 『マダムと女房』				
	開催日	令和4年7月12日	場所	国立映画アーカイブ小ホール	聴講者数(人)	126
1	講師・パネリスト等の氏名(職名)	【登壇者】 八木信忠(日本大学名誉教授、協同組合日本映画・テレビ録音協会名誉会員) 上倉 泉(日本大学芸術学部映画学科教授、協同組合日本映画・テレビ録音協会) 志満順一(協同組合日本映画・テレビ録音協会理事長) 高木 創(協同組合日本映画・テレビ録音協会)				
	内容	主催：国立映画アーカイブ、協同組合日本映画・テレビ録音協会 協力：日本大学芸術学部映画学科				

	内容：デジタルでの映画制作や上映が主流となった現在において、公開当時のオリジナルの映像や音の保存と復元について知見を深め、映画の適正な保存や映画文化の継承をはかることを目的に開催。令和2年度以降、コロナ禍により開催を見送られていたが、今回は、国産トーキー映画の第一弾『マダムと女房』（1931年、五所平之助）をとりあげ、撮影時に使用した機材の特性の観点を交えて映画の音の生成と映画表現について考察した。					
	セミナー・シンポジウム タイトル		ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」記念特別イベント [上映と講演] 戦前日本の映画検閲—内務省 切除フィルムからみる—			
	開催日	令和4年10月15日	場所	国立映画アーカイブ小ホール	聴講者数(人)	295
2	講師・パネリスト等の氏名(職名)	<p>【上映】</p> <p>可燃性の切除フィルムから複製した①35mmフィルム、②同フィルムのデジタル版（同定した作品タイトル入り）、の2回上映</p> <p>【講演】（1時間）2回</p> <p>講師：加藤厚子氏「映画検閲再考—歴史資料としての切除フィルム—」</p>				
	内容	<p>ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」（10月27日）記念特別イベントとして、1988年に寄贈された鳥羽幸信コレクションから、戦前日本の映画検閲で切除されたシーンの断片集を初公開した。</p> <p>この切除フィルムは主に1925年から1939年に内務省警保局の検閲でカットされたフィルムと推定されるもので、本イベントでは、『日輪』（1925年、マキノ＝聯合、衣笠貞之助）などすでに失われた日本映画から当時の観客すら見ることができなかつた場面を、90年以上の時を経て初めてスクリーンに上映し、当時の映画検閲の制度や切除フィルムの資料的価値を講演をとおして考察した。</p>				

別表15 シンポジウムの開催等による国内外の優れた研究者等とのネットワークの構築

ア 東京国立近代美術館						
(本館)						
	セミナー・シンポジウム タイトル		ゲルハルト・リヒター《ビルケナウ》についての考察			
	開催日	令和4年8月20日	場所	ゲーテ・インスティテュート	聴講者数(人)	500
1	講師・パネリスト等の氏名(職名)	ディーター・シュヴァルツ（現代美術のキュレーター、作家）、西野路代（ドイツ文学研究）、榊田倫広（展覧会企画者、東京国立近代美術館主任研究員）				
	内容	ゲルハルト・リヒター展にあわせたゲーテ・インスティテュートとの共同企画シンポジウム。ゲルハルト・リヒター《ビルケナウ》の制作過程から展示の変遷を追い、記憶の想起力などドイツの歴史の文脈の中で作品をとらえることで、この重要な作品が現代に問いかける問題を考察。				
(国立工芸館)						
	セミナー・シンポジウム タイトル		伝統陶芸の未来			
	開催日	令和4年5月8日	場所	石川県立美術館講堂	聴講者数(人)	107
1	講師・パネリスト	講師：前田昭博（陶芸家）、今泉今右衛門（陶芸家） 聞き手：唐澤昌宏（国立工芸館館長）				

	等の氏名 (職名)					
	内容	人間国宝の陶芸家二人を招き、「伝統陶芸」の今と未来について検証するシンポジウム。 *石川県との連携事業として開催				
2	セミナー・シンポジウム タイトル	工芸ってなに？				
	開催日	令和4年9月17日	場所	国立工芸館多目的室	聴講者数(人)	38
	講師・パ ネリスト 等の氏名 (職名)	登壇者：青木千絵（漆彫刻家）、牟田陽日（陶芸家） 聞き手：岩井美恵子（国立工芸館工芸課長）				
	内容	美術と現代アートを学んだのち工芸素材を用いて作品を発表する作家二人に、工芸の魅力を中心に話を聞いた。				
3	セミナー・シンポジウム タイトル	工芸作品を作ること				
	開催日	令和4年11月5日	場所	国立工芸館多目的室	聴講者数(人)	44
	講師・パ ネリスト 等の氏名 (職名)	登壇者：池田晃将氏（漆芸家）、見附正康氏（陶芸家） 聞き手：岩井美恵子（国立工芸館工芸課長）				
	内容	現代アートと工芸両分野で高い評価を得る二人の作家が自作を紹介しながら着想源や交流関係などを絡めて話を進め、それぞれが考える「工芸」作品について検証した。 *石川県との連携事業として開催				
イ 京都国立近代美術館						
1	セミナー・シンポジウム タイトル	講演会「京・大坂の画家たちの交流」				
	開催日	令和4年4月9日	場所	1階講堂（オンライン配信あり）	聴講者数(人)	45
	講師・パ ネリスト 等の氏名 (職名)	講師：中谷伸生（関西大学名誉教授・一般財団法人きょうと視覚文化振興財団理事）				
	内容	展覧会「サロン！雅と俗ー京の大家と知られざる大坂画壇」の関連イベントとして、関西大学名誉教授・一般財団法人きょうと視覚文化振興財団理事の中谷伸生氏を迎え、講演会を実施した。				
2	セミナー・シンポジウム タイトル	講演会「大坂に西山派あり！ー芳園・完瑛にみる写生画の系譜」				
	開催日	令和4年4月23日	場所	1階講堂（オンライン配信あり）	聴講者数(人)	36
	講師・パ ネリスト 等の氏名 (職名)	講師：明尾圭造（大阪商業大学教授・商業史博物館主席学芸員）				
	内容	展覧会「サロン！雅と俗ー京の大家と知られざる大坂画壇」の関連イベントとして、大阪商業大学教授・商業史博物館主席学芸員の明尾圭造氏を迎え、講演会を実施した。				

3	セミナー・シンポジウム名	講演会「彫刻家・清水九兵衛とアフィニティ」				
	開催日	令和4年9月3日	場所	1階講堂（オンライン配信あり）	聴講者数(人)	37
	講師・パネリスト等の氏名(職名)	講師：森啓輔（千葉市美術館学芸員）				
内容	展覧会「生誕100年 清水九兵衛／六兵衛」の関連イベントとして、千葉市美術館学芸員の森啓輔氏を迎え、講演会を実施した。					
4	セミナー・シンポジウム タイトル	講演会「Collecting for the Public: Irene and Peter Ludwig（公共のための作品収集：イレーネ&ペーター・ルートヴィヒ）」				
	開催日	令和4年10月14日	場所	1階講堂（当日のみオンライン配信あり）	聴講者数(人)	39
	講師・パネリスト等の氏名(職名)	講師：カルラ・クギーニ（ペーター&イレーネ・ルートヴィヒ財団理事長）				
内容	展覧会「ルートヴィヒ美術館展 20世紀美術の軌跡—市民が創った珠玉のコレクション」の関連イベントとして、ペーター&イレーネ・ルートヴィヒ財団理事長のカルラ・クギーニ氏を迎え、講演会を実施した。					
5	セミナー・シンポジウム タイトル	講演会「リュウユの歴史—ヴァイキング船からアート・ギャラリーへ」				
	開催日	令和5年1月28日	場所	1階講堂（オンライン配信あり）	聴講者数(人)	68
	講師・パネリスト等の氏名(職名)	講師：トゥオマス・ソパネン（本展出品者）				
内容	展覧会「リュウユ—フィンランドのテキスタイル：トゥオマス・ソパネン・コレクション」の関連イベントとして、本展出品者のトゥオマス・ソパネン氏を迎え、講演会を実施した。					
6	セミナー・シンポジウム タイトル	講演会「甲斐荘楠音をとおして女装の時代を考える」				
	開催日	令和5年2月23日	場所	1階ロビー（オンライン配信あり）	聴講者数(人)	103
	講師・パネリスト等の氏名(職名)	講師：井上章一（国際日本文化研究センター所長）				
内容	展覧会「開館60周年記念 甲斐荘楠音の全貌—絵画、演劇、映画を越境する個性」の関連イベントとして、国際日本文化研究センター所長の井上章一氏を迎え、講演会を実施した。					
7	セミナー・シンポジウム タイトル	講演会「太秦時代劇における甲斐荘楠音の役割と功績」				
	開催日	令和5年3月4日	場所	1階講堂	聴講者数(人)	80

講師・パネリスト等の氏名(職名)	講師：山口記弘（東映株式会社・経営戦略部フェロー）				
内容	展覧会「開館 60 周年記念 甲斐荘楠音の全貌—絵画、演劇、映画を越境する個性」の関連イベントとして、東映株式会社・経営戦略フェローの山口記弘氏を迎え、講演会を実施した。				
ウ 国立映画アーカイブ					
セミナー・シンポジウム タイトル	歌舞伎学会 2022 年度秋季大会 『歌舞伎・文楽の発掘映像をみる』				
開催日	令和 4 年 12 月 4 日	場所	早稲田大学 戸山キャンパス 38 号館 AV 教室	聴講者数(人)	138
講師・パネリスト等の氏名(職名)	<p>【上映解説】</p> <p>講師：原田真澄（早稲田大学演劇博物館助教）『生きている人形』解説</p> <p>講師：大傍正規（国立映画アーカイブ）「林又一郎旧蔵フィルムコレクションと『生きている人形』のコンカラーについて」解説</p> <p>講師：児玉竜一（早稲田大学文学部教授）「林又一郎コレクション」上映同時解説</p> <p>【対談】 渡辺保（演劇評論家）×児玉竜一（早稲田大学文学部教授）</p>				
内容	<p>主催：歌舞伎学会、国立映画アーカイブ</p> <p>内容：歌舞伎学会との共催企画により、『生きている人形』（1958 年、山本プロ）と林又一郎コレクション 17 本を上映し、上映前に当館主任研究員により、『生きている人形』のコンカラーと林又一郎旧蔵フィルムの発見について解説を行った。</p>				
セミナー・シンポジウム タイトル	共催上映「アカデミー・フィルム・アーカイブ 映画コレクション」の上映作品に因んだ講演会				
開催日	令和 5 年 1 月 28、 2 月 2 日	場所	国立映画アーカイブ小ホール	聴講者数(人)	157
講師・パネリスト等の氏名(職名)	講師：アカデミー・フィルム・アーカイブ ジョセフ・リンドナー				
内容	<p>アカデミー・フィルム・アーカイブ(AFA)との共催上映「アカデミー・フィルム・アーカイブ 映画コレクション」において、上映作品に因んだ講演を行った。</p> <p>○1 月 28 日 2 回目上映後 16:57～17:56 聴講者 102 人 ジョセフ・リンドナー氏による講演（逐次通訳付き） テーマ：「映画製作における保存と修復について」</p> <p>○2 月 2 日 1 回目上映後 15:54～17:06 聴講者 55 人 ジョセフ・リンドナー氏による講演（逐次通訳付き） テーマ：「『日本の映画作り』の実際の修復作業の経緯について」</p>				
セミナー・シンポジウム名	映画史家・塚田嘉信 そのコレクションと業績				
開催日	令和 5 年 3 月 18 日	場所	国立映画アーカイブ小ホール	聴講者数(人)	112

<p>講師・パネリスト等の氏名(職名)</p>	<p>○イントロダクション 1:30～1:35 研究プロジェクト「塚田嘉信コレクションを起点に初期映画史を読み直す」について 講師：入江良郎（研究代表者、国立映画アーカイブ主任研究員／東京国立近代美術館主任研究員） 1:35～1:45 発表「よみがえる塚田嘉信コレクション—資料の受け入れと今後の活用」 講師：岡田秀則（国立映画アーカイブ主任研究員／東京国立近代美術館主任研究員） ○塚田嘉信の功績 1:50～2:50 基調講演「塚田嘉信氏旧蔵資料に就いて」 講師：本地陽彦（日本映画史研究家） 3:05～3:25 発表「塚田嘉信旧蔵（創刊号を中心とした）雑誌コレクション調査報告」 講師：佐崎順昭（国立映画アーカイブ客員研究員） ○塚田嘉信コレクションを用いた研究発表 3:30～3:50 発表「映画を二番目にみた女性皇族—初期映画と皇室の関わり」 講師：紙屋牧子（玉川大学芸術学部非常勤講師） 3:55～4:15 発表「『南極探検活動写真』（1912）関連資料の同定研究—『活動写真機械及フィルム定価表』（1912）に見る最古の長篇記録映画」 講師：大傍正規（国立映画アーカイブ主任研究員／東京国立近代美術館主任研究員） 4:20～4:40 発表「『北清事変活動写真』と『新製活動写真』—最古の映画商社・吉澤商店における映画製作の起源」 講師：入江良郎（研究代表者、国立映画アーカイブ主任研究員／東京国立近代美術館主任研究員）</p>																		
<p>内容</p>	<p>主催：国立映画アーカイブ、東京国立近代美術館、 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究(C) 「塚田嘉信コレクションを起点に初期映画史を読み直す」（研究代表者・入江良郎） 協力：科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究(C) 「明治末期から戦中期までの映画に描かれた/描かれなかった天皇・皇族の表象」 （研究代表者・紙屋牧子） 内容：日本映画史の研究に高度な実証研究の扉を開いた映画史家である塚田嘉信氏については、1995年の同氏の急逝によりその研究は中断されていたが、それから20年以上を経た2018年に同氏の遺族から当館が寄贈を受け、2020～2022年度の科学研究費助成事業として3年間の研究プロジェクトに取り組むこととなった。本年度、同研究が最終年度を迎えたためその成果を研究発表会として披露した。</p>																		
<p>ウ 国立西洋美術館</p>																			
<p>1</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="193 1585 331 1630"> <p>セミナー・シンポジウム タイトル</p> </td> <td colspan="5" data-bbox="331 1585 1445 1630"> <p>全国美術館会議 第37回 学芸員研修会（保存研究部会主催）</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="193 1630 331 1921"> <p>開催日</p> </td> <td data-bbox="331 1630 619 1921"> <p>令和5年3月20日</p> </td> <td data-bbox="619 1630 707 1921"> <p>場所</p> </td> <td data-bbox="707 1630 1034 1921"> <p>国立西洋美術館講堂</p> </td> <td data-bbox="1034 1630 1217 1921"> <p>聴講者数(人)</p> </td> <td data-bbox="1217 1630 1445 1921"> <p>317人 ※会場参加申込30人+オンライン参加申込265人+関係者22人（R5年3月19日現在）</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="193 1921 331 2063"> <p>講師・パネリスト</p> </td> <td colspan="5" data-bbox="331 1921 1445 2063"> <p>パネリスト：奈良本真紀（川崎市市民ミュージアム教育普及部門長）、泉田邦彦（石巻市博物館学芸員（主任主事））、塚本麻莉（高知県立美術館主任学芸員、保存研究部会員）、小谷竜介（国立文化財機構文化財防災センター文化財防災統括リーダー）、浜田拓志（国立文化財機構文化財防災センタ</p> </td> </tr> </table>	<p>セミナー・シンポジウム タイトル</p>	<p>全国美術館会議 第37回 学芸員研修会（保存研究部会主催）</p>					<p>開催日</p>	<p>令和5年3月20日</p>	<p>場所</p>	<p>国立西洋美術館講堂</p>	<p>聴講者数(人)</p>	<p>317人 ※会場参加申込30人+オンライン参加申込265人+関係者22人（R5年3月19日現在）</p>	<p>講師・パネリスト</p>	<p>パネリスト：奈良本真紀（川崎市市民ミュージアム教育普及部門長）、泉田邦彦（石巻市博物館学芸員（主任主事））、塚本麻莉（高知県立美術館主任学芸員、保存研究部会員）、小谷竜介（国立文化財機構文化財防災センター文化財防災統括リーダー）、浜田拓志（国立文化財機構文化財防災センタ</p>				
<p>セミナー・シンポジウム タイトル</p>	<p>全国美術館会議 第37回 学芸員研修会（保存研究部会主催）</p>																		
<p>開催日</p>	<p>令和5年3月20日</p>	<p>場所</p>	<p>国立西洋美術館講堂</p>	<p>聴講者数(人)</p>	<p>317人 ※会場参加申込30人+オンライン参加申込265人+関係者22人（R5年3月19日現在）</p>														
<p>講師・パネリスト</p>	<p>パネリスト：奈良本真紀（川崎市市民ミュージアム教育普及部門長）、泉田邦彦（石巻市博物館学芸員（主任主事））、塚本麻莉（高知県立美術館主任学芸員、保存研究部会員）、小谷竜介（国立文化財機構文化財防災センター文化財防災統括リーダー）、浜田拓志（国立文化財機構文化財防災センタ</p>																		

	等の氏名 (職名)	一客員研究員)、邊牟木尚美(国立西洋美術館主任研究員・保存修復室長、全美災害対策委員、保存研究部会員)、貝塚健(アーティゾン美術館学芸員、全美災害対策委員会副委員長)				
	内容	テーマ:「美術館の防災対策」 年々増え続ける自然災害により美術館博物館が被害を受けるケースも増加し、災害やその対策への社会的関心が高まっていることを受けて、テーマを「美術館の防災対策」とした。過去の美術館被災事例、および、各館が今後の防災対策を検討する上で基礎となり得る組織や情報の紹介を含む。学芸員だけではなく、美術館に勤務するすべての職員を対象とする。				
エ 国立国際美術館						
1	セミナー・シンポジウム タイトル	大岩オスカル来日記念講演会「ウィルスとの戦い」				
	開催日	令和4年4月2日	場所	国立国際美術館 講堂、オンライン	聴講者数(人)	72
	講師・パネリスト等の氏名 (職名)	講師:大岩オスカル(美術家、出品作家)				
	内容	ニューヨークを拠点に創作活動続ける大岩オスカル氏を招き、コロナ禍で考えたこと、そして今日の世界の状況を目の当たりにして、画家としていかに生きるかということについて語る講演会を開催した。				
2	セミナー・シンポジウム タイトル	NMAO トーク ヨン・マ「第11回ソウル・メディアシティ・ビエンナーレについて」				
	開催日	令和4年4月14日	場所	オンライン	聴講者数(人)	31
	講師・パネリスト等の氏名 (職名)	講師:ヨン・マ(第11回ソウル・メディアシティ・ビエンナーレ アーティスティック・ディレクター/ヘイワード・ギャラリー キュレーター)				
内容	第11回ソウル・メディアシティ・ビエンナーレ(2021)でアーティスティック・ディレクターを務めたヨン・マ氏を招き、オンライン・トークを開催した。ヨン・マ氏がテーマにかかげた「One Escape at a Time」について、またパンデミックの状況下で開催された同ビエンナーレについて紹介した。					
3	セミナー・シンポジウム タイトル	NMAO トーク・マラソン2022				
	開催日	令和4年9月10日、 令和4年9月11日	場所	国立国際美術館 講堂、オンライン	聴講者数(人)	909
	講師・パネリスト等の氏名 (職名)	登壇者:中村茜(パフォーミングアーツ・プロデューサー、株式会社 precog 代表取締役)×島敦彦(国立国際美術館長) トビアス・バーガー(大館現代美術館館長)×植松由佳(国立国際美術館学芸課長) 中西學(現代美術家)×安來正博(国立国際美術館上席研究員) 端山聡子(横浜美術館教育普及グループ教育プロジェクトチームリーダー、主任学芸員)×藤吉祐子(国立国際美術館主任研究員) 千葉雅也(立命館大学大学院先端総合学術研究科 教授)×橋本梓(国立国際美術館主任研究員) 福尾匠(日本学術振興会特別研究員、哲学研究者・批評家)×福元崇志(国立国際美術館主任研究員)				

		0 JUN (画家) ×小川絢子 (国立国際美術館研究員) 箭内匡 (東京大学 大学院総合文化研究科 超域文化科学専攻 教授) ×田中晋平 (国立国際美術館客員研究員) キム・ヘジュ (釜山ビエンナーレ 2022 芸術監督) ×馬定延 (国立国際美術館客員研究員)				
	内容	国立国際美術館の研究員が、自らの研究テーマや現在抱いている興味関心領域あるいは過去に実施した事業に関連する対談相手を招き、連続トークを実施する2日間のイベントを開催した。				
4	セミナー・シンポジウム名	講演会「具体の時代：草創期の”新人たち”をめぐって」				
	開催日	令和4年11月27日	場所	国立国際美術館 講堂	聴講者数(人)	33
	講師・パネリスト等の氏名(職名)	講師：光田由里 (多摩美術大学大学院教授、アートアーカイヴセンター所長)				
	内容	「すべて未知の世界へ — GUTAI 分化と統合」展の関連イベントとして多摩美術大学大学院教授、アートアーカイヴセンター所長の光田由里氏を講師に招き、講演会を開催した。				
5	セミナー・シンポジウム タイトル	アーティストトーク：今井祝雄				
	開催日	令和4年12月10日	場所	国立国際美術館 講堂	聴講者数(人)	61
	講師・パネリスト等の氏名(職名)	講師：今井祝雄 (出品作家) 聞き手：福元崇志 (国立国際美術館 主任研究員)				
	内容	「すべて未知の世界へ — GUTAI 分化と統合」展の出品作家である今井祝雄氏を招き、アーティストトークを開催した。				
6	セミナー・シンポジウム タイトル	講演会「ベルクグリーン美術館におけるピカソ作品の90年」				
	開催日	令和5年2月4日	場所	国立国際美術館 講堂	聴講者数(人)	106
	講師・パネリスト等の氏名(職名)	講師：ガブリエル・モントゥア (ベルリン国立ベルクグリーン美術館統括責任者)				
	内容	「ピカソとその時代 ベルリン国立ベルクグリーン美術館展」の関連イベントとして、ベルリン国立ベルクグリーン美術館統括責任者のガブリエル・モントゥア氏を招き、講演会を開催した。				
7	セミナー・シンポジウム タイトル	講演会「ピカソとドラ・マール：ファシズムと戦争の時代の芸術」				
	開催日	令和5年3月4日	場所	国立国際美術館 講堂	聴講者数(人)	104
	講師・パネリスト等の氏名(職名)	講師：村上博哉 (武蔵野美術大学教授)				
	内容	「ピカソとその時代 ベルリン国立ベルクグリーン美術館展」の関連イベントとして、武蔵野美術大学教授の村上博哉氏を招き、講演会を開催した。				

オ 国立新美術館						
1	セミナー・シンポジウム タイトル	連続講座：今、絵画について考える 第1回「絵画の手」				
	開催日	令和4年4月8日	場所	国立新美術館3階講堂	聴講者数(人)	35名
	講師・パネリスト等の氏名(職名)	平倉圭(横浜国立大学大学院 准教授)				
	内容	絵画について考える講演会シリーズ：「メトロポリタン美術館展 西洋絵画の500年」に関連し、絵画に「描きこまれた手」と絵画を「描く画家の手」を起点に、15世紀から19世紀までの西洋絵画作品および、その鑑賞実践について分析がなされた。				
2	セミナー・シンポジウム タイトル	連続講座：今、絵画について考える 第2回「点描から垣間見える死——スーラとダミアン・ハースト」				
	開催日	令和4年5月14日	場所	国立新美術館3階講堂	聴講者数(人)	49名
	講師・パネリスト等の氏名(職名)	加藤有希子(埼玉大学大学院人文社会科学研究所准教授)				
	内容	絵画について考える講演会シリーズ：「ダミアン・ハースト 桜」展に関連し、点描と「死」のテーマを軸に、ジョルジュ・スーラからダミアン・ハーストに至る絵画作品について分析がなされた。				
3	セミナー・シンポジウム タイトル	文化庁アートプラットフォーム シンポジウム「人々が作るパブリック・コレクション：独・ルートヴィヒ美術館における現代美術コレクションの形成」				
	開催日	令和4年6月30日	場所	国立新美術館3階講堂/オンライン	聴講者数(人)	195名(アーカイブ1,029回、3/10時点)
	講師・パネリスト等の氏名(職名)	講師：イルマーズ・ズィヴィオー(ルートヴィヒ美術館館長) モデレーター：片岡真実(日本現代アート委員会会長、アート・コミュニケーションセンター(仮称)エグゼクティブ・アドバイザー、森美術館館長)				
	内容	ルートヴィヒ美術館館長のイルマーズ・ズィヴィオー氏を招聘し、美術館と市民との生きた交流とその成果を紹介いただき、日本における市民と美術館との関係について考える機会とした。				
4	セミナー・シンポジウム タイトル	文化庁アートプラットフォーム シンポジウム「日本の現代美術を翻訳する：言説、文脈、歴史」				
	開催日	令和4年7月7日	場所	国立新美術館3階講堂/オンライン	聴講者数(人)	211名(アーカイブ1,368回、3/10時点)
	講師・パネリスト等の氏名(職名)	登壇者：大館奈津子(日本現代アート委員会委員/翻訳事業意見交換会メンバー/芸術公社/一色事務所)、富井玲子(美術史家)、ウィリアム・マロッチェ(カリフォルニア大学ロサンゼルス校歴史学部准教授)、中嶋泉(翻訳事業意見交換会メンバー/大阪大学大学院人文学研究科准教授)、山本浩貴(翻訳事業意見交換会メンバー/金沢美術工芸大学美術科芸術学講師)、大久保玲奈(文化庁ア				

	ートプラットフォーム事業事務局／翻訳家) モデレーター：加治屋健司（日本現代アート委員会委員／翻訳事業意見交換会メンバー／東京大学大学院総合文化研究科教授）					
内容	文化庁アートプラットフォーム事業では、日本における文脈や言説の形成が海外からも見えるように、日本現代美術に関する重要文献を翻訳し、ウェブサイトで公開してきた。また、翻訳、クロスチェック、校閲というプロセスを導入し、日本語を翻訳する際のスタイルガイドを作成するなど、美術翻訳の質的向上にも力を入れてきた。日本国内における現代美術の評論や研究は長年にわたって行われており、その全貌は依然として海外からは見えにくい状況にあるため、海外において日本の現代美術の評論や研究はどう捉えられているのか、また、日本の現代美術について、どのような研究や評論、展示がなされているのか、海外で日本近現代美術の研究に携わってきた研究者を招いて、こうした問題を議論しつつ、今後どのように日本の現代美術の海外発信を行うのがよいかについても考察する機会とした。					
5	セミナー・シンポジウム名		連続対談シリーズ：対話より 松井茂と李禹煥			
	開催日	令和4年7月26日（収録日）	場所	国立新美術館3階講堂（オンライン）	聴講者数(人)	再生回数759回 (3/31時点)
	講師・パネリスト等の氏名(職名)	松井茂（情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] 准教授）				
	内容	連続対談シリーズ：対話よりの一環として行われた松井茂と李禹煥の対談。60年代から70年代の作品を中心に、虚像の概念を巡って議論がなされた。				
6	セミナー・シンポジウム タイトル		連続講座：今、絵画について考える 第3回「抽象の探求 — カンディンスキーとマレーヴィチの“非対象／無対象”の絵画」			
	開催日	令和4年8月7日	場所	国立新美術館3階講堂	聴講者数(人)	83名
	講師・パネリスト等の氏名(職名)	大島徹也（多摩美術大学 准教授 / 美術史家（西洋近現代美術史））				
	内容	絵画について考える講演会シリーズ：「ルートヴィヒ美術館展 20世紀美術の軌跡—市民が創った珠玉のコレクション」に関連し、ワシリー・カンディンスキーとウラジミール・マレーヴィチの抽象画について比較・分析がなされた。				
7	セミナー・シンポジウム タイトル		講演会 「3つの展覧会／3つの歴史的場所」 アルフレッド・バックマン			
	開催日	令和4年8月9日	場所	国立新美術館3階講堂	聴講者数(人)	79名
	講師・パネリスト等の氏名(職名)	アルフレッド・バックマン（キュレーター、美術評論家）				
	内容	李禹煥のフランスでの活動についての講演会				
8	セミナー・シンポジウム タイトル		連続対談シリーズ：対話より 王舒野と李禹煥			
	開催日	令和4年8月21日	場所	国立新美術館3階講堂	聴講者数(人)	93名

	講師・パネリスト等の氏名(職名)	王舒野 (美術家)				
	内容	連続対談シリーズ：対話よりの一環として行われた王舒野と李禹煥の対談。日本、中国、韓国という3つの国の視点から、李禹煥の作品について議論がなされた。				
9	セミナー・シンポジウム タイトル	連続対談シリーズ：対話より 酒井忠康と李禹煥				
	開催日	令和4年8月27日	場所	国立新美術館3階講堂	聴講者数(人)	71名
	講師・パネリスト等の氏名(職名)	酒井忠康 (世田谷美術館館長、東北芸術工科大学客員教授)				
	内容	連続対談シリーズ：対話よりの一環として行われた酒井忠康と李禹煥の対談。李禹煥がヨーロッパで活動するきっかけとなった、ドイツでの展覧会について議論がなされた。				
10	セミナー・シンポジウム タイトル	連続対談シリーズ：対話より ハンス・ウルリッヒ・オブリストと李禹煥				
	開催日	令和4年9月4日	場所	国立新美術館3階講堂	聴講者数(人)	70名
	講師・パネリスト等の氏名(職名)	ハンス・ウルリッヒ・オブリスト (キュレーター、美術評論家)				
	内容	連続対談シリーズ：対話よりの一環として行われたハンス・ウルリッヒ・オブリストと李禹煥の対談。李禹煥のイギリスでの展覧会と、国際的な活動について議論がなされた。				
11	セミナー・シンポジウム タイトル	シンポジウム：国際的文脈における李禹煥				
	開催日	令和4年9月11日	場所	国立新美術館3階講堂/オンライン	聴講者数(人)	138名 (うちオンライン65名)
	講師・パネリスト等の氏名(職名)	アレクサンドラ・モンロー (グッゲンハイム・アブダビ、キュレトリアル部門ディレクター、兼ソロモン・R・グッゲンハイム美術館、グローバルアート・シニアアドバイザー、アジアアート・シニアキュレーター) 吉竹美香 (インディペンデントキュレーター) ドリュン・チョン (M+キュレトリアル部門副館長、チーフキュレーター) ジルケ・フォン・ベルスヴォルト=ヴァルラーベ (美術史家、シチュアション・クンスト財団会長) ジャン=マリ・ガレ (ピノーコレクション、キュレーター) 李禹煥 米田尚輝 (国立新美術館主任研究員)				
	内容	李禹煥の活動について、アメリカ、香港、ドイツ、フランスなど、様々な視点から議論がなされた。				
12	セミナー・シンポジウム タイトル	国立新美術館 連続講座：今、絵画について考える 第4回「絵画と全方位—地球/惑星を描く」				
	開催日	令和4年9月19日	場所	国立新美術館3階講堂	聴講者数(人)	50名

	講師・パネリスト等の氏名(職名)	沢山遼 (近現代美術/美術批評)				
	内容	絵画について考える講演会シリーズ:「ルートヴィヒ美術館展 20世紀美術の軌跡—市民が創った珠玉のコレクション」に関連し、抽象画における方位の問題について論じられた。				
13	セミナー・シンポジウム タイトル	六本木アートナイト 2022 クロストーク:今井俊介×沢山遼				
	開催日	令和4年9月19日	場所	国立新美術館3階講堂	聴講者数(人)	65名
	講師・パネリスト等の氏名(職名)	沢山遼 (近現代美術/美術批評) 今井俊介 (美術家)				
	内容	国立新美術館のロビーでインスタレーションを発表する今井俊介と、絵画についての鋭い考察で知られる美術批評家、沢山遼によるクロストークを行った。今井は、二次元と三次元が交差する、鮮やかでポップな絵画を基盤にしつつ、立体や映像、そしてインスタレーションへとメディアを拡大してきた。学生時代からの友人であり、この変遷を目撃してきた沢山との対談を通じて、今井の絵画の本質とその軽やかな変遷が明らかになった。				
14	セミナー・シンポジウム タイトル	文化庁現代アートワークショップ				
	開催日	令和4年9月23日～25日	場所	愛知芸術文化センター/オンライン	聴講者数(人)	244名(アーカイブ1,698回)
	講師・パネリスト等の氏名(職名)	皮力 (M+ シング・シニアキュレーター兼学芸統括)、パク・ジュウオン (韓国国立現代美術館)、古市保子 (元 国際交流基金アジアセンター 美術コーディネーター)、スクリプカリウ落合安奈 (美術家)、潘逸舟 (美術家)、MES (新井健、谷川果菜絵)、バート・ウィンザー=タマキ (カリフォルニア大学アーヴァイン校教授)、ガブリエル・リッター (カリフォルニア大学サンタバーバラ校准教授)、チェルシー・フォックスウェル (シカゴ大学准教授)、アデ・ダルマワン (ruangrupa 設立メンバー・スポークスマン/documenta 15 ディレクター)、キャロル・インハ・ルー (ヨコハマトリエンナーレ 2023 アーティスティック・ディレクター)、崔敬華 (東京都現代美術館学芸員)、中村史子 (愛知県美術館 学芸員/国際芸術祭あいち 2022 キュレーター)、Reuben Keehan (クイーンズランド・アートギャラリー ブリスベン近代美術館アジア現代美術キュレーター)、服部浩之 (東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻 准教授)、金井直 (信州大学人文学部教授)、馬定延 (関西大学准教授)、熊倉晴子 (森美術館アシスタント・キュレーター)、梶田倫広 (東京国立近代美術館主任研究員)、尹志慧 (国立新美術館特定研究員)、山田裕理 (東京都写真美術館学芸員)、大塚真弓 (横浜美術館主任学芸員/主任エドゥケーター)、鈴木幸太 (ポーラ美術館学芸員)、中田耕市 (金沢 21 世紀美術館 学芸課長)、能勢陽子 (豊田市美術館学芸員)、牧口千夏 (京都国立近代美術館主任研究員)、藤田瑞穂 (京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA チーフキュレーター/プログラムディレクター)、松岡剛 (広島市現代美術館主任学芸員)、赤井あずみ (鳥取県立博物館主任学芸員)、レオナルド・バルトロメウス (山口情報芸術センターキュレーター)、佐々木玄太郎 (熊本市現代美術館 学芸員)、片岡真実 (森美術館館長)、植松由佳 (国立国際美術館学芸課長)、大館奈津子 (芸術公社/一色事務所)、岡部美紀、加治屋健司 (東京大学大学院教授)、神谷幸江 (美術評論・キュレーター)、川口雅子 (国立アトリサーチセンター (仮称) 設置準備室情				

		報資料グループ グループリーダー)、成相肇(東京国立近代美術館美術課主任研究員(コレクション情報発信室長)、逢坂恵理子(国立新美術館長)、長屋光枝(国立新美術館学芸課長)				
	内容	文化庁の委託事業として最終年度である今年度、これまで五カ年の取り組みの総括的なプログラムとして、この間のアジア太平洋地域の現代アートにおける新しい動向、ネットワーキングの拠点について学びつつ、美術館活動やキュレーションの実践、ならびにアカデミアにおける議論から、特定の地域における美術および美術史の発信と需要、共同研究、次世代への知識や経験の継承等についてともに考えを深める機会とした。				
15	セミナー・シンポジウム タイトル	Bunka-cho Art Platform Japan Translation Workshop : Translating Art Writing				
	開催日	令和4年11月15日	場所	オンライン	聴講者数(人)	88名(アーカイブ262回)
	講師・パネリスト等の氏名(職名)	登壇者:アンドリュー・マークル(アートライター、エディター、翻訳者)				
	内容	本ワークショップでは、文化庁アートプラットフォーム事業翻訳プロジェクトの創設メンバーでありエディトリアル・ディレクターを務めていたアンドリュー・マークル氏が、国際的な現代アートのライティングの特徴を紹介し、日本語で書かれたアート・ライティングを英語に翻訳する際に重要となるテクニックを紹介した。				
16	セミナー・シンポジウム タイトル	国立新美術館:連続講座「美術館を考える」第1回「美術館の誕生1877」				
	開催日	令和4年11月27日	場所	国立新美術館3階講堂	聴講者数(人)	40名
	講師・パネリスト等の氏名(職名)	木下直之(静岡県立美術館館長)				
	内容	日本における美術館の成り立ちについて、歴史的な経緯が論じられた。				
17	セミナー・シンポジウム タイトル	Bunka-cho Art Platform Japan Translation Workshop : 翻訳と出版プロセス				
	開催日	令和4年12月7日	場所	オンライン	聴講者数(人)	55名(アーカイブ131回)
	講師・パネリスト等の氏名(職名)	登壇者:大舘奈津子(日本現代アート委員会委員/翻訳事業意見交換会メンバー/芸術公社/一色事務所)、神谷幸江(日本現代アート委員会委員/キュレーター/美術評論)、アンドリュー・マークル(アートライター/エディター/翻訳家)				
	内容	文化庁アートプラットフォーム事業では、日本における文脈や言説の形成が海外からも見えるように、日本現代美術に関する重要文献を翻訳し、ウェブサイトで公開してきた。また、翻訳、クロスチェック、校閲というプロセスを導入し、日本語を翻訳する際のスタイルガイドを作成するなど、美術翻訳の質的向上にも力を入れてきた。翻訳の質の向上を目指しながら、さらにその翻訳原稿を出版というアウトプットへと繋げるためには、どのようなことが必要か。バイリンガルもしくは他言語での出版にはどのような形があり、それぞれ何を重要と考えるか。本事業で翻訳プロジェクトを進めてい				

		る大館奈津子氏をモデレーターに、国内外でカタログ出版経験のあるキュレーター、評論家の神谷幸江氏、翻訳家、編集者のアンドリュー・マークル氏を招きし、考える機会とした。				
18	セミナー・シンポジウム タイトル	国立新美術館：連続講座「美術館を考える」第2回「展覧会とアーカイブ—モノをめぐる空間」				
	開催日	令和4年12月18日	場所	国立新美術館3階講堂	聴講者数(人)	37名
	講師・パネリスト等の氏名(職名)	渡部葉子(慶應義塾大学アート・センター 教授/キュレーター、慶應義塾ミュージアム・コモンズ 副機構長)				
	内容	講演者の勤務する慶應義塾大学アート・センターでの展示や鑑賞教育の実例をもとにアーカイブをどのように構築するか、また、展示をどのように考えていくべきについて論じられた。				
19	セミナー・シンポジウム タイトル	文化庁アートプラットフォーム シンポジウム「日本のアート振興のこれから：5カ年を振り返り今後を考える」				
	開催日	令和5年2月23日	場所	国立新美術館3階講堂/オンライン	聴講者数(人)	393名(アーカイブ726回)
	講師・パネリスト等の氏名(職名)	<p>第一部登壇者：植松由佳(国立国際美術館学芸課長、日本現代アート委員会副座長)、大館奈津子(芸術公社/一色事務所、日本現代アート委員会、翻訳事業意見交換会メンバー)、川口雅子(国立アートリサーチセンター(仮称)設置準備室 情報資料グループ グループリーダー、日本現代アート委員会)</p> <p>成相肇(東京国立近代美術館美術課主任研究員(コレクション情報発信室長)、日本現代アート委員会)</p> <p>第一部モデレーター：片岡真実(森美術館館長、日本現代アート委員会座長、独立行政法人国立美術館エグゼクティブ・アドバイザー)</p> <p>第二部①登壇者：光田由里(多摩美術大学大学院教授、多摩美術大学アートアーカイブセンター所長)</p> <p>第二部①聞き手：加治屋健司(東京大学大学院総合文化研究科教授、日本現代アート委員会、翻訳事業意見交換会メンバー)、中嶋泉(大阪大学大学院准教授、翻訳事業意見交換会メンバー)</p> <p>第二部②登壇者：黒ダライ兒</p> <p>第二部②聞き手：大館奈津子(芸術公社/一色事務所、日本現代アート委員会、翻訳事業意見交換会メンバー)、山本浩貴(金沢美術工芸大学講師、翻訳事業意見交換会メンバー)</p>				
	内容	文化庁アートプラットフォーム事業では、日本における現代アートの持続的発展を目指し、その国際的な評価を高めるための取り組みを推進してきた。5カ年の最終年度となる今年度、その成果を振り返り、今後日本のアート振興について、考える機会とした。第一部は、文化庁アートプラットフォーム事業が推進してきたワークショップ、国際シンポジウム、ウェビナー、翻訳事業、全国美術館収蔵品データベース「SHŪZŌ」など、日本におけるアート振興のための基盤を整備する数々のプロジェクトについて。第二部は、アートプラットフォーム事業の中核事業の一つとして進めてきた二冊の書籍の海外出版を記念し、著者によるトークセッションを行った。				
20	セミナー・シンポジウム タイトル	国立新美術館：連続講座「美術館を考える」第3回「21世紀の美術館はどこへ向かうのか：資本主義とコスモポリタニズム」				
	開催日	令和5年2月18日	場所	オンライン (Zoom)	聴講者数(人)	78名

	講師・パ ネリスト 等の氏名 (職名)	村田麻里子（関西大学社会学部教授／オランダ国際アジア研究所（IIAS）研究員）				
	内容	オランダ、イギリス、ベルギーの博物館、美術館においてどのように脱植民主義的な視点から展示が構成されているかという実例を紹介しながら、資本主義とコスモポリタニズムの関係について論じられた。				
21	セミナー・シンポジウム タイトル	45分でめぐるルーヴル美術館				
	開催日	令和5年3月1日	場所	国立新美術館3階講堂	聴講者数(人)	150名
	講師・パ ネリスト 等の氏名 (職名)	ローランス・デ・カール（ルーヴル美術館 総裁・館長）				
	内容	2021年9月にルーヴル美術館総裁・館長に就任したローランス・デ・カール氏の視点から、同館のミッション、建築、コレクションと展示、今後の展望が論じられた。				
22	セミナー・シンポジウム タイトル	国立新美術館：連続講座「美術館を考える」第4回「美術館をメディアとして考える」				
	開催日	令和5年3月19日	場所	国立新美術館3階講堂	聴講者数(人)	45名
	講師・パ ネリスト 等の氏名 (職名)	光岡寿郎（東京経済大学コミュニケーション学部教授）				
	内容	美術館のメディアとしての特徴や、鑑賞以外の多様なコミュニケーションについて論じられた。				

独立行政法人国立美術館の役職員の報酬・給与等について

I 役員報酬等について

1 役員報酬についての基本方針に関する事項

① 役員報酬の支給水準の設定についての考え方

国立美術館は、美術館を設置して、美術(映画を含む)に関する作品その他資料を収集し、保管して公衆の観覧に供するとともに、これに関連する調査及び研究並びに教育及び普及の事業等を行うことにより、芸術その他の文化の振興を図ることを目的としている。

そうした組織の中で、理事長は、法人全体の活動を総括する一方で、我が国における芸術文化の創造と発展、国民の美的感性の育成を使命とし、美術振興の中心拠点として、高いマネジメント能力やリーダーシップに加え、高度な専門性が求められる。

理事においてもこれら多岐に渡る業務を遂行する理事長の職務を補佐するにあたり、相当の能力と専門性が求められる。

以上により役員報酬の設定にあたっては、国家公務員の指定職、文化分野の保存・活用等を図ることを主要な業務とする他法人の長を参考とした。

② 令和4年度における役員報酬についての業績反映のさせ方(業績給の仕組み及び導入実績を含む。)

独立行政法人国立美術館役員報酬規則により、役員に支給される報酬のうち、期末特別手当においては、文部科学大臣が行う業績評価、役員としての業務に対する貢献度等を総合的に勘案して理事長が決定する評価に基づき、期末特別手当の額の100分の10の範囲内で、これを増額し、又は減額した額とすることができるものとしている。令和4年度においては、業績に反映するほどの特に顕著な業績や失態がなかったと判断し、役員報酬の増減は行わなかった。

③ 役員報酬基準の内容及び令和4年度における改定内容

法人の長

役員報酬支給基準は、月額及び期末特別手当から構成されている。月額については、独立行政法人国立美術館役員報酬規則に則り、俸給月額(965,000円)及び地域手当の月額、並びに俸給月額及び地域手当の月額に100分の20を乗じて得た額、並びに俸給月額に100分の25を乗じて得た額の合計額に、6月に支給する場合においては100分の162.5、12月に支給する場合においては100分の167.5を乗じて得た額としている。また、文部科学大臣が行う業績評価の結果を勘案して、前項の規定による期末特別手当の額の100分の10の範囲内で、これを増額し、又は減額した額とすることができることとしている。

なお、令和4年度では、国家公務員の給与改定の状況を踏まえた改定として、期末特別手当支給割合の引き下げ(年間0.05ヶ月分)を実施した。その際、令和3年度の期末手当引き下げに相当する額については、令和4年6月の期末手当から減額することで調整を行っている。

理事

役員報酬支給基準は、法人の長と同様である。月額については、独立行政法人国立美術館役員報酬規則に則り、俸給月額(706,000円から965,000円の範囲内)及び地域手当の月額、並びに俸給月額及び地域手当の月額に100分の20を乗じて得た額、並びに俸給月額に100分の25を乗じて得た額の合計額に、6月に支給する場合においては100分の162.5、12月に支給する場合においては100分の167.5を乗じて得た額としている。また、文部科学大臣が行う業績評価の結果を勘案して、前項の規定による期末特別手当の額の100分の10の範囲内で、これを増額し、又は減額した額とすることができることとしている。

なお、令和4年度では、国家公務員の給与改定の状況を踏まえた改定として、期末特別手当支給割合の引き下げ(年間0.05ヶ月分)を実施した。その際、令和3年度の期末手当引き下げに相当する額については、令和4年6月の期末手当から減額することで調整を行っている。

理事(非常勤)

独立行政法人国立美術館役員報酬規則に則り、非常勤役員手当として月額120,000円としている。なお、令和4年度においては改定は行っていない。

監事(非常勤)

独立行政法人国立美術館役員報酬規則に則り、非常勤役員手当として月額120,000円としている。なお、令和4年度においては改定は行っていない。

2 役員の報酬等の支給状況

役名	令和4年度年間報酬等の総額				就任・退任の状況		前職
	報酬(給与)	賞与	その他(内容)	就任	退任		
法人の長	千円 19,269	千円 11,580	千円 5,219	千円 2,316 (地域手当) 154 (通勤手当)			
A理事	千円 16,280	千円 9,816	千円 4,424	千円 1,963 (地域手当) 77 (通勤手当)			◇
B理事 (非常勤)	千円 1,440	千円 1,440	千円 ()		4月1日		
A監事 (非常勤)	千円 1,440	千円 1,440	千円 ()				※
B監事 (非常勤)	千円 1,440	千円 1,440	千円 ()				

注1:「地域手当」とは、当該地域における民間の賃金水準を基礎とし、当該地域における物価等を考慮して規則に定める地域に在勤する役員に支給されているものである。

注2:「前職」欄には、役員の前職の種類別に以下の記号を付す。

退職公務員「*」、役員出向者「◇」、独立行政法人等の退職者「※」、退職公務員でその後独立行政法人等の退職者「*※」、該当がない場合は空欄

3 役員の報酬水準の妥当性について

【法人の検証結果】

法人の長

国立美術館は、美術館を設置して、美術(映画を含む。)に関する作品その他資料を収集し、保管して公衆の観覧に供するとともに、これに関連する調査及び研究並びに教育及び普及の事業等を行うことにより、芸術その他の文化の振興を図ることを目的としている。そうした組織の中で、理事長は、法人全体の活動を総括する一方で、我が国における芸術文化の創造と発展、国民の美的感性の育成を使命とし、美術振興の中心拠点として、高いマネジメント能力やリーダーシップに加え、高度な専門性が求められる。また、理事長の年間報酬額は、事務次官の年間給与額(2,337万円)と比較してもそれを下回っている。文化分野の保存・活用を図ることを主要な業務とする他法人の長の年間報酬額(約1,800万円)と比すると100万円超上回っているが、これは地域手当の差に起因するものであって俸給額としては同水準であるため、こうした職務内容の特性や他法人等との比較を踏まえると、報酬水準は妥当であると考えられる。

理事

理事の職務においては、上記理事長の多岐に渡る業務を補佐するにあたり、相当の専門性を求めている。また、文化分野の保存・活用等を図ることを主要な業務とする他法人の理事の年間報酬額(約1,600万円)とほぼ同水準となっており、こうした職務内容の特性や他法人等との比較を踏まえると、報酬水準は妥当であると考えられる。

理事(非常勤)

理事(非常勤)については、国家公務員における指定職俸給表1号俸相当をベースに、業務内容、想定勤務日数、勤務状況等を総合的に勘案し算出している。また、文化分野の保存・活用を図ることを主要な業務とする他法人の理事(非常勤)の報酬額との比較を踏まえると、報酬水準は妥当であると考えられる。

監事(非常勤)

監事(非常勤)については、国家公務員における指定職俸給表1号俸相当をベースに、業務内容、想定勤務日数、勤務状況等を総合的に勘案し算出している。また、文化分野の保存・活用を図ることを主要な業務とする他法人の監事(非常勤)の報酬額との比較を踏まえると、報酬水準は妥当であると考えられる。

【主務大臣の検証結果】

職務内容の特性や国家公務員指定職適用官職、他の同規模の独立行政法人、民間企業との比較などを考慮すると、役員報酬水準は妥当であると考えられる。

4 役員の退職手当の支給状況(令和4年度中に退職手当を支給された退職者の状況)

区分	支給額(総額)	法人での在職期間		退職年月日	業績勘案率	前職
	千円	年	月			
法人の長	8,318	7	1	R3.4.29	1.0	
理事	該当なし					
理事 (非常勤)	該当なし					
監事 (非常勤)	該当なし					

注:「前職」欄には、退職者の役員時の前職の種類別に以下の記号を付す。
退職公務員「*」、役員出向者「◇」、独立行政法人等の退職者「※」、退職公務員でその後独立行政法人等の退職者「*※」、該当がない場合は空欄

5 退職手当の水準の妥当性について

【主務大臣の判断理由等】

区分	判断理由
法人の長	当該者は、平成26年度から平成28年度を理事、平成29年度から令和3年4月までを理事長として法人の業務運営に従事し、在任期間中に掲げられた中期計画・年度計画の内容を遅滞なく実行・推進したことにより、国立美術館の運営に大きく貢献したことから、当該理事長の業績勘案率については、算定ルールに基づき文部科学大臣によって1.0と決定された。退職手当支給額は、当該業績勘案率及び「役員退職手当規則」に基づき決定されており、妥当な水準であると考えます。
理事	該当なし
理事 (非常勤)	該当なし
監事 (非常勤)	該当なし

注:「判断理由」欄には、法人の業績、担当業務の業績及び個人的な業績の検討結果を含め、業績勘案率及び退職手当支給額の決定に到った理由等を具体的に記入する。

6 業績給の仕組み及び導入に関する考え方

当法人においては、期末特別手当について、独立行政法人国立美術館役員報酬規則に則り、文部科学大臣が行う業績評価の結果を勘案して、前項の規定による期末特別手当の額の100分の10の範囲内で、これを増額し、又は減額した額とすることができることとしている。

II 職員給与について

1 職員給与についての基本方針に関する事項

① 職員給与の支給水準の設定等についての考え方

独立行政法人通則法第50条の10第3項に基づき、業務の実績を考慮し、かつ、社会一般情勢(国家公務員の給与水準)に適合するよう、学歴、試験、経験及び職務の責任の度合いを基に給与水準を決定している。

② 職員の発揮した能率又は職員の勤務成績の給与への反映方法についての考え方(業績給の仕組み及び導入実績を含む。)

勤務評定等の結果を踏まえた勤務成績を考慮し、昇格、昇給の実施及び勤勉手当の成績率の決定を行っている。

[能率、勤務成績が反映される給与の内容]

給与種目	制度の内容
俸給月額 (昇格)	従事する職務に応じ、かつ、総合的な能力の評価により1級上位の級に昇格させることができる。
俸給月額 (昇給)	昇給期間における勤務成績等に応じて、上位の号俸に昇給させることができる。
賞与: 勤勉手当 (査定分)	基準日以前6箇月以内の期間における、勤務成績に応じて決定される支給割合(成績率)に基づき支給される。

③ 給与制度の内容及び令和4年度における主な改定内容

独立行政法人国立美術館職員給与規則に則り、俸給及び諸手当(扶養手当、地域手当、住居手当、通勤手当、単身赴任手当、超過勤務手当、休日出勤手当、夜勤手当、管理職手当、主任研究員手当、期末手当及び勤勉手当)としている。
期末手当については、期末手当基準額(俸給+扶養手当+地域手当+役職段階別加算額+管理職加算額)に100分の120を乗じ、さらに基準日以前6箇月以内の期間におけるその者の在職期間に応じた割合を乗じて得た額としている。
勤勉手当については、勤勉手当基準額(俸給+地域手当+役職段階別加算額+管理職加算額)に勤勉手当の支給基準に従って定める割合を乗じて得た額としている。
なお、令和4年度では、国家公務員の給与改定に準拠し、①人事院勧告による官民較差等の状況を踏まえ、若年層を中心に俸給水準を平均0.3%引き上げ(令和5年1月期において令和4年4月に遡及して引き上げを実施)、②期末手当支給割合の引き下げ(年間0.15ヶ月分)②勤勉手当成績率の引き上げ(年間0.1ヶ月分)の改定等を実施した。その際、令和3年度の期末手当引き下げに相当する額については、令和4年6月の期末手当から減額することで調整を行っている。

2 職員給与の支給状況

① 職種別支給状況

区分	人員	平均年齢	令和4年度の年間給与額(平均)			
			総額	うち所定内		うち賞与
				うち通勤手当		
千円	千円	千円	千円	千円		
常勤職員	92	45	7,843	5,831	140	2,012
事務・技術	45	40.5	6,244	4,631	158	1,613
研究職種	47	49.2	9,375	6,981	124	2,394
技能・労務職種	—	—	—	—	—	—
任期付職員	4	65	15,189	11,129	175	4,060
指定職種	4	65	15,189	11,129	175	4,060
再任用職員	—	—	—	—	—	—
研究職種	—	—	—	—	—	—
非常勤職員	35	45.7	5,880	5,827	131	53
事務・技術	20	48.4	5,427	5,334	112	93
研究職種	15	42.2	6,483	6,483	157	0

注1: 常勤職員については、在外職員、任期付職員及び再任用職員を除く。

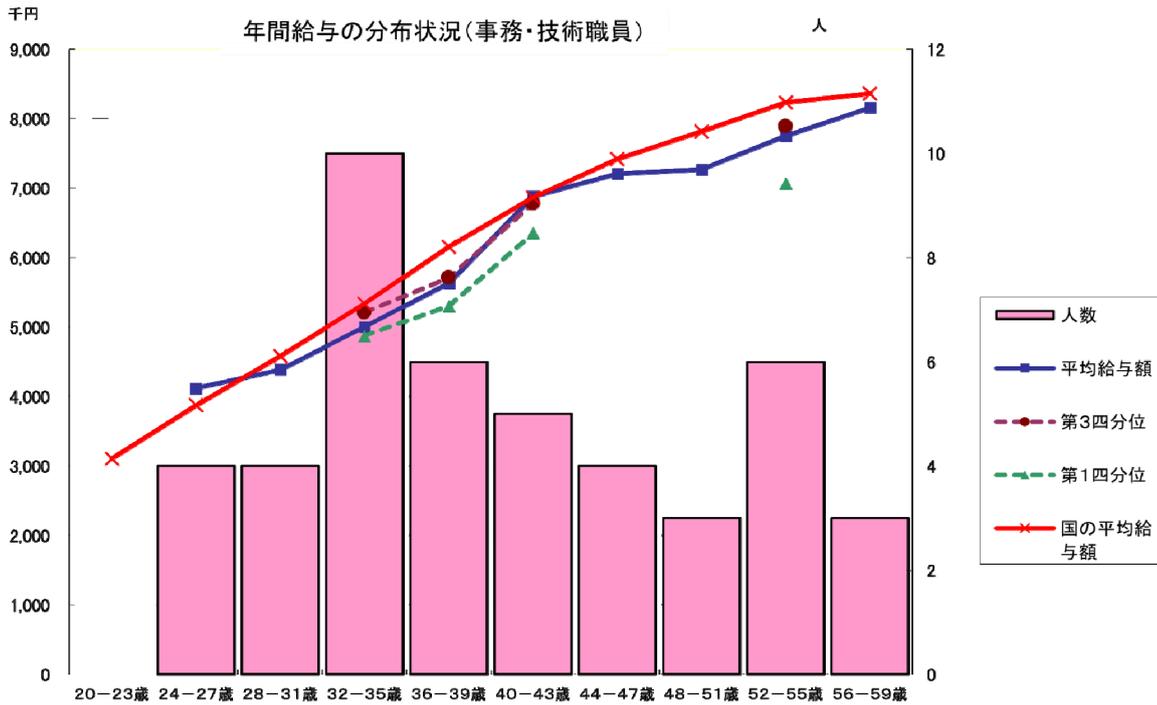
注2: 技能・労務職種とは、守衛の業務、又は映写技術に関する業務に従事する職種をいう。

注3: 技能・労務職種の該当者は2人以下の為、当該個人に関する情報が特定されるおそれのあることから、職種のみ記載している。

注4: 再任用職員の該当者は2人以下の為、当該個人に関する情報が特定されるおそれのあることから、該当者のいる職種のみ記載している。

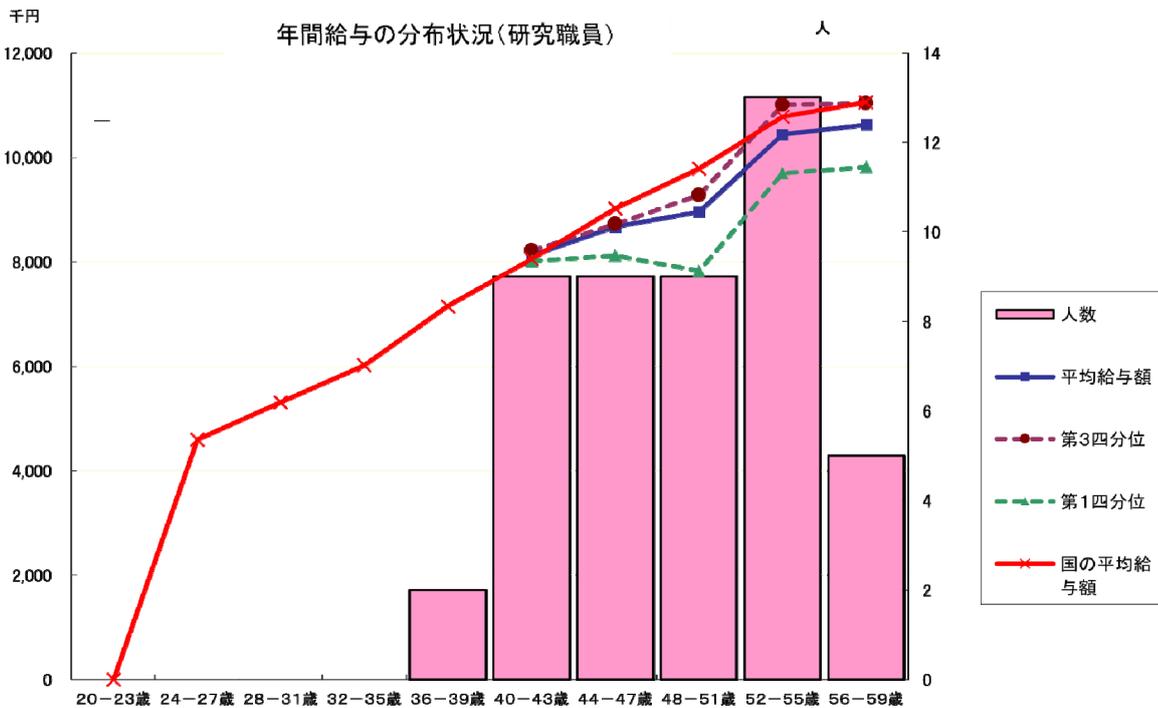
注5: 常勤職員、非常勤職員のうち医療職種(病院医師)、医療職種(病院看護師)及び教育職種(高等専門学校教員)、在外職員については、該当する者がいないため欄を省略した。

② 年齢別年間給与の分布状況(事務・技術職員／研究職員〔在外職員、任期付職員及び再任用職員を除く。以下、④まで同じ。〕)



注1: ①の年間給与額から通勤手当を除いた状況である。以下、④まで同じ。

注2: 年齢24-27歳、28-31歳、44-47歳、48-51歳及び56歳-59歳の該当者については4人以下のため、当該個人に関する情報が特定されるおそれがあることから、第1・第3四分位を表示していない。



注3: 36歳-39歳の該当者については2人以下のため、当該個人に関する情報が特定されるおそれがあることから、平均給与額を表示していない。

③ 職位別年間給与の分布状況(事務・技術職員／研究職員)

(事務・技術職員)

分布状況を示すグループ	人員	平均年齢	年間給与額		
			平均	最高～最低	
	人	歳	千円	千円	千円
代表的職位					
本部課長	1	-	-	-	-
本部室長	1	-	-	-	-
本部係長	6	42.0	6,148	6,820	5,306
本部主任	2	-	-	-	-
本部係員	6	29.7	4,469	5,057	3,911
地方課長	3	51.5	9,019	-	-
地方室長	4	51.5	7,973	-	-
地方係長	11	47.1	6,660	8,058	5,558
地方主任	3	35.8	4,931	-	-
地方係員	8	31.3	4,657	5,256	4,011

注1: 地方課長、地方室長、地方主任の該当者は4人以下のため、当該個人に関する情報が特定されるおそれがあることから、最高～最低を記載していない。

注2: 本部課長、本部室長、本部主任の該当者は2人以下のため、当該個人に関する情報が特定されるおそれがあることから、平均年齢以下の項目を記載していない。

(研究職員)

分布状況を示すグループ	人員	平均年齢	年間給与額		
			平均	最高～最低	
	人	歳	千円	千円	千円
代表的職位					
本部学芸担当課長	1	-	-	-	-
副館長	2	-	-	-	-
学芸課長	8	53.4	10,833	11,950	7,823
主任研究員	36	47.8	8,639	10,123	7,167

注: 本部学芸担当課長、副館長の該当者は2人以下のため、当該個人に関する情報が特定されるおそれがあることから、最高～最低を記載していない。

④ 賞与(令和4年度)における査定部分の比率(事務・技術職員／研究職員)

(事務・技術職員)

区分		夏季(6月)	冬季(12月)	計
一般職員	一律支給分(期末相当)	%	%	%
		55.6	53.8	54.7
	査定支給分(勤勉相当)(平均)	%	%	%
		44.4	46.2	45.3
	最高～最低	48.9～41.3	48.4～42.9	47.4～42.5

(研究職員)

区分		夏季(6月)	冬季(12月)	計
管理職員	一律支給分(期末相当)	%	%	%
		-	-	-
	査定支給分(勤勉相当)(平均)	%	%	%
		-	-	-
	最高～最低	-	-	-
区分		夏季(6月)	冬季(12月)	計
一般職員	一律支給分(期末相当)	%	%	%
		55.7	53.3	54.5
	査定支給分(勤勉相当)(平均)	%	%	%
		44.3	46.7	45.5
	最高～最低	52.7～31.5	54.6～44.0	53.7～39.4

注: 研究職員の管理職員は2人以下のため、記載していない。

3 給与水準の妥当性の検証等

事務・技術職員

項目	内容
対国家公務員 指数の状況	<ul style="list-style-type: none"> ・年齢勘案 95.7 ・年齢・地域勘案 89.3 ・年齢・学歴勘案 93.9 ・年齢・地域・学歴勘案 88.1
国に比べて給与水準が 高くなっている理由	該当なし
給与水準の妥当性の 検証	<p>【国からの財政支出について】 支出予算の総額に占める国からの財政支出の割合 82.9% (国からの財政支出額 9,499百万円, 支出予算の総額 11,452百万円: 令和4年度 予算) 累積欠損額 0円(令和4年度決算) 支出総額に占める給与・報酬等支給額の割合 9.4% (支出総額(令和4年度決算ベース) 11,474,855千円, 給与・報酬等支出総額 1,083,746千円) 管理職の割合 0%(常勤職員数45名中0名) 大卒以上の割合 93.3%(常勤職員数45名中42名)</p> <p>(法人の検証結果) 俸給表、諸手当等の給与体系は国家公務員に準拠しており、国からの財政支出の 割合は大きいものの、対国家公務員指数(年齢勘案は国を4.3ポイント下回っており、 令和4年度の事務職員の給与水準は適切なものであると認識している。</p> <p>(主務大臣の検証結果) 法人の職員の給与水準は、職務の特性や国家公務員、民間企業の従業員の給与 等を勘案し、設定の考え方を明らかにすることが求められており、国家公務員と比べ て給与水準が高い法人は、その合理性及び妥当性について、説明責任を果たすべ きこととされている。(独立行政法人改革等に関する基本的な方針(平成25年12月24 日閣議決定)) 当該法人は、国家公務員の給与及び業務の実績等を総合的に勘案したうえで、職 員の給与水準を設定しており、法人における給与水準の妥当性の検証結果から、適 切な対応が執られていると考える。引き続き、適切な給与水準の設定に努めていた だきたい。</p>
講ずる措置	引き続き適正な給与水準を維持する。

研究職員

項目	内容
対国家公務員 指数の状況	<ul style="list-style-type: none"> ・年齢勘案 96.4 ・年齢・地域勘案 94.8 ・年齢・学歴勘案 96.2 ・年齢・地域・学歴勘案 94.7
国に比べて給与水準が 高くなっている理由	該当なし
給与水準の妥当性の 検証	<p>【国からの財政支出について】 支出予算の総額に占める国からの財政支出の割合 82.9% (国からの財政支出額 9,499百万円, 支出予算の総額 11,452百万円: 令和4年度 予算) 累積欠損額 0円(令和4年度決算) 支出総額に占める給与・報酬等支給額の割合 9.4% (支出総額(令和4年度決算ベース) 11,474,855千円, 給与・報酬等支出総額 1,083,746千円) 管理職の割合 4.2%(常勤職員数47名中2名) 大卒以上の割合 100%(常勤職員数47名中47名)</p> <p>(法人の検証結果) 俸給表、諸手当等の給与体系は国家公務員に準拠しており、国からの財政支出の 割合は大きいものの、対国家公務員指数(年齢勘案は国を3.6ポイント下回っており、 令和4年度の事務職員の給与水準は適切なものであると認識している。</p> <p>(主務大臣の検証結果) 法人の職員の給与水準は、職務の特性や国家公務員、民間企業の従業員の給与 等を勘案し、設定の考え方を明らかにすることが求められており、国家公務員と比べ て給与水準が高い法人は、その合理性及び妥当性について、説明責任を果たすべ きこととされている。(独立行政法人改革等に関する基本的な方針(平成25年12月24 日閣議決定)) 当該法人は、国家公務員の給与及び業務の実績等を総合的に勘案したうえで、職 員の給与水準を設定しており、法人における給与水準の妥当性の検証結果から、適 切な対応が執られていると考える。引き続き、適切な給与水準の設定に努めていた だきたい。</p>
講ずる措置	引き続き適正な給与水準を維持する。

4 モデル給与

(扶養親族がない場合)

○ 22歳(大卒初任給)

月額 182,200円 年間給与 2,749,000円

○ 35歳(本部主任)

月額 317,640円 年間給与 5,192,000円

○ 50歳(本部室長)

月額 443,880円 年間給与 7,524,000円

※扶養親族がいる場合には、扶養手当(配偶者6,500円、子1人につき10,000円)を支給

5 業績給の仕組み及び導入に関する考え方

昇格、昇給の実施及び勤勉手当の成績率の判定については、規則に基づく勤務の評定、または業務において特に優秀な成績を修めた職員の勤務成績を考慮している。

III 総人件費について

区 分	令和3年度	令和4年度
給与、報酬等支給総額 (A)	千円 992,509	千円 1,083,746
退職手当支給額 (B)	千円 112,376	千円 61,742
非常勤役職員等給与 (C)	千円 585,488	千円 637,048
福利厚生費 (D)	千円 239,529	千円 247,110
最広義人件費 (A+B+C+D)	千円 1,929,902	千円 2,029,646

注:中期目標管理法及び国立研究開発法人については中期目標期間又は中長期目標期間の開始年度分から当年度分までを記載する。行政執行法人については当年度分を記載する。

総人件費について参考となる事項

令和5年3月28日付けでのアトリサーチセンター設置に向けて組織を拡充し、常勤職員、非常勤職員ともに採用したことにより、「給与、報酬等支給総額」は対前年度比9.2%、「非常勤役職員給与」は対前年度比8.8%増加した。

また、これに伴い社会保険料額等による「福利厚生費」(前年度比3.2%)の増加があった。

「退職手当支給額」は、定年退職者が少なく、特に役員の退職者がいなかったことにより、減少(前年度比54.9%)した。

これらを総合して、「最広義人件費」は対前年度比5.2%増となった。

IV その他

特になし。